

川原平(1)遺跡Ⅶ

－ 津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告 －

西捨場地区

2017年3月

青森県教育委員会



遮光器土偶出土状況



漆塗リ堅櫛



樹皮素材



樹皮製円盤



土偶



土製品・ミニチュア土器・小型土器

序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、平成15年度から平成27年度にかけて津軽ダム建設事業予定地内に所在する遺跡の発掘調査を実施しました。そのうち、川原平(1)遺跡では、平成15・23・25～27年度に発掘調査を実施しました。

調査の結果、縄文時代中期から晩期にかけての堅穴建物跡・土坑・土器埋設遺構・配石遺構・焼土遺構・盛土遺構・捨場等が確認され、縄文時代の集落が営まれていたことがわかりました。遺物は土器・土製品、石器・石製品、漆製品、木製品、骨角器、動植物遺存体等が出土しました。特に縄文時代後期後葉～晩期にかけての遺物は、この地域では稀少な出土例として注目され、晩期の亀ヶ岡文化を考える上で貴重な発見となりました。

本報告書は、平成26年度及び27年度に実施した川原平(1)遺跡発掘調査事業のうち、西捨場地区の調査成果をまとめたものです。この成果が、埋蔵文化財の保護に広く活用され、また、地域の歴史を理解する一助となることを期待します。

最後に、日頃から埋蔵文化財の保護と活用に対してご理解をいただいている国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所に厚くお礼申し上げるとともに、発掘調査の実施と調査報告書の作成にあたり、ご指導、ご協力をいただきました関係各位に対し、心より感謝いたします。

平成29年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 田村 博美

例言・凡例

- 1 本書は、国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所による津軽ダム建設事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが平成15・23・25～27年度に発掘調査を実施した西目屋村川原平（1）遺跡のうち、平成26年度及び27年度に行った西捨場の発掘調査報告書である。
- 2 川原平（1）遺跡の所在地は中津軽郡西目屋村大字川原平字福岡地内、青森県遺跡番号は343009である。
- 3 川原平（1）遺跡の発掘調査報告書は、既に以下のものが刊行されている。
 - ・『川原平（1）・（4）遺跡・大川添（2）遺跡・水上遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第409集
 - ・『川原平（1）遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第564集
 - ・『川原平（1）遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第565集また、本書の他に、以下の4冊を刊行する。
 - ・『川原平（1）遺跡Ⅳ（平場地区・クラック地区）』青森県埋蔵文化財調査報告書第576集
 - ・『川原平（1）遺跡Ⅴ（東捨場地区・北東捨場地区）』青森県埋蔵文化財調査報告書第577集
 - ・『川原平（1）遺跡Ⅵ（北捨場地区）』青森県埋蔵文化財調査報告書第578集
 - ・『川原平（1）遺跡Ⅶ（自然科学分析・総括・補遺）』青森県埋蔵文化財調査報告書第580集本書の報告範囲である西捨場地区の出土品の一部は、北捨場等の他の地区の出土品と接合しており、接合先の報告書に図と写真が掲載されたものがある。また、平成26年度に刊行した『川原平（1）遺跡Ⅲ』・『川原平（4）遺跡Ⅳ』にも接合品が掲載されている。
- 4 発掘調査と整理・報告書作成の経費は、発掘調査を委託した国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所が負担した。
- 5 発掘調査から整理・報告書作成までの期間は、以下のとおりである。

発掘調査期間	平成26年5月1日～平成26年11月14日
	平成27年4月20日～平成27年8月28日
整理・報告書作成期間	平成27年4月1日～平成28年3月31日
	平成28年4月1日～平成29年3月31日
- 6 本書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が刊行した。執筆と編集は、報告書抄録記載の編著者が担当し、執筆者名は文末に記した。なお、発掘調査成果の一部は、現地見学会、発掘調査報告会等において公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合においては本書が優先する。

- 7 発掘調査から整理・報告書作成にあたり、以下の業務については委託により実施した。

基準点・水準点測量	株式会社キタコン
空中写真撮影	株式会社シン技術コンサル
土器の図化作業の一部	株式会社アルカ、株式会社ラング
石器の図化作業の一部	株式会社アルカ
漆製品の保存処理	株式会社吉田生物研究所
遺物の写真撮影	シルバーフォト、フォトショップいなみ、有限会社無限
炭化材の樹種同定	株式会社吉田生物研究所、株式会社パレオ・ラボ
放射性炭素年代測定	株式会社加速器分析研究所、株式会社パレオ・ラボ
洗浄・注記作業の一部	ナカシャクリエイテブ株式会社、第一合成株式会社、株式会社イビソク
写真の切り抜き作業の一部	ワタナベサービス株式会社

- 8 石器の石質鑑定は調査員の柴正敏氏及び島口天氏に依頼した。

- 9 測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第X系による。挿図中の方位は、すべて世界測地系の座標北を示している。

- 10 遺構については、その種類を示すアルファベットの略号と算用数字を組み合わせた番号を付した。略号は、以下のとおりである。

S I - 竪穴建物跡

- 11 遺物については、取り上げ順に種別ごとの略号と番号を付した。略号は、以下のとおりである。

P - 土器 S - 石器 C - 炭化材 特 - 漆製品など特殊なもの

- 12 土層の色調表記には、『新版標準土色帖2005年度版』（小山正忠・竹原秀雄）を用い、遺跡の基本土層にはローマ数字、遺構内堆積土層には算用数字を使用した。土層断面図には、水準点を基にした海拔標高を付した。

- 13 土器実測図で使用したスクリーントーンは以下の通りであるが、一部については図の中に記したものもある。

漆容器などの漆塗膜  黒色付着物  赤色顔料・赤彩 

- 14 石器・石製品実測図で使用したスクリーントーンは以下の通りであるが、一部については図の中に記したものもある。

アスファルト・黒色付着物  磨面  光沢  赤彩 

- 15 遺構実測図および遺物実測図の各図版にはスケールを付している。
- 16 土器観察表における（ ）内計測値は、口径・底径については推定値、器高については残存値を示す。
- 17 実測図の掲載を省き、写真のみで報告した遺物もあるため、実測図には、遺物写真の個別番号を付した。縮尺は、原則として土器は1/4、土製品は1/2あるいは1/3、剥片石器・石製品は1/2、礫石器は1/3である。この原則からはずれるものについては、個別に縮尺を示した。
- 18 調査経過等について
 今回の報告範囲における調査に至る経緯、調査体制、整理・報告書作成体制、整理・報告書作成作業の経過については、今回報告範囲以外の地区のものとあわせ、『川原平（1）遺跡Ⅳ』（576集）に掲載した。
- 19 土器の整理・分類について
 口縁から底部まで接合した土器は原則として図化した。が、写真掲載のみとしたものもある。区分・分類基準などについては、『川原平（1）遺跡Ⅵ』（578集）の「第2章第2節2土器」を準用した。また、口径あるいは器高が10cm以下の容器については小型土器・ミニチュア土器として扱った（詳細については『川原平（1）遺跡Ⅶ』（580集）31～33ページ参照）。
- 20 石器の整理・分類について
 石器の整理・分類については、『川原平（1）遺跡Ⅲ』（青埋報565集：pp.9-10）を準用した。また、石製円盤については、右のように円1（石製円盤集合写真1）、円2（石製円盤集合写真2）…と集合写真でも掲載した。また、出土地点等の情報を記載するため、写真中表示はしないものの下のように1、2、3…と左上から番号を付した形で観察表を作成した。



円●

21 時期区分

本報告書で触れる遺構・遺物の時期は、『川原平（1）遺跡Ⅱ』（564集）を準用した。

表① 本報告書の時期区分

				本報告	青森県史 (関根2013)	型式等	備考		
後期		後葉 末葉	瘤付 土器			十腰内V群	本文中で7-3期以前を 瘤付土器前半とした		
				7-3期	7期3段階				
				7-4期	7期4段階			(十腰内V群に欠 落する時期)	瘤付土器第Ⅲ段階 (小林2008)
				8期	8期			(十腰内VI群)	瘤付土器第Ⅳ段階 (小林2008)
晩期	前半	初頭 前葉	亀ヶ 岡式土 器	1期	1a期	大洞B	大洞B1		
					1b期		大洞B2		
		2期		2期	大洞BC				
		3期		3期	大洞C1				
	後半	中葉		4期	4期	大洞C2			
				5期	5期	大洞A			
		後葉 末葉		6期	6期	大洞A'			

22 古代以降の遺物について

今回の報告範囲において、古代以降の陶磁器等が僅かに出土しているが、今回報告以外の地区で得たものとあわせて、『川原平（1）遺跡Ⅷ』（580集）に掲載する。

23 自然科学分析

今回の報告範囲出土遺物等について、放射性炭素年代測定や樹種同定、漆製品の塗膜分析などの自然科学分析を外部委託しているが、これらの成果については今回報告以外の地区で得たものとあわせて、『川原平（1）遺跡Ⅷ』（580集）に掲載する。ただし、本報告における遺構・遺物の記載にあたり、それらの結果を部分的に引用した箇所がある。分析に使用した資料は、観察表の備考欄に下記のように資料番号を記載した。

Ⅷ第1編第5章第1～7節 放射性炭素年代測定→「年代測定KAWA（1）一●」

Ⅷ第1編第6章第5節 漆関連遺物の塗膜分析→「塗膜分析Na●」

Ⅷ第1編第7章第5節 炭素・窒素安定同位体比分析→「安定同位体比分析資料●」

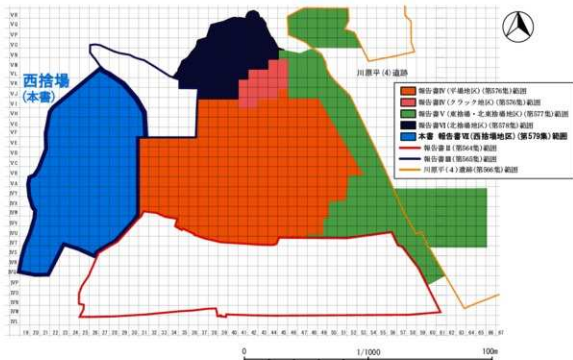
Ⅷ第1編第8章第2節 胎土分析→「胎土分析●」

24 引用文献についてはpp. 241ページに掲載したが、参考文献については『川原平（1）遺跡Ⅷ』（580集）に掲載した。

25 発掘調査及び整理・報告書作成における出土品・実測図・写真等は現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。



図① 川原平(1)遺跡位置図



川原平(1)遺跡平成28年度刊行報告書掲載範囲

図② 本書の報告範囲

目 次

巻頭写真

序

例言・凡例

目次

第1章 調査の方法	1
第1節 調査の方法	1
1 発掘作業の方法	1
2 基本層序	3
第2節 整理・報告書作成作業の方法	11
第2章 西捨場地区の検出遺構と出土遺物	22
第1節 遺構	22
第2節 西捨場	27
1 概要	27
2 土器	27
3 石器	55
4 土製品	96
5 石製品	150
6 木質遺物	189
7 骨角器	233
第3章 まとめ	237
図1～ 全体図・土層・遺構等	12
図13～ 土器	37
図31～ 石器	57
図70～ 土製品	100
図120～ 石製品	152
図157～ 木製品等	190
図185～ 骨角器	235
図187 まとめ関係	240
写真1～ 土層・遺構・出土状況	351
写真60～ 木製品出土状況	410
写真70～ 土器	420
写真116～ 石器	466
写真204～ 土製品	554
写真221～ 石製品	571
写真266～ 石製円盤集合	616
写真278～ 木製品等	628
写真299～ 骨角器	649
表1 土器観察表	242
表2 土製品観察表	286
表3 小型土器観察表	290
表4 石器・石製品観察表	294
表5 石製円盤集合写真観察表	329
表6 木質遺物観察表	335
表7 骨角器観察表	349

第1章 調査の方法

第1節 調査の方法

1 発掘作業の方法

西捨場地区は平場地区の西側の崖下に位置する。2013年調査の時点で植林された杉が密生しており、下草も多かったため地表が確認できる状況になかった。遺跡範囲にも含まれていなかったため、平場地区北西部(報告書Ⅲ報告範囲)の排土を崖上から投棄した。2013年調査終了後に杉の伐採が行われた。

杉伐採後の搬出に伴う重機使用によって地表が一部削られ、2014年5月の県文化財保護課の踏査によってこの地区一帯に多量の土器・石器等が散布していることが明らかとなった。これらの遺物は、前年の排土が存在する傾斜面上部以外でも出土するため、プライマリーな包含層があることは確実にあり、当該地点で工事的な仮設道路が敷設されることから本調査が必要になった。本調査の着手は6月10日で、この時点で初めて西捨場の呼称が与えられた。グリッドは遺跡内共通のものを用い、ベンチマークと測量の基点は業者に委託して新たに設置した。なお、グリッドの設定方法および名称については、他の地区と共通させており『川原平(1)遺跡Ⅱ』(青森県教委2016)に詳しい。

遺構番号や遺物取り上げ番号は遺跡内における通し番号を付した。遺物の取り上げはグリッド単位で層位ごとに行い、必要に応じて取り上げ番号を付し、個別の位置データを取得(いわゆる点あげ)した。写真撮影は適宜行った。遺物が密に集まっている箇所は「ブロック」として取り上げたが、これは周辺よりも密であるということに過ぎず、一括廃棄かどうかを現地で確認したわけではない。

調査は清掃の後トレンチ調査から開始した。トレンチ1～3では包含層が確認されず、IVUグリッド以南はトレンチ調査のみで終了した。トレンチ4～7は地表面で遺物の散布が確認された場所で、トレンチ調査によって縄文時代晩期の包含層が確認された。包含層の堆積が厚く、遺物が多量に出土するため地山までの深さは確認できずにトレンチ調査を中断した。この時点で、仮設道路敷設のため22グリッド以西を完掘する必要があったため、当該部分は全面調査として、重機で表土を除去した。包含層はほとんど確認できず、IVV～IVYグリッドは地山直上で近代の陶磁器が出土するなど遺構や包含層は確認できず、6月18日に調査を終了して引き渡した。本調査と併行して、西捨場の西側隣接地の試掘調査が県文化財保護課によって行われた。遺構・遺物が認められなかったことから調査不要と判断され、川原平(1)遺跡の範囲が確定し(県560集20-21頁)、仮設道路の工事が開始された。23グリッド列以東はプライマリーな包含層が確認されるため、精査対象区域とした。また、平場地区との堆積状況の連続を確認し、西捨場の精査範囲を確定するためにトレンチ8～16を設定した。これらのトレンチ設定箇所は急斜面部にあたり、ロングアームのバックホウを用いて掘削した。いずれのトレンチでも平場地区の包含層は斜面途中で途切れており、西捨場の包含層とは連続しないことが明らかとなった。トレンチ8・9・11・15・16では西捨場の包含層が確認されず、精査範囲から除外した。トレンチ10・12・13・14の西端(現地では各トレンチ下段と呼称)は傾斜変換点にあたり、西捨場の包含層が確認された。これらのトレンチ調査によって西捨場の精査範囲が確定し、先に述べた23グリッド列以東の範囲で、南はおおむねVAグリッド列、北はおおむねトレンチ7、西はトレンチ10・

12・13・14の西端を含む範囲を精査することとなった。なお、トレンチ17・18は西捨場の精査過程で包含層の厚さを確認するために入れたトレンチである。

前段で述べたように、精査範囲は確定したが、遺物包含層の堆積が厚く、調査を円滑に進めるために8月以降は職員・調査補助員・作業員を増員して調査にあたることとなった。排土の仮置き場を確保して増員に対応するため、7月中旬に23グリッド列の精査を終了した。G-G'セクションでVC・VDの堆積が厚いことが判明したため、8月以降は捨場の北・南両端から中央に向かって精査を進めた。精査においては冒頭で記した精査範囲の斜面上部に残っている2013年排土および表土の除去、杉の根の除去にはバックホウを用いたが、包含層の掘削は人力で行った。堆積が厚く、遺物量が膨大で、下層からは湧水があるという困難な状況により当年度中の調査終了が見込めないため、次年度への繰り越しを決定した。精査範囲のうち2014年度中に地山までの掘削が完了した区域は、トレンチ18などごく一部のみである。当年度の調査では、斜面下側に仮設道路があり、調査区内の湧水をそこへ流せないうえ、掘削が地山に到達していないにもかかわらず湧水によって調査が継続できない場合は終了した箇所がある。地山まで調査できなかった場所はVA-23やトレンチ18などで、範囲としてはごく狭い。

2015年度は前年度の調査を継続した。仮設階段を設置し、4月20日に調査を開始した。4月中は雪解け後の湧水が多く、少人数で開始した。5月以降は、乾燥が進み、平場から作業員を移動させ、掘り下げを進めた。伐採直後の前年度に比べて湧水量は少なく、掘り下げは順調に進んだ。最も包含層の堆積が厚いVC・VD・VE-25～27グリッドに調査の最終段階まで残す土層観察用のベルトを設定し、ここを土層の堆積時期を確定させる上で最も重要な区域と定めて調査した。この区域は、土層観察用のベルトがタワーのように残ったため、現地調査ではフィールドネームとして「バベル」と呼称し、遺物の注記にもそれを用いた。本報告書の編集にあたって、今後引用されていく良好な資料体の出土区域であることから、例言に記したとおり名称を「中央ベルト」とした。このベルトに関するセクションはC-C'（ベルト南壁）・E-E'（ベルト北壁）・F-F'（ベルト横断ライン）である。また、この部分の下位では漆製品やトチの果皮等が出土し湧水が激しかったことから、中央ベルト撤去時に有機質遺物を含む層の精査に時間を確保するために、その上部とベルト部分以外の精査を急いだ。特に中央ベルト北側にあたる区域は排土の仮置場とするため調査の迅速化を図った。中央ベルトの東側と南側ではトチやクルミの果皮が層をなして堆積していたことから、南壁は試料採取地点として残した。北壁については、試料採取用に、より上層の土も残した。

そしてⅢ層中からⅢ層下までの層に①～⑧の層名を付して遺物を取り上げた。中央ベルトから木質遺物が多数出土してからは、木製品上層・中層・下層をさらに付け加えて取り上げた。しかしながら傾斜があるうえに木製品は重層的に堆積しており、特定の面を把握しての命名ではない。そのため、グリッド内の相対的な上下関係を示したものととなった。

その後、南壁及び北壁からの試料採取の前に①～⑧層に対応させつつ、土層の線の細部を再検討して、算用数字を使用した層名で土層断面図を作成した。これにより⑤層は5-1層、5-2層となるなど整理され、取り上げ層位としても使用した。5-1層で骨角器や動物骨が目立って出土するようになり、先行部分で5-2層に入った時期に出土数が増加したため、排土を土のう袋にいれて、水洗い選別試料として回収することとした。7層の下部や8層になり動物骨等が減少するまで継続した。

試料採取に関しては、北壁の土層断面（E-E'セクション）で弘前大学の土條信彦准教授が花粉等

の分析用の試料を採取した。南壁の土層断面（C-C'セクション）では東端付近でカリフォルニア大学バークレー校の羽生淳子先生の年代・花粉等の調査資料を採取した。5cm毎に上層から下層に向かって土層を採取し、層境にあたる部分では、主体となる層の土層のみ採取して土層番号との整合性を図った。メインとなるAライン（図8に赤色で示した。採取試料番号：NR-1～26）の下部は礫を含み採取が困難なため、西側にBライン（図8に水色で示した。採取試料番号：NL-1～8）として中部から底部に向かって高さ5cmで上層から下層に向かって土層を採取した。またAラインで壁面に柱状の空隙ができたので、その東側に接して、土壌微細構造分析のための土を切り出して分析委託をした（図8に黄緑色で示した。採取試料番号：1～5）。Bラインの西側では上條准教授が西端まで土層の剥ぎ取りを行った。長さがあるため、2つに分割して行った。また、剥ぎ取り及びA・Bラインでの試料採取・土壌微細構造分析用の土壌ブロック採取後に、上條准教授は層を引き直し、南壁を幅40cmほどの土層を水洗い選別試料として全量採取した。採取土層は多量であり、水洗いは本報告の刊行後も継続される予定である。

これらの土層や試料の採取状況は写真16～17に掲載し、調査成果は報告書Ⅷに報告されている。

精査は8月下旬に終了し、8月28日に機材撤収を終えて津軽ダム関連の発掘調査は完了した。

一連の調査過程では（株）CUBIC製「遺構実測支援システム」を用いた、トータルステーションによる測量を主とし、必要に応じて簡易遺り方測量等で縮尺1/10、1/20の実測図を作成した。土層の色調表記には『新版標準土色帖2005年度版』（小山正忠・竹原秀雄）を用いた。

発掘調査における担当者や調査員等の調査体制は、報告書Ⅳの平成26・27年度の部分を参照されたい。

（岡本・齋藤）

2 基本層序

本遺跡における基本層序は、報告書Ⅱで示したように下記のとおりである。

I層：表土。II層：本来はIII層であったが、耕地や道路の造成時に攪乱を受けた部分。III層：耕作等による新しい時代の攪乱を受けていない縄文時代の堆積層。漸移層：III層とIV層の間にある、遺物を含まない自然堆積土。IV層：段丘堆積物。いわゆる地山（無遺物層）。地山の深掘りを行った地点が少なく、また地点ごとに様相が異なるため、地山内の堆積順序あるいは年代については情報が不足している。このため、地山は基本的にIV層と表記し、必要に応じて「IV層（ローム）」のように（ ）内に土質を記した。なお、報告書Ⅱでは本遺跡が河成段丘低地面に立地すると記載したが、2015年に小岩直人（弘前大学教育学部教授）、小野映介（新潟大学教育学部准教授）両先生によって西捨場が立地する場所よりも標高が低い場所において段丘堆積物が確認され、遺跡の立地場所よりもさらに下位に段丘面が存在することが明らかとなった。このため、本遺跡が河成段丘上に立地することは変わらないが、低地面という区分については検討を要する（詳細は第3章）。また、西捨場は26グリッド列より西側で地上上部がほぼ水平であることから、狭いながらもこの場所に段丘面が形成されていた可能性がある。

西捨場の堆積はII層を欠く。遺物包含層はIII層で、同層は後述のように細分される。漸移層は10センチで岩盤直上に部分的に確認された。IV層は地山のため無遺物であるが、遺物の取り上げ層位に「IV層」という表記がある。セクションで区分していない漸移層（黒色が薄く、地山の黄褐色土に近

似した土)があったのか、Ⅲ層の最下部をⅣ層として取り上げたのかは判然としませんが、地山直上の出土と理解できるため、表現は修正せずに掲載した。Ⅳ層は地点によって異なり、トレンチ1～3、6、7やグリッド列22以西ではローム、中央ベルト周辺では粘土である。いずれにおいても人頭大以下の礫を少量含む。9トレンチではⅠ層の下に黒色土が堆積している。Ⅲ層に近似するが、遺物を含まないため堆積時期は不明である。黒色土の下は岩盤である。10トレンチでは、上位からⅠ層、漸移層、岩盤の堆積が認められる。11トレンチでは、上位からⅠ層、Ⅳ層(礫)、岩盤の堆積が認められる。13・14トレンチでは、上位からⅠ層、Ⅳ層(混礫ローム)、Ⅳ層(礫を含まないローム)、Ⅳ層(礫)、岩盤の堆積が認められる。12・16トレンチでは、上位からⅠ層、Ⅲ層(平場地区から連続するもの)、Ⅳ層(混礫ローム)、Ⅳ層(礫)、岩盤の堆積が認められる。

Ⅲ層は堆積が厚いため、遺物の取り上げにあたっては同層を上位-中位-下位に区分し、それぞれの注記はⅢ層上-Ⅲ層中-Ⅲ層下とした。上-中-下に対応する細別層は、下記でセクションベルトごとに示す。セクションベルト付近の出土遺物で、セクションと対応させた細別層で取り上げたものもあり、対応するセクションは観察表に記載している。セクションベルト内で出土した遺物は、各層の堆積時期を決める上で最も重要であるため、観察表に「ベルト」と表記し、それと分かるようにした。取り上げ層位が5層のように数字のみ、5-2a層のように数字とアルファベット、6-間1のように数字と漢字で表されているものは、中央ベルトの層位に対応する。このほか、色調による区分でⅢ層(茶)、Ⅲ層(黒)とした層が、トレンチ7からD-D'セクション付近に堆積している。Ⅲ層上の一部であるが、(黒)が上、(茶)が下に堆積している。細別層の表記はセクションベルトごとに異なり、似た表現であっても無関係である。例えばB-B'セクションのⅢ中1層とD-D'セクションのⅢ層中1-1層は別の層である。ただし、中央ベルトに関わるC-C'・E-E'・F-F'各セクションの層名は対応し、例えば各セクションの5-2層は同じ層を指し、同層をさらに区分したものがC-C'セクションの5-2a～5-2j層である。Ⅲ層で一括したものは、西捨場の包含層から出土したのは明らかだが、上中下の区分以前の取り上げなどで対応層がわからないものである。出土層位不明というのは、2014・2015年調査の出土遺物のうち整理途中でカードを紛失したか、排土回収により帰属層がわからないものである。なお、2013年調査の平場地区北西部の排土は、基本的に重機で掘削しており、当該排土からの出土遺物は掲載していない。中央ベルトでは5層以下で木質遺物が多量に出土したため、取り上げ層位に木製品上層、木製品中層、木製品下層の語が用いられているが、この上中下は木製品を取り上げる時の相対的な上下関係を表しており、Ⅲ層-上・中・下とは対応しない。

A-A'セクション(図1①):VA-25・26グリッド。本セクションの層位に対応する取り上げ遺物はない。1～3層がⅠ層、4・5層がⅢ層上、6～8層がⅢ層中、9層がⅢ層下である。

B-B'セクション(図3・4:図1②):VB-24～29グリッド。Ⅲ上、Ⅲ上a～cがⅢ層上、Ⅲ中1～Ⅲ中13がⅢ層中、Ⅲ下がⅢ層下に対応する。

C-C'セクション(図8:図1③):中央ベルト。VC-25～27グリッド。C-C'・E-E'・F-F'各セクションの層名は対応する。4～6層がⅢ層中、7・8層がⅢ層下に対応する。各層はE-E'・F-F'セクションよりも細かく分けられ、アルファベットで区分した。4・5層は一部で斜面に逆行する堆積を示しており、この場所への廃棄が単純に斜面上方から進められたものではないことを示してい

る。弘前大学の分析試料、羽生先生の分析試料、パリオ・サーヴェイ(株)の分析試料の層位は本セクションに対応する。また、弘前大学に剥ぎ取った土層が保管されている。

D-D⁺セクション(図5:図1④):VE~VI-27グリッド。本セクションの層位に対応する取り上げ遺物はない。Ⅲ上の各層がⅢ層上、Ⅲ中の各層と①~⑤層がⅢ層中に対応する。

E-E⁺セクション(図7:図1⑤):中央ベルト。VE-25~27グリッド。C-C⁺・E-E⁺・F-F⁺各セクションの層名は対応する。1~3層がⅢ層上、4~6層がⅢ層中、7・8層がⅢ層下に対応する。4層と5層の間に6-a、6-間1、6-b層が挟まり数字が逆転しているが、修正は加えていない。堆積は上から順に4層→6層→5層である。

F-F⁺セクション(図7:図1⑥):中央ベルト。VC~VE-26グリッド。C-C⁺・E-E⁺・F-F⁺各セクションの層名は対応する。2・3層がⅢ層上、4~6層がⅢ層中、7・8層がⅢ層下に対応する。

G-G⁺セクション(図6:図1⑦):VA~VE-23グリッド。Ⅲ層ア~ウがⅢ層上、Ⅲ層ス・セ・ソがⅢ層下、その他はⅢ層中に対応する。Ⅲa~j層出土遺物は土質が近似しているため、Ⅲ層オとして取り上げた。

VB-22・23ベルト(写真7-2段目右、3段目左):G-G⁺セクションのⅢ層スが地上上に水平堆積している。

VE-23ベルト(写真7-2段目左):地上上部のラインがほぼ水平であることを示す。

Ⅲ層上は黒褐色シルトを主体とし、大型の礫や細片化した土器を含むことに特徴があり、総じてしまりが悪い。遺物の時期は混在しているが、晩期5期の土器を確実に含むため、本遺跡の最終段階に堆積した層である。写真87-7は後期後葉の異系統土器であるが、報告書Ⅱの図3-4・5と同一個体(Ⅲ層中で出土した写真98-24も同一個体だが、)と思われ、Ⅲ層上には晩期後葉に投棄された平場の掘削土を含む可能性が高い。Ⅲ層中は遺物量が多く、完形土器も少なくない。暗褐色シルトと黄褐色シルトが互層をなす堆積も認められる。黄褐色シルトには遺物が含まれないことも多く、遺物の廃棄とそれを覆う土砂の廃棄が繰り返されたものとみられる。一部では斜面上方からの崩落土もあったであろうがそれはごく小規模なもので、西捨場の包含層が厚く堆積した要因が人為堆積であることは疑いない。Ⅲ層中には晩期5期の遺物が含まれるものの、その割合は低い。Ⅲ層中は厚いため、どの細別層から晩期5期の遺物が出土したかをすべて特定できないのが残念だが、晩期4期の遺物は一定量が出土しているので、主に晩期前葉~中葉にかけて堆積し、上部が晩期5期の堆積と推定できる。また、中央ベルトでは5層を掘り込んで晩期2期に属するS117が構築されており、ある時期には居住の場にもなっていたようである。Ⅲ層下は包含層の最下部にあたり、湧水のある層である。最下層にも晩期の遺物が含まれるため、この場所が捨場として主に機能したのは晩期前葉以降と判断できる。

中央ベルトの堆積状況と各細別層の出土土器について

北・北東・東捨場の整理作業では、細別層の最新の土器を抽出し各層の堆積時期が明らかになるよう努めた。西捨場の整理作業においても時期が新しいと思われるものはできるだけ抜き出すようにしているが、時間的な制約から復元個体の抽出を優先したため、他の捨場より精度は低い。接合・復元にかけることができた時間が少ないため、粗製土器の掲載点数が少なくなっている。下記では中央ベ

ルト出土土器を細別層ごとに示し、各層の堆積時期を検討する。セクション付近の出土遺物は、できるだけ細別層に対応させて取り上げており、写真図版はそのように組んでいる。ただし、層位情報としてはベルトの中で出土したものが最も信頼できるので、ここではベルト出土の土器のみを対象とする。放射性炭素年代測定を行った試料は、ベルト以外で出土したものも取り上げる。

なお、C-C⁺セクションは4層より下のみが存在する。E-E⁺・F-F⁺セクションの4、5-1、5-2層がそれぞれ細分されたものがC-C⁺セクション4a~f、5-1a~g、5-2a~j層である。微細構造観察(報告書Ⅱ第2章2節)ではこれらの層をさらに細分している。

Ⅲ層上に対応する層

砂礫を多く含み、遺物は小片が多く、少量である。各層の区分はセクションでのみ行っている。いずれの層も晩期4~5期の堆積と判断できる。

- ・1層:復元可能なものはなく、時期の分かる破片を抽出している。晩期2期(写73-5)、3期(写73-4)、4期(写73-2・3)、4~5期(写73-1)が出土している。
- ・2層:1層に比べやや暗色である。本層は2-a、2-bに区分できるが、細分せずに2層として取り上げたものがある。復元個体と、時期の新しい破片を抽出した。晩期2~3期(写74-3)、3期(写74-4~6・8)、4期(写74-2)、4~5期(写74-7)、晩期(写74-1)が出土している。
- ・2a層:復元可能なものはなく、時期の分かる破片を抽出している。晩期3期(写73-7)、2~4期(写73-9)、4~5期(写73-6)、晩期(写73-8・10)が出土している。
- ・2b層:時期の分かる破片、珍しいものを抽出した。晩期1b期(写73-24)、2期(写73-19)、2~3期(写73-16)、3期(写73-11~14・17・18・20~23)、晩期中葉(写73-15)が出土している。
- ・3層:復元個体と、時期の新しい破片を抽出した。晩期2期(写74-17)、2~3期(写74-16・18・23・27・28)、3期(写74-11~14・19・21・22・24~26)、晩期中葉(写74-15)、4~5期(写74-10)が出土している。写74-10は平場地区の第3号盛土下層で同一個体が出土している。晩期3期に属す写74-20の付着漆の放射性炭素年代測定値は2890±20yrBPである(KAWA(1)-175)。

Ⅲ層中に対応する層

Ⅲ層中では2014年調査において、VC-26グリッド、標高190.36mの地点からコラムサンプルを採取している。これはB-B⁺セクションのⅢ中11層に対応する位置である。ここから得られた種実で放射性炭素年代測定を行っており、測定値は2870±20yrBPである(KAWA(1)-82)。

- ・4層:西捨場地区は全体に西に傾斜しているが、C-C⁺セクションの観察では、本層の堆積は東に傾斜している。この事実は、西捨場の堆積が単純に斜面上部からの土の供給によって進んだものではなく、西捨場の主要部に人為的な土砂の廃棄が行われたことを示すといえる。遺物量は少なく、復元個体と時期が分かる破片を抽出した。晩期2期(写73-31・32・38・39)、2~3期(写73-29・30)、3期(写73-26~28・34~37・40)、晩期前~中葉(写73-41)、晩期(写73-25)が出土している。晩期2期に属す写73-33の付着漆について放射性炭素年代測定を行っており、測定値は2880±20yrBPである(KAWA(1)-174)。確実に晩期4期に下る土器の出土はなく、晩期3期の堆積と判断で

きる。4層を細別した4a~f層では、図化可能な土器がほとんど出土していない。

・4c層：微細構造の観察では、黒褐色を呈する上部と褐色を呈する下部に区分され、上部に植物遺体が多く含まれる。セクションより採取した土壌から得られたオニグルミの放射性炭素年代測定値は、 $2890 \pm 30\text{yrBP}$ (KT-001:Beta-427335)である。

・4d層：微細構造の観察では、暗褐色を呈する上部と黒褐色を呈する下部に区分され、両層準ともに植物遺体を含み、不明瞭な葉理状の構造が観察される。セクションより採取した土壌から得られたオニグルミの放射性炭素年代測定値は、 $2970 \pm 30\text{yrBP}$ (KT-002:Beta-427336)である。

・4e層：微細構造の観察では、上位より褐色を呈するシルト層、黒褐色を呈し植物遺体を葉理状に多く含むシルト層、暗褐色を呈するシルト層、褐灰色を呈するシルト層に4区区分される。セクションより採取した土壌から得られたオニグルミの放射性炭素年代測定値は、 $2900 \pm 30\text{yrBP}$ (KT-003:Beta-427337)、 $2870 \pm 30\text{yrBP}$ (KT-004:Beta-430077)、 $2890 \pm 30\text{yrBP}$ (KT-005:Beta-427338)である。

・4f層：晩期2期(写71-2・3)。写71-2の内面付着炭化物の放射性炭素年代測定は $3050 \pm 20\text{yrBP}$ である(KAWA(1)-178)。

・6層：遺物は少量で、図化できるものは少ない。4層より暗色でシルトが多い点は5層に近いが、5層よりも礫を多く含むことからセクションでのみ区分した。ベルト周辺の遺物は4層、5層で取り上げているため6の数字を充てたが、4層の下、5層の上に堆積している。遺物量が少ないため判断は難しいが、晩期3期と判断した写78-14は文様要素としては古く、晩期3期のうちでも古い時期に堆積が終了している可能性がある。

・6a層：晩期1b期(写76-18)、2期(写76-17・19)が出土している。

・6間-1層：後期7-4期(写78-13)、晩期1b期(写78-16)、2期(写78-11・12・15・18)、3期(写78-14)、晩期前葉~中葉(写78-17)が出土している。

・6b層：晩期2期(写76-20)が出土している。

・5層：5-1、5-2に細別される層であるが、取り上げ時に一括するなど細別不明のものである。「木製品上層・5層」の記載が遺物カードにしばしばみられる。木製品中層は5-2層が主体であるため、木製品上層はおおむね5-1層に対応するようである。可能性細別不明なので堆積時期の検討には向かないが、復元個体も多いため、主にそれらを抽出している。晩期1b期(写78-1)、2期(写77-2・4・7、写78-2)が出土した。本層出土のW-9027について放射性炭素年代測定を行っており、測定値は $2960 \pm 20\text{yrBP}$ である(KAWA(1)-108)。5-1層では晩期3期の土器が出土しているものの復元個体は得られておらず、主体は2期以前である。堆積時期が3期に下るとしてもその古い段階に収まると考えられる。5-2層では3期が出土しておらず、2期の堆積と判断できる。

・5-1層：5層の上部である。復元個体と、時期の新しい破片を抽出した。晩期1a~1b期(写75-28)、1b期(写75-11・12・14)、1b~2期(写75-10)、2期(写75-2・4~9・21・24)、3期(写75-20)が出土している。本層出土のW-9062、9063について放射性炭素年代測定を行っており、測定値はそれぞれ 2960 ± 20 、 $2970 \pm 20\text{yrBP}$ である(KAWA(1)-110、112)。W-9001・9002は2014年調査で出土し、層位はⅢ層中である。出土位置は2015年調査におけるE-E'セクションの北側に接した場所であり、出土標高が189.99~190.03mであるため、5-1層に帰属すると考えてよい。

W-9001・9002周辺で出土した炭化種実の放射性炭素年代測定を行っており、KAWA(1)-78~81の測定値がそれぞれ2880±20、2920±20、2930±20、2880±20yrBPである。

- ・5-1a層：植物遺体の堆積層である。微細構造の観察では明瞭な菜理構造が確認でき、植物遺体と砕屑物が互層をなす。晩期3期(写71-4)が出土している。該期の土器は、弘前大学の水洗選別でも複数点出土している。セクションより採取した土壌から得られたオニグルミの放射性炭素年代測定値は、2790±30yrBP (KT-006:Beta-430078)、2930±30yrBP (KT-007:Beta-427339)である。
- ・5-1b層：時期判定可能なものが出土しておらず、掲載した土器はない。弘前大学の水洗選別で回収した中には晩期前葉の破片、3期の可能性がある破片がある。
- ・5-1c層：植物遺体を含むシルト層で、微細構造は5-1a層に類似する。晩期前葉(写71-5)が出土している。セクションより採取した土壌から得られたオニグルミの放射性炭素年代測定値は、2900±30yrBP (KT-008:Beta-430079)、2960±30yrBP (KT-009:Beta-427340)である。
- ・5-1d層：晩期1b期(写71-6)が出土している。弘前大学の水洗選別で回収した中には、晩期2期の破片がある。
- ・5-1e層：微細構造の観察では、上部が褐色を呈すシルト層、下部が植物遺体を多く含むシルト層に区分される。
- ・5-1f層：微細構造の観察では、植物遺体を多く含む層で、下部ほど礫が多い。晩期1b期(写71-8)、2期(写71-7)が出土している。弘前大学の水洗選別で回収したものでは、晩期1b期が最新である。セクションより採取した土壌から得られたオニグルミの放射性炭素年代測定値は、2950±30yrBP (KT-010:Beta-427341)である。
- ・5-1g層：晩期1b期(写71-9・10)が出土している。
- ・5-2層：西捨場地区は全体に西に傾斜しているが、C-C'セクションの観察では、本層の一部(5-2a・d・e層)の堆積は東に傾斜している。後期後葉(写76-16)、晩期1b期(写76-5・8・9・12)、2期(写76-3・4)が出土している。木製品中層の主体である。本層より出土した土器内面に付着した植物遺体の放射性炭素年代測定値は、2920±25yrBP (PLD-32953)である。
- ・5-2c層：晩期1b期(写71-11)が出土している。セクションより採取した土壌から得られたトチノミの放射性炭素年代測定値は、2900±30yrBP (KT-011:Beta-427342)である。
- ・5-2d層：晩期1b期(写71-12)が出土している。
- ・5-2e層：晩期1b期(写71-13)が出土している。弘前大学の水洗選別で回収した中には晩期前葉と思われる粗製土器片があるが、有文土器は含まれていない。
- ・5-2f層：粗製深鉢の体部片が出土したのみで、資料化していない。
- ・5-2g層：後期後葉~晩期前葉(写71-14)が出土している。
- ・5-2j層：晩期1b期、2期の土器が出土しているが、小片のため資料化していない。

Ⅲ層下に対応する層

主に黒色土からなり、礫は少ない。湧水が認められる。7層、8層それぞれで晩期2期が出土しており、後期段階の土器は少なく、その時点では捨場としては機能していなかったと考えられる。晩期1a・1b期の復元個体は一定数出土しており、晩期になって捨場として使われ始めたかと判断できる。最

初の段階では小規模な廃棄単位が地点的に存在したと考えられ、最下層の8c層においても晩期2期と判断できる土器が出土しているため、2期以降に大量の土砂が供給されたことが推定される。8層・7層と5層の大部分が晩期2期で堆積したものと考えている。

Ⅲ層下に対応するVC-24グリッドの最下層で、木胎漆器(特-9065)とともに出土した種実の放射性炭素年代測定を行っており、測定値は $2940 \pm 20\text{yrBP}$ である(KAWA(1)-83)。同グリッドの当該層では晩期1b期の土器(写112-5)が出土している。

・7層:木製品中層・下層の両者がみられる。上部の5層よりも出土する種実が減少し、礫がやや増える。後期7-3期(写80-13)、7-4期(写80-10~12)、8期(写80-9、写82-11)、後期8~晩期1a期(写80-8)、晩期1a期(写79-2・15・16、80-2~4)、1b期(写79-1・10・12、写81-3、82-6)、1b~2期(写81-4・15・16)、2期(写79-7)、後期後葉~晩期前葉(写82-2)、晩期前葉(写81-21)が出土している。晩期前葉に属す写80-7の付着漆について放射性炭素年代測定を行っており、測定値は $3070 \pm 20\text{yrBP}$ である(KAWA(1)-173)。木製品はW-9164について放射性炭素年代測定を行っており、測定値は $2970 \pm 20\text{yrBP}$ である(KAWA(1)-109)。

・7a層:晩期1b期(写71-16・17)、2期(写71-19)が出土している。

・7b層:遺物量は少なく、晩期1a・1b・2期が出土している。資料化したものは1b期(写71-21)であるが、2期が最新である。

・8層:西捨場における最下層で、粘性の強い黒色土である。8層の下は地山の粘土層である。a~cに細別されるが、8層として一括して取り上げた遺物がある。8b層では時期が判別できる遺物が出土していない。後期7-4期(写84-6)、後期8~晩期1a期(写84-7)、晩期1a期(写84-2)が出土している。晩期1b~2期に属す写83-9の付着漆について放射性炭素年代測定を行っており、測定値は $3010 \pm 20\text{yrBP}$ である(KAWA(1)-172)。木製品ではW-9128について放射性炭素年代測定を行っており、測定値は $3040 \pm 20\text{yrBP}$ である。

・8a層:上下の層に比べて遺物量は多い。後期7-4期(写72-5)、8期(写83-7・8)、後期8~晩期1a期(写72-8)、晩期1a期(写72-4・6・7、83-6)、1b期(写72-1・3)、1b~2期(写83-9)、2期(写72-2)が出土している。晩期1b期に属する写72-1の外表面付着炭化物について放射性炭素年代測定を行っており、測定値は $2990 \pm 20\text{yrBP}$ である(KAWA(1)-177)。

・8c層:遺物量は少なく、晩期1a・1b・2期が出土している。2期(写72-9)が最新の時期である。この土器の外表面付着炭化物について放射性炭素年代測定を行い、測定値は $2990 \pm 20\text{yrBP}$ である(KAWA(1)-176)。セクションより採取した土壌から得られたトナノミの放射性炭素年代測定値は、 $3060 \pm 30\text{yrBP}$ (KT-013:Beta-427343)である。微細構造の観察では偽石状の砕屑物ブロックの集合とされ、崩壊堆積物の可能性が指摘されている。しかし、本地区全体を見た場合、上部からの明らかな崩落は確認されていない。ここでは遺物や植物遺体が少ない層であるということに注意しておきたい。

ブロック出土土器について

見かけの上で土器が集中して出土した範囲に対して「ブロック」という名称を与えて遺物を取り上げた。調査段階で30程度のブロックを把握したが、整理作業では大別層ごとに掲載遺物を抽出したた

め、ブロックごとの検討はできなかった。ここでは掲載点数がまとまっているブロックについて、内容を示しておく。

・**ブロック14**：VC-23グリッドに位置する。取り上げ層位はⅢ層中で、抽出したものは晩期3期(写85-10・12・13)、晩期2～4期(写85-14)である。確実に晩期4期に下るものは出土しておらず、14を含めて晩期3期のまとまりと考えてよいのではないだろうか。復元できる個体は少ない。土偶(特-9001)を伴う。

・**ブロック9019**：VG-25付近のⅢ層中で確認された。晩期4期(写103-13)、晩期4～5期(写108-3)、晩期中葉(写97-5)が出土している。Ⅲ層中での晩期後半のまとまりと考えられる。

・**ブロック9020**：VG-26のⅢ層中で確認された。晩期1b～2期(写97-26)、4～5期(写107-6)、晩期中葉～後葉(写108-6)が出土している。晩期後半のまとまりである。

・**ブロック9023**：VE-25周辺のⅢ層中で確認された。晩期3期(写104-6・9・14)、4期(写110-2)が出土している。晩期中葉のまとまりである。

・**ブロック9029**：中央ベルト7層で確認され、多量の遺物が出土している。後期7-4期(写80-10～12)、8期(写80-9、写82-11)、後期後葉(写82-3、写113-7)、後期7-4～晩期1a期(写82-10、83-16(7層と8a層で接合))、後期8～晩期1a期(写80-8)、後期後葉～晩期前葉(写79-5、82-2、80-5・7)、晩期1a期(写79-2・15～18、写80-2～4、写82-8)、1a～1b期(写111-3・6)、1b期(写79-1、写81-2・3・19、写82-4・6、写112-1・6・7、写113-2～5)、1b～2期(写81-15)、2期(写75-25、79-7、写113-8)、晩期前葉(写113-1)、晩期中葉(写112-8)が出土している。主体は晩期1b期なので、該期のまとまりと考えられる。写75-25は取り上げ層位が5-1層と記載されているので除外する。晩期中葉に属する写112-8については、上位層に属するものを誤って取り上げた可能性を否定できない。小型土器では西-土器9129・19271・19289が本ブロックに属す。

・**ブロック9030**：中央ベルト7層で確認した。晩期1a期(写79-14)、1b期(写79-12、写81-17・18)、1b～2期(写81-4・14)、晩期前葉(写79-3、写81-21)が出土している。晩期前葉のまとまりと考えられる。

・**ブロック9031**：中央ベルト5-1層で確認した。晩期1b期(写75-11・19)、2期(写75-2・3)、晩期前葉(写75-16)が出土している。晩期前葉のまとまりと考えられる。

(岡本)

第2節 整理・報告書作成作業の方法

西捨場から遺物が1785箱（土器1084、石器609、木質遺物87、骨角器・動物遺存体5）出土した。整理作業は、主に平成27年4月1日から平成29年3月31日まで実施した。図面類や写真の整理、遺物の観察・図化、遺物の写真撮影等は報告書Ⅳで記された内容と共通するため、参照されたい。西捨場特有の事情としては、調査の最後に大量に遺物が出土したことが有機質遺物の出土である。そのため平成26年の発掘調査の実施期間中に土器の洗浄及び注記については業者委託を中心に行った。委託業者への運搬は発掘現場から直接運搬する方法も採用した。漆製品等は劣化を防ぐため、平成26年度中から保存処理や一部の整理を実施した。

トレースはデジタルを基本としたが、土製品と少数の石器については作業時間の短縮のためにロットリングによるトレースを行った。掲載遺物の選定に関しては各執筆担当者が、それぞれの遺物の項で記載している。土器・石器については量が多く、写真を中心とした掲載となっている。

整理・報告書作成における担当者や調査員等の調査体制等は、報告書Ⅳの平成26・27年度の部分を参照されたい。

（齋藤）

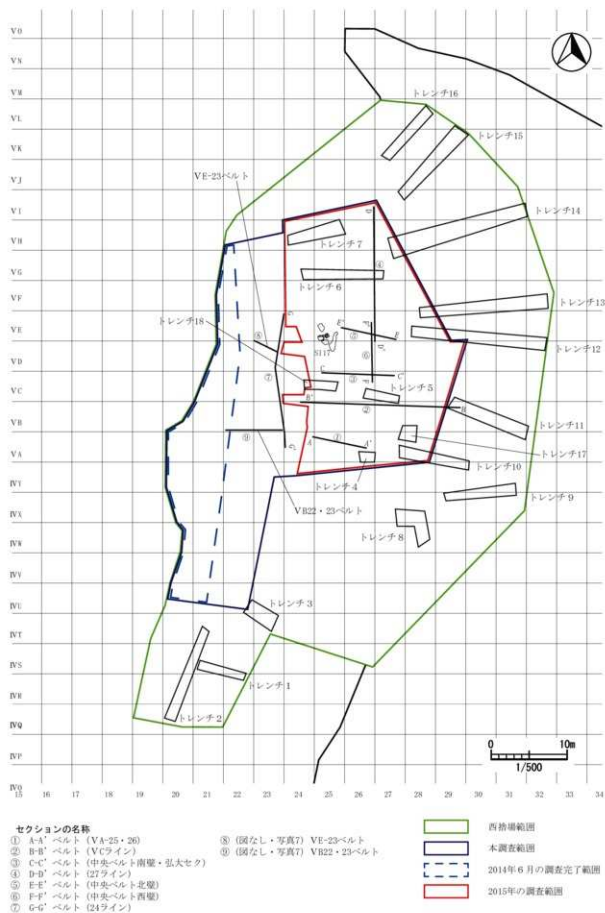


図1 西捨場全体図

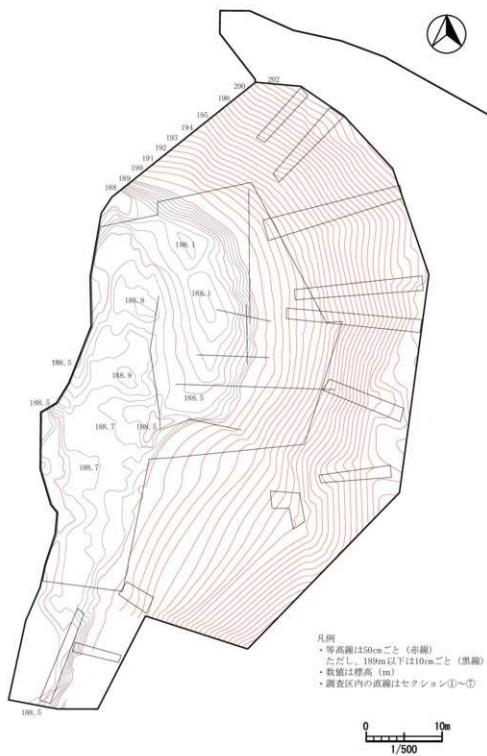
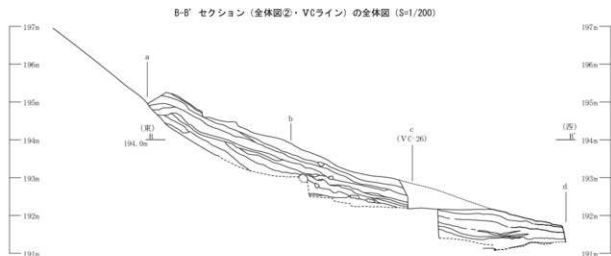


図2 西捨場の旧地形



※B-B' セクションは、上の a-b 間を図 3 下段、b-c 間を図 4 上段、c-d 間を図 4 下段に分割して掲載した。

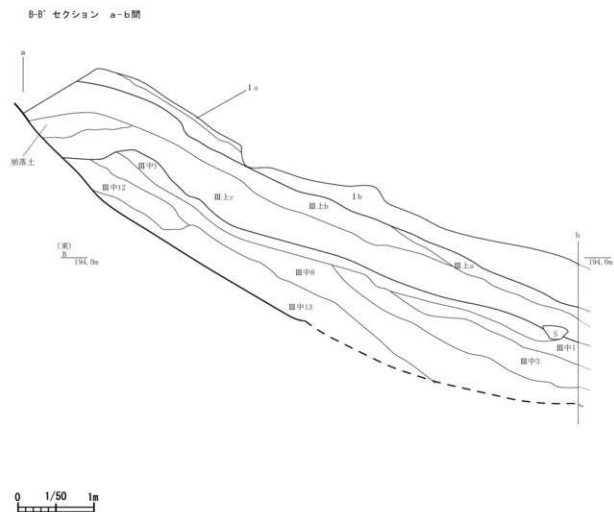


図3 セクション図(1)

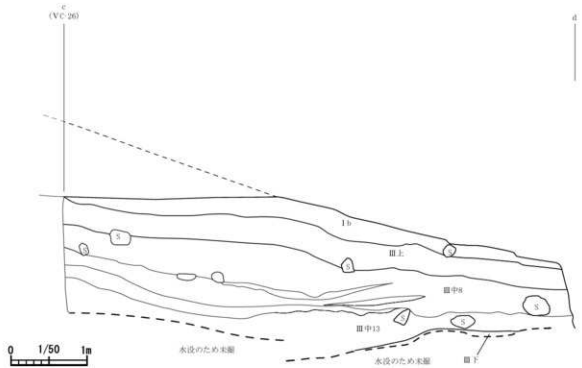
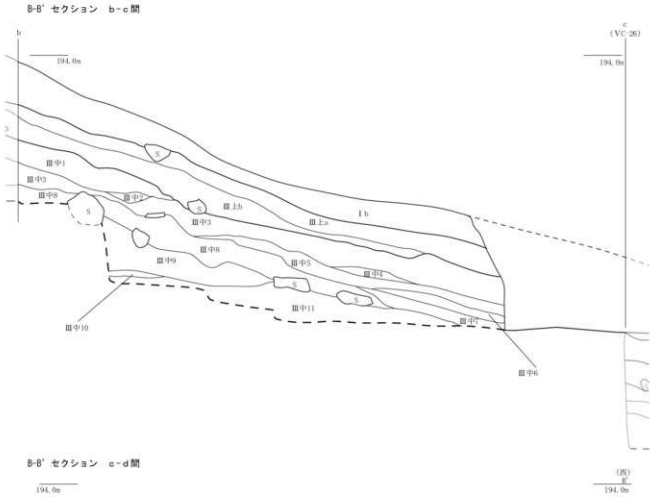
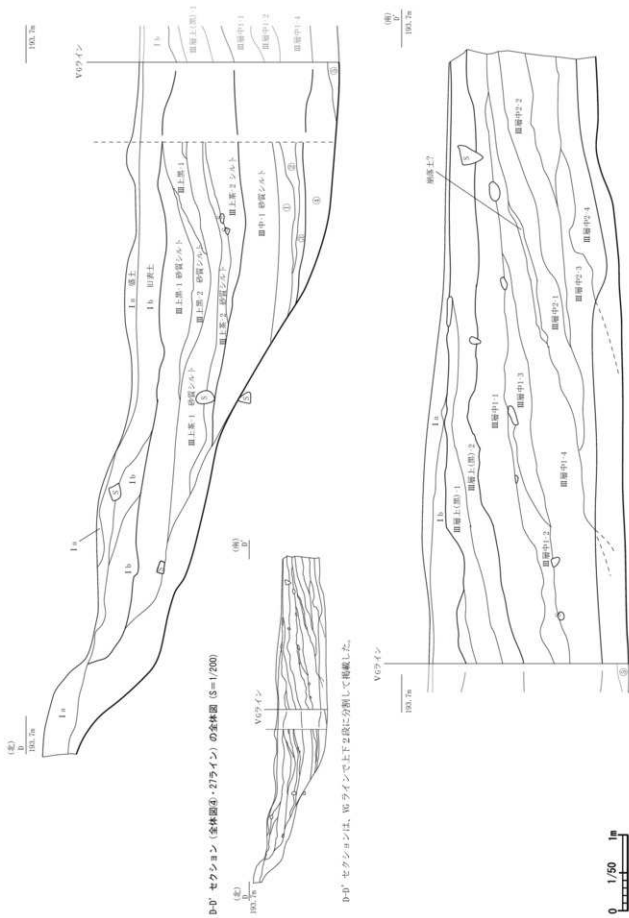


図4 セクション図(2)



D-D' セクション (全体図南・27ライン) の本体図 (S=1/200)

D-D' セクションは、WGラインで上下2段に分割して掲載した。

図5 セクション図(3)

6-0' セクション (遺跡図7・24ライン) の全体図 (S=1/200)



6-0' セクションは、VDラインで上下方向に分割して掲載した。

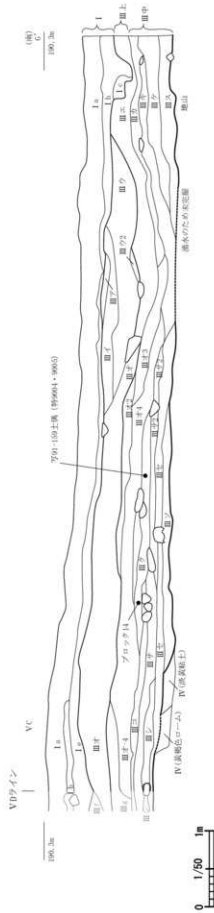
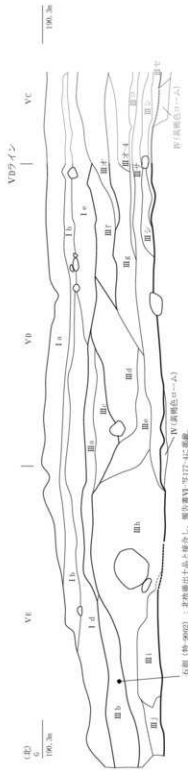
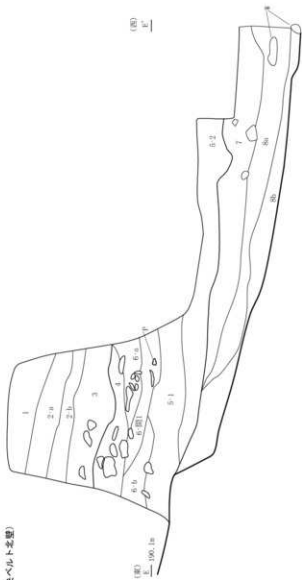


図6 セクション図(4)

E-E' セクション (全体図部・中央ベルト北壁)



F-F' セクション (全体図部・中央ベルト YD-27西壁)

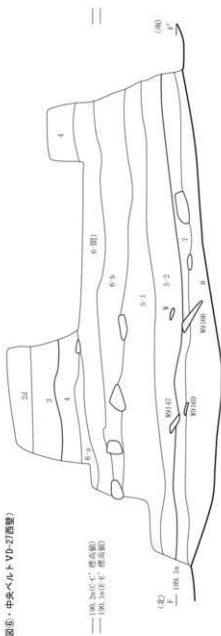
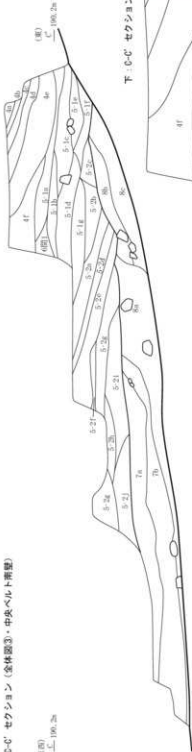


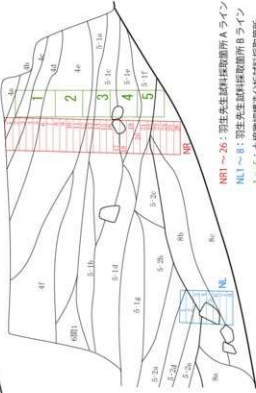
図7 セクション図(5)

C-C' セクション (全体図③・中央ペルト南壁)

(北)
1:100.2m



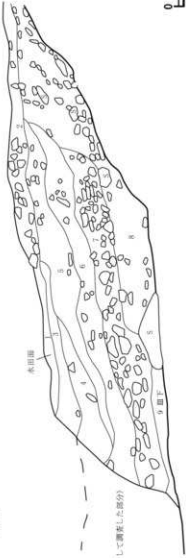
下 C-C' セクション土壌サンプル採取箇所 (南北中間)



NR1 ~ 26 : 羽生先生原料採取箇所 A ライン
NL1 ~ 8 : 羽生先生土質採取箇所 B ライン
1 ~ 5 : 土壌微細構造分析試料採取箇所

A-A' セクション (全体図①・VA-25・26東西壁)

(北)
1:100.2m



0 1/50

図8 セクション図(6)

セクション土層注記(1)

図3・4掲載分

B-B' セクション(全体図②・V-Cライン)

層上	黒褐色土(101R2/2シルト)	
層上	埋堀色土(101R4/3シルト)	
層上	記録なし	
層上	黒褐色土(101R2/2シルト)	
層上	黒褐色土(101R2/2シルト)	
層中	黒褐色土(101R2/2シルト)	礫($\phi \sim 300$ mm)2%, 炭化物粒($\phi \sim 20$ mm)10%
層中	にぶい黄褐色(101R4/4砂質シルト)	礫($\phi \sim 10$ mm)2%, 炭化物粒($\phi \sim 10$ mm)2%, 崩落土混入
層中	埋堀色土(101R3/3シルト)	礫($\phi \sim 200$ mm)30%, 炭化物粒($\phi \sim 10$ mm)10%
層中	埋堀色土(101R3/2シルト)	炭化物粒($\phi \sim 10$ mm)5%
層中	にぶい黄褐色(101R5/4砂質シルト)	礫($\phi \sim 10$ mm)5%, 炭化物粒($\phi \sim 30$ mm)25%
層中	黒褐色土(101R2/2シルト)	礫($\phi \sim 10$ mm)5%, 炭化物粒($\phi \sim 20$ mm)20%
層中	にぶい黄褐色土(101R4/3砂質シルト)	礫($\phi \sim 200$ mm)2%, 炭化物粒($\phi \sim 20$ mm)7%
層中	埋堀色土(101R3/3シルト)	礫($\phi \sim 600$ mm)10%, 炭化物粒($\phi \sim 10$ mm)15%
層中	埋堀色土(101R3/2シルト)	礫($\phi \sim 300$ mm), 炭化物粒($\phi \sim 10$ mm)10%
層中	褐色土(101R6/1粘土質シルト)	礫($\phi \sim 100$ mm)5%, 炭化物粒($\phi \sim 10$ mm)2%
層中	埋堀色土(101R3/2シルト)	礫($\phi \sim 100$ mm)10%, 炭化物粒($\phi \sim 10$ mm)20%
層中	埋堀色土(101R2/2)	礫($\phi \sim 400$ mm)5%, 炭化物粒($\phi \sim 20$ mm)10%
層中	埋堀色土(101R6/6)	礫($\phi \sim 200$ mm)10%, 炭化物粒($\phi \sim 2$ mm)10%

図5掲載分

D-D' セクション(全体図④・27ライン)

1 a	盛土 黒褐色土(101K1/シルト)	礫($\phi \sim 400$ mm)5%, 炭化物粒の混入
1 b	田土 埋堀色土(101K3/2シルト)	礫($\phi \sim 100$ mm)3%
層上(原)	埋堀色土(101K2/2)	炭化物粒($\phi \sim 7$ mm)2%, 礫($\phi \sim 150$ mm)2%
層上(原)	埋堀色土(101K2/2シルト)	礫($\phi \sim 200$ mm)5%, 炭化物粒($\phi \sim 10$ mm)1%
層上(原)	埋堀色土(101K3/2シルト)	礫($\phi \sim 50$ mm)2%, 炭化物粒($\phi \sim 10$ mm)5%
層上(新)	にぶい黄褐色土(101R4/2シルト)	礫($\phi \sim 50$ mm)3%, 炭化物粒($\phi \sim 10$ mm)2%
層中	埋堀色土(101K3/2シルト)	礫($\phi \sim 300$ mm)3%, 炭化物粒($\phi \sim 5$ mm)3%
層中	埋堀色土(101K2/2シルト)	礫($\phi \sim 400$ mm)3%, 炭化物粒($\phi \sim 2$ mm)3%
層中	埋堀色土(101K3/2シルト)	礫($\phi \sim 400$ mm)5%, 炭化物粒($\phi \sim 20$ mm)5%
層中	埋堀色土(101K2/2シルト)	礫($\phi \sim 400$ mm)5%, 炭化物粒($\phi \sim 20$ mm)5%
層中	埋堀色土(101K3/2砂質シルト)	礫($\phi \sim 200$ mm)10%, 炭化物粒($\phi \sim 2$ mm)10%
層中	埋堀色土(101K2/2砂質シルト)	礫($\phi \sim 200$ mm)20%, 炭化物粒($\phi \sim 20$ mm)20%
層中	埋堀色土(101K3/2砂質シルト)	礫($\phi \sim 300$ mm)2%, 炭化物粒($\phi \sim 20$ mm)15%
層中	黒色土(101K2/1砂質シルト)	礫($\phi \sim 600$ mm)20%, 炭化物粒($\phi \sim 20$ mm)25% ト・タケノコ混入
①	記録なし	
②	埋堀色土(101K2/3)	礫($\phi \sim 250$ mm)2%
③	埋堀色土(101R6/8)	礫($\phi \sim 100$ mm)20%, 炭化物粒($\phi \sim 20$ mm)少量
④	黄褐色土(101K5/6)	礫($\phi \sim 10$ mm)3%, 炭化物粒($\phi \sim 20$ mm)少量
⑤	記録なし	

図6掲載分

G-G' セクション(全体図⑤・24ライン)

1 a	埋堀色土(101K3/2)	礫($\phi \sim 70$ mm)20%, 炭化物粒($\phi \sim 2$ mm)10%
1 b	灰黄褐色土(101R4/2)	101R5/6黄褐色土との互層 礫($\phi \sim 220$ mm)10%, 炭化物粒($\phi \sim 2$ mm)5% 水田層
1 c	埋堀色土(101K3/4)	礫($\phi \sim 170$ mm)2%, 炭化物粒($\phi \sim 5$ mm)7%
1 d	埋堀色土(101K3/2)	礫($\phi \sim 70$ mm)20%, 炭化物粒($\phi \sim 2$ mm)5%
1 e	埋堀色土(101K3/3)	礫($\phi \sim 60$ mm)7%, 炭化物粒($\phi \sim 2$ mm)7%
層上	褐色土(101R4/4)	礫($\phi \sim 100$ mm)5%, 炭化物粒($\phi \sim 2$ mm)2%, 砂子・崩落土混入(コア)に相当
層上	にぶい黄褐色土(101R4/3)	礫($\phi \sim 130$ mm)7%, 炭化物粒($\phi \sim 2$ mm)7%
層中	埋堀色土(101K3/3)	礫($\phi \sim 170$ mm)7%, 炭化物粒($\phi \sim 10$ mm)7%
層中	埋堀色土(101K3/2)	礫($\phi \sim 40$ mm)10%, 炭化物粒($\phi \sim 10$ mm)10%
層中	埋堀色土(101K3/2)	礫($\phi \sim 130$ mm)15%, 炭化物粒($\phi \sim 10$ mm)10%
層中	埋堀色土(101K3/2)	礫($\phi \sim 130$ mm)7%, 炭化物粒($\phi \sim 10$ mm)10% (101R4/4褐色土10%含む)
層中	埋堀色土(101R4/3)	礫($\phi \sim 110$ mm)15%, 炭化物粒($\phi \sim 10$ mm)10%
層中	埋堀色土(101R4/4)	礫($\phi \sim 450$ mm)15%, 炭化物粒($\phi \sim 2$ mm)10%
層中	褐色土(101R4/4)	礫($\phi \sim 80$ mm)7%, 炭化物粒($\phi \sim 10$ mm)7%
層中	にぶい黄褐色土(101R4/3)	礫($\phi \sim 30$ mm)5%, 炭化物粒($\phi \sim 2$ mm)5%
層中	埋堀色土(101K3/2)	礫($\phi \sim 20$ mm)2%, 炭化物粒($\phi \sim 20$ mm)2%
層中	埋堀色土(101R5/6)	礫($\phi \sim 130$ mm)2%, 炭化物粒($\phi \sim 2$ mm)5%
層中	褐色土(101R4/4)	礫($\phi \sim 80$ mm)7%, 炭化物粒($\phi \sim 2$ mm)7%
層中	黄褐色土(101R5/6)	礫($\phi \sim 30$ mm)10%, 炭化物粒($\phi \sim 2$ mm)7%
層中	記録なし	
層中	灰黄褐色土(101R4/2)	礫($\phi \sim 80$ mm)10%, 炭化物粒($\phi \sim 80$ mm)10%, 炭化物粒($\phi \sim 2$ mm)10%
層中	埋堀色土(101K2/3)	礫($\phi \sim 70$ mm)7%, 炭化物粒($\phi \sim 2$ mm)15%
層中	埋堀色土(101K3/3)	礫($\phi \sim 90$ mm)20%, 炭化物粒($\phi \sim 20$ mm)15%
層中	埋堀色土(101K3/2)	礫($\phi \sim 20$ mm)5%, 炭化物粒($\phi \sim 20$ mm)15%
層中	にぶい黄褐色土(101R4/3)	礫($\phi \sim 130$ mm)2%, 炭化物粒($\phi \sim 2$ mm)7% (101R4/4褐色土15%含む)
層中	埋堀色土(101K2/2)	礫($\phi \sim 120$ mm)2%, 炭化物粒($\phi \sim 5$ mm)15%
層中	埋堀色土(101K3/2)	礫($\phi \sim 260$ mm)10%, 炭化物粒($\phi \sim 2$ mm)10%
層中	褐色土(101R4/4)	101R4/1褐色土との互層 礫($\phi \sim 50$ mm)2%, 炭化物粒($\phi \sim 3$ mm)7%
層中	埋堀色土(101R5/6)	礫($\phi \sim 20$ mm)5%, 炭化物粒($\phi \sim 2$ mm)2%
層中	記録なし	
層中	埋堀色土(101K3/3)	礫($\phi \sim 50$ mm)7%, 炭化物粒($\phi \sim 10$ mm)5%
層中	埋堀色土(101K2/2)	礫($\phi \sim 20$ mm)1%, 炭化物粒($\phi \sim 2$ mm)7%
層中	にぶい黄褐色土(101R4/3)	礫($\phi \sim 60$ mm)10%, 炭化物粒($\phi \sim 10$ mm)10%
層中	褐色土(101R4/4)	礫($\phi \sim 100$ mm)10%, 炭化物粒($\phi \sim 10$ mm)10%
層中	にぶい黄褐色(101R5/4砂質シルト)	礫($\phi \sim 10$ mm)5%
崩落土	にぶい黄褐色(礫化したら赤茶ける) (101R6/3)	礫($\phi \sim 270$ mm)2%

セクション土層注記(2)

図7掲載分

E-E' セクション (全体図⑤・中央ベルト北壁)

- 1 埋堀色土(10YR3/4) 10R4.6明褐色土(φ1~15mm)3%, 炭化物(φ3~20mm)20%, 礫(φ20~60mm)10%
- 2-a 黒褐色土(10YR2/3) 5YR4.6赤褐色土(φ1~5mm)2%, 炭化物(φ5~12mm)25%, 礫(φ10~30mm)8%
- 2-b 黒褐色土(10YR2/3) 5YR4.6赤褐色土(φ1~5mm)2%, 炭化物(φ5~20mm)30%, 礫(φ10~30mm)10%
- 3 黒褐色土(10YR2/3) 5YR4.6赤褐色土(φ1~5mm)40%, 礫(φ10~20mm)25%
- 4 黒褐色土(10YR3/1) 礫(φ30~250mm)30%, 炭化物(φ3~25mm)30%
- 6-a 黒褐色土(10YR2/1) 礫(φ30~220mm)60%, 炭化物(φ5~15mm)20%
- 6-b 黒褐色土(10YR2/1) 礫(φ10~180mm)30%, 炭化物(φ3~20mm)10%
- 6階-1 黒色土(10YR2/1) 礫(φ10~200mm)15%, 炭化物(φ3~10mm)10%
- 5-1 黒色土(10YR1.7/1) 礫(φ10~230mm)30%, 炭化物(φ10~20mm)5%
- 5-2 黒色土(10YR1.7/1) 礫(φ5~18mm)5%, 炭化物(φ1~5mm)5%
- 7 黒色土(10YR1.7/1) 礫(φ10~150mm)5%, 炭化物(φ1~5mm)5%
- 8a 黒色土(10YR2/1) 礫(φ10~120mm)5%, 炭化物(φ3~10mm)5%
- 8b 黒褐色土(10YR3/1) 礫(φ5~100mm)3%, 炭化物(φ3~10mm)5%

F-F' セクション (全体図⑤・中央ベルト西壁)

- 2d 黒褐色土(10YR2/3) 炭化物(φ5~30mm)40%, 礫(φ10~20mm)25%
- 4 黒褐色土(10YR3/1) 礫(φ30~250mm)30%, 炭化物(φ3~25mm)30%
- 5-1 黒色土(10YR1.7/1) 礫(φ10~230mm)30%, 炭化物(φ10~20mm)5%
- 6-a 黒色土(10YR2/1) 礫(φ30~220mm)60%, 炭化物(φ5~15mm)20%
- 6-b 黒色土(10YR2/1) 礫(φ10~180mm)30%, 炭化物(φ3~20mm)10%
- 6階-1 黒色土(10YR2/1) 礫(φ10~200mm)10%, 炭化物(φ3~10mm)10%
- 5-2 黒色土(10YR1.7/1) 礫(φ5~18mm)5%, 炭化物(φ1~5mm)5% くるみ多い
- 7 黒色土(10YR1.7/1) 礫(φ10~150mm)5%, 炭化物(φ1~5mm)5% くるみ少ない
- 8 黒~黒褐色土

図8掲載分

C-C' セクション (全体図③・中央ベルト南壁)

- 4a 黒褐色土(10YR3/1) 5YR4.6赤褐色土5%, 炭化物(φ1~5mm)7%
- 4b 黒褐色土(10YR2/2) 5YR4.6赤褐色土(φ1~5mm)1%, 炭化物(φ10~20mm)2%
- 4c 黒色土(10YR2/1) 5YR4.6赤褐色土5%, 炭化物(φ3~7mm)1%
- 4d 黒褐色土(10YR2/2) 礫(φ40~60mm)1%, 炭化物(φ10~20mm)1%
- 4e 黒色土(10YR1.7/1) 炭化物(φ5~15mm)5%, 礫(φ50~60mm)2%
- 4f 黒褐色土(10YR2/3) 5YR4.6赤褐色土3%, 礫(φ60~120mm)7%, 炭化物(φ5~10mm)5%
- 5-1a 黒褐色土(10YR3/1) 10YR6.2黄褐色土1%, 炭化物(φ3~5mm)1%
- 5-1b 黒色土(10YR2/1) 礫(φ30~100mm)2%, 炭化物(φ3~7mm)1%
- 5-1c 黒褐色土(10YR3/2) 礫(φ100~120mm)7%, 炭化物(φ5~7mm)1%
- 5-1d 黒褐色土(10YR2/2) 礫(φ50~150mm)10%, 炭化物(φ7~15mm)3%
- 5-1e 黒色土(10YR2/1) 礫(φ60~120mm)5%, 炭化物(φ5~10mm)1%
- 5-1f 黒褐色土(10YR2/3) 礫(φ40~60mm)3%
- 5-1g 黒褐色土(10YR3/1) 礫(φ20~50mm)3%, 炭化物(φ5~10mm)3%
- 5-2a 黒色土(10YR1.7/1) 礫(φ30~30mm)1%, 炭化物(φ3~5mm)1%
- 5-2b 黒褐色土(10YR3/2) 炭化物(φ3~5mm)1%
- 5-2c 黒褐色土(10YR3/1) 炭化物(φ15~20mm)1%
- 5-2d 黒色土(10YR2/1) 炭化物(φ5~15mm)1%
- 5-2e 黒褐色土(10YR3/1) 礫(φ20~70mm)3%, 炭化物(φ3~5mm)1%
- 5-2f 埋堀色土(10YR3/3) 炭化物(φ1~5mm)1%
- 5-2g 黒褐色土(10YR2/2) 5YR5.6明褐色土3%, 礫(φ30~100mm)2%, 炭化物(φ5~10mm)1%
- 5-2h 黒色土(10YR1.7/1) 炭化物(φ5~10mm)1%
- 5-2i 黒褐色土(10YR2/3) 炭化物(φ10~15mm)2%
- 5-2j 黒褐色土(10YR2/2) 炭化物(φ7~10mm)1%
- 6階-1 黒褐色土(10YR2/2) 炭化物(φ5~10mm)1%
- 7a 黒色土(10YR2/1) 礫(φ30~50mm)3%, 炭化物(φ10~15mm)2%
- 7b 黒褐色土(10YR3/1) 礫(φ60~200mm)1%, 炭化物(φ3~7mm)1%
- 8a 黒色土(10YR1.7/1) 礫(φ180~250mm)10%, 炭化物(φ5~10mm)3%
- 8b 黒褐色土(10YR2/3) 礫(φ120~150mm)20%, 炭化物(φ7~10mm)1%
- 8c 黒褐色土(10YR3/1) 礫(φ70~120mm)20%, 炭化物(φ5~10mm)1%

A-A' セクション (全体図①・VA-25・26東西壁)

- 1階 埋堀色土(7.5YR5.6) 上面に本日の掘化あり
- 2階 埋堀色土(7.5YR3/2) 小礫70%
- 3階 埋堀色土(7.5YR/1) 小礫10%, 細礫30%
- 4階 埋堀色土(7.5YR4/1)
- 5階 黒い埋堀色土(7.5YR5/3) 小礫及び細礫を全面に含む
- 6階 埋堀色土(7.5YR/4) 小礫15%, 炭化物(φ2mm)10%
- 7階 埋堀色土(7.5YR/4) 全面に小礫を含む
- 8階 埋堀色土(7.5YR2/2) 砂礫50%, 炭化物(φ2mm)5%
- 9階 記録なし

第2章 西捨場地区の検出遺構と出土遺物

西捨場地区からは、建物跡が1棟と西捨場とした遺物包含層を検出した。

第1節 遺構

第17号建物跡 (SI17 図9～11、写真21～23)

[位置と確認及び炉]

本建物跡は、VD-25・VE-24～26グリッドの第Ⅲ層中の西側を精査中に炉を確認した。壁・柱穴・付属施設・出入口施設は確認できなかった。床面の全体は確認できなかったが東西5m74cm・南北4m34cmの範囲で踏み固められた床を確認できた。堆積土は5cmと薄く分層できず、暗褐色土を基調としている。自然堆積及び人為堆積かどうかは判断できなかった。炉は土器埋設炉と石囲炉を2基確認した。炉1は方形の掘り方で長軸60cm・短軸54cmで、中心部に直立した完形の鉢形土器(図10-1)がみられる。上部には礫を用いて、方形に配置しているが不規則な配置である。そのため炉石を抜き取られた事も考えられたが、抜き取り痕は確認できなかった。炉2は炉1の西側14cmに位置し、方形の掘り方で長軸76cm・短軸70cmであり、上部には角ばった礫を用いて円状に組んでいる。炉1・2ともに同時期に構築され、炉内の堆積土は2層に分層できたが、堆積土中に焼土を確認できず礫も焼成を受けておらず炉として長期に使用したとは考えられない。

[出土遺物]

土器は図10・11及び写真22に掲載した。写真22の掲載番号をもとに以下に記載する。

床下出土品は1～13で、三叉入組文がみられる土器がある。2～3は口唇部の上面に連続の刻みがある。5は浅鉢の精製土器である。12は器外面に赤色顔料を塗布している。床面直上のは14～26で、17が文様区画体内部に羊歯状文を施文し口唇部に二又状突起がみられる。二又状突起は23にもみられる。27は2層のもので、28～40は炉内出土土器である。30は炉1内に埋設されていた平口縁の鉢形土器で、器外面の全面にスス状炭化物が付着している。34は口唇部の上面に指頭による押圧がみられる。本遺構の出土土器の多くは鉢及び台付鉢の破片であり、縄文のみ施文の土器にはスス状炭化物の付着が多い。

石器は石鏃や削器などが出土した。炉石のうち3点は石皿を用いたものである。

[小結]

本建物跡は、縄文時代晩期前葉期で石囲炉と床のみの検出であり、石囲炉の使用頻度は低く長期間の使用は考えられない。

西捨場地区からは建物跡が一棟のみ検出し、他の遺構は全く検出しなかった。時期は床下の遺物が大洞B式であり、床直は大洞BC式に併行する土器であるため、本建物跡の構築時期は縄文時代晩期前葉の大洞BC式期と考えられる。

(成田)

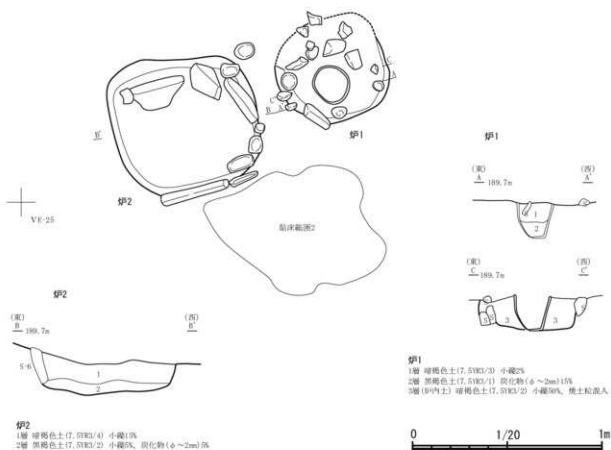
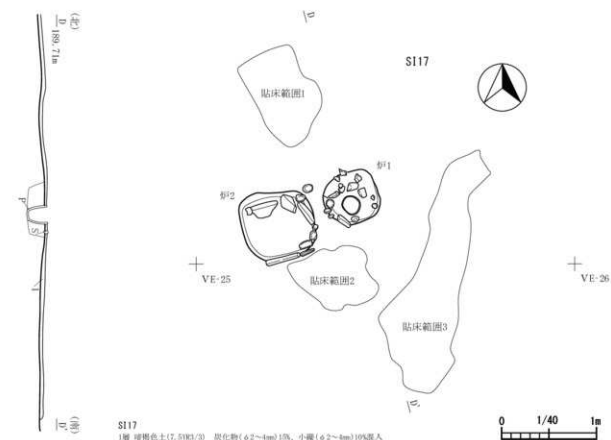


図9 第17号建物跡

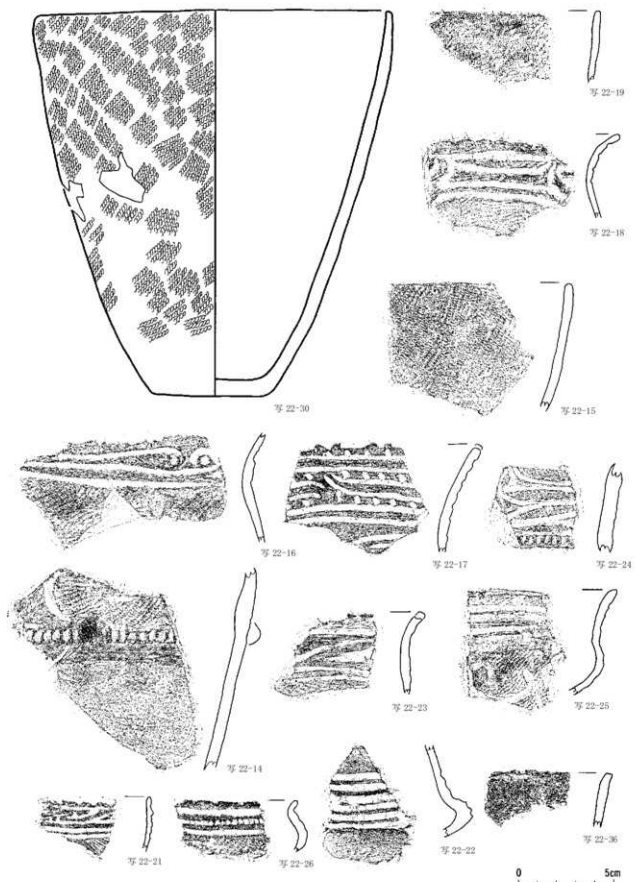


図10 建物跡出土遺物(1)土器

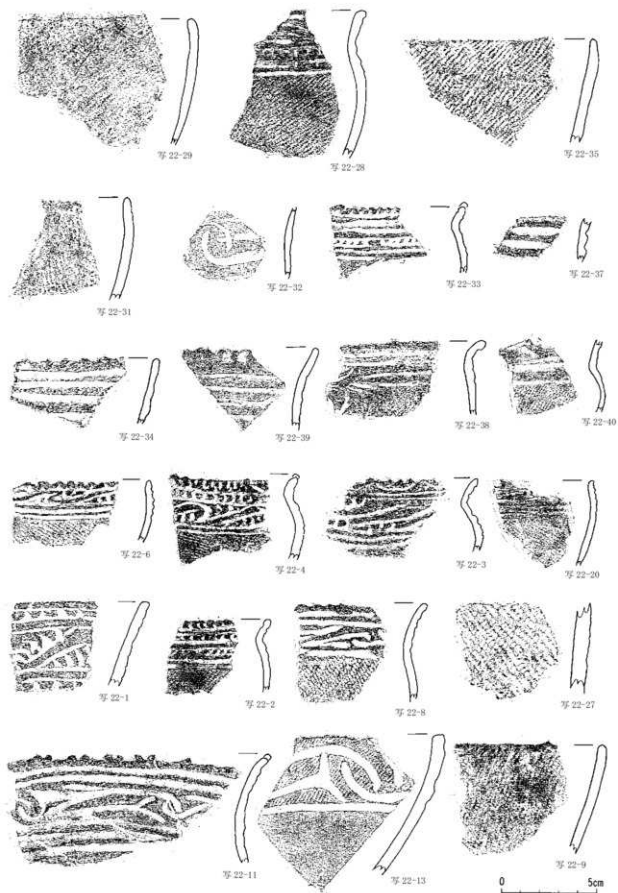


図 11 建物跡出土遺物(2)土器

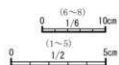
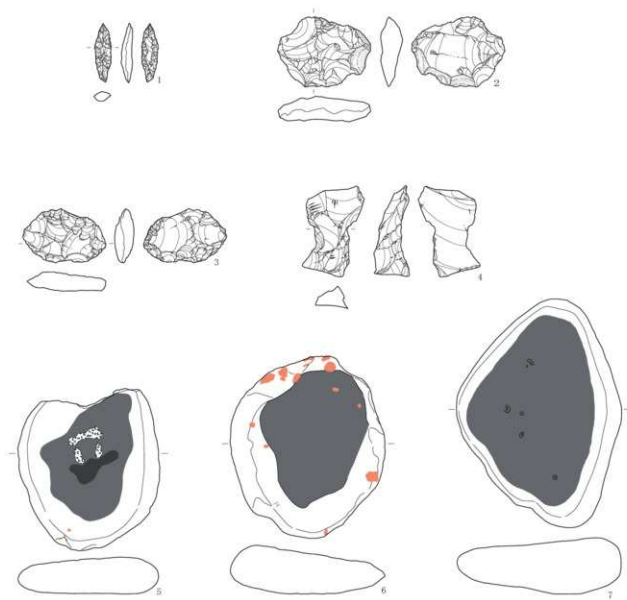


図12 第17号建物跡出土石器

第2節 西捨場

1 概要

西捨場は土器・土製品が1084箱、石器・石製品類が609箱、木質遺物が87箱、骨角器が5箱の合計1785箱が出土した。遮光器土偶などの土製品、ヒスイなどの玉類・石棒・岩版・石製円盤などの石製品も出土した。西捨場では、下層から保存状態の良い漆製品や木製品、骨角器、動物骨、魚骨、種実などの有機質遺物が出土したことが特徴であり、木製品では端に突起を持つヘラ状木製品、漆製品では櫛や腕輪などのほか漆漉し布が見つかった。ヤスや装飾品等の骨角器は河川上流域のものとして類例の少ないものである。本書では、土器、石器と遺物の種類をわけて掲載し、動物骨の同定を含めた自然科学分析は、『川原平(1)遺跡Ⅶ』にまとめて掲載している。

(齋藤)

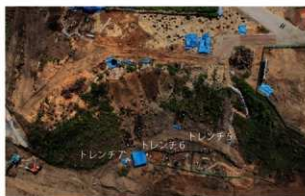
2 土器

〔出土土器の重量分布について〕

西捨場地区では12,697.5kgにのぼる土器が出土している。これは水洗後、接合前の計量分であり、現地でも個体ごとに保管した完形土器等は含まれていない。また、表採およびトレンチ出土品でグリッドを記入していないものも除外している。次頁の図にはグリッド単位での出土状況を示した。着色の凡例は、報告書Ⅱに揃えている。1グリッドあたり175kgを超えると、色での区別ができないため、グリッドごとの出土重量を記した表では175kg以上出土しているグリッドを中太線、400kg以上出土したグリッドを二重線、500kg以上出土したグリッドを極太線で囲んだ。最も多くの土器が出土したのはVD-26グリッドで、重量は572.6kgである。この場所は中央ベルトの位置であり、土層の堆積が最も厚いところで最も多量の土器が出土していることを端的に示す。西捨場の土器は流れ込みではなく、土と土砂がともに廃棄された結果、土の堆積が厚いところほど土器が多いということである。

ところで、下記の写真は2014年7月に調査開始直後の西捨場を撮影したものである。斜面部の掘削が本格的に行われるより前のため、白線より斜面上方には2013年に平場地区から投棄された廃土が残っている。廃土は後にトレンチ9からトレンチ16を設定した場所の間に投棄されているが、斜面下方への流出はトレンチ5・6よりも上方で止まっている。一部で土砂の流出防止のため土留めのコンパネを設置してはいたが、平場から土砂を直接投棄した場合、西捨場で最も土器が出土した場所までは達しないということである。西捨場の斜面は急であり、時間が経てば土砂は斜面下方に移動するという見方も当然あるだろうが、いかに崖面が急であるとはいえ、斜面途中でそのような堆積が確認できないのは不自然である。2013年の排土は一冬を越して雪解け水が斜面を流れた後でも、下方への流出はほとんど見られない。このことは西捨場への廃棄が平場から直接行われたものではなく、斜面を少し下って行われたことを示唆する。

(岡本)



西捨場（上方が東）



西捨場（南から）

【土器の整理作業および報告書掲載の方法】

整理作業にあたっては、まず接合作業に先立ち、出土量を把握するため袋単位で重量を計測し、その後接合作業を進めた。整理期間の制約により、接合作業は基本的に同一グリッドかつ同一層の出土土器に対して行い、赤彩土器や特徴的な土器など一部の資料についてのみ、広範囲の接合を試みた。全体の状況が把握できる状態に還元できた個体(概ね全体の1/4以上)は、最終的に約1350点を数える。これらにSI17出土土器のほか、資料的価値が高いと判断した中央ベルト出土の破片資料、類例の少ない破片資料などを加えた約1600点を、一次抽出資料として、整理番号を付した。これらの資料は可能な限り掲載に努め、約950点を掲載したが、整理作業の制約上、約400点は非掲載である。なお一次抽出資料のうち約230点は小型土器として土製品の項で扱っている。資料は基本的に写真掲載とした。より多くの資料を掲載するため、1つの個体に対し、撮影は1面に留めたものが多い。実測図は195点作成した。写真掲載資料における図化率は約20%である。掲載は実測図・写真ともに出土層位ごととした。詳細は「第1章第2節基本層序」のとおりである。層位を基準に、写真図版は器種順、実測図は時期順に掲載した。なお時期区分や器種区分の詳細については「報告書VI第2章第2節2土器」に準拠している。

【出土土器の様相】

西捨場の掲載土器は、最も古い土器が後期7-3期、最も新しい土器は晩期5期に該当する¹⁾。後期7-3期の資料は小破片1点のみであることから、本捨場の機能時期は概ね後期7-4期～晩期5期と考えられる。各時期の出土量に多寡はあるものの、本遺跡の主体時期である後期後葉～晩期にかけて、連続と利用された状況が窺える。掲載土器946点のうち、時期の特定が可能であった土器は588点である²⁾。内訳は、後期7-3期が1点で0.1%(パーセンテージは掲載土器全点に対する比率。以下同じ)、後期7-4期が14点1.5%、後期8期が12点1.3%、晩期1a期が23点2.4%、晩期1b期が114点12.1%、晩期2期が138点14.6%、晩期3期が222点23.5%、晩期4期が36点3.8%、晩期5期が28点3.0%である。これらの比率をみると、西捨場は晩期1b期から本格的に利用され始め、晩期3期をピークとして、その後減少する傾向が読み取れる³⁾。以下、時期ごとに西捨場から出土した土器の特徴を記載する。なお、層位に基づいた土器の出土傾向は「第1章第2節基本層序」に記載した。遠距離で接合したものや、異なる捨場などで同一個体が確認できた例については報告書Ⅷに掲載した。

後期7-3期：口縁端部に貼瘤が巡る。鉢と推定される小破片である(写80-13)。

後期7-4期：器種は鉢、注口がある。他に香炉や、底部が高台となる粗製深鉢や壺が該期に伴うと推定されるが、後期8期との区別は困難である。

鉢は波状口縁で頸部が括れる器形を主体とする(写80-12など)。これらは口縁部を文様帯とし、入組文が施されるほか、貼瘤や刻目列も多用される。入組文には磨消縄文が施され、縄文本体はLRが多いもののRLも見受けられる(写80-10)。体部はいずれも無文である。この類型の他に、平口縁で頸部が括れない例があり(写84-6)、横位沈線と刻目列のみで文様が構成される。

注口は平口縁と波状口縁があり、頸部が独立して設けられる。文様は頸部に施され、幅広の隆帯に横位沈線が伴うもの(写111-7など)、彫去状の横位沈線が複数条施されるもの(写74-9)、頸部の上下端に彫去状の横位沈線が2条一組で施されるもの(写83-12)がある。いずれも貼瘤が伴い、LR縄文が施される。口縁部や体部や注口部は無文でミガキ調整が施される。底部は径の小さい高台である。注口

下部には一袋もしくは二袋状の膨らみや突起を伴う。

後期8期：器種は鉢、注口がある。他に香炉や、底部が高台となる粗製深鉢や壺が該期に伴うと推定されるが、後期7-4期との区別は困難である。

鉢は平口縁が主流であるが波状口縁(写98-16)も見受けられる。平口縁には台形もしくは一山の突起が伴い、単位が復元できるものはすべて7単位である(写80-9など)。いずれも頭部が括れ(写83-7など)、口縁部に文様帯をもつが、写98-16は文様帯が体部上半に及ぶ。7-4期から引き続き入組文や貼瘤が施されるほか、入組文に接続する三叉文(写98-16など)も一定数確認できる。入組文には磨消縄文が施され、体部が無文となる例(写99-19など)が主流だが、入組文に収斂した刻目が充填され、体部に縄文が施されるものもある(写98-20)。底部が残存するものは台が付くものが多い。

注口はいずれも平口縁で、突起が付く例もある(写82-9など)。文様は、頭部や口縁端部のみに横位沈線や三日月状の貼瘤などが施される例が多いが、体部に沈線文が施されるものもある(写82-11)。底部は径の小さい高台である。注口部が残存する2点(写82-11、写84-8)は、どちらも下部に一袋の突起を伴う。

晚期1a期：器種は深鉢、鉢(台付)、注口がある。他に粗製深鉢や粗製壺が該期に伴うと推定されるが、特定は困難である。

深鉢と鉢は、平口縁と小波状口縁がほぼ同数見受けられ、平口縁には突起が密に付くものが多い(写80-1など)。小波状口縁では1単位の突起が付くものもある(写79-17)。いずれも頭部が括れ、口縁部が文様帯となる。文様は1段構成の入組文が主体で、三叉文が多用される。三叉文は入組文に接続するもの(写80-3など)や、入組文の空隙に充填されるもの(写79-14など)のほか、口縁突起の下に独立して施される例(写79-16など)もある。入組文には主にLR縄文が施され、入組部に刺突を伴う例(写80-3など)や、入組文内に縦位短沈線を伴う例(写79-17)もある。体部には縄文が施されることが多い。底部が残存しているものは、深鉢はいずれも高台であり、鉢はすべて台付きである。台付鉢では器高が40cmを超える大形のものも出土している(写80-2)。

注口はすべて平口縁で、口縁部に立体的な装飾を持つものが特徴的に存在する(写83-14など)。頭部が独立して設けられる器形が主流であり、底部はすべて丸底である。文様は施されないか、横位沈線などの簡素な文様に留まる例が多いものの、頭部や体部に沈線文が施されるものもある(写72-6、写111-6)。注口下部には、一袋もしくは二袋状の突起や三叉文(写72-6)、弧状の隆帯(写115-9)などが伴う。なお、写93-11は報告書Ⅲ図89-12と接合した。

晚期1b期：器種は深鉢、鉢(台付)、浅鉢(台付)、皿(台付)、壺、注口がある。

深鉢や鉢(台付)は平口縁と小波状口縁があり、いずれも突起がつく例が一定数見受けられる。突起は平口縁では多数のB突起が多く、小波状口縁では1単位の大ぶりの突起が特徴的に存在する(写71-16など)。器形は、鉢では頭部の括れがない(写79-12など)もしくは、口縁端部が外反する(写88-7など)が、台付鉢では頭部が括れ、体部が丸みを帯びる(写113-2など)。鉢の底部形態は、口径と高さの比率が大きなものは高台であり(写76-7)、比率が小さいものは平底(写98-1など)が多い。文様は基本的に口縁部～体部上半に施されるが、体部に施される例もある(写88-7)。文様要素は、横位に連続する入組三叉文が主流であり、沈線間に施される短沈線列や、部分的に「ノ」の字状に垂下する文様帯区画文が副次的に用いられる例(写99-17など)が多い。入組三叉文が用いられない例も一定数

存在し、粗雑な弧線文(写79-11など)や横位沈線化した入組三叉文(写75-18など)、上向き2重の弧線文に複数条の横位沈線(写77-11など)、入組文と三叉文の組み合わせによる入組三叉文に類似した文様(写98-5など)などが確認できる。また、副次的な要素として、眼鏡状隆帯が伴う例(写71-16)も見受けられる。深鉢に近い器形では、口縁端部の狭小な範囲に沈線間の短沈線列や横位沈線などの簡易な文様が施される例(写76-7など)もある。文様帯には地文が施されず、体部に縄文が施文される例が多い。

浅鉢(台付)や皿(台付)では平口縁と小波状口縁があり、いずれも突起が付くものは1単位であることが多い。また、突起の内側に隆帯などの文様が施される例(写101-21など)もある。器形は頸部が括れるものと括れないものがあるが、台付では括れないものが多数を占める。台が伴わない場合の底部形態はいずれも凹底(写81-6など)である。文様は鉢と同様に入組三叉文が主流であるが、入組文と三叉文の組み合わせによる入組三叉文に類似した文様も、入組三叉文と同数程度見受けられる(写112-3など)。短沈線列や「ノ」字状に垂下する区画文などは見受けられず、鉢と比較して文様は画一的である。特異な例として、内面からの押圧により体部に4か所の張り出しを作出しているもの(写90-11)がある。文様帯には地文をもたないものが多いが、縄文地施文も一定数見受けられる。一方、磨消縄文は少ない。体部はいずれも無文で丁寧なミガキ調整が施されるものが多い。

壺は、精製土器では2段の頸部が設けられるものが多く(写107-1など)、半精製では独立した頸部を持たない(写107-3など)。体部は長胴形(写106-19など)や算盤玉形(写107-2)、球胴形(写112-6など)などがある。底部は平底が主流であり、削り出し状にミガキ調整が施されるもの(写81-17など)もある。文様は、精製壺では頸部に入組三叉文、体部には磨消縄文を伴う入組文や渦巻文が施されるもの(写112-7など)が主流だが、体部文様に入組三叉文が用いられる例(写106-19など)や無文の例(写106-20など)も見受けられる。また、文様帯の下端などに沈線で区画された無文帯が伴うもの(写113-5など)が多く、特徴的である。半精製壺は、口縁部と体部の境に隆帯が施されており、隆帯上に横位沈線と刻目が交互に配される(写78-19など)。

注口は、すべて独立した頸部が設けられる器形で、体部は扁平な算盤玉形が多数を占める。口縁部は平口縁が多いが、小波状口縁も見受けられる(写82-6)。突起を伴う例(写82-5など)もあり、写82-4では突起部に人面を表現している。底部はすべて丸底で、注口部の端部は肥厚するものが主流である。文様は注口周囲のみに施されるもの(写85-22など)、頸部～体部上半に施されるもの(写93-10など)、無文のもの(写110-17)がある。文様は地文をもたない沈線で描出されるものが主流であり、沈線が彫去状となるもの(写110-18など)もある。器面は丁寧なミガキ調整が施され、黒色を呈するものが多い。

該期には赤彩土器が一定数見受けられ、光沢のある膜状の赤彩土器が壺(写107-1など)に多く認められるほか、皿(写81-6など)でも数点確認できる。また、外面に透明漆を塗布する例もある(写76-13、写78-19)。

晩期2期：器種は深鉢、鉢(台付)、浅鉢(台付)、皿(台付)、壺、注口がある。

深鉢(台付)や鉢(台付)では精製より半精製が多数を占める。半精製では、平口縁が主流で、口唇に刻目を伴う例と伴わない例が同数程度存在する。刻目の有無にかかわらず、多数のB突起が付くものが多い。突起にはB突起に類似した三山突起(写97-23など)も見受けられる。底部に台が伴わないもの

は、口縁部が内湾する例(写97-19など)が多い。台付では頸部が括れるものが主流で、口縁部が比較的短い。口縁部は、端部が短く立ち上がるもの(写75-3など)、外傾もしくは外反するもの(写75-1など)がある。頸部が括れないものも一定数見受けられ、それらは口縁部が内湾する(写88-21など)。文様は、羊歯状文のほか、沈線間に施される刻目列(写75-17など)・刺突列(写97-16など)・短沈線列(写76-3など)が1~3条程度施文される例も多い。副次的な要素として横位沈線が多用されるほか、口縁端部に刺突列や刻目列が施される例(写87-6など)も多い。いずれも文様帯には地文が伴わず、体部に縄文が施される。精製では、器形に多様性が見られ、長く外傾する口縁部に扁平な体部をもつもの(写115-1など)、頸部の括れがなく直線的に開くもの(写97-14など)、頸部の括れがなく体部が丸みを帯びるもの(写77-5など)などがある。文様は、口縁部のみ施されるもの(写77-6など)のほか、体部に羊歯状文が施されるもの(写97-14など)、体部に磨消縄文を伴う沈線文が施されるもの(写99-14など)がある。なお、台付鉢の台部に設けられる透かし孔(写88-24など)は精製・半精製ともに確認できる。

浅鉢(台付)や皿(台付)では、半精製より精製が多数を占める。どちらも口縁形態はすべて平口縁で、半数程度に1~5単位程度のB突起が伴う。口唇に沈線や刻目を伴う例も見受けられる。底部に台が付くものが少なく、台付ではすべて口縁部が内湾する。台が付かない場合の器形は精製鉢とほぼ同様であるが、底部直上付近で括れて外反・外傾して立ち上がる器形(写75-23など)がある。また、平面形が楕円形を呈するもの(写101-19など)が特徴的に見受けられる。文様は、半精製では鉢と同様である。精製では、器形と文様に相関関係が見受けられ、頸部が括れるもの(写101-7など)や口縁部が内湾するもの(写101-5など)では、口縁部に羊歯状文や沈線間に刻目列、体部には磨消縄文を伴う沈線文が施される例が多い。頸部の括れがなく直線的に開くものや、底部直上付近で括れて外反・外傾して立ち上がる器形では体部に地文を伴わない沈線文(写101-11など)や羊歯状文が施される(写101-2など)傾向がある。羊歯状文や沈線文には彫去により立体的に描出される例(写77-15など)もある。

壺は、基本的に口縁部が短く、独立した頸部が設けられる。口縁部はやや厚みのあるもの(写78-6など)の他に、受け口状のもの(写106-9など)などもある。体部は長胴形のもの(写78-6など)や球胴形のもの(写106-15)などがある。頸部が極端に細い例(写106-13など)も一定数見受けられる。また、肩部が屈曲するもの(写78-5など)もある。頸部が設けられないものはすべて広口壺である。底部形態は平底もしくは凹底が多く、張り出し状の脚が付く例が1点ある(写78-4)。文様は、広口壺を除き、いずれも頸部に隆帯(写106-10)や立体的な羊歯状文(写106-15など)が施される。頸部に3~4単位のB字状の突起を伴う例(写78-6など)も多い。体部は無文のもの(写92-13など)、上半に羊歯状文や沈線間の刻目列が施されるもの(写115-5など)、渦巻文などの沈線文が施されるもの(写106-14など)がある。

注口の器形は、頸部が作り分けられているもの(写71-1など)と、ないもの(写85-20など)がある。前者は口縁部が受け口になり、後者は口縁部が長く内傾する。口縁形態はどちらも平口縁で、B突起が多用される。注口に対応する位置には正面性のある突起が配される例(写110-10など)が多い。体部は扁平で体部上半は狭小である。体部屈曲部が装飾的となる例(写110-11など)もある。底部は基本的に丸底である。文様は羊歯状文や沈線間に施文される刻目列が主流であり、口縁部~体部上半に施文される。また、注口部下に沈線文が伴う例(写93-8など)も多い。縄文は用いられず、器面は丁寧に磨

かれる。注口部は端部が肥厚し、基部に隆帯が巡るものが多い(写113-8)。

該期には赤彩土器が多く、いずれも光沢のある膜状を呈し、鮮やかに発色している。特に精製壺には大多数に施されるほか、注口や浅鉢、皿などの多様な器種に認められる。また、塗膜の遺存状態が良好な彩文土器も出土している(写101-16)。そのほか、外面に透明漆を塗布する例もある(写81-9など)。

晩期3期：器種は深鉢(台付)、鉢(台付)、浅鉢(台付)、皿(台付)、壺、注口がある。

深鉢(台付)や鉢(台付)では半精製土器が多数を占め、精製土器は数点である。いずれも口縁形態は平口縁で、三又状の袂りを連続させて装飾的な口縁を作出するもの(写99-9など)、口唇に刻目を伴うもの(写99-5など)、B突起を連続させるもの(写99-8など)など、口縁部が装飾的となる。また、B突起が多用される傾向が看取される。器形は、体部上位が強く張り出し、口縁部が短く立ち上がるもの(写96-6)が主流であるが、口縁部が内湾する例(写99-9)もある。底部が残存するものは、装飾性の強い写97-9を除き、すべて台が伴う。半精製土器では、口縁部付近に間隔の狭い横位沈線が複数条施され、沈線間に刻目列や刺突列が伴う例が一般的である。刻目列や刺突列は数個一組が沈線の上下に施される例(写99-1)も多い。肩部には1単位の突起が付くものが見受けられる。突起は縦位のB字状を呈するものが多く、突起が突出する例(写74-12など)も見受けられる。文様帯に地文は伴わず、体部に縄文が施される。縄文原体はLRとRLがほぼ同数である。精製土器では、口縁部付近の文様は半精製土器と同様の様相であり、体部に磨消縄文を伴う雲形文が施文される。台部は半精製・精製ともに、端部が肥厚し、沈線文や透かし孔が施される例(写85-8など)が多い。

浅鉢(台付)や皿(台付)では、口縁部が内湾し、底部が凹底もしくは丸底となるもの(写85-9など)、体部から口縁部が直線的に開き、底部が平底のもの(写90-17など)、底部付近で括れ、口縁部が外傾・外反し、底部は凸状の平底となるもの(写102-15など)がある。前者の口縁形態は平口縁で、2個一組のB突起が1単位伴う例が多く、後2者は装飾的な口縁が多い。また、平面形が楕円形を呈するものが2例認められる(写70-5、写85-13)。文様は、口縁端部に横位沈線や刻目列・刺突列が施され、体部全面に雲形文が施されるもの(写89-9など)、体部上半のみに雲形文や沈線文が施されるもの(写89-18など)があり、雲形文は影去されるものと、沈線で施文されるものがある。また、底面に雲形文が施される例(写86-7など)もある。磨消縄文が伴うものが主流だが、縄文を伴わない例(写100-5など)や、体部上半のみに文様が施文されるものでは縄文地施文(写86-6など)も見受けられる。そのほか、口縁端部に2条程度の横位沈線のみが施文される例(写89-11など)も多く、これらの多くには赤彩が施される。内面はミガキ調整が一般的だが、内底面に凹線状の段が設けられるもの(写91-4など)や、雲形文が施されるもの(写85-2)もある。底部に台が伴う例は少なく、台の様相は、鉢と同様であるもの(写86-10など)のほか、装飾性が強い台(写103-1)が一定数存在する。

壺の器形は、頸部が作り分けられるものが主流であるが、独立した頸部を持たないもの(写74-8)もある。口縁部は短く開くもの(写103-15など)と、受け口状(写103-16など)になるものがあり、突起を伴う例(写105-5など)や装飾的な口縁(写105-17など)は、一部に確認できるのみである。体部は下膨れ状(写103-19など)や球胴形(写92-1など)、扁平形(写105-3など)があるほか、体部が細長いもの(写92-4など)が特徴的に存在する。また、広口壺(写106-5など)も少数見受けられる。底部は凹底が主流であるが、平底も認められ、底部形状を問わず、張り出し状の4単位の脚が付属するもの(写104-

6)もある。文様は、体部に雲形文や沈線文が施文されるものと、無文のものがある。前者は磨消縄文が伴う場合もあるが、地文がないもののほうが多い。体部文様の有無に関わらず、頸部と体部の境には2条の隆帯が巡る例が多く、横位や縦位のB字状の突起が4単位前後伴う。特異な例として、底面(写105-12)や口縁部内面(写73-22)に雲形文が施される例も見受けられる。

注口の器形は、頸部が作り分けられているもの(写93-4など)と、ないもの(写93-1など)がある。前者は口縁部が短く開き、後者は口縁部が長く内傾する。口縁形態は装飾的な口縁と、平口縁があり、どちらも注口に対応する位置に正面性のある突起が配される例(写93-3など)が多い。体部は扁平で、体部上半は屈曲部と一体化する。体部屈曲部には装飾的な突起が連続する例(写93-1など)が多い。底部は凹底か丸底で、丸底には円形の沈線が施されるもの(写93-3など)がある。注口端部は肥厚し、基部は隆帯やB字状の突起が付されるなど、装飾的である(写110-6など)。

該期には赤彩土器が多く、壺や浅鉢などに多用されるものの、なめらかな膜状を呈し鮮やかに発色する例はほとんど見受けられず、暗赤褐色状を呈するもの(写71-4など)や、粉状のもの(写70-8など)が多い。

晩期4期：器種は、鉢(台付)、浅鉢(台付)、皿、壺、注口がある。他に口縁端部に3条の横位沈線が巡る粗製深鉢や、肩部が張る粗製壺(写107-12)などが該期に伴うと推定されるが、晩期5期との区別は困難である。

鉢(台付)はすべて半精製土器である。口縁形態は平口縁で、基本的に口唇に刻目を伴う。突起が伴うものにはB突起(写95-15)や山突起(写88-3など)などが見受けられるが、いずれも低平である。器形は、体部上位が強く張り出し、口縁部が短く立ち上がるもの(写97-1など)が主流であるが、口縁部が内湾する例(写88-3)もある。底部形態は平底、もしくは台付である。文様は、口縁部に数条施される間隔の狭い横位沈線を基本とする。沈線間に刺突列を伴う例(写88-2など)もある。肩部には1単位の立ち上がる大突起が付く例(写88-18など)もある。文様帯には地文が伴わず、体部の縄文の原体はLRとRLがほぼ同数である。台付鉢では、台部に沈線文が施される例もある(写74-2)。

浅鉢(台付)や皿では精製土器が多数を占め、半精製土器は1点(写101-25)のみである。半精製土器の様相は鉢と同じである。精製土器では、浅鉢よりも皿が多く、平底の底部に口縁部から体部が直線的に開く器形(写102-11など)を主体とし、丸底で口縁部が内湾する器形(写102-13)が若干含まれる。口縁形態はいずれも平口縁で、突起を伴う例(写86-4など)は少ない。口唇には沈線や刻目を施すものが大多数を占める。基本的に体部文様には、横位沈線とともに退化した雲形文や沈線文が用いられ、磨消縄文が施されるが、一部に縄文地施文(写90-14)も見受けられる。内面には口縁部に沈線が1条施文される例(写90-15)が多いほか、底面直上に凹線状の段を持つ例(写102-10)も一定数存在する。

壺は、いずれも平口縁で体部上位に最大径をもち、底部は平底となる。頸部は作り分けられるもの(写103-14)とないもの(写103-12)がある。口縁部に突起を伴う場合はB突起のほか、1単位の山突起も見受けられる(写103-13)。文様は、体部上半に沈線文をもつものと、口縁部と体部の境に横位沈線と1単位の突起が施されるのみのもの(写103-12)がある。前者は地文が伴わないもの(写103-14)と縄文地に施文されるもの(写103-13)がある。

注口の器形は、体部が屈曲し、底部は丸底である。文様は、器体の上半と下半に磨消縄文を伴う沈線文が施され、注口部の上下には注口を挟むように隆帯が施される(写85-7など)。

赤彩土器は、皿や注口では過半数に認められるものの、いずれも遺存状態が悪く、多くが褐色の脆い膜状を呈する(写90-16など)。写85-7は、文様内にもみ赤彩が残存することから、塗り分けがなされていた可能性がある。

晩期5期：器種は、深鉢、鉢(台付)、浅鉢(台付)、皿、壺がある。他に口縁端部に3条の横位沈線が巡る粗製深鉢や、肩部が張る粗製壺(写107-12)などが該期に伴うと推定されるが、晩期4期との区別は困難である。

深鉢、鉢(台付)は、いずれも半精製土器である。器形は、体部が直線的に開き、口縁部で外反する。口縁形態は平口縁で、突起が付くもの(写88-13など)もある。口唇には沈線を伴うものが過半数を占める。底部形態は平底もしくは台付である。口縁部～体部上半には多条の横位沈線が施文される。体部に縦位短沈線が付加され、工字状の文様を構成する例(写95-10など)や口縁部と体部の境付近に2個一組の突起が伴う例(写98-27など)が多く、突起は眼鏡状隆帯となることもある(写96-1)。いずれも体部上半や口縁部には地文が伴わないが、体部は縄文地施文である。体部下半には縄文が施される。縄文原体はLRよりRLのほうが多い。口縁部内面には沈線が施文される例が一定数存在する。台部には刺突が充填される例(写98-27)が見られる。写88-15はIV写83-25と同一個体である。異系統の鉢である。

浅鉢(台付)、皿では、精製土器が多数を占め、半精製土器は浅鉢で若干数認められるのみである。浅鉢(台付)や皿の器形は、体部が直線的もしくは内湾気味に開き、口縁部はやや外反するもの(写90-2など)と直立するもの(写90-3など)がある。口縁や口唇の様相は鉢と同様である。底部形態は平底と丸底と台付があり、台付は浅鉢のみである。口縁部には数条の横位沈線を施し、2個一組の突起が付加される例が多い。体部には矢羽状文が施されるもの(写114-7など)と、無文のもの(写86-9など)がある。台付浅鉢には、横位沈線と工字文が用いられ、2個一組の突起を伴う例も多い。地文は施されない。内底面には凹線状の段が設けられる例が一定数見受けられる。台の有無に関わらず、口縁部内面には沈線が施文される例も多い。

壺は1点のみである(写91-10)。口縁部から体部上半は欠損している。横位沈線が残存しており、地文は認められない。底部には4箇所脚が付く。

該期にも浅鉢(台付)や皿に赤彩が認められる。いずれも遺存状態が悪く、粉状(写90-3など)を呈するものが多い。

また、上記以外にも次のような遺物が出土している。写81-13は外面に赤彩が施される壺の底部である。張り出し状の脚が付属し、脚には沈線による加飾が認められる。内面には透明漆の掻き取りのような痕跡が残る。漆液容器に転用された可能性が考えられる。写81-22は頸部に隆帯を伴う壺である。隆帯内側は赤彩が塗り残され、地塗りの黒が表出する。写88-10は鉢の底部である。内面に赤色顔料が付着していることから、顔料容器の可能性が考えられる。写92-21は晩期3～4期の注口である。器面に黒色付着物が全面に認められ、口縁端部と体部屈曲部および内面口縁部のみ赤彩が残存する。彩文状に塗り分けられていたものと推定される。写92-20は後期後葉から晩期の壺である。内面に竹管状の刺突が確認できる。写93-14は張り出しを持つ土器である。器種は不明であり、土製品の可能性もある。内面は粗いナデ調整である。写97-4は漆液容器である。赤い膜状の漆液の上面に縮

黴のある褐色の漆液が確認できる。写99-20は後期後葉から晩期前葉の台付鉢と推定されるが、台部が中実の棒状となる。秋田県の堀ノ内遺跡に類例が認められる(秋田県教委 第432集 図195-10)。写108-9は底部に張り出し状の脚を伴う壺の底部である。脚の上面に沈線による加飾が認められる。写109-13は底部の摩滅が顕著で、一部穿孔状の欠損がある。その周囲にはアスファルトと思われる黒色物質が付着する。写110-1は晩期3期と思われる壺の小破片である。刻目を伴う細い隆帯により施文される。類例がなく、異系統の可能性もある。写111-10は注口と推定される土器である。器形から晩期中葉と推定されるが、体部には沈線間に刺突列を充填し、文様が描出される。写111-11は環状土器である。上部に低平な筒状の突起が設けられる。平面形はやや楕円形を呈する。写111-14は晩期4～5期の壺形の手あぶり形土器である。外面全面に炭化物が付着する。覆いの部分は機能時には接合していたものだが、一度壺形土器を焼成した後に口縁に付加されたものである。写112-3は体部と台部の接合部分が剥離しており、剥離部分にアスファルトと思われる黒色物質が付着している。写114-18は4単位の脚を伴う鉢の底部である。底面に沈線による文様が施される。異系統と考えられる。写114-22は4単位の脚を伴う皿である。平面形が方形を呈する。

【分析資料】

本捨場出土の土器について、下記のとおり分析を行った。詳細は報告書Ⅷ第1編に掲載した。

胎土分析(Ⅷ第1編第8章第2節)：3点分析を行った。土器の材料となった堆積物の採取地について、写83-9、写98-24は遺跡周辺以外、写98-20は遺跡周辺と推定された。

安定同位体分析(Ⅷ第1編第7章第5節)：3点分析を行った。そのうち1点是非掲載である。写98-23と非掲載資料(整理番号19310)はC3植物・草食動物、写85-14はC3植物由来と同定されている。

漆関連遺物の塗膜分析(Ⅷ第1編第6章第5節)：10点分析を行った。写81-8の内面塗膜は透明漆が1層確認された。写97-4は、赤色漆層1層の上に、2層の透明漆層が確認され、漆液容器として繰り返し使用されたと推定された。写104-11の内面黒色・赤色塗膜、写81-11と写81-22の外表面黒色・赤色塗膜は、透明漆層1層の上に赤色漆層1層が確認された。写103-20の外表面赤色塗膜は漆が明瞭に検出できず、劣化の可能性と、漆以外の膠着材の可能性が指摘されている。写76-13と写78-19と写81-9の外表面黒色塗膜は透明漆と同定されている。写103-19の外表面赤色塗膜は赤色漆と同定された。赤色顔料はすべて非パイプ状のベンガラと同定されている。

放射性炭素年代測定(Ⅷ第1編第5章第7節)：7点分析を行った。いずれも中央ベルト出土土器で、試料は付着塗膜が4点(写83-9、写80-7、写73-33、写74-20)、付着炭化物が3点(写72-9、写72-1、写71-2)である。分析結果は報告書Ⅷのとおりである。

(岩井)

1) 限られた期間で整理作業を行ったため、本捨場については、主体となる後期後葉から晩期の土器の整理を優先した。遺跡内では前期前葉～中期の土器も出土していることから、本捨場でも、それらの時期の土器が出土している可能性がある。

2) 時期を特定していない土器としては、粗製土器や、過渡期的な特徴をもつ土器、異系統と思われる土器などがあり、これらは時期に幅をもたせている。

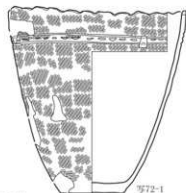
3) 掲載土器という限定した資料での比率であるため、実態とは差異がある可能性があるものの、大局は示されているものと考えられる。ただし晩期3期については、特に壺形土器において、他時期と比較して時期比定が容易なことや、小形で破損しにくいため完形での出土が多いことなどから、他時期よりも掲載率が高い可能性がある。また、後期後葉～晩期前葉においては、とくに注口や台付浅鉢などについて、帰属時期の特定が困難なため分析対象から除外している。このため後期後葉～晩期前葉の土器点数は、実際よりも少なく計上されている可能性がある。

4a層



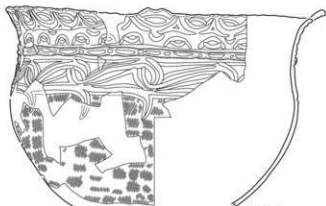
写71-1

8a層



写72-1

7a層



写71-16



写71-15



写70-5

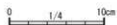


写70-8

Ⅲ層上b



図13 B-B' , C-C' セクション対応層出土土器



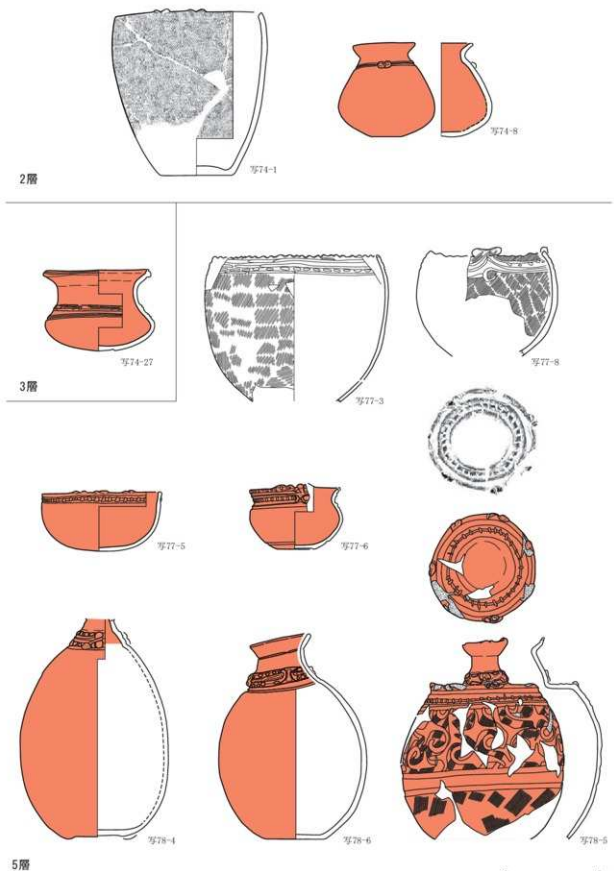
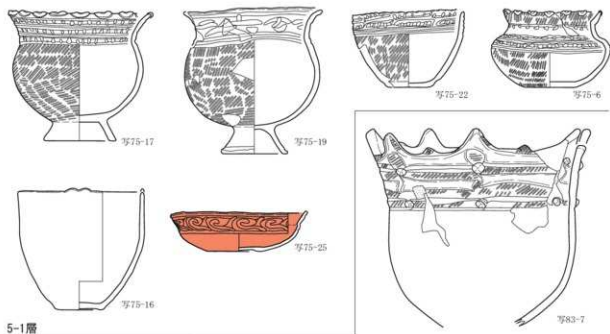
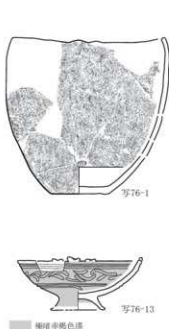


図14 E-E' , F-F' セクション対応層出土土器1



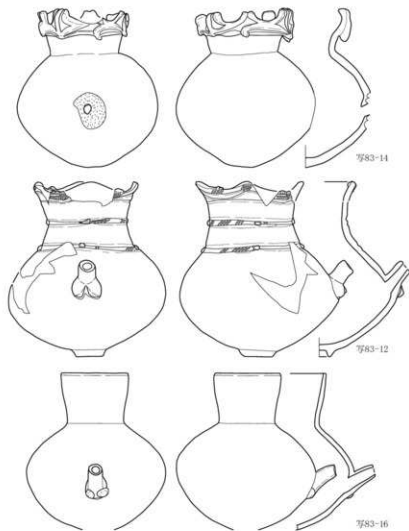
5-1層



5-2層

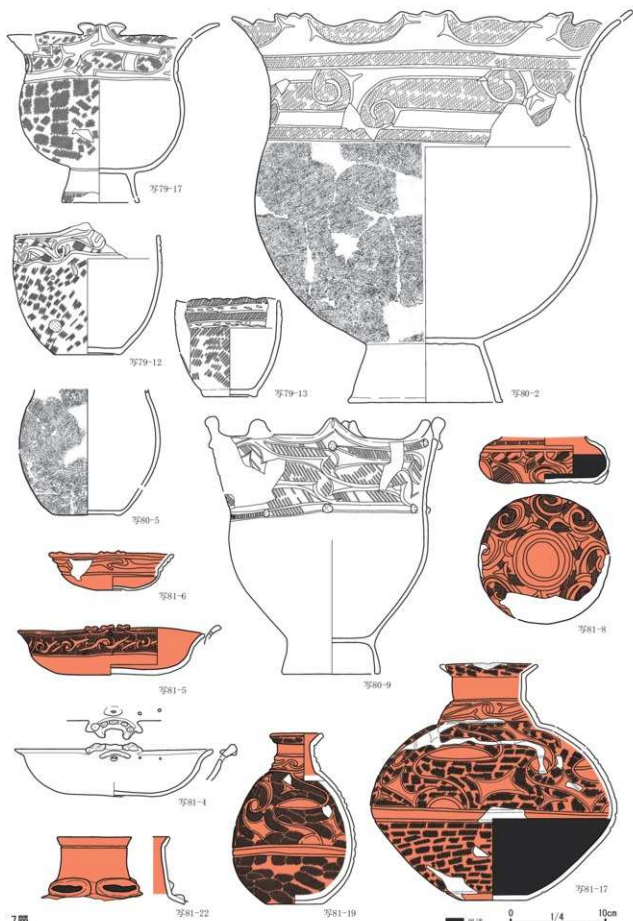


6間-1層



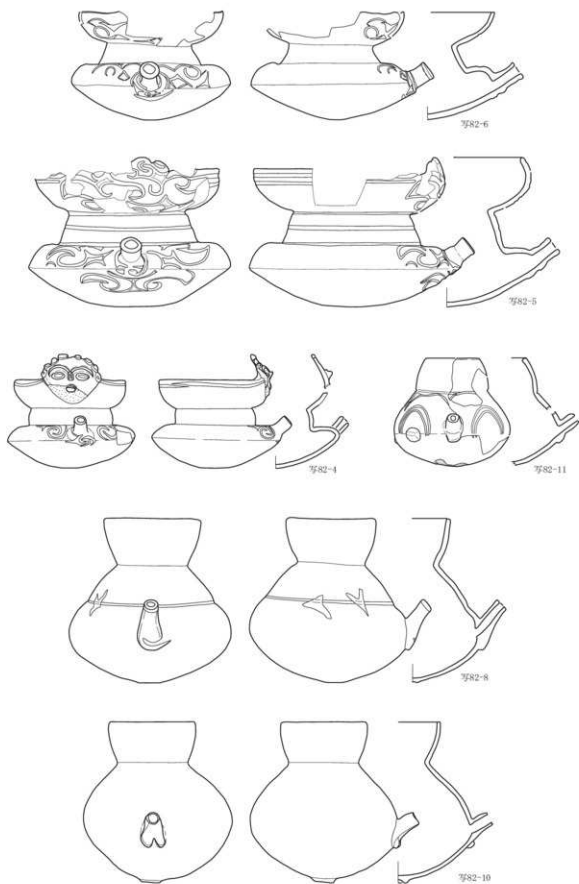
8a層

図15 E-E' ,F-F' セクション対応層出土土器2



7層

図16 E-E' , F-F' セクション対応層出土土器3



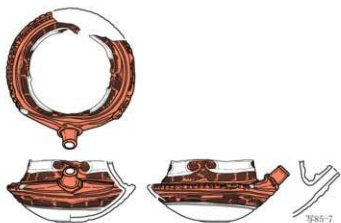
7層

0 1/4 10cm

図17 E-E' ,F-F' セクション対応層出土土器4



写85-1



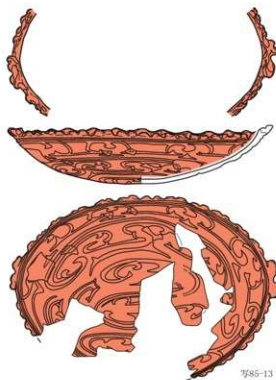
写85-7

Ⅲ層才



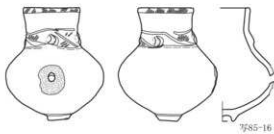
写85-9

Ⅲ層キ



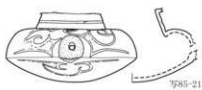
写85-13

Ⅲ層ク



写85-16

Ⅲ層中a

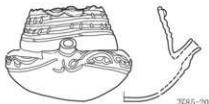


写85-21



写85-22

Ⅲ層中b



写85-20



図18 6-6' セクション対応層出土土器

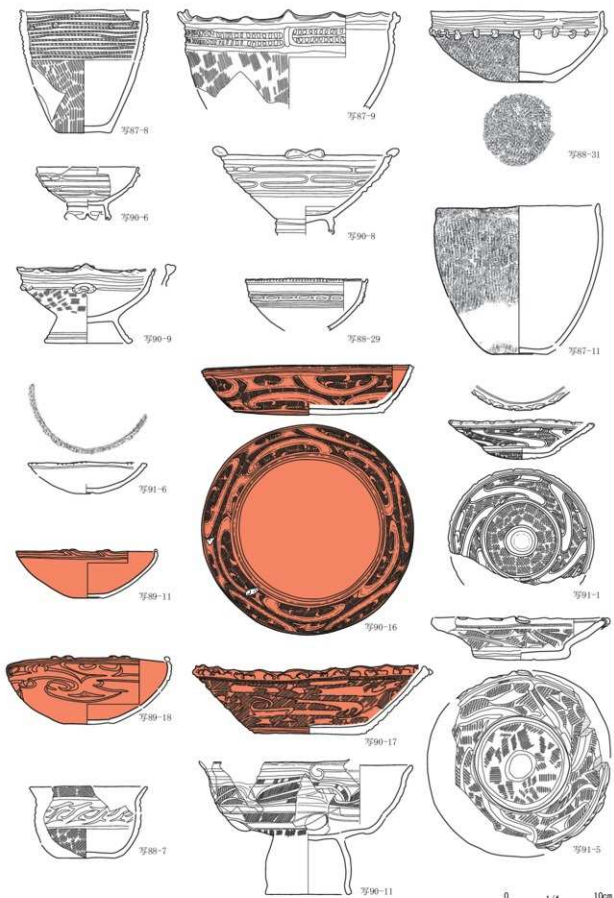


图19 Ⅲ層上位出土土器1

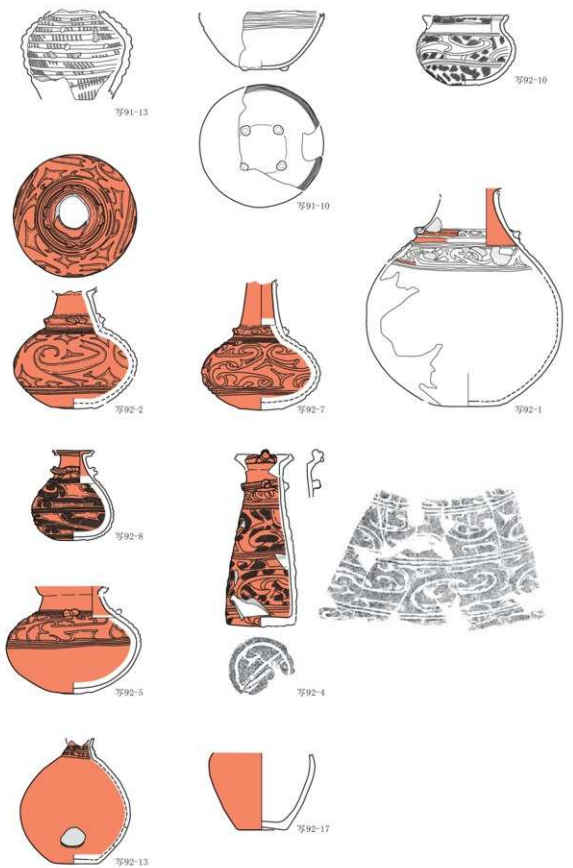


图20 III層上位出土土器2

0 1/4 10cm

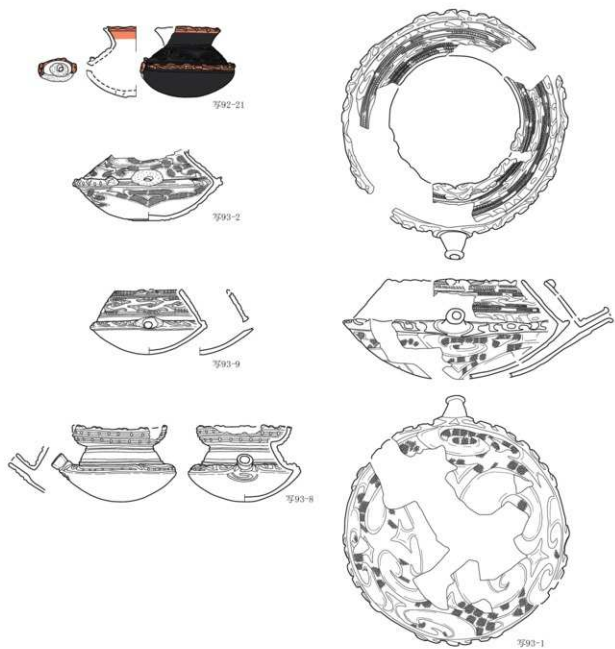
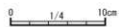


図21 Ⅲ層上位出土土器3



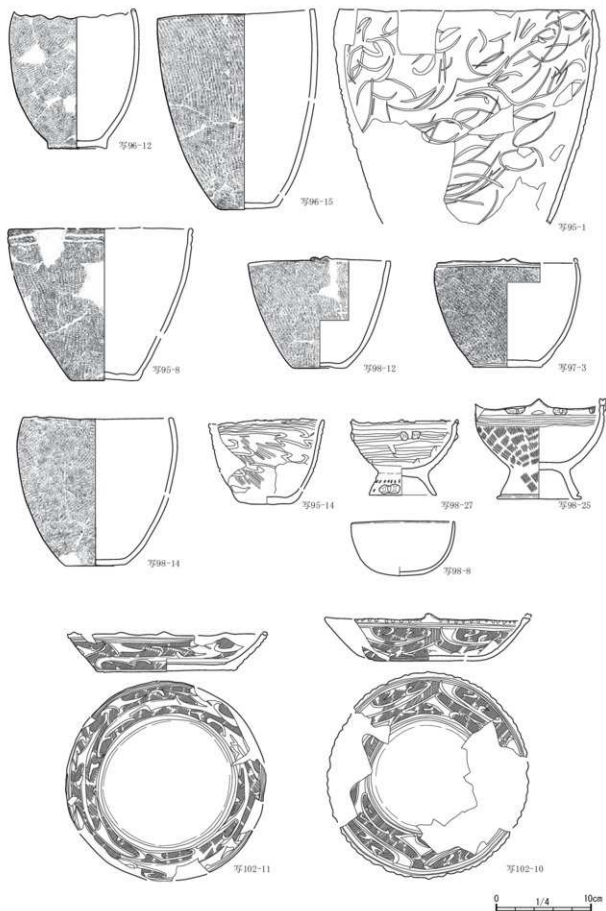


图22 Ⅲ層中位出土土器1

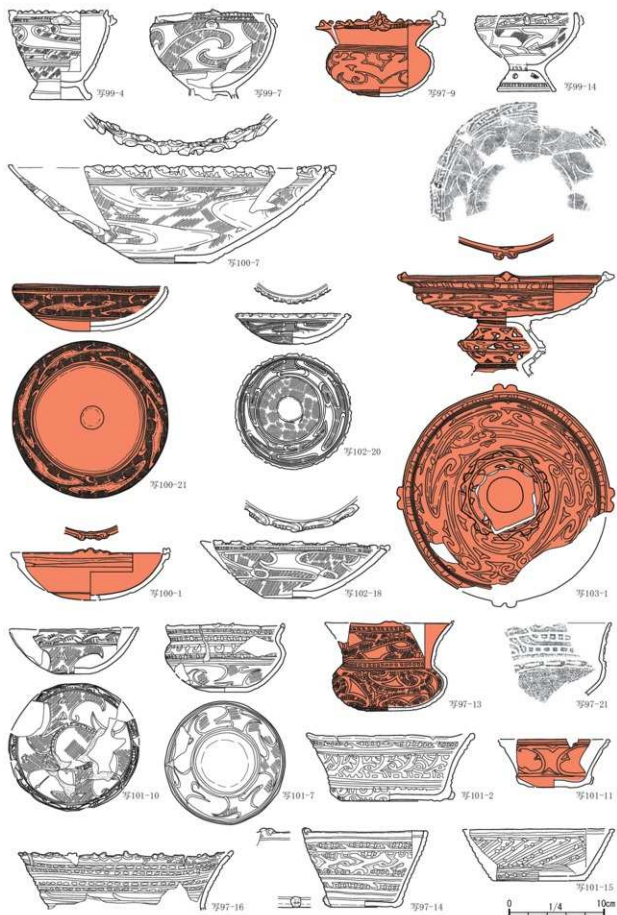


图23 Ⅲ層中位出土土器2

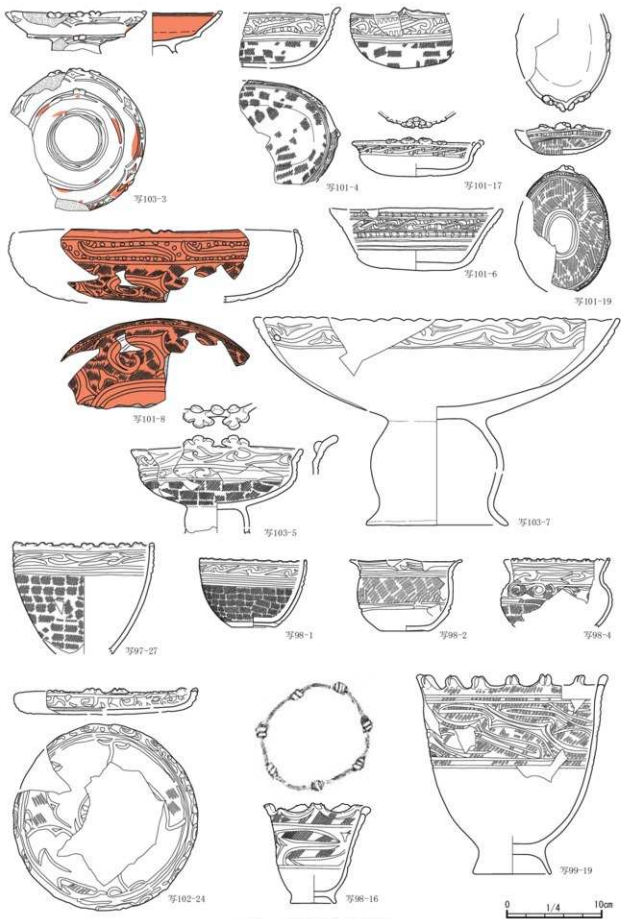


图24 Ⅲ層中位出土土器3

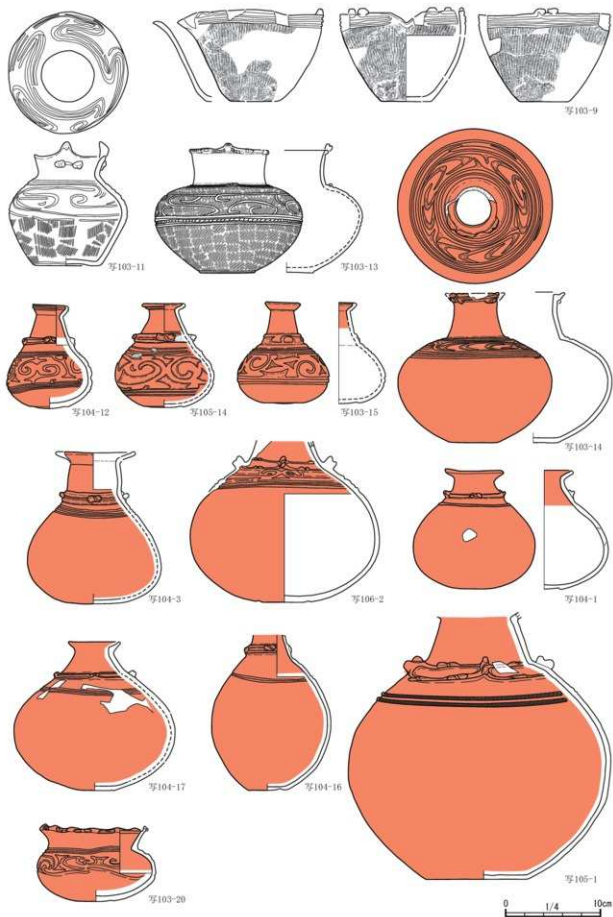


图25 Ⅲ層中位出土土器4

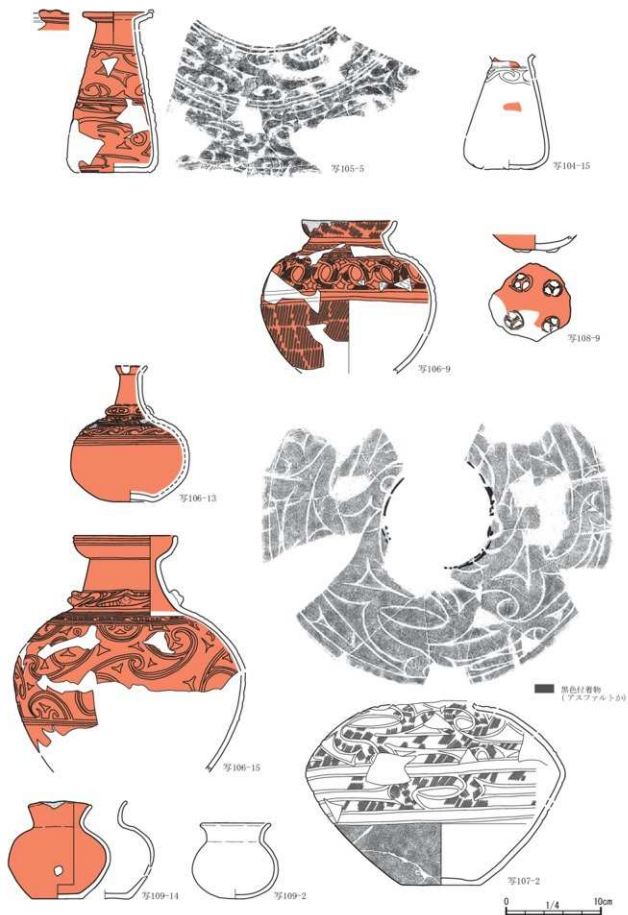


图26 III層中位出土土器5

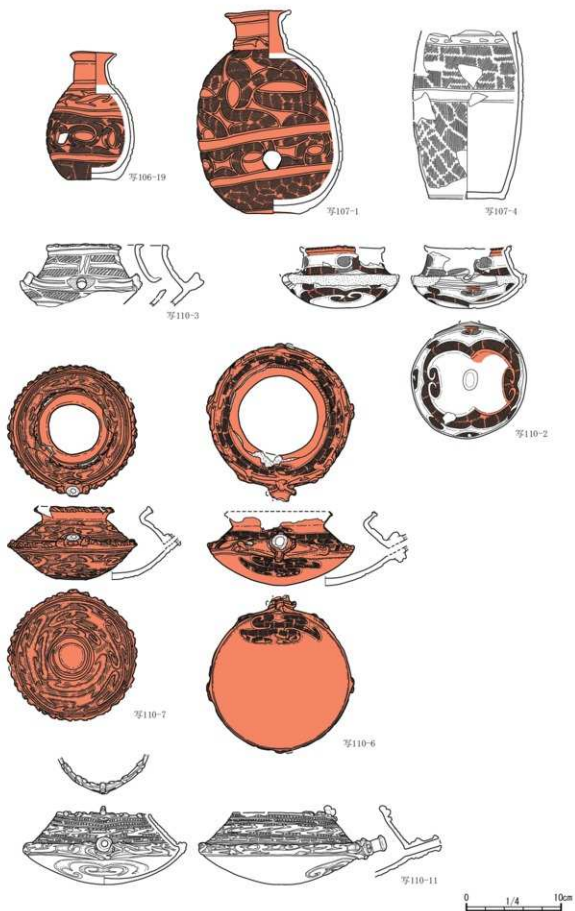


図27 III層中位出土土器6

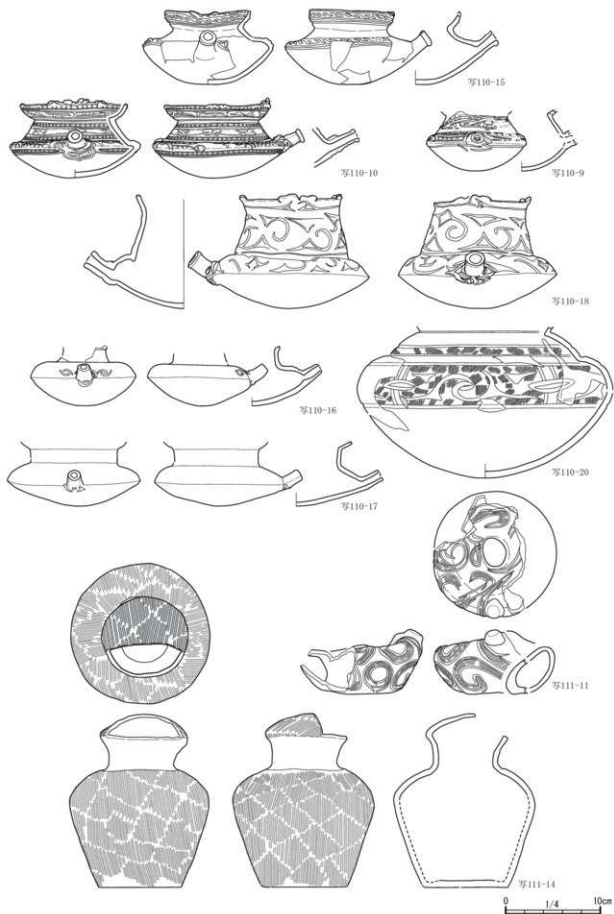


图28 III層中位出土土器7

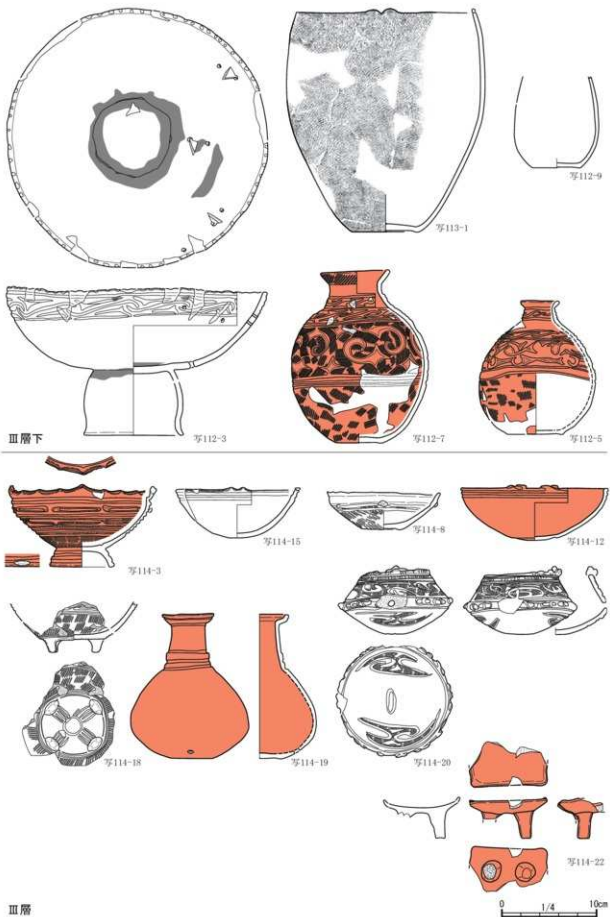


图29 III層下位出土土器, III層出土土器

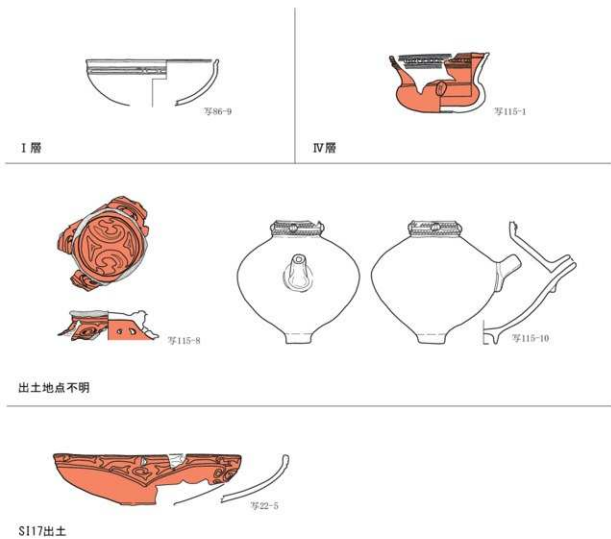


図30 I層, IV層, 出土地点不明, SI17出土土器

3 石器

剥片石器や礫石器、石製円盤などの石製品は出土量が多く、観察表での記載を基本とした。観察表で表現しきれないものを中心に文章化した。重要なものは報告書Ⅷに他の捨場の遺物とともに記載した。しかし図化を含め整理が進み、搬入品である磨製石斧等については、この限りではない。

その他報告に関する考え方や石器出土点数及び組成については、報告書Ⅷに掲載する。

【剥片石器】 写真116～150までは石鏃、石錐、石筥、石匙、削器、異形石器などを掲載した。

写117-70は茎を幅広く作り出し、両側縁を鋸歯状に作り出しており本遺跡では類例の少ない形状である。棒状の石錐では写122-7のように両端が摩滅しているものがある。

写143-20・21は形状がナイフ形石器に類似する二次加工剥片である。写144-30は1側縁に刃つぶし状の加工が行われている。写144-24・25・38・40・43は上部にアスファルトが付着する削器である。下に置いた刃部の弧は横型石匙の下辺の刃部に類似する。同29・37・39・44・45は、アスファルトは認められないものの、刃部形状の類似などから、同様の置き方にした。写144-1～17は、これらより小形であり、石鏃未製品の可能性がある。しかし、4～8のように右側縁が張り出すものはアスファルトが付着する削器と共通点がある。写145-1～21等についてもアスファルト付着の削器と同じグループと考えたい。写146-57～60は上部の突起が石匙のつまみ部と異なり、紐かけ等の機能を欠落している。これらも同様の削器と捉えられる。異形石器を写真149-29～写真150においた。赤色の鉄石英や灰白色の玉髓、写150-12の黒曜石、同16のように緑色の珪質頁岩など、色調や光沢に変化がある。写150-9・10・28・29は珪質頁岩製で、中央部に大きく抉りを作り出している。抉りは、刃部をつくる細部加工や石核としての剥片剥離のためではなく、上下の対称性を意識して形を整えたと考えられるので、異形石器とした。石核や剥片は写真151～159に掲載した。写151-13～17、写157-1～17のように最終形状として両端が尖る形となっているものがある。その中には写157-2・3・11・12・13のように器体中央部が浅い抉りになるものがある。異形石器の上下対称を意識している可能性がある。写159-19～50は産地分析を行った黒曜石である。写159-19～29は深浦八森山群、30以降は木造出来島群の黒曜石である。写159-19～21は同一個体であり、20を構成する剥片は図50-3～8に図示した。

写真160は中央ベルトの4e下層で一括出土した剥片76点と石核1点である。出土状況は写真40の右上に掲載した。砕片や小剥片を回収できなかったが、剥片等は、すべて同一母岩である。石核は中心となるものが残されていない。厚みのある剥片を素材としたものが1点出土している(写160-1)。その正面と上面は節理面となっている。上面には敲石の痕跡が、丸く点状に計6点確認できる。写160-2に剥片を置いた。長さや幅が3.5cm以上の大ききな剥片は、背面を占める礫面の割合が高い。裏面中央部に珪化の進んだ良質な部分が残る。剥片の打面の多くは剥離面であり、礫皮付近の軟質部が打面となっているものが多い。多くは礫皮の除去の際の剥片と考えられる。礫皮の無い剥片は、礫皮を持つ剥片よりも小形である。中にはリングが密なものがあり、両極打法と考えられるものもある。写真の中には、2点接合した剥片が3組含まれている。二次加工剥片や細部加工により定形石器を作りうる剥片はみあたらない。礫皮を持ち、原石に近い石核から剥片剥離を行い、石器素材となりうる剥片と石核を除いた残滓を一括して廃棄したものと考えられる。

(齋藤)

【石斧】

・打製石斧

写163-14～16、図51-1～5に掲載した。石材は、珪質頁岩、泥岩、シルト岩などである。刃部に土擦痕は見られない。

・磨製石斧

磨製石斧は写真161～164(図52～61)に掲載した。

大形から小形磨製石斧まで出土し、大半は欠損している。小形磨製石斧に片刃が多い。石材は、緑色岩、珪化凝灰岩、緑色凝灰岩、粗粒玄武岩、角閃岩、デイサイト、安山岩、凝灰岩などがある。

整形は敲打と研磨が主体的である。写161-19、写163-3、写163-6、写163-9、写164-12などは、基部に敲打痕が顕著に残されている。

緑色岩製磨製石斧(写162-9、写162-16、写163-1など)に擦切痕が確認できる。写162-17は、小形磨製石斧の器体長軸に沿って鋭い擦痕が見られる。

写164-13は、凝灰岩製である。敲打らしき整形加工は見られるが、不明瞭であり、形状的にも自然礫の可能性が高い。

接合資料としては、VF-25、Ⅲ層中と、13トレンチ下段Ⅲ層から出土した破片が接合している(写163-9)。

欠損した後、再加工や敲石など他器種への転用が見られる。多くは基部の欠損面に剥離や敲打で整形している。写161-34などは、敲石への転用である。

(高橋)

【礫石器】

写真165～200に磨石、敲石、凹石、石皿等を掲載した。写真167等には赤色顔料の付着する磨石を掲載した。写189-6は、両面の中央上部に凹痕があり、最終形状は石製品を思わせるものになっている。同7は線状痕が通常の礫石器よりも深く、線刻礫の可能性もある。同8～23は石製品に形状が類似するものである。写189-12の敲石は上下両端が面取りされたように平坦である。同16～23は全面が磨面となっている。18・20・22は小形であり、石製品の可能性がある。赤色顔料分析を行った写193-9・写252-28のように石皿にも赤色顔料が付着しているものがある。石皿は写194-2のように凝灰岩製の縁付きのもの、写196-7のように相馬安山岩製の板状のもの、写191-4・写198-6・7のように自然の窪みのある石を利用したものがある。写200-7は中央部が窪む。写198-10・写200-9は中高の石皿である。

自然礫は写真201～202に掲載した。写201-1～21は、4・11・18のメノウを除き水晶・石英である。3はピンク色に近い紫水晶の群晶であり、12も下部を中心に薄い紫色となっている。写201-24は有孔の自然礫に研磨を加えている。石製品の可能性がある。写201-24～202-19は形状が特異な自然礫である。くびれ石や有孔のもの、珪化木、マンガンジュエル(写202-11)のほか、赤色顔料塊の一部を写202-20～25に示した。21は空隙が多く、容易にすり潰せそうな状態である。23は被熱の痕跡がある。集合写真の25の赤色顔料塊には軟質部を持つもの、持たないもの、色調の異なるもの等を掲載した。

写203-1～5はアスファルト塊で、同7・8にはアスファルト付着剥片の一部を掲載した。写203-6は方鉛鉱である。

(齋藤)

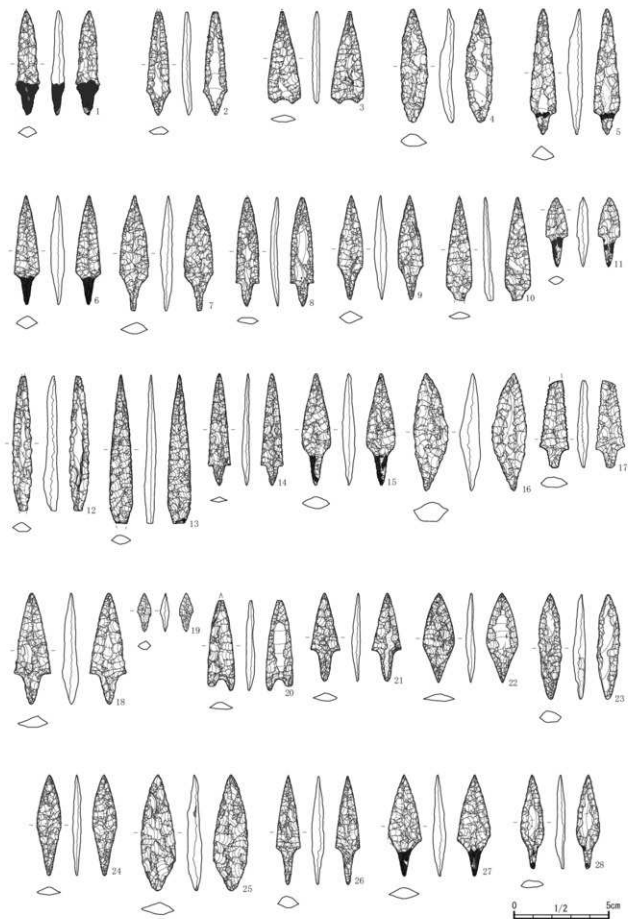


図31 石器・石製品(1)

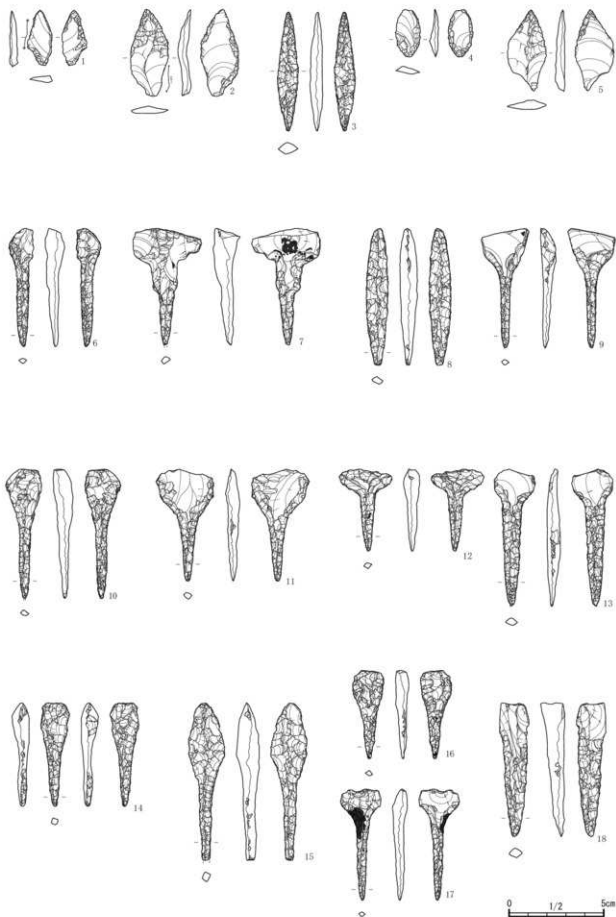


図32 石器・石製品(2)

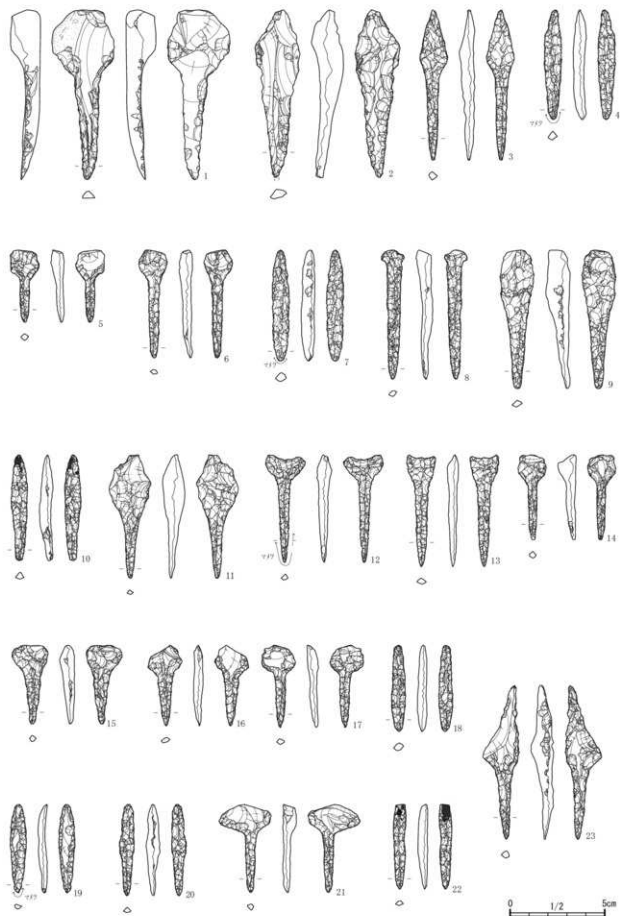


図33 石器・石製品(3)

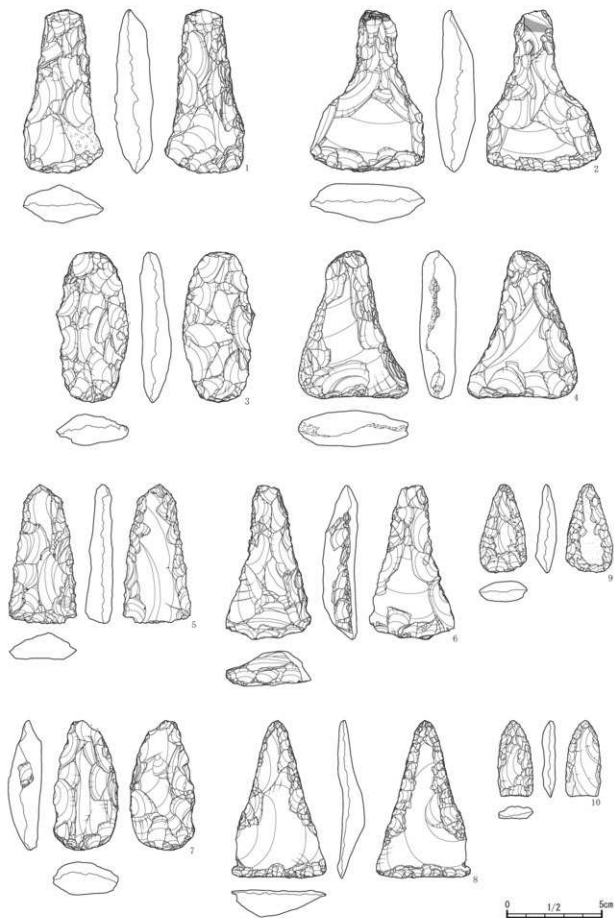


図34 石器・石製品(4)

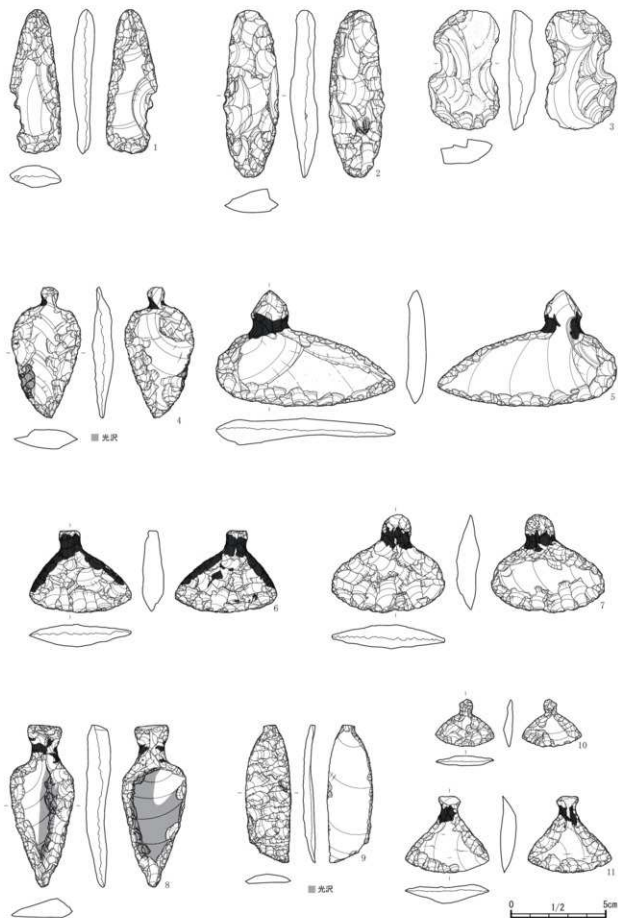


図35 石器・石製品(5)

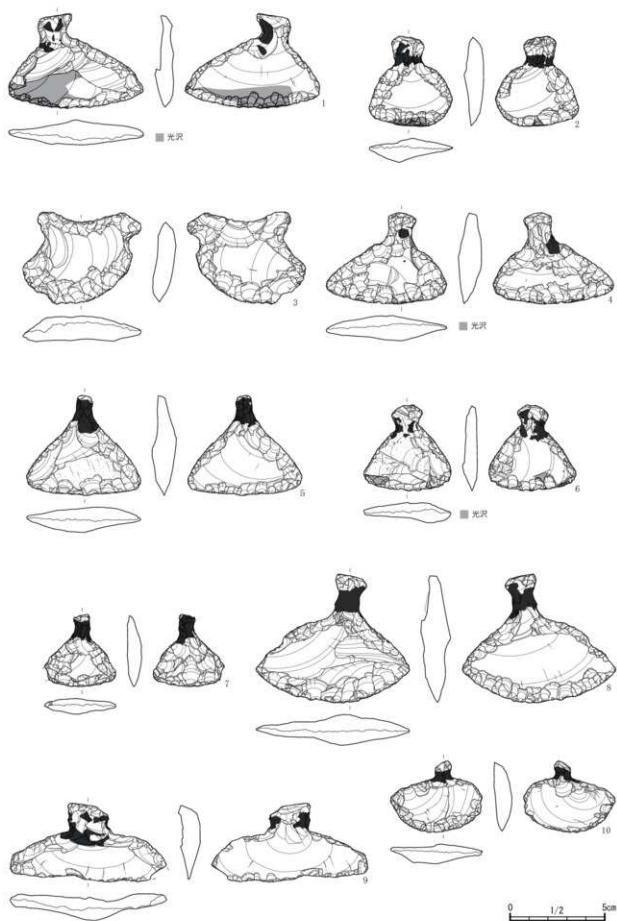


図36 石器・石製品(6)

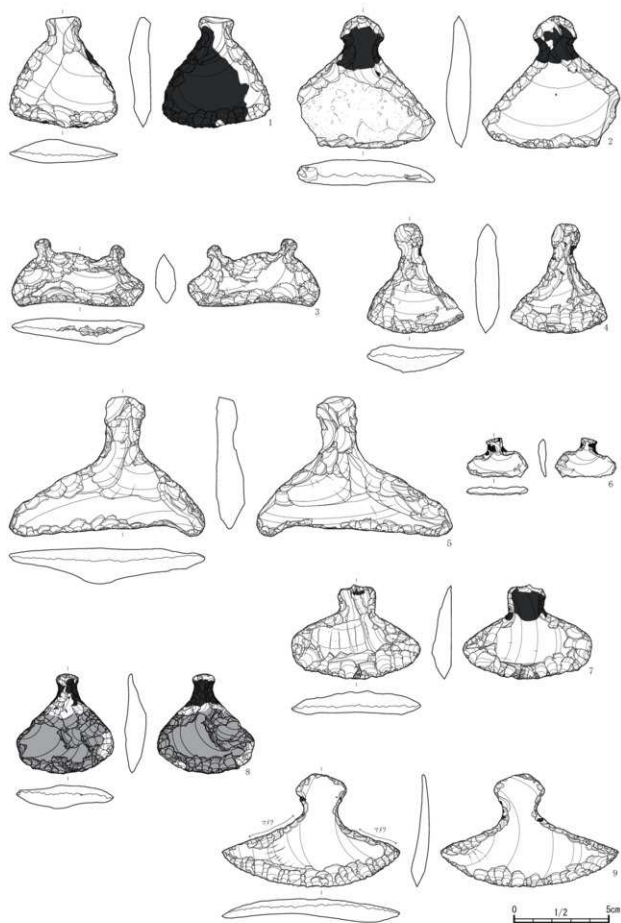


図37 石器・石製品(7)

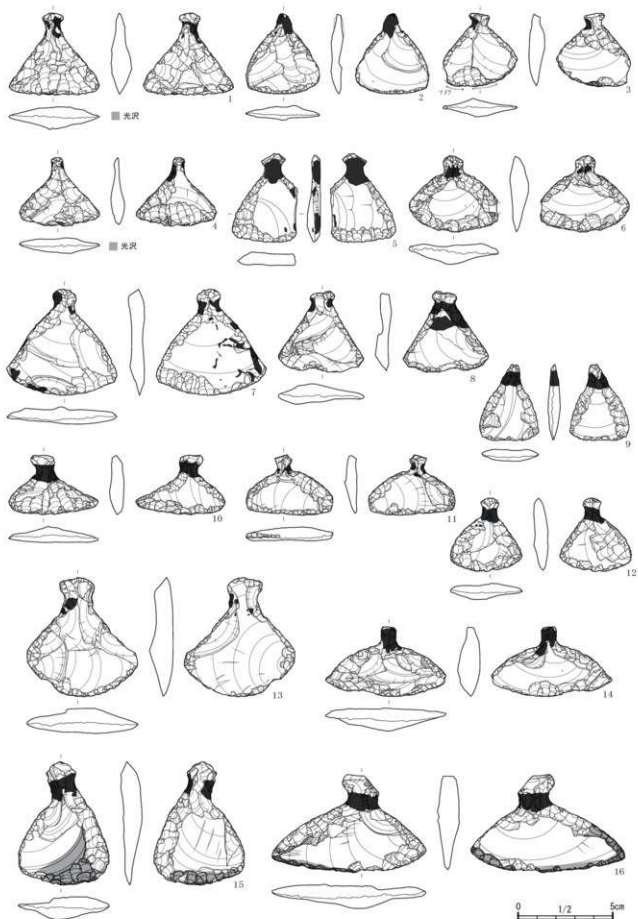


図38 石器・石製品(8)

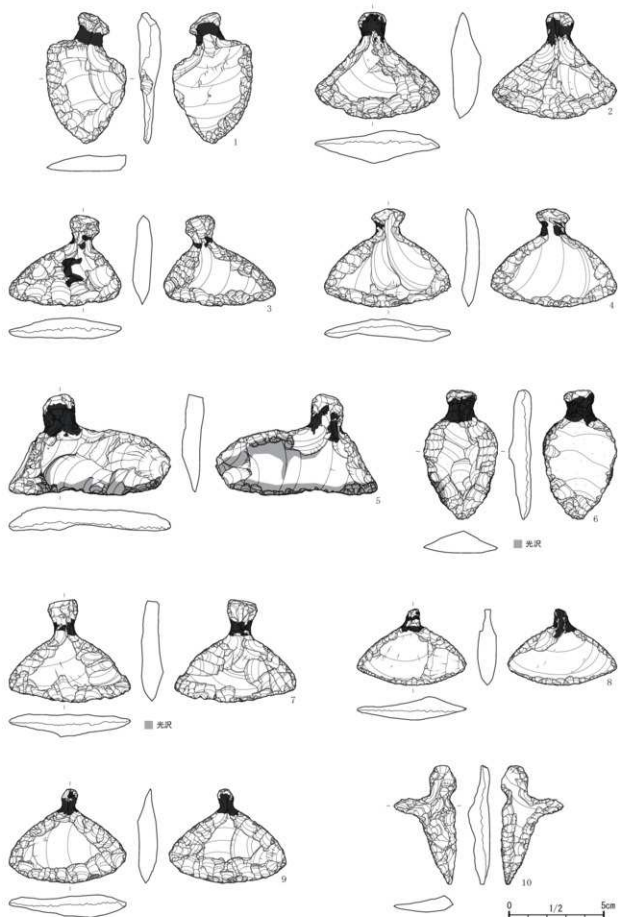


図39 石器・石製品(9)

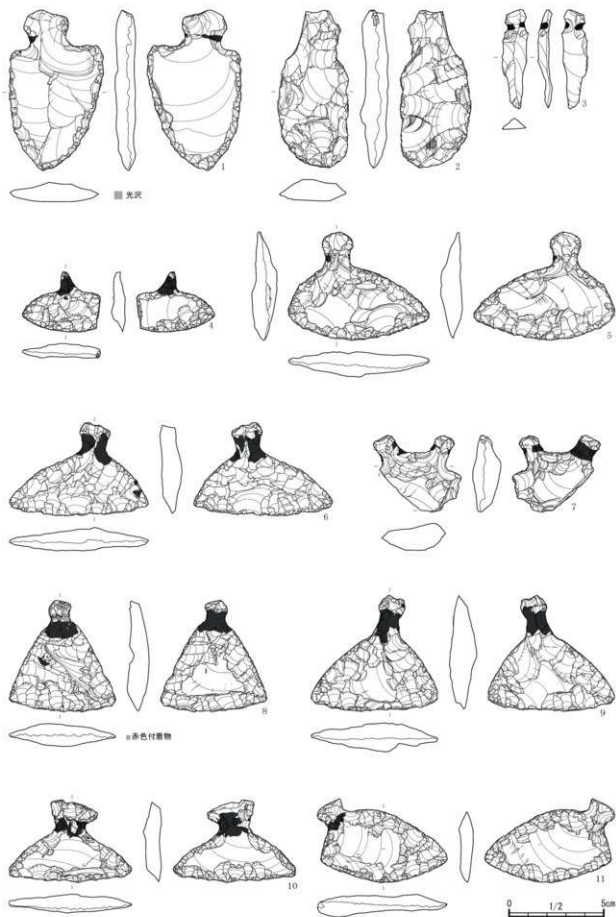


図40 石器・石製品(10)

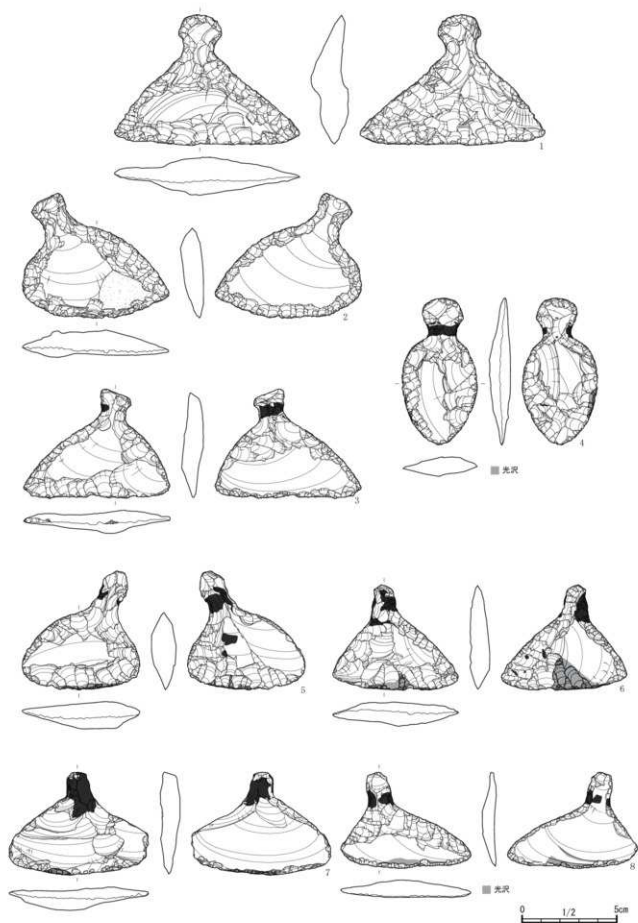


図41 石器・石製品(11)

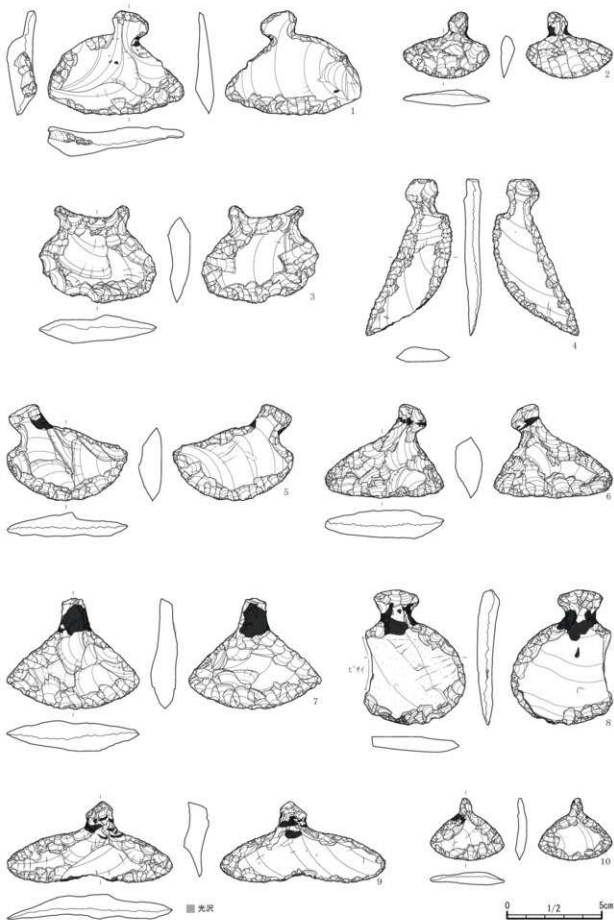


図42 石器・石製品(12)

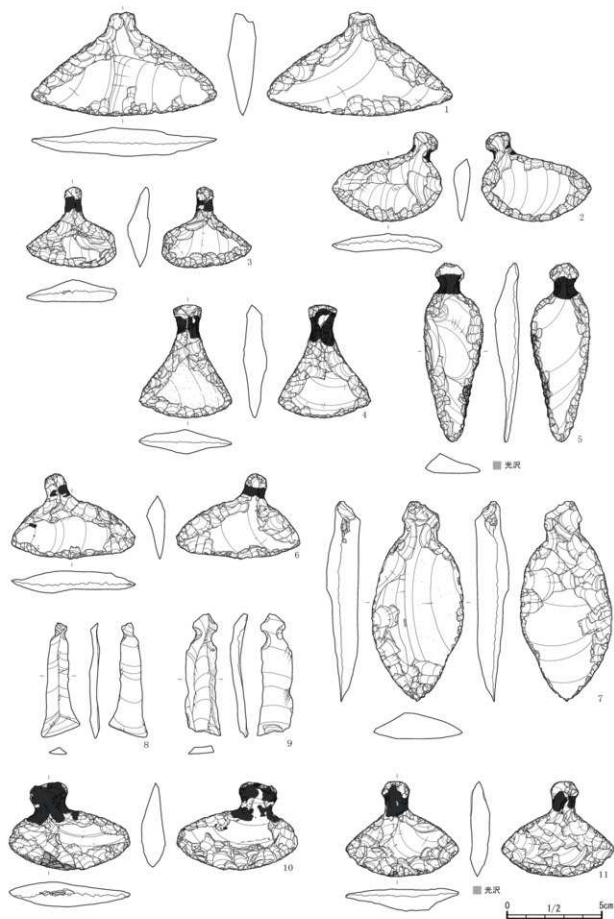


図43 石器・石製品(13)

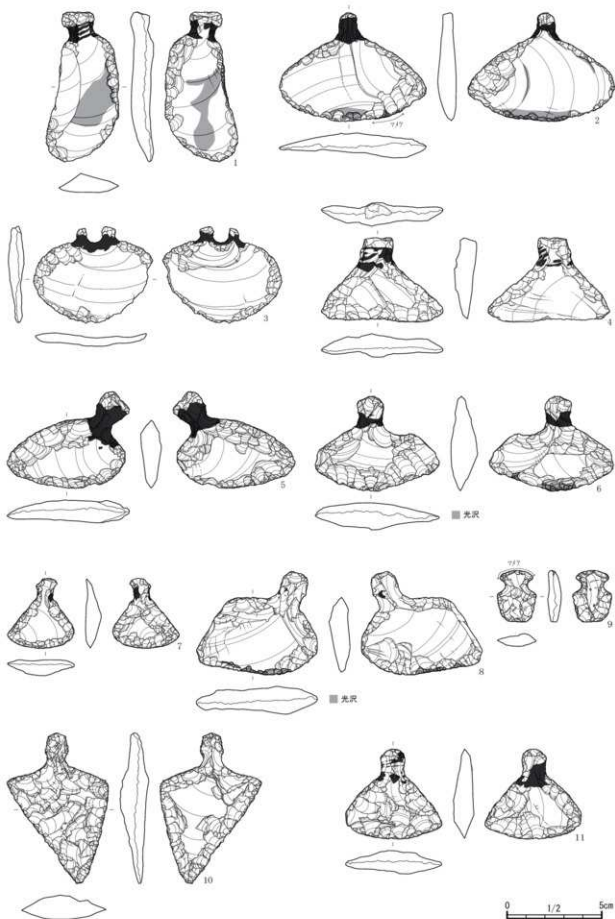


図44 石器・石製品(14)

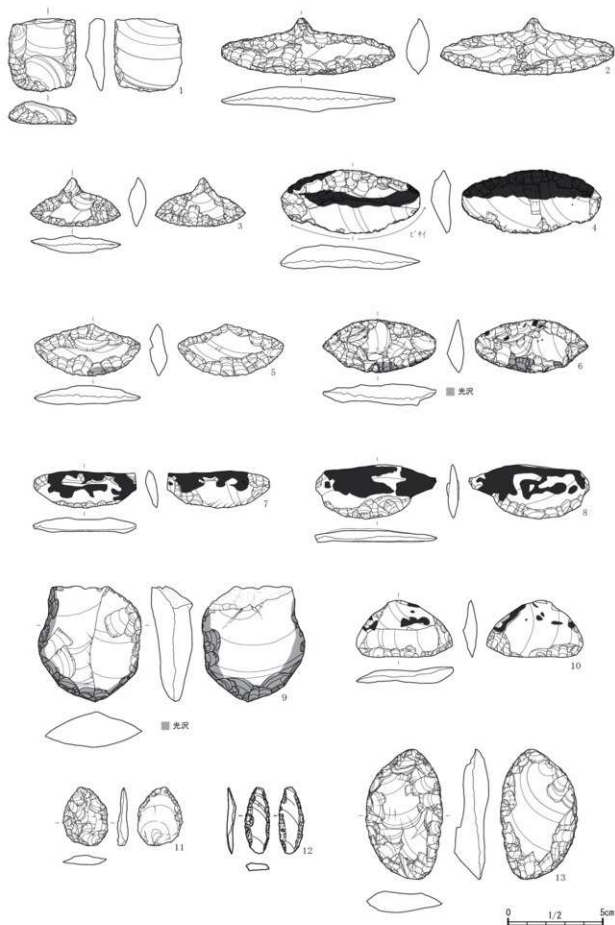


図45 石器・石製品(15)

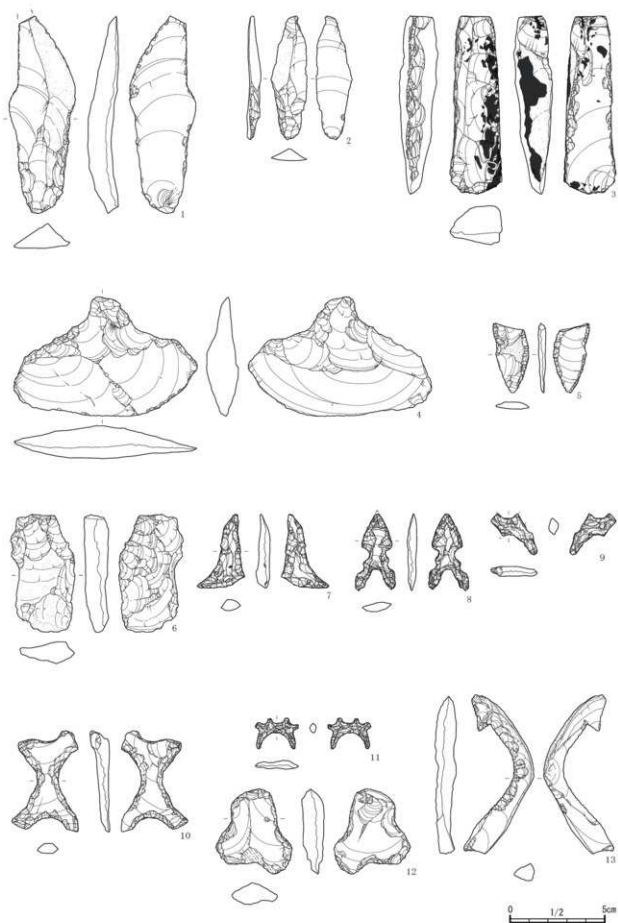


図46 石器・石製品(16)



図47 石器・石製品(17)

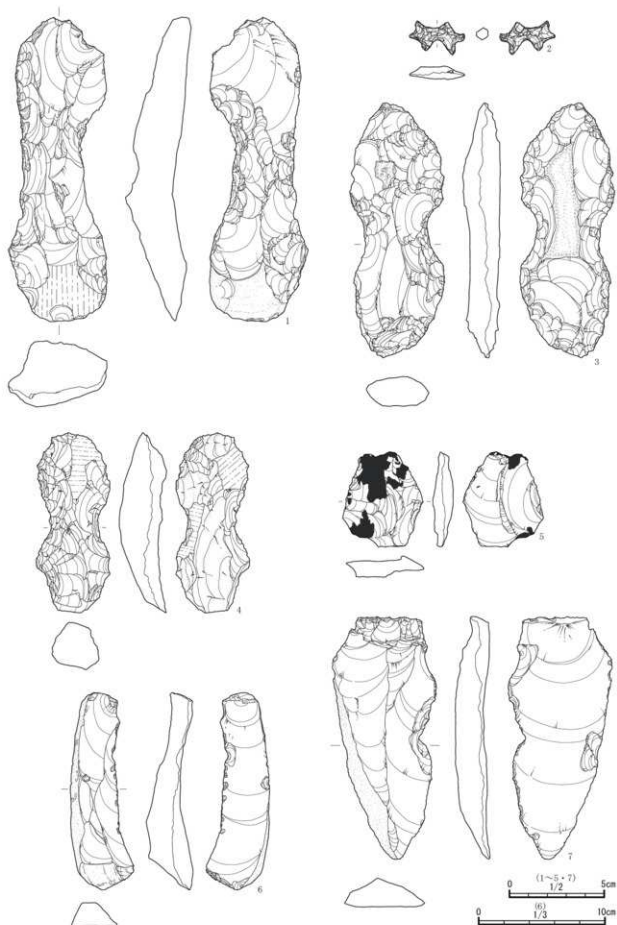


図48 石器・石製品(18)

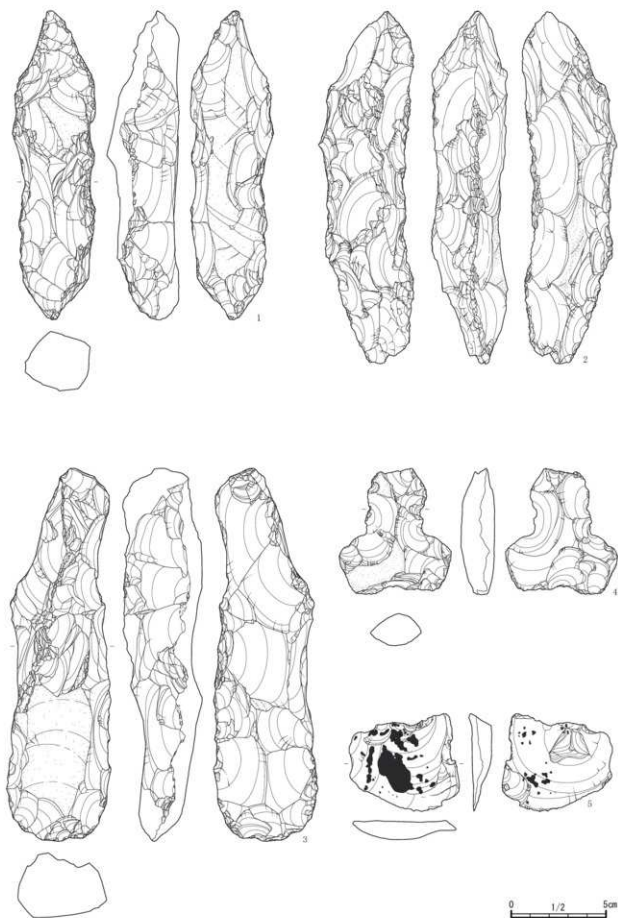


図49 石器・石製品(19)

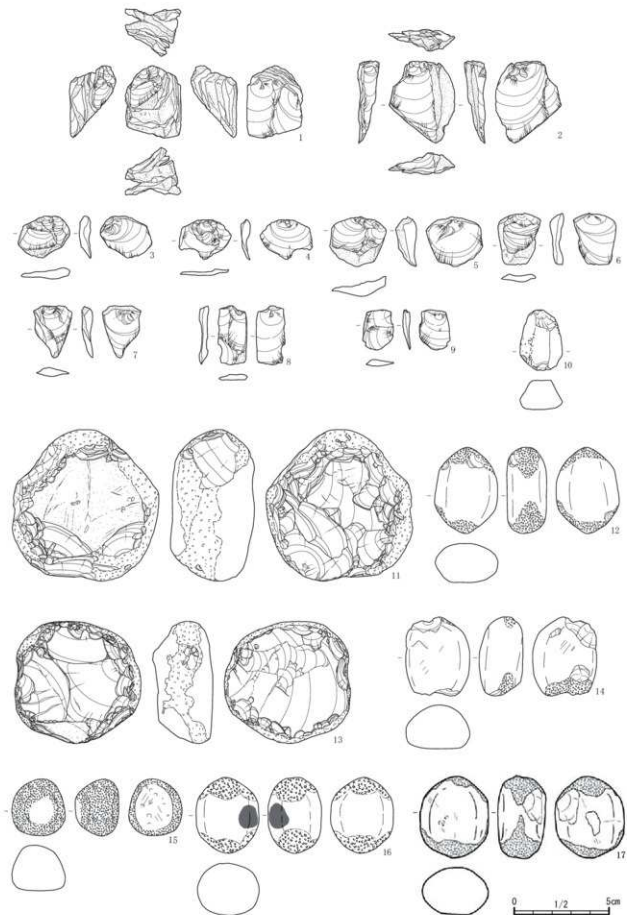


図50 石器・石製品(20)

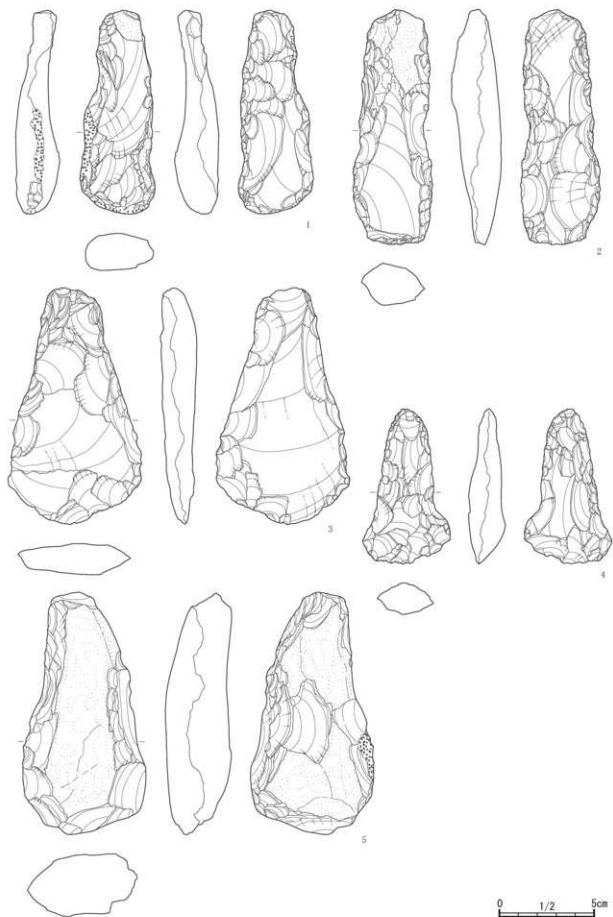


図51 石器・石製品(21) 打製石斧



図52 石器・石製品(22) 磨製石斧(1)

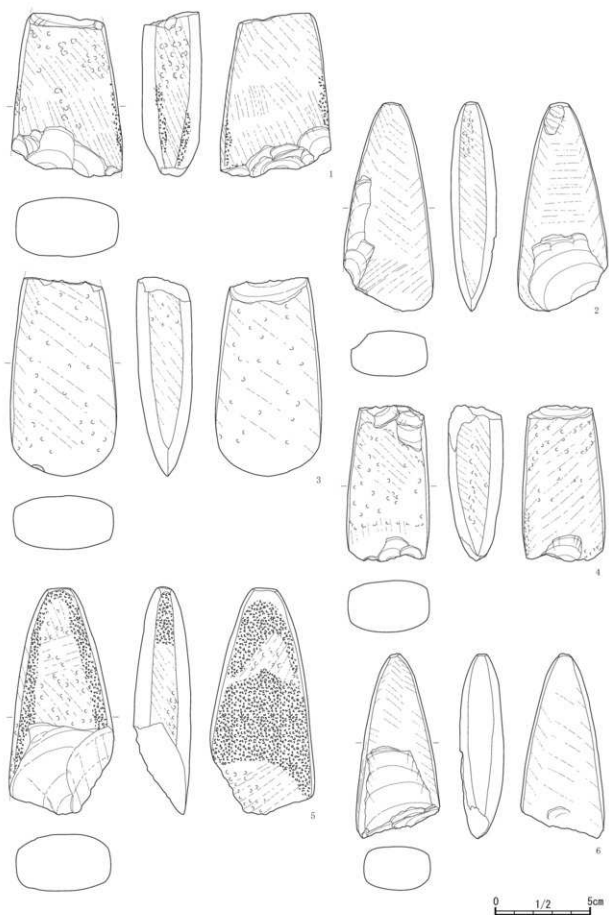


図53 石器・石製品(23) 磨製石斧(2)

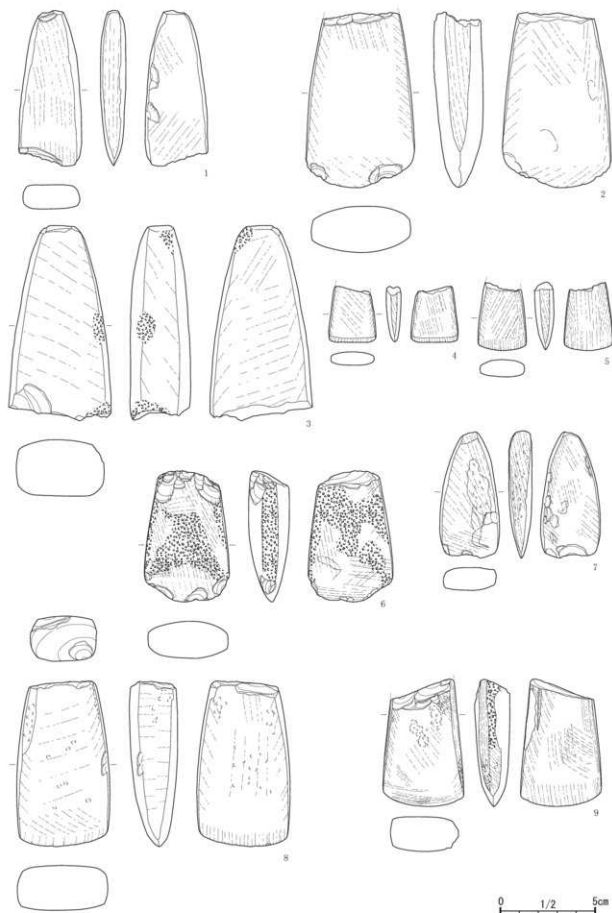


図54 石器・石製品(24) 磨製石斧(3)

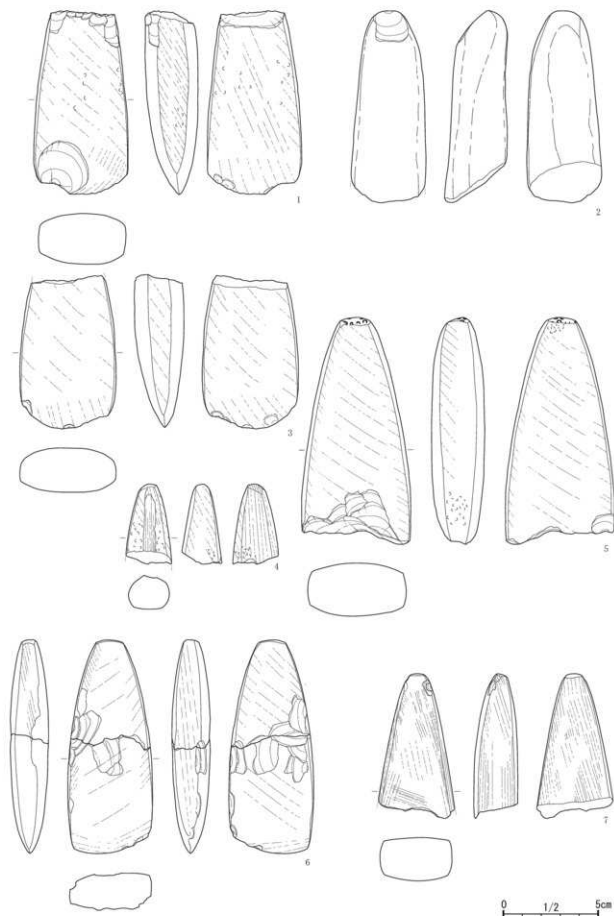


図55 石器・石製品(25) 磨製石斧(4)

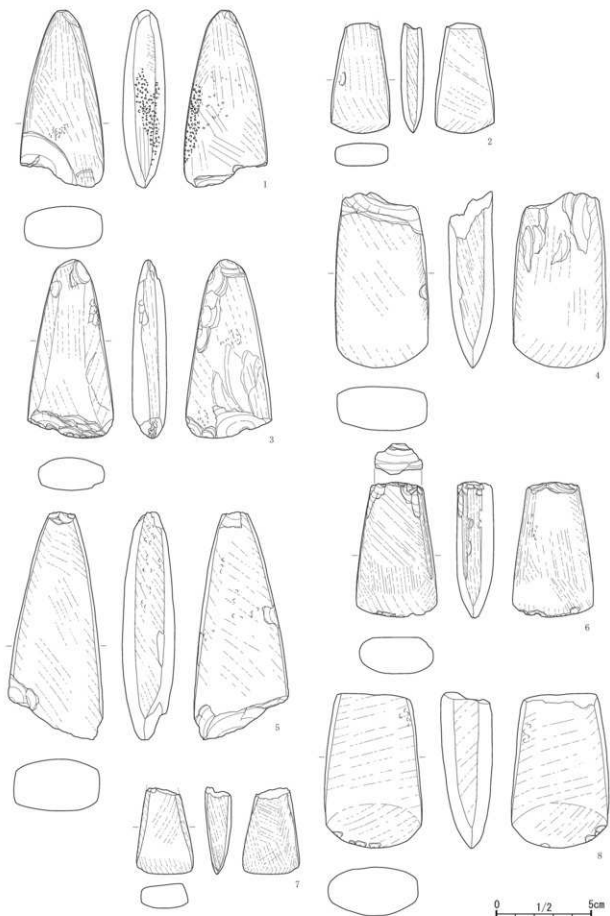


図56 石器・石製品(26) 磨製石斧(5)

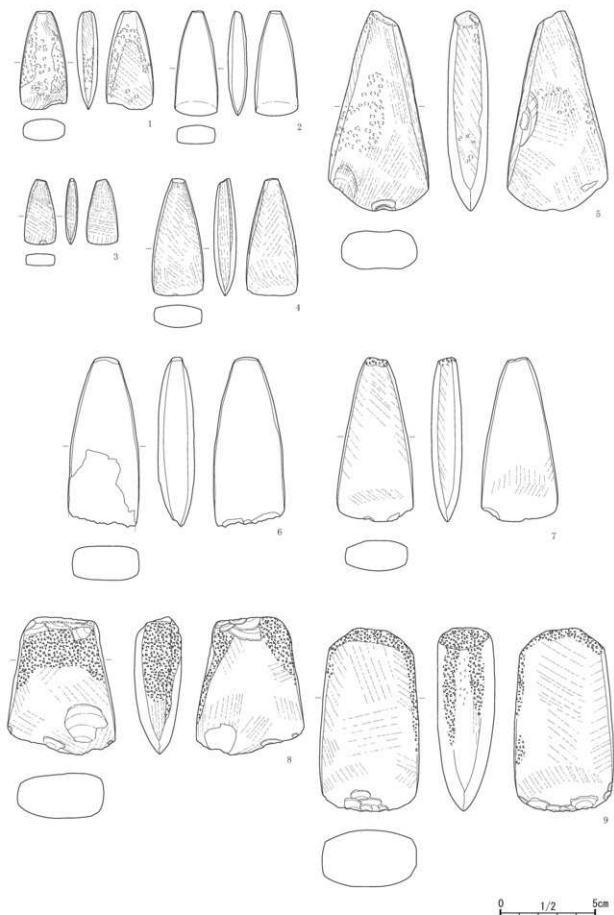


図57 石器・石製品(27) 磨製石斧(6)

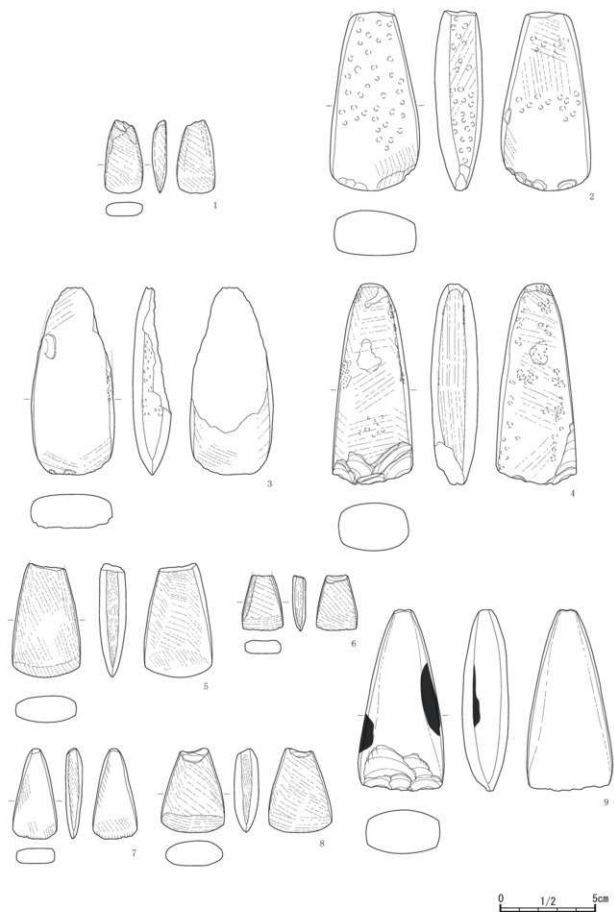


図58 石器・石製品(28) 磨製石斧(7)

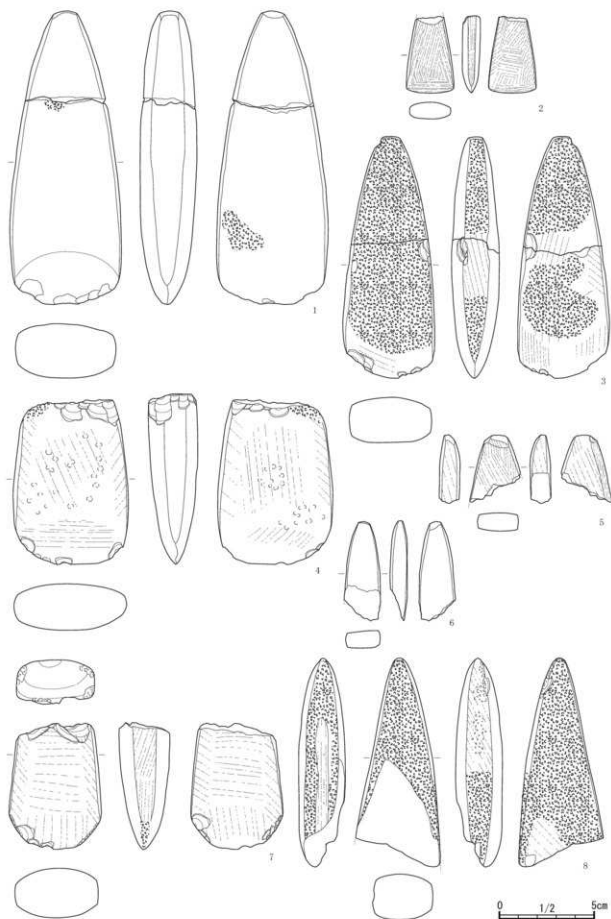


図59 石器・石製品(29) 磨製石斧(8)

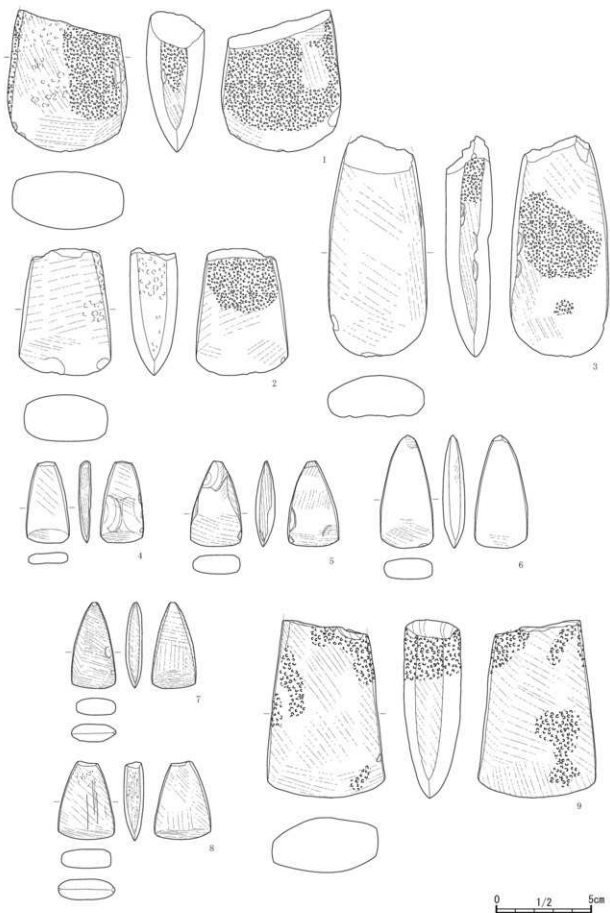


図60 石器・石製品(30) 磨製石斧(9)

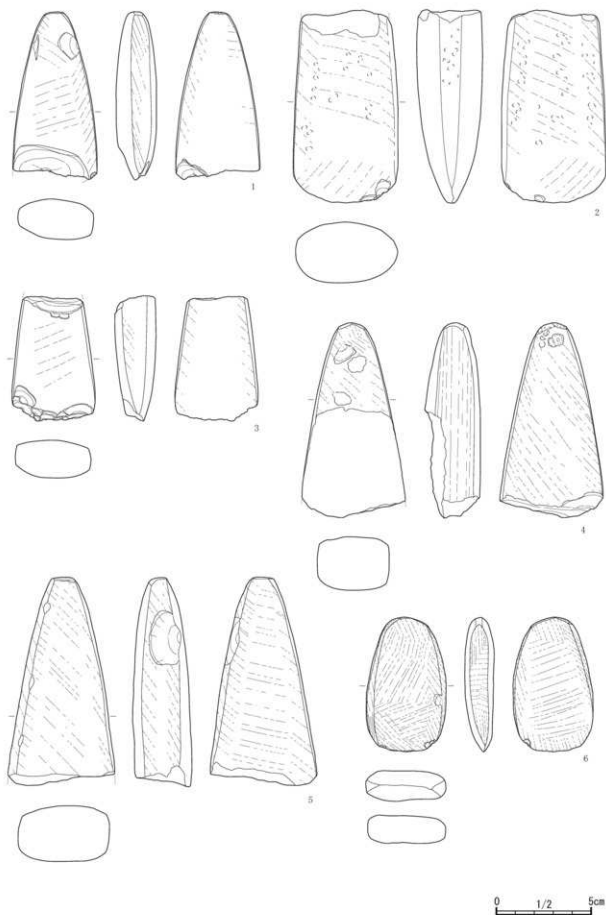


図61 石器・石製品(31) 磨製石斧(10)



図62 石器・石製品(32)

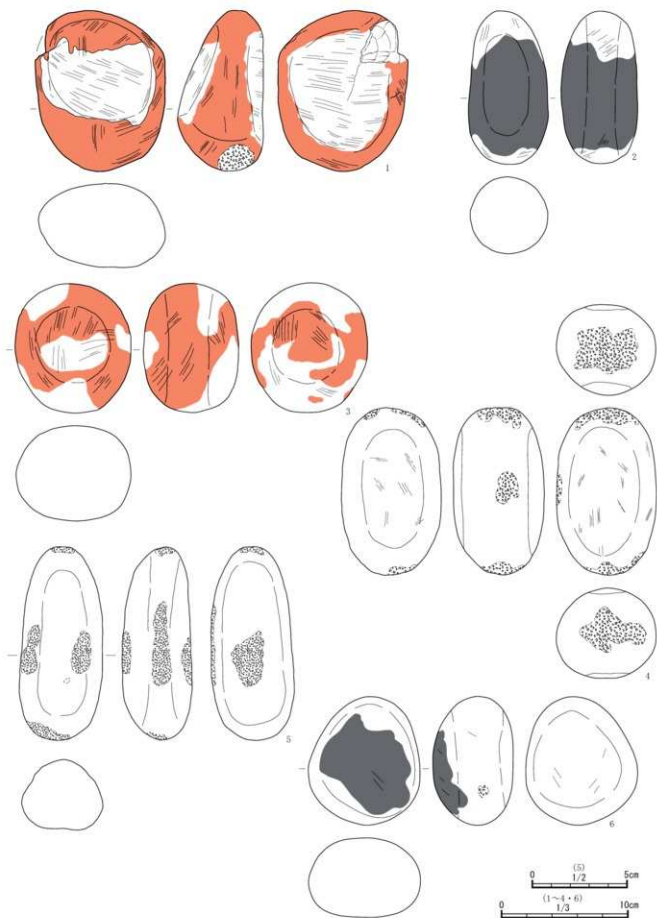


図63 石器・石製品(33)

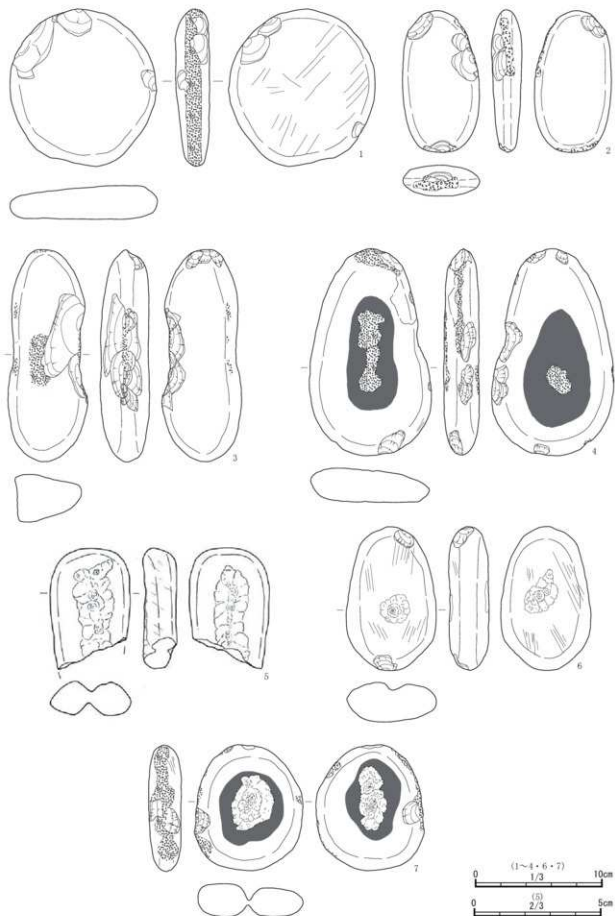


図64 石器・石製品(34)



図65 石器・石製品(35)

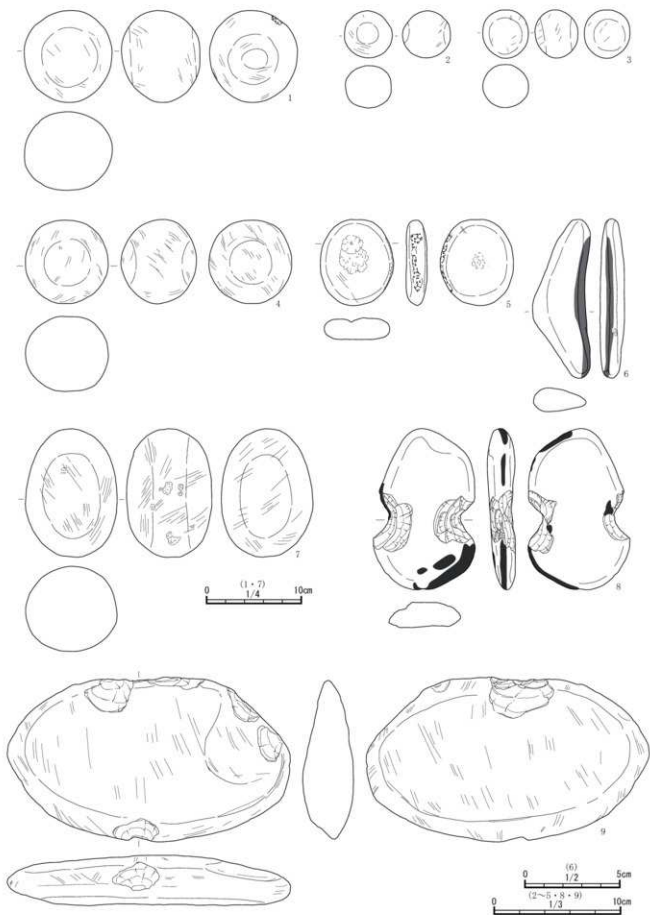


図66 石器・石製品(36)

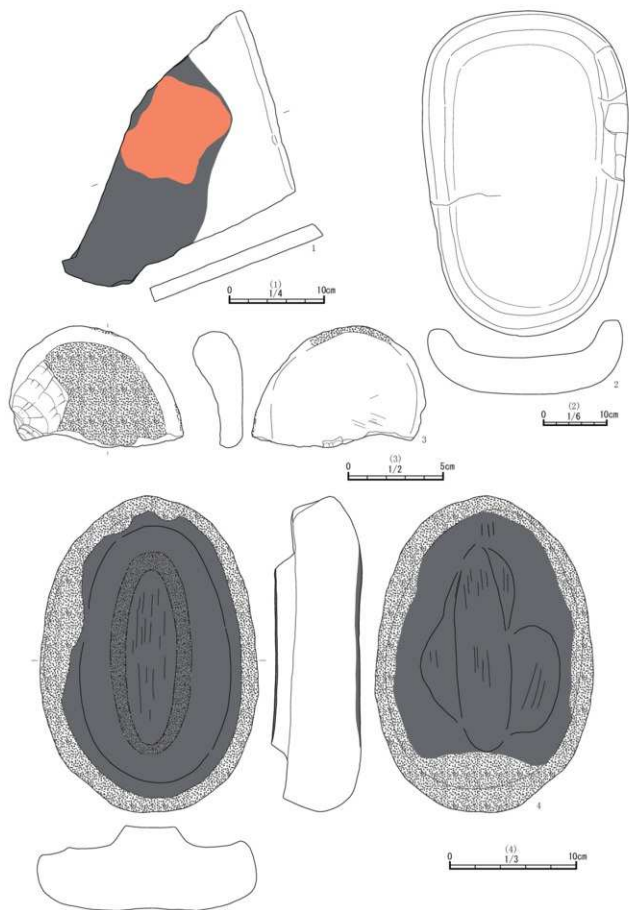


図67 石器・石製品(37)

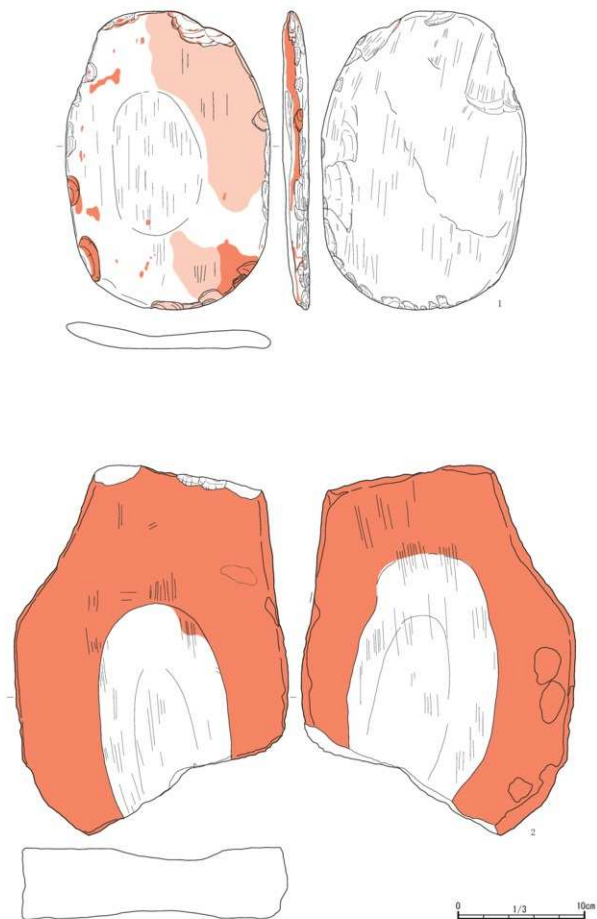


図68 石器・石製品(38)

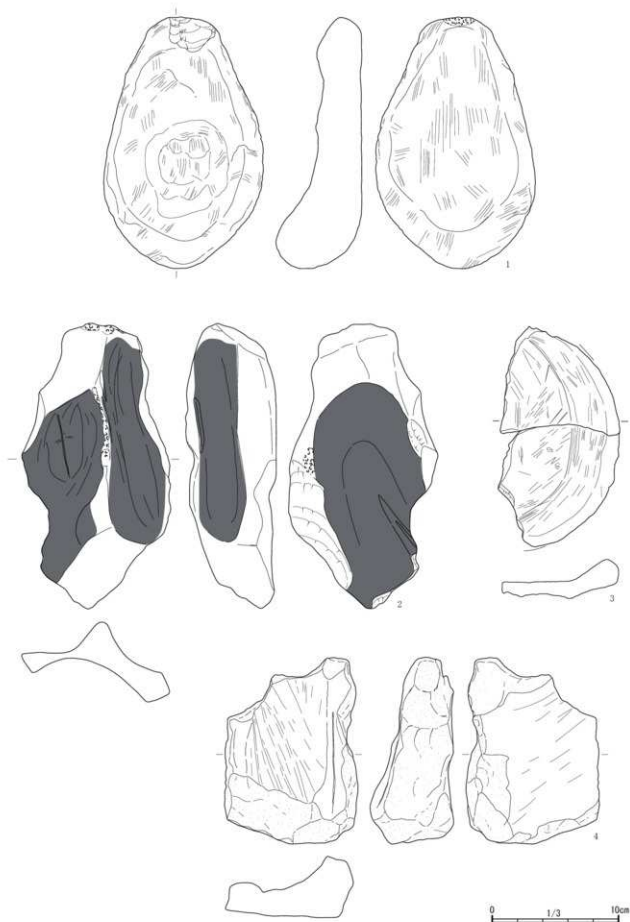


図69 石器・石製品(39)

4 土製品

西捨場から出土した土製品は、土偶164点・亀形土偶7点・土面1点・耳飾り30点・有孔土製品15点・有孔環状土製品2点・腕輪形土製品6点・三角形土版4点・土版2点・スタンプ形土製品1点・土冠1点・環状土製品1点・棒状土製品1点・鐔形土製品1点・蓋2点・土製品3点・粘土塊91点(掲載22点・未掲載69点)・円盤状土製品245点(掲載150点・未掲載95点)・ミニチュア土器及び小型土器406点(掲載395点・未掲載11点)で、総数983点(掲載808点・未掲載175点)である。出土個数は、ミニチュア土器及び小型土器・円盤状土製品・土偶・粘土塊の順で多く、全体の9割を占める。特に土偶の出土数が多いのが特徴である。

【土偶】 (図70～92-1～164)

土偶は164点出土し、中空111点・中実53点が出土した。

【中空土偶】全体の形態がわかる1は、頭部に王冠をのせ、目を強調し、肩はなで肩でウエストがくびれ、脚部はふくらはぎが丸みをもつものである。輪積みによって製作しており内面は凹凸がみられ、調整は雑なのが特徴である。1・5は腕部を中実、26は中空に製作している。王冠部は、断面形が三角形で、四本の粘土を組み合わせ、その間を穿孔し、透かし彫り風に製作している。また側縁には、二個一対の粘土粒を貼り付けている。2・3は頭頂部をさらに二重重ねている。顔部は目を強調し横一線の沈線を施文しているのが特徴である。目部の間に鼻と口部に粘土粒で貼り付けている。24は口・目部の周縁に連続刺突を施文している。27・29は目の輪郭のみの表現である。肩部はなで肩で、手前は26のように、手表現を表していない。土偶の乳房は多くははりがある。29・33・34は垂れ下がった状態を表している。体部上半がえぐれ、下半がひろがる形態を呈する。脚部は、全体的に丸みを持ち、全体の形状がO脚状態である。足裏は平坦なものが多いが18は斜位表現である。そのため自立するものとしにくいものに分かれる。足指先は明確に表現していない。文様は首部を弧状文、体部には左右対称に磨消縄文を用いて施文している。1・4・5・23は赤色顔料を塗布し、29は腕部にアスファルトを塗布しているがアスファルトの塗布例は少ない。

【中実土偶】122は首部にアスファルトを塗布している。122・124は顔部が縦長で楕円形の形状である。鼻部と目部は粘土紐を貼り付け121は粘土紐に縄文を施文している。口部を凹ませているものが多い。162は、頭頂部に突起がありその形態は、あたかも帽子を表現しているようにみえる。肩部はなで肩、ウエストがえぐれ、脚部がO脚な形状は中空土偶の形状と相似している。乳房部は、はりがあるものより126・133・141・142と垂れ下がっている乳房が多い。体部には正中線126・133を施文し、左右対称に渦巻き文126を施文している。134・142は下半部にパンツツ状の文様を施文している。139は連続刺突を施文している。134は腹部が張り出しており、妊婦状態を表している。肢には盲孔130・刺突134を施文しており、その表現は女性性器を表している可能性が高い。

【跽踞土偶】121は顔部が円形で、腕部は欠損している。4グリッドにまたがってバラバラの状態出土した。正面はY字状粘土紐、裏面には三又入組文を施文している。膝頭の上部分が欠損しているため、腕部が付着していたと考えられ、八戸市風張(1)遺跡と同様の様む土偶の形態と類似している可能性が高い。焼成は良好で優品である。160・161は小形の跽踞土偶であり160は体部に正中線を施文し左右に刺突を施文している。裏面は二条の沈線のみである。顔面を施文せず土下座表現をしている。

161は足指・手指が欠損しており、顔面を表現していない無文で粗雑なつくりである。二例とも4cm未満の小形であり津軽地域では貴重である。

【X字形土偶】(148～152)は全体の形状がX字形を呈するものをX字形土偶とした。一部欠損しているものの全体の形状が残存しているものが多い。149・152の形態・文線施文が相似しており、ペア土偶と呼称したい。顔面の細部を省略し裏面に漆を塗布している。直線距離で約8m離れて出土した。

【岩偶形土偶】159は顔面が岩偶と類似し、岩偶形土偶と呼称されている。乳房部が垂れ下がっており、頭頂部は山形状の文様、体部及び裏面に渦巻文を施文している。腹部は三角形に区画している。接合面は肩から腰にかけて割れており、岩偶の切断と類似している。岩偶形土偶は津軽地域では完形の出土は貴重な資料である。

【亀形土偶】(図95-228～234) 亀形土偶は7点出土した。体部が中空であり全て破片である。228は側縁に連続刺突、両端部に穿孔がみられる。230～234は側縁部の破片である。228は脚部をもたない楕円形、233・234は脚部の一部分と思われる。

【土面】(図93-187) 土面は1点出土した。287は目から鼻部にかけて残存している。眉・鼻部を粘土紐で、鼻孔を沈線で施文し目を貫通している。無文で焼成は良好で裏面は平坦である。

土製品

【耳飾り】(図92-165～186、図93-188～195) 耳飾りは30点出土した。形態的に大別し分類すると、断面形がa類台形(片方の長さが長く土器の鉢形と類似する)174・漏斗形(両端が丸みを持ち耳栓形)173とb類滑車形182で中実と断面が開くものに分かれる。a類は全面に赤色顔料を塗布しており、178・179は中心部が貫通している。b類はa類より長径が大きく片面が開いている。中心が穿孔し放射状に沈線193・中心から放射状に連続刺突194・192は中心から楕円形文を施文している。190は内外面に黒色付着物(漆?)がみられる。耳飾りには、形態にバラエティーがみられるものの、a類の台形タイプの出土が多く、a・b類には赤色顔料の塗布例が多い。

【有孔土製品】(図93-196～208・図94-212・214) 有孔土製品は15点出土した。ここでは穿孔しているものを一括して本類に含める。形態は円形が多いが他に208の十字形・212の楕円形・214のバーベル形がみられる。中心部に穿孔がみられるが、202は盲孔・214は対に孔がみられ、212は長軸に穿孔している。周縁には刻みを巡らすものが多く、赤色顔料を塗布している例が多い。

【有孔環状土製品】(図93-209・210) 上記の有孔土製品に分類するべきであるが、つくりが精巧なため分けて分類した。有孔環状土製品は2点出土した。210は環状がみられないものの形態が相似しているため本類に分類した。209は中心部を穿孔し、周縁に對の粘土粒を貼り付け赤色顔料を塗布している。210も全面に赤色顔料を塗布し側縁に粘土粒を貼り付けている。

【腕輪形土製品】(図94-211・213・215～218) 腕輪形土製品は6点出土した。全周するもの211と、弧状で衣類を干すハンガーの形態215も本類とした。214は完形で刺突を不規則に充填し、211は縄文を施文しているもので全周すると思われる。215は側縁に二又状突起を有する完形で全面に漆を塗布した優品である。

【三角形土版】(図94-219～222) 三角形土版は4点出土した。219は端部に突起を有し人形に近い

形態を呈する。側縁部に捺糸圧痕・220は横位方向に二条の連続刺突・222は側縁に沈線を施文している。221は端部に貫通孔がみられる。

【土版】(図94-223-224) 土版は2点出土した。223は残存部から推定すると楕円形の形態で板状を呈し斜位と弧状文を施文し、224は同心円状に文様を表面に施文している。板状で形態は不明である。

【スタンプ形土製品】(図94-225) スタンプ形土製品は1点出土した。225は完形で上位から底面にかけて広がる中実の形態で、つまみ部に孔を有する。孔の下位に横位沈線とRLを縦回転して縄文を施文している。

【土冠】(図94-226) 土冠は1点出土した。226は断面が三角形で底面は三脚状を呈する。そのため従来の土冠と異なるため土冠の範疇には入らないかもしれない。無文で焼成は良好である。

【環状土製品】(図94-227) 環状土製品は1点出土した。一部破片であるが残存部から推定すると環状を呈すると思われる。表面に弧状文を施文している。輪積み痕跡と横位方向の調整痕がみられる。この内面の整形は遮光器土偶の内面調整と類似性をもつものである。

【棒状土製品】(図95-235~239) 棒状土製品は5点出土しすべて破片である。236は内部が一部分中空であり、237~239は端部が鋭利である。239は十字形文様を施文している。用途については未だ不明である。

【鐸形土製品】(図95-240) 鐸形土製品は上半部のみが1点出土した。240は、つまみ部から体部にかけての破片であり、表面に粘土粒を貼り付けている。後期の鐸形土製品にはみられない粘土粒を貼り付けており晩期と考えられるものである。

【蓋】(図95-241・242) 蓋は2点出土した。241はつまみ部であり粘土粒に連続刺突を施文している。242は無文で焼成は良好である。

【土製品】(図95-243~245) 土製品は3点出土した。すべて破片である。全体の形態がわからないものを本類とした。245は先端部に斜位の文様を施文し、顔面にもみえるが定かでない。243は中央部に凹みを有し、244は粘土粒を貼り付け下位が空洞化している。

【粘土塊】(図96-246~267) 粘土塊は91点出土し、22点を図化した。表面に凹凸があり、不規則な形態である。265・266は側縁部が直線的である。周辺から出土した土器を観察したところ縄文晩期後葉の大洞A式と共存する例が多い。

【円盤状土製品】(図96~101-268~417) 円盤状土製品は245点出土し、150点を図化した。三角形・方形を呈するものも本類に分類した。土器片を再利用したものであり、深鉢形の胴部破片を用いるものが多く、246・356は底部破片であるが出土例は少ない。縄文・無文の土器片を多く用いる。268~273は文様を施文しているのものであるが、245点の内6点と少ない。器種は鉢・台付鉢破片を用いている。壺形・注口土器破片は用いず円盤状土製品を製作する選定にあたっては一定の規制がみられる。周縁は擦り364・369がみられる。全体の占める割合は少なく打ち欠きのみの整形である。389~404は中央部に貫通孔が確認される。貫通孔は表裏面から穿孔する二次的穿孔が主体である。402は裏面に4つの盲孔がみられる。405~412は三角形・414~417は方形を呈するが全体に占める割合は少ない。

【ミニチュア土器及び小型土器】(図102~119-418~812) 本類は406点出土し、395点を図化し

た。器高0～5cmと器高5～10cmの二種に分けて記載する。5cm未満は従来言われているミニチュア土器の範疇に入るものであり、5～10cmは小形土器と呼称されているものである。

【器高5cm未満のミニチュア土器】 鉢・台付鉢形土器（図102～104・500～528）は、底面から口唇部にかけて外反するもの（418・435）、底辺から口唇部にかけて立ち上がるもの（452・487）、口頸部が内反するもの（462・463）と形状にバラエティーがみられる。500・508・509はスス状炭化物の付着がみられるが台付鉢形に多い。文様は無文及び縄文施文の土器が多い。529～578は壺形であり、形状は全体に丸みをもつもの（559）・胴部下半が張り出すもの（535）に分かれる。文様は無文と粘土紐を横位に貼り付けている。530・531・535・536は赤色顔料を塗布し、532・542は漆を塗布している。579は片口・580は方形土器である。806は注口土器で粗雑な製作であり出土例は少ない。

【器高5～10cmの小型土器】 鉢形・台付鉢形土器で底部から口唇部にかけて外反するもの（621・624）、全体的に丸みをもつもの（634～636）、口頸部が内反するもの（630・631）と形状の種類が多い。616・617・630は赤色顔料を塗布しているが、器内外面のスス状炭化物の付着が多いのが特徴である。特に台付鉢に顕著にみられる。壺形は638～793と器種の中で出土量が多かった。また赤色顔料・漆の塗布が多く焼成良好なものが目立っている。794～796は底面に四脚をもつ土器であり、全てに赤色顔料の塗布がみられる。800～802は片口土器でスス状炭化物の付着がみられる。803～812は注口土器で、804・807の作りは精緻な作りであり、806は粗雑な作りである。

ミニチュア土器は日常容器の模倣であるが、580の方形土器は日常容器でみられなかったものである。器種は鉢・台付鉢が主体であり器高5～10cmのものは、台付鉢にスス状炭化物の付着が多くみられる。その次にくる器種は壺形土器で赤色顔料・漆を塗布している例が多い。器種で少ないのは注口土器である。

西捨塚から出土した土偶・土製品は、他の各捨塚と比較すると、土偶数及び土製品の種類は豊富である。特異な出土例はみられず、その時期は後期末葉～晩期後葉の時期で主体は晩期前葉の時期のものが多い。

（成田）

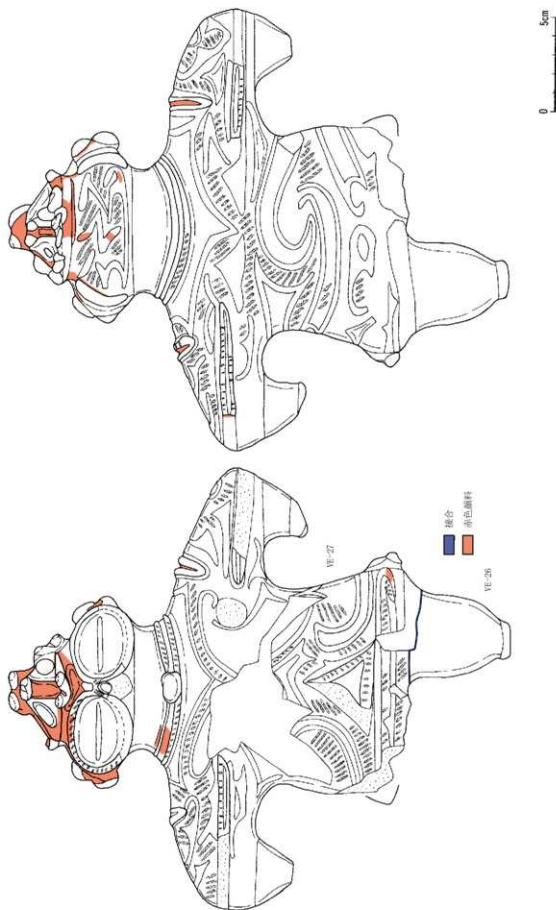


图 70 土製品 (1)

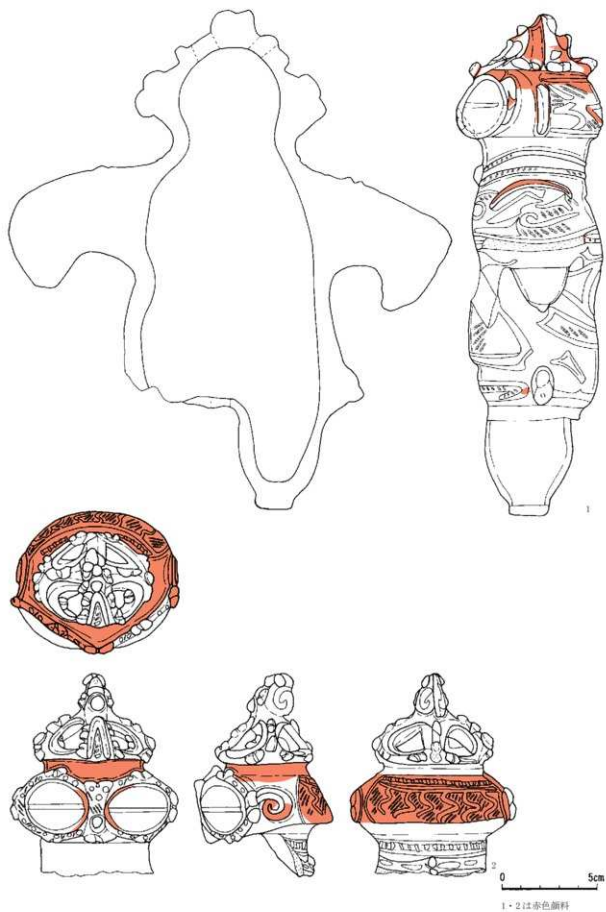


図 71 土製品 (2)

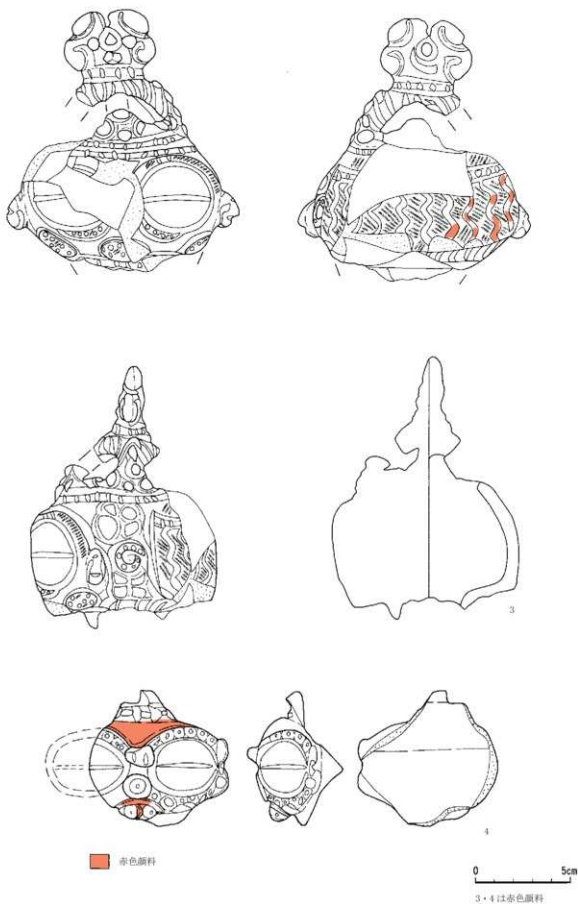


図 72 土製品 (3)

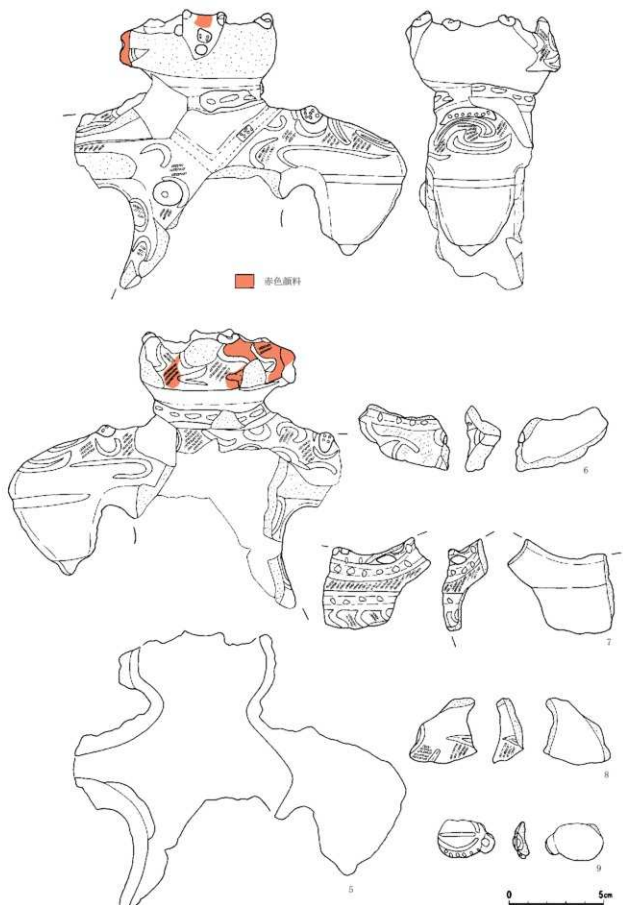


図 73 土製品 (4)

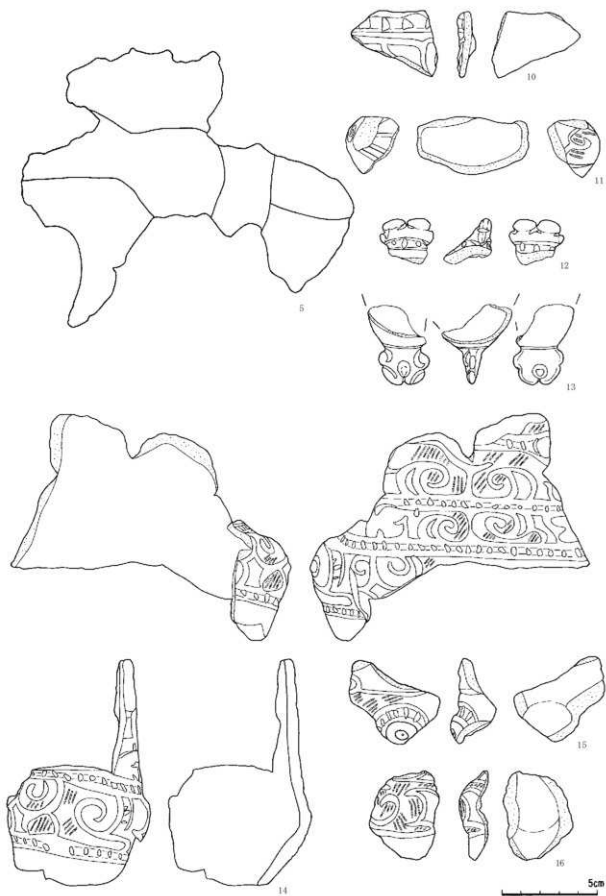


図 74 土製品 (5)

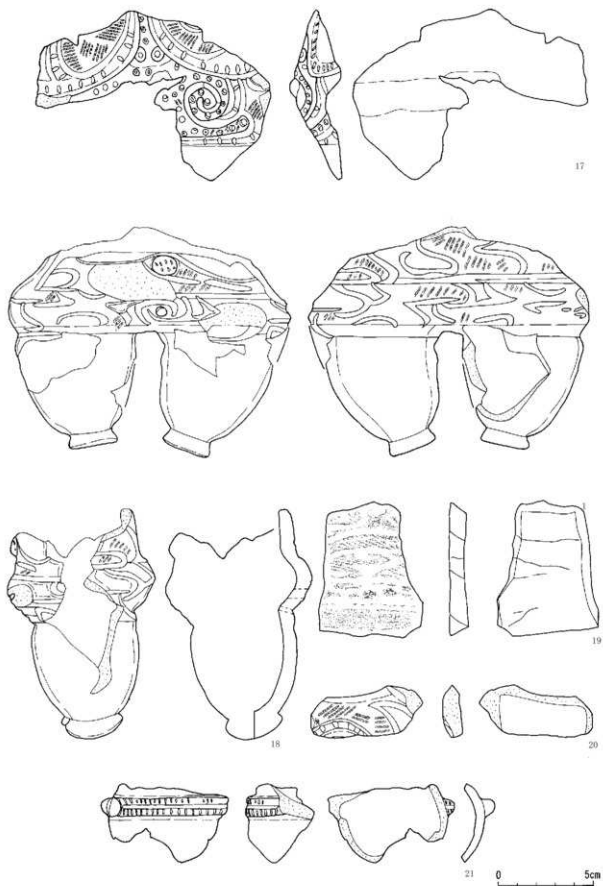


図 75 土製品 (6)

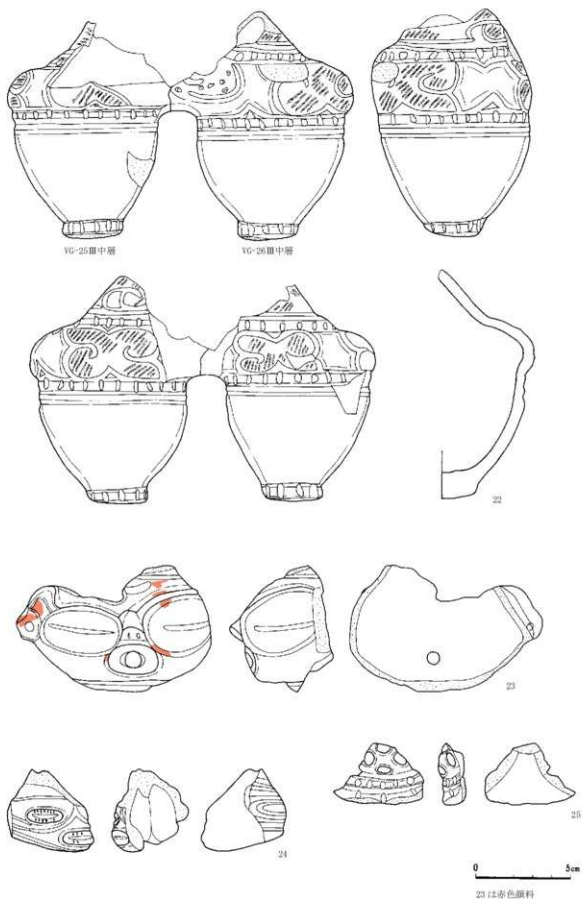


図 76 土製品 (7)

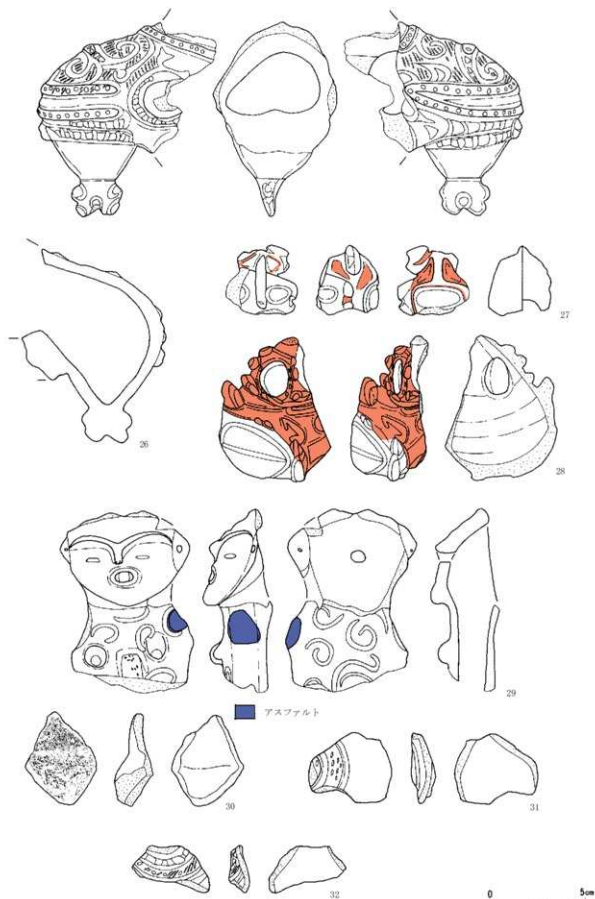
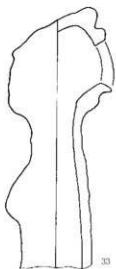
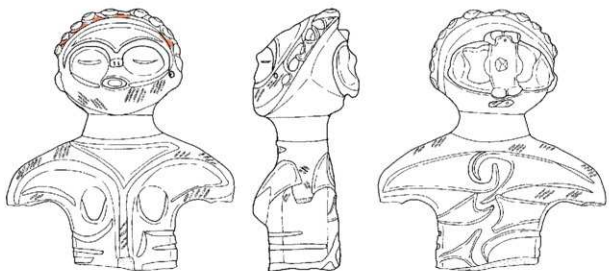
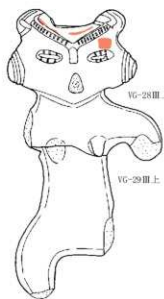
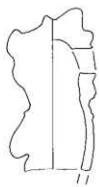
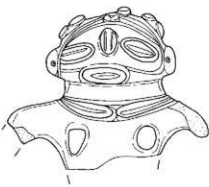


図 77 土製品 (8)

27・28 は赤色顔料

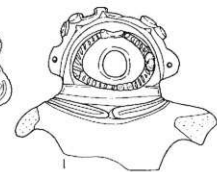


33

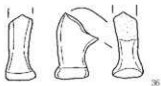


VG-28Ⅲ上

VG-29Ⅲ上



34



36

0 5cm

図 78 土製品 (9)

35は赤色顔料

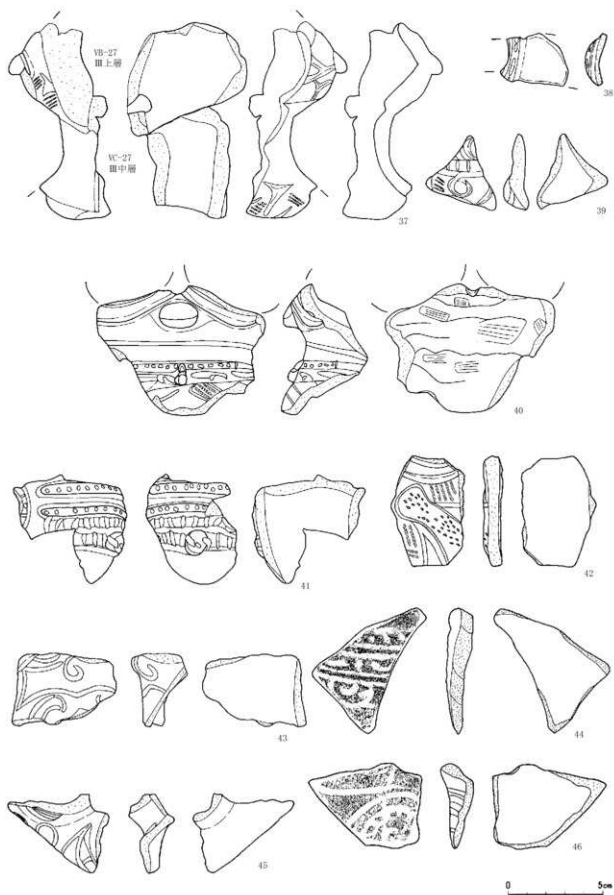


図 79 土製品 (10)

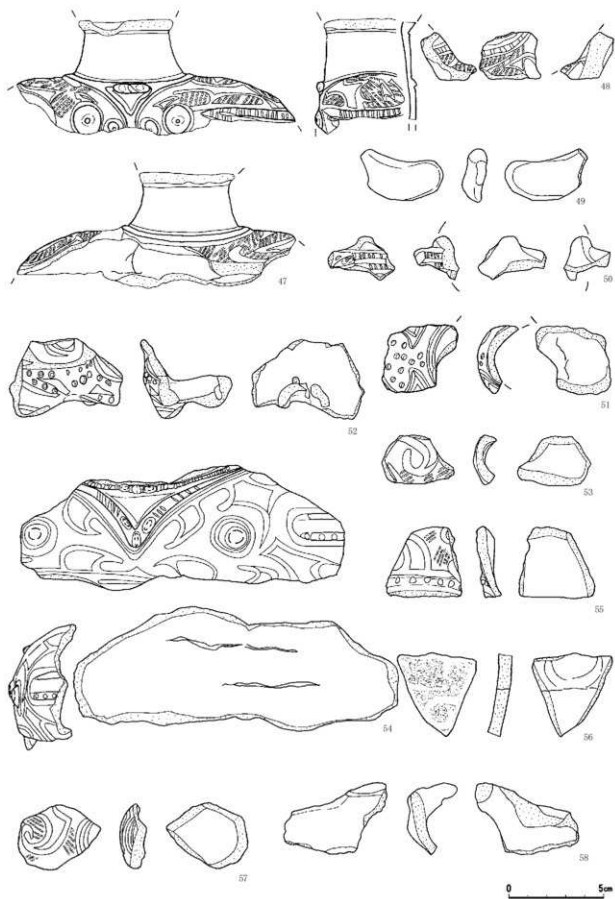


図80 土製品(11)

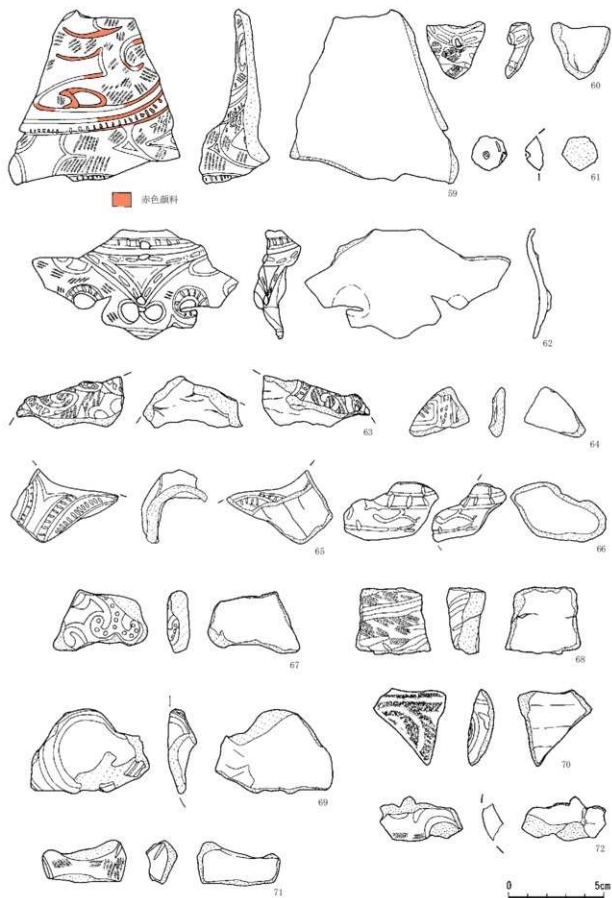


图 81 土製品 (12)

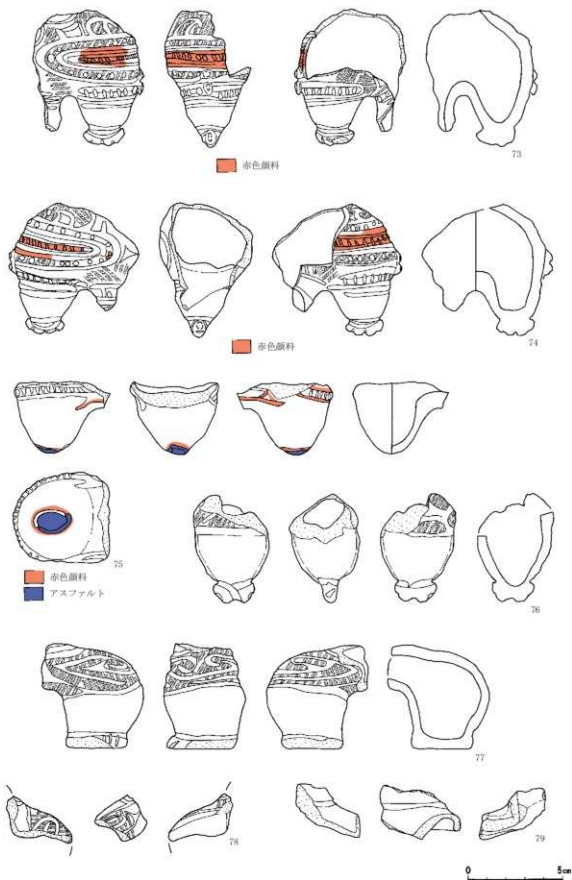


図 82 土製品 (13)

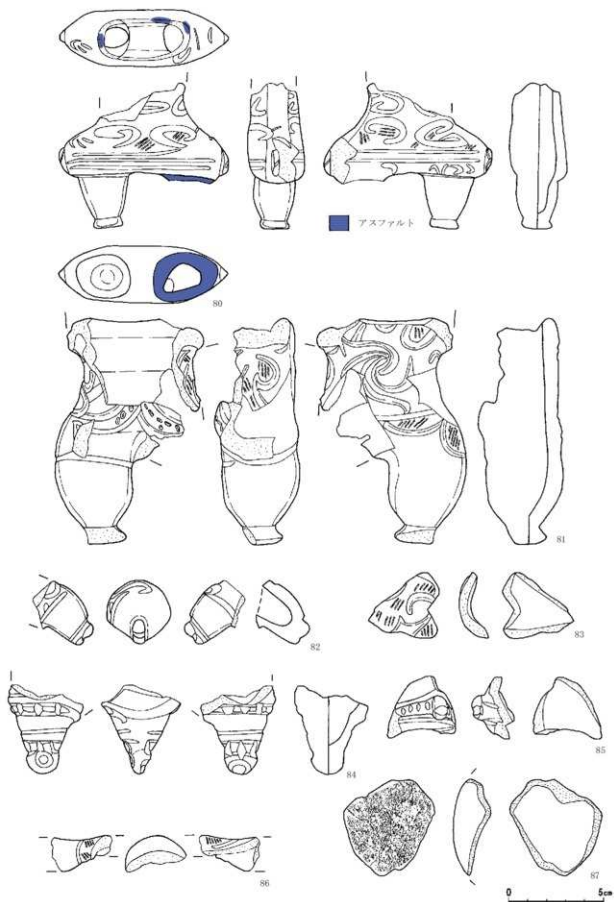


図 83 土製品 (14)

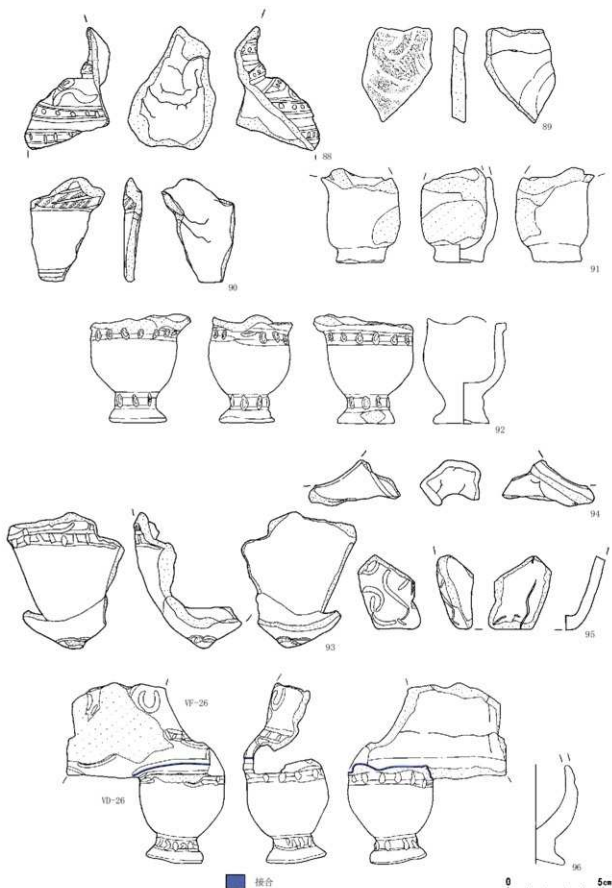


図84 土製品 (15)

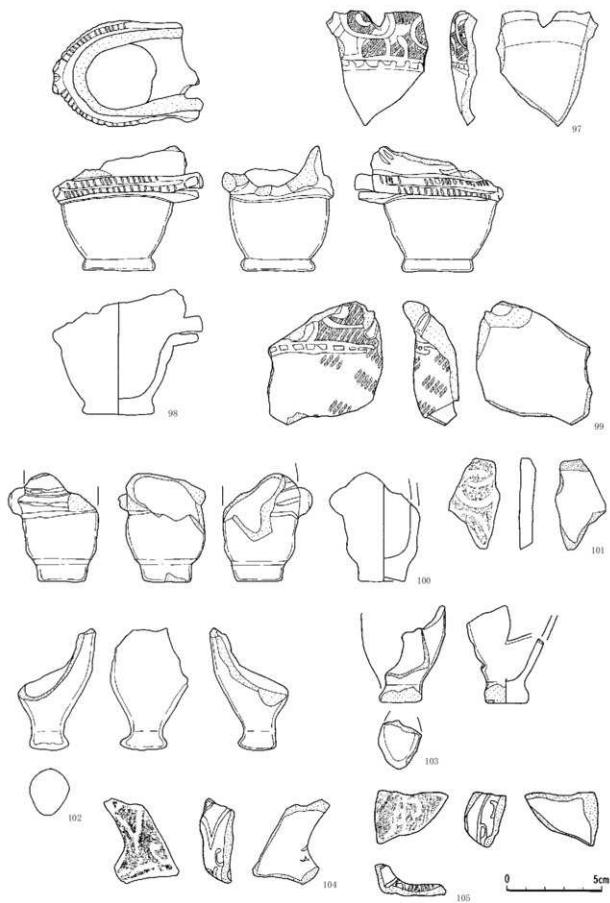


図85 土製品(16)

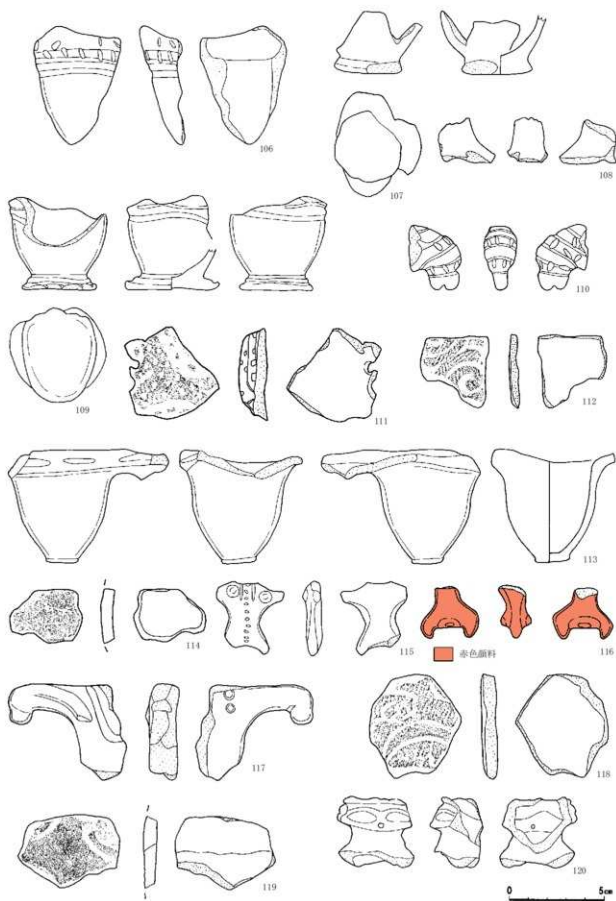


図 86 土製品 (17)

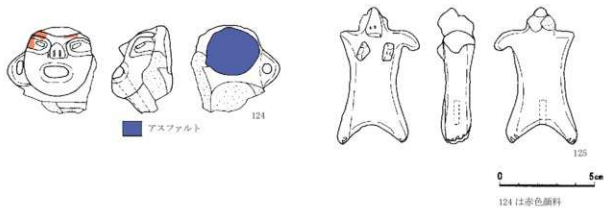
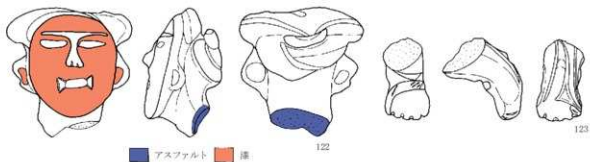


図 87 土製品 (18)

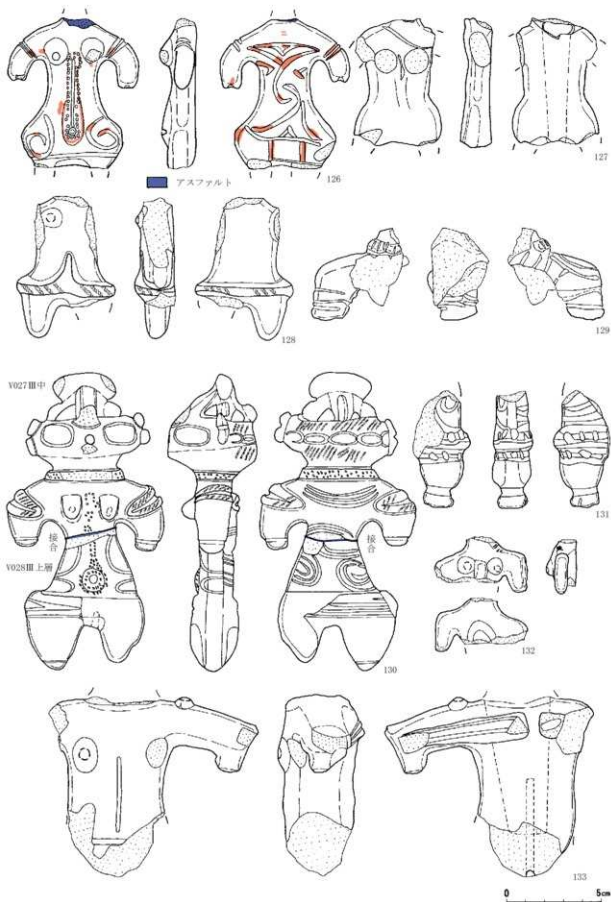


図 88 土製品 (19)

126 12赤色顔料

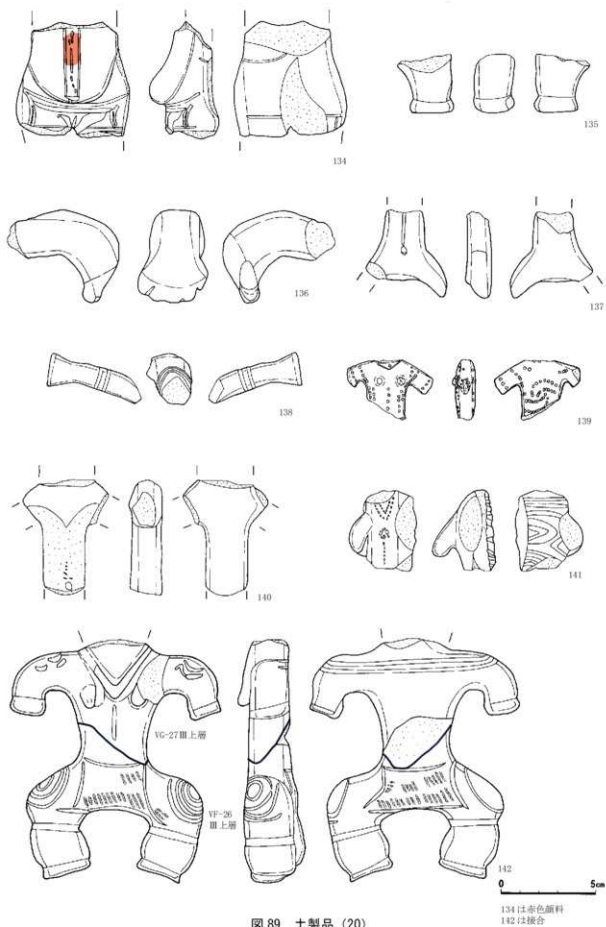


図 89 土製品 (20)

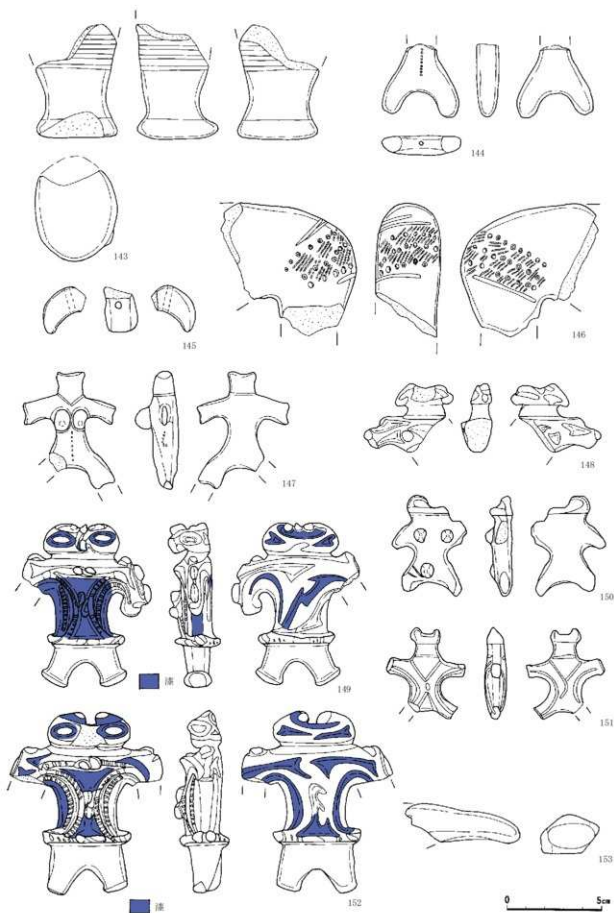


図90 土製品 (21)

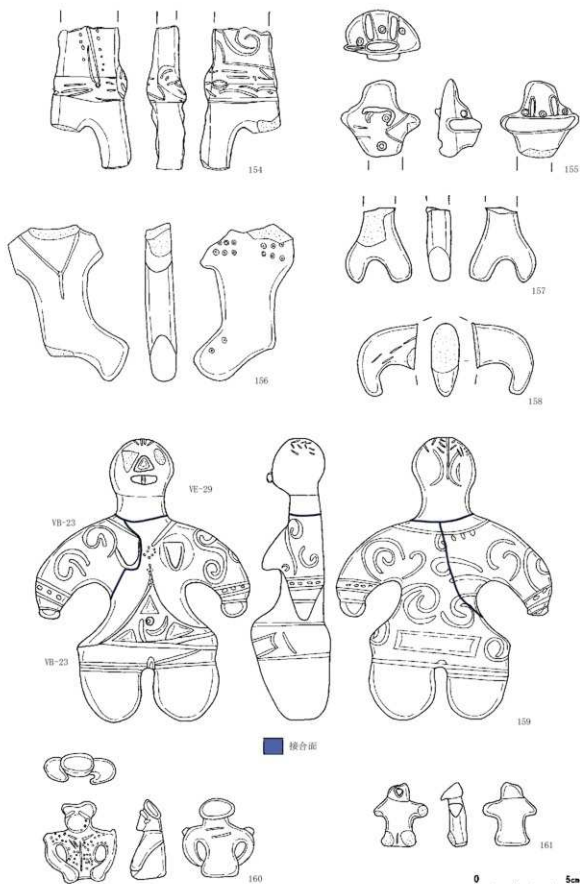


図91 土製品(22)

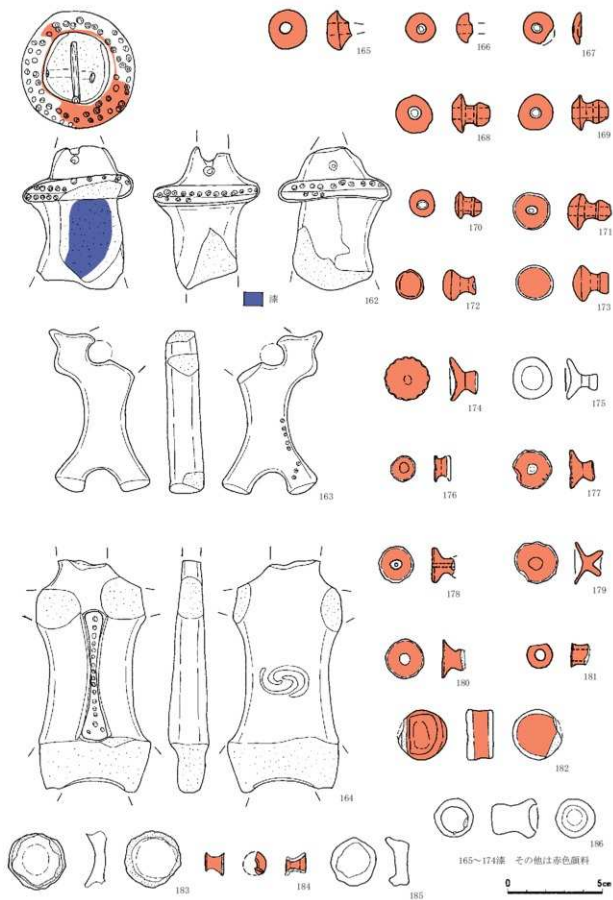
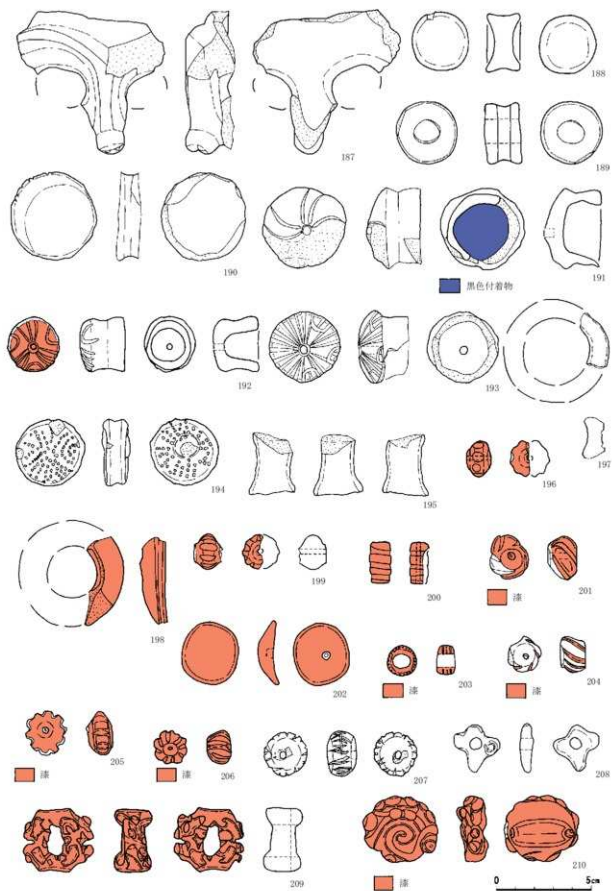


図 92 土製品 (23)



192・196・198～200・202・209に赤色顔料

図 93 土製品 (24)

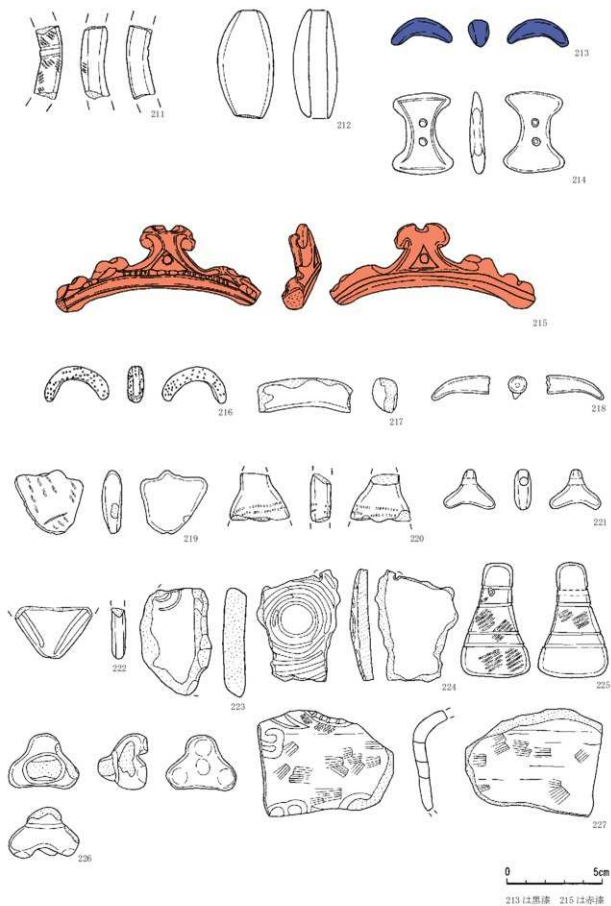


図 94 土製品 (25)

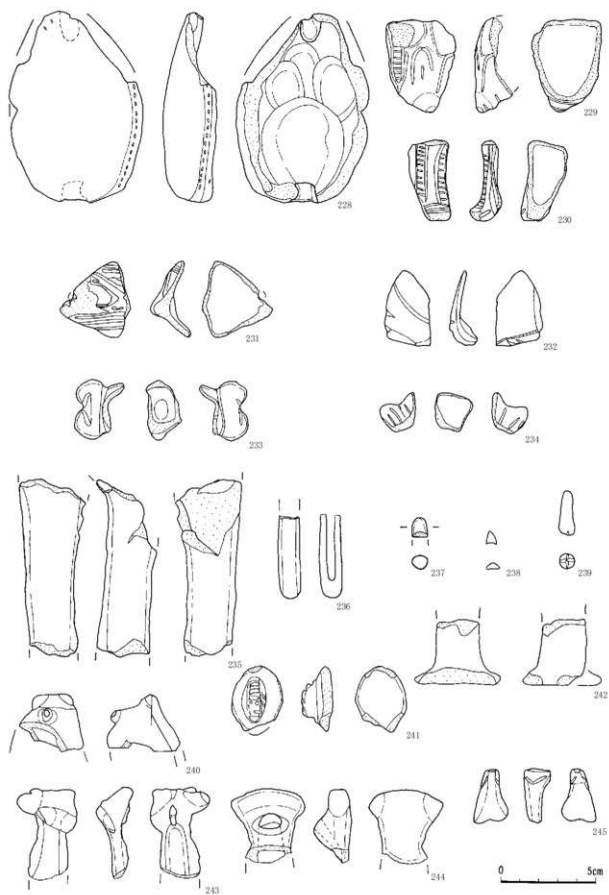


図95 土製品 (26)



図 96 土製品 (27)

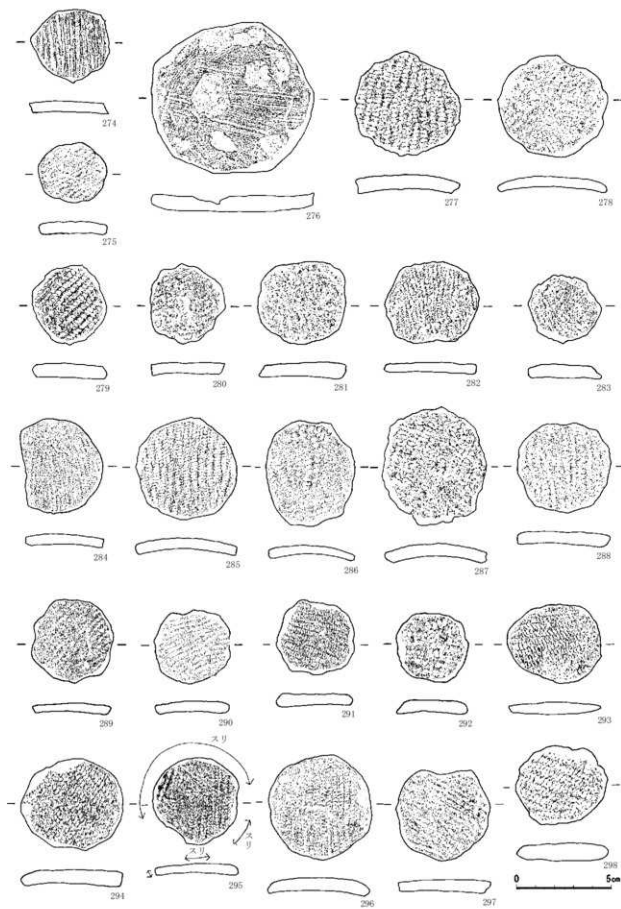


図 97 土製品 (28)

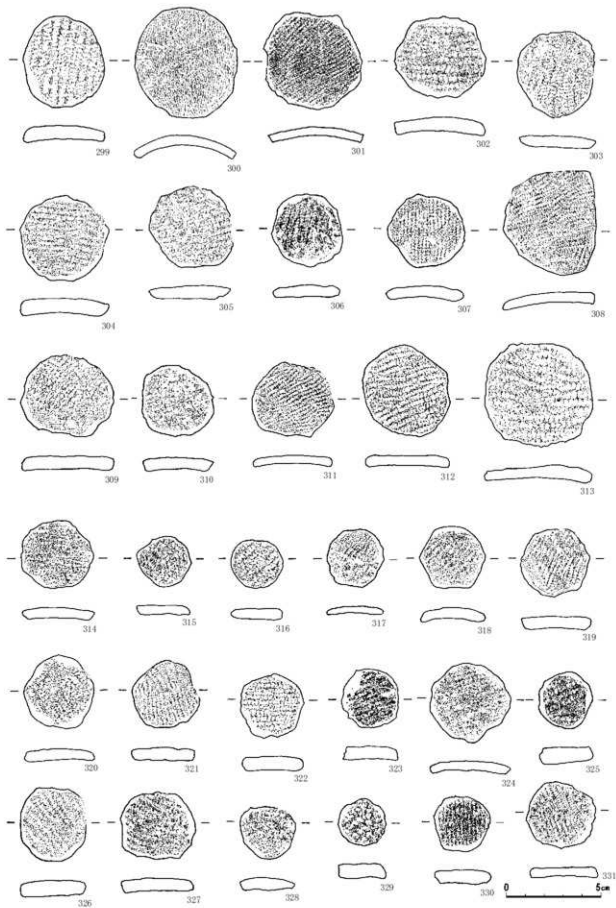


図 98 土製品 (29)

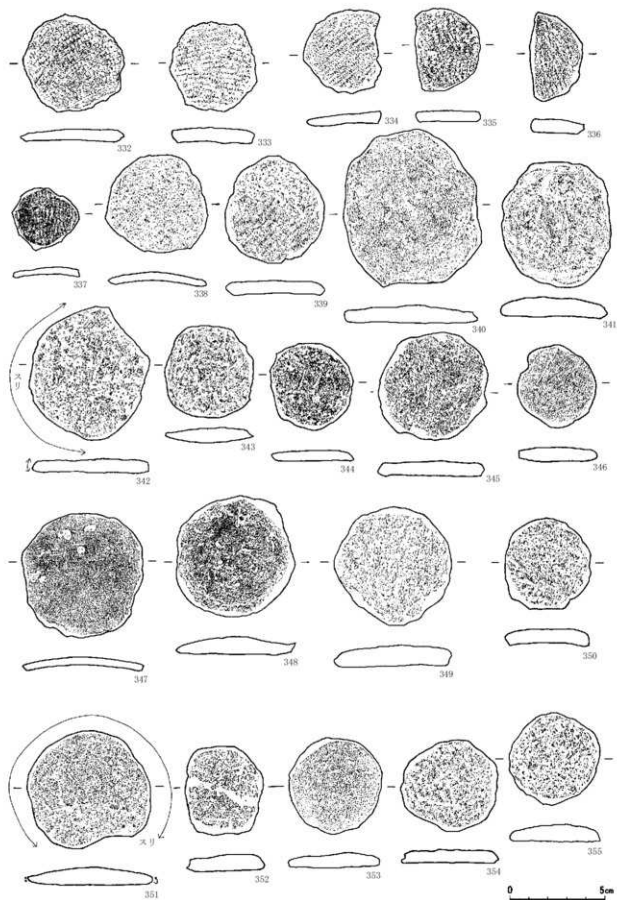


図 99 土製品 (30)

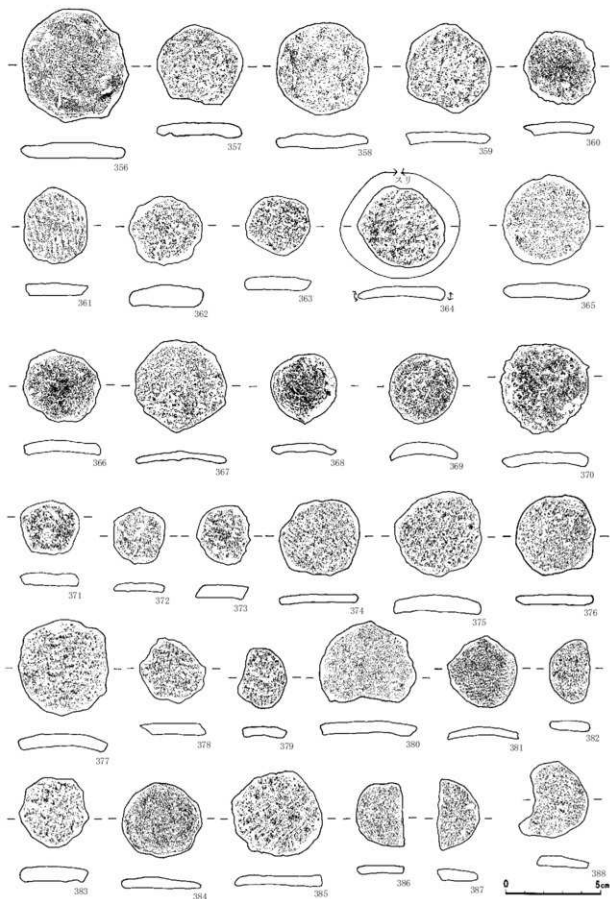


図 100 土製品 (31)

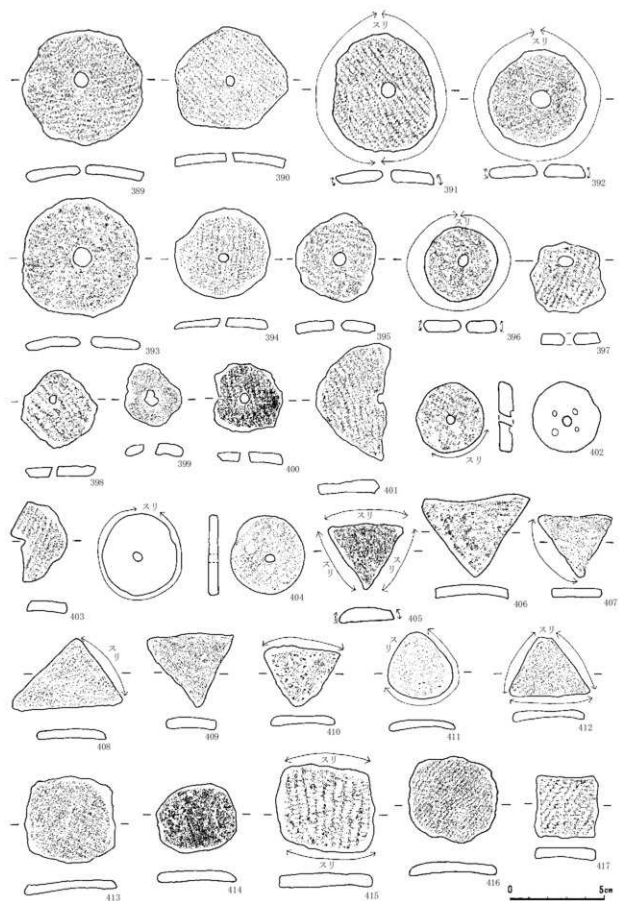


図 101 土製品 (32)

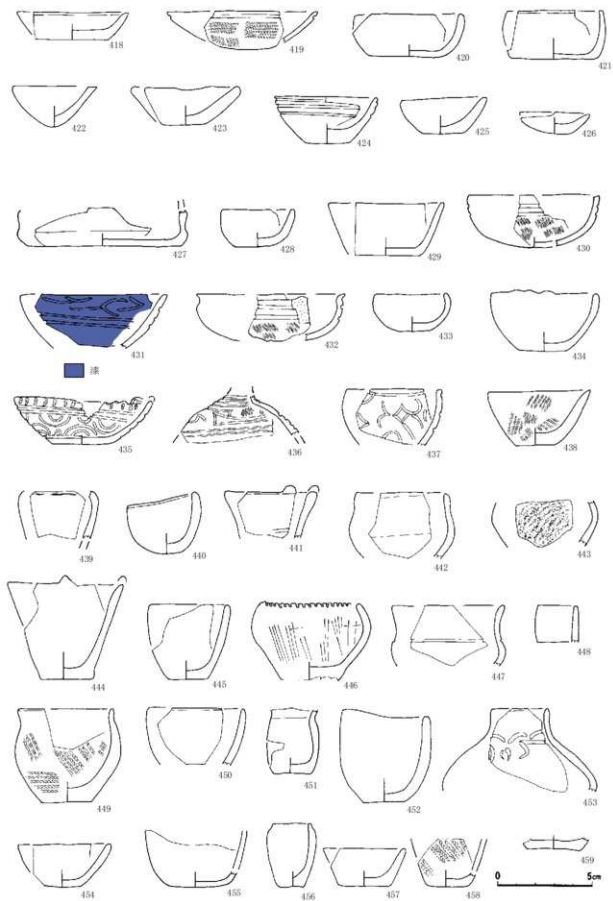


图 102 土製品 (33)

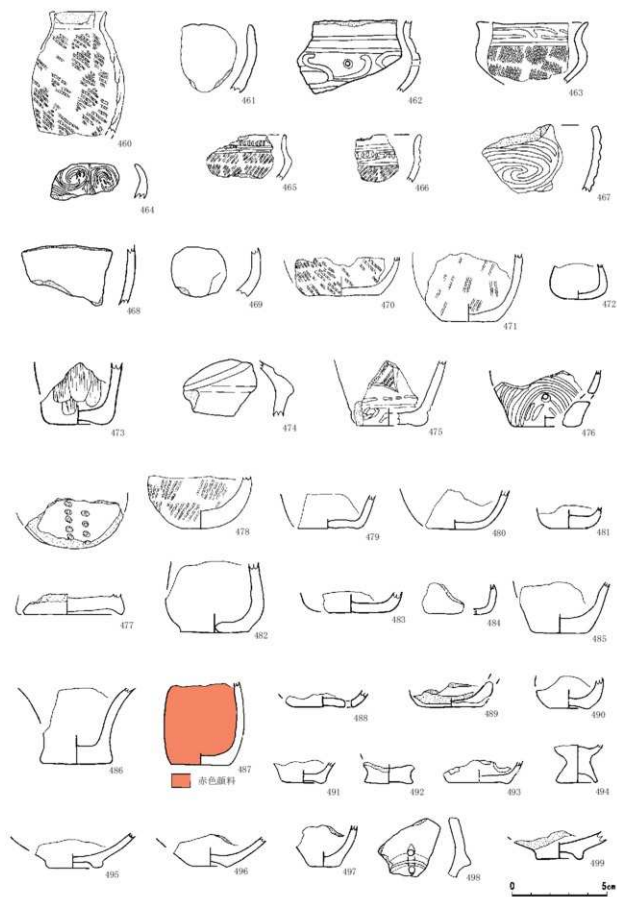


図 103 土製品 (34)

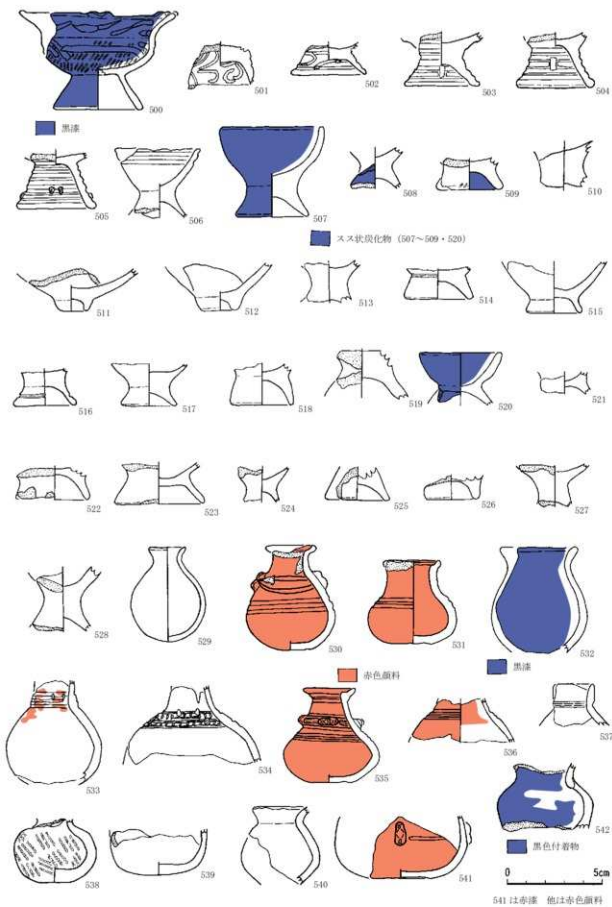
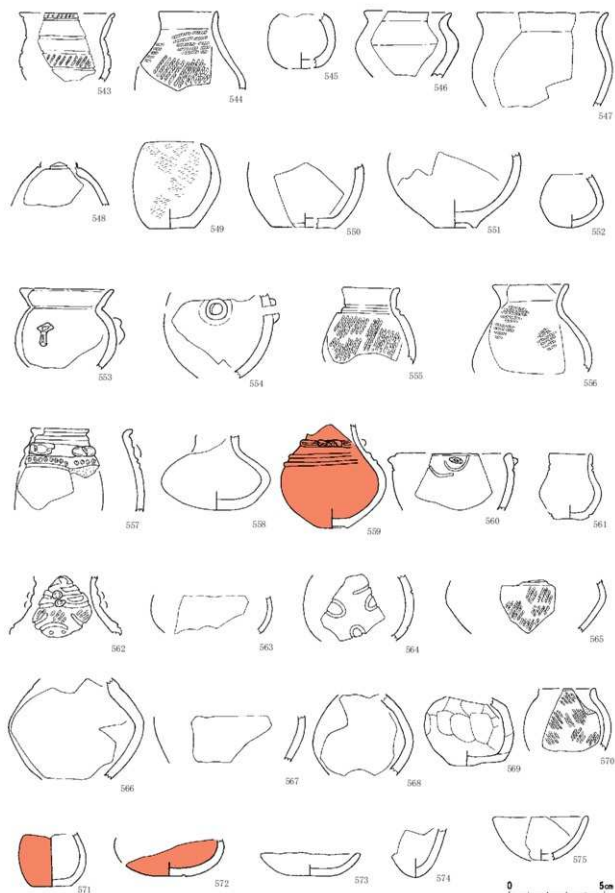


図104 土製品 (35)



559 紅赤漆 571・572 紅赤色顔料

図 105 土製品 (36)

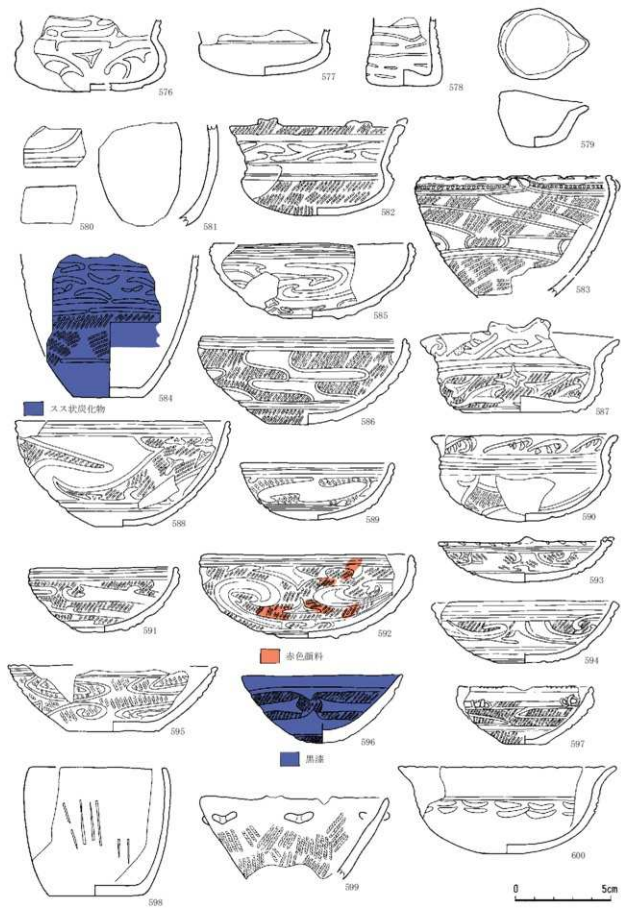


図106 土製品 (37)

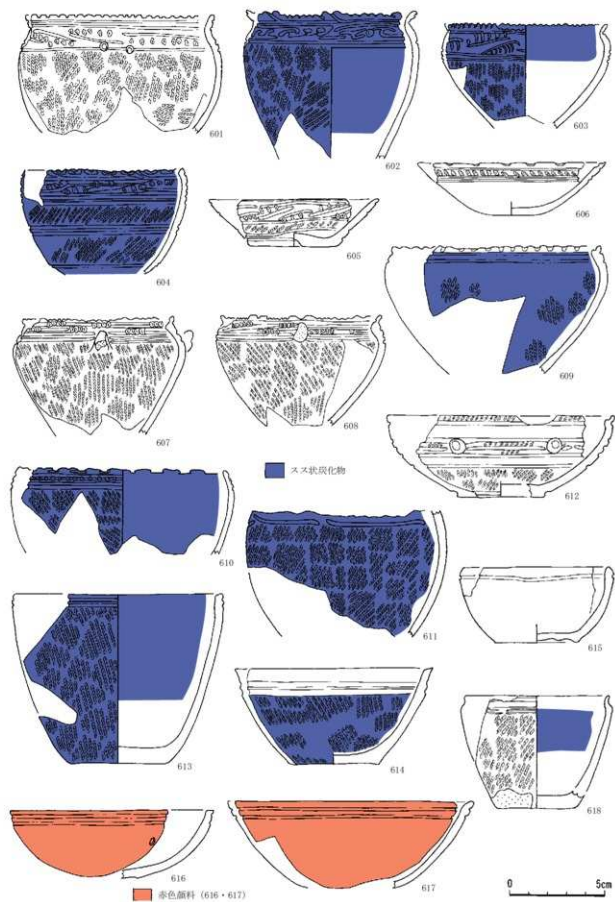


図 107 土製品 (38)

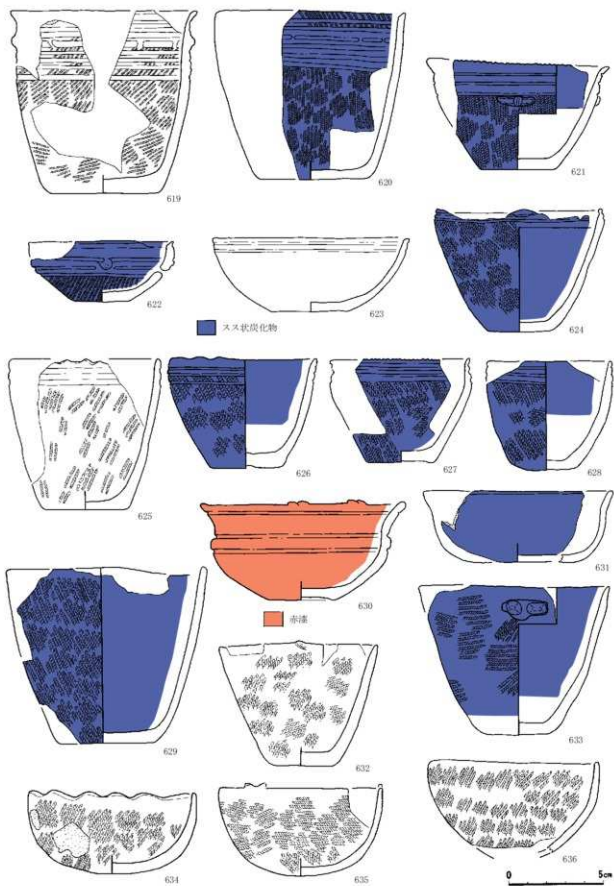


図 108 土製品 (39)

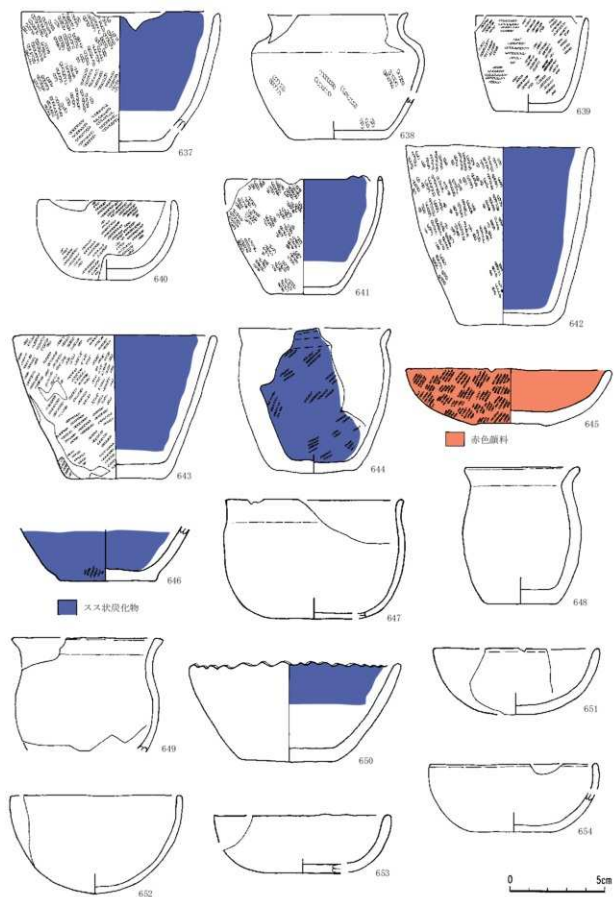


図 109 土製品 (40)

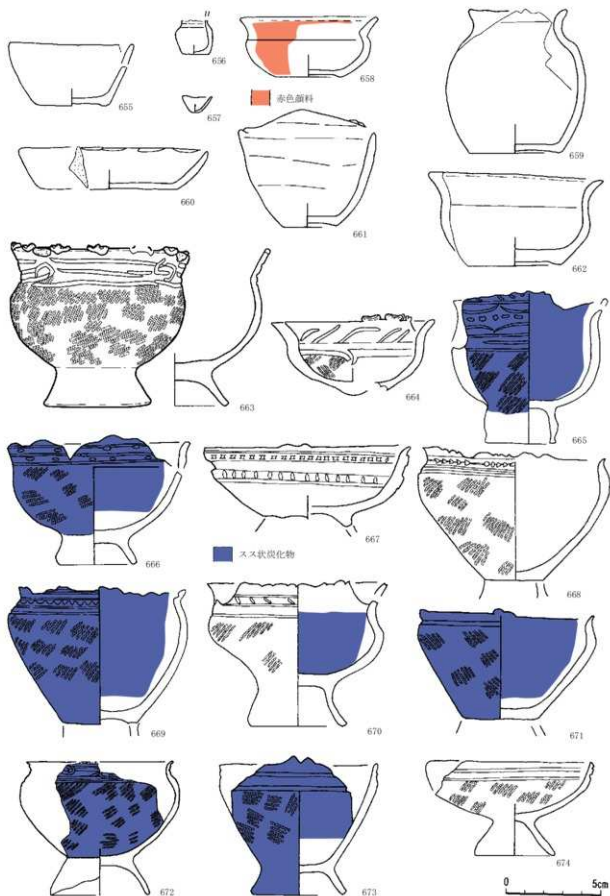


図110 土製品 (41)

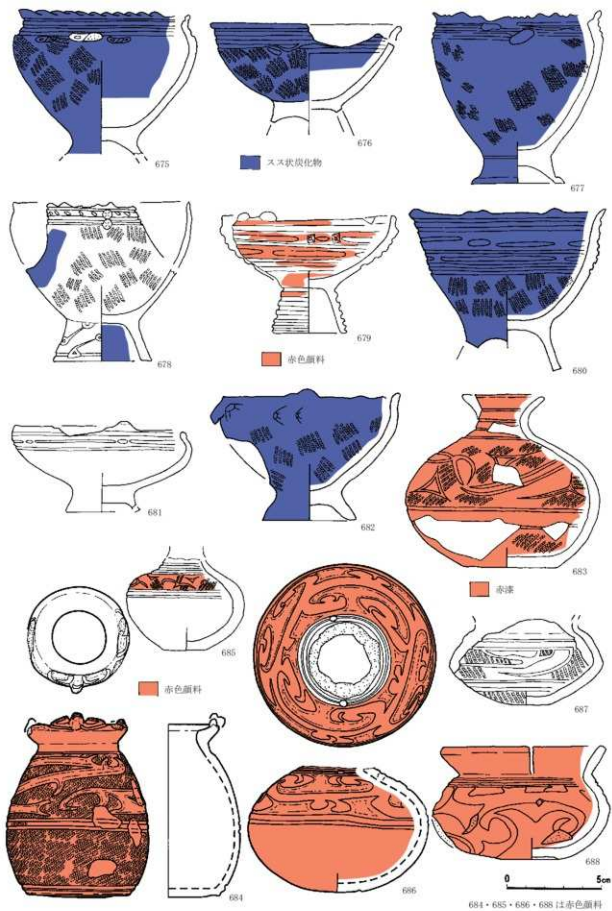


図111 土製品(42)

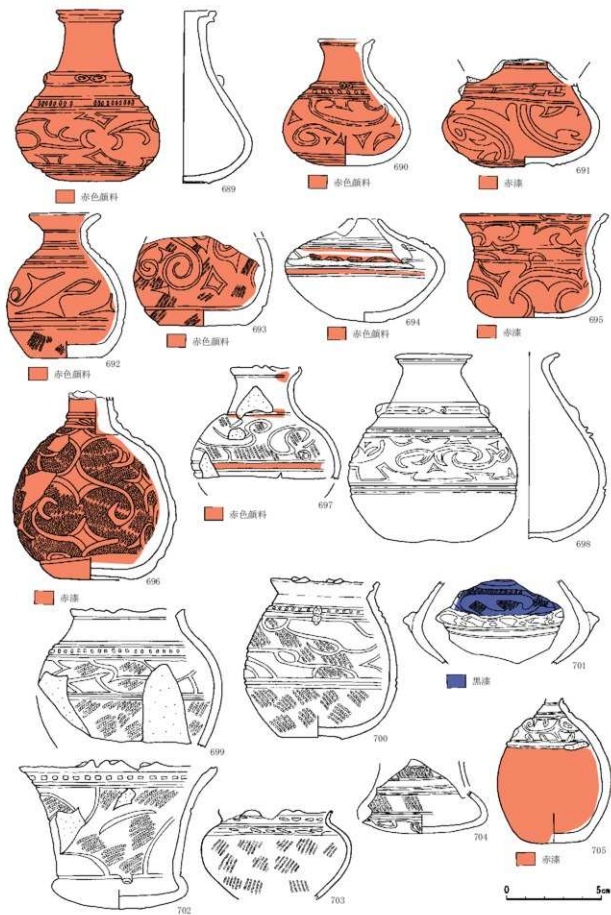


図 112 土製品 (43)

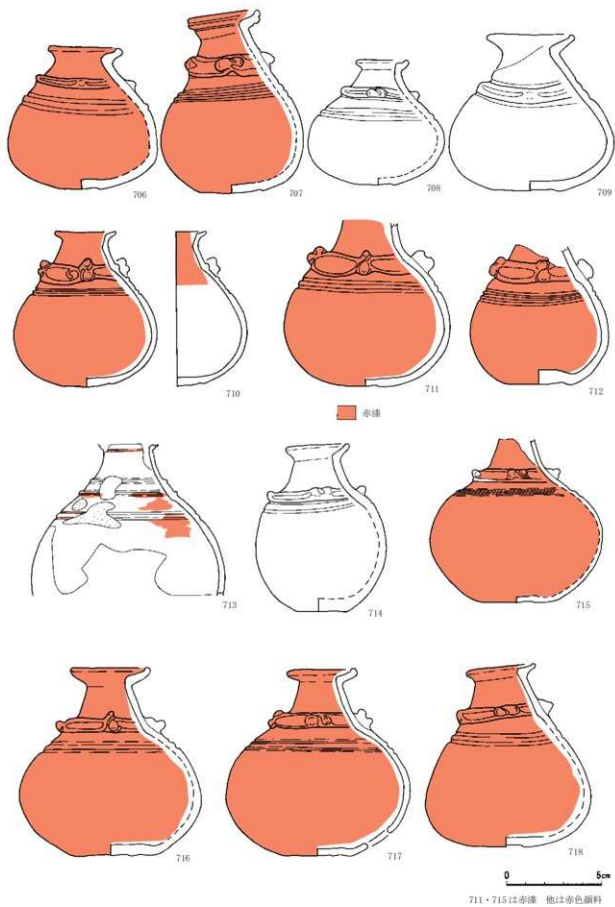


図 113 土製品 (44)

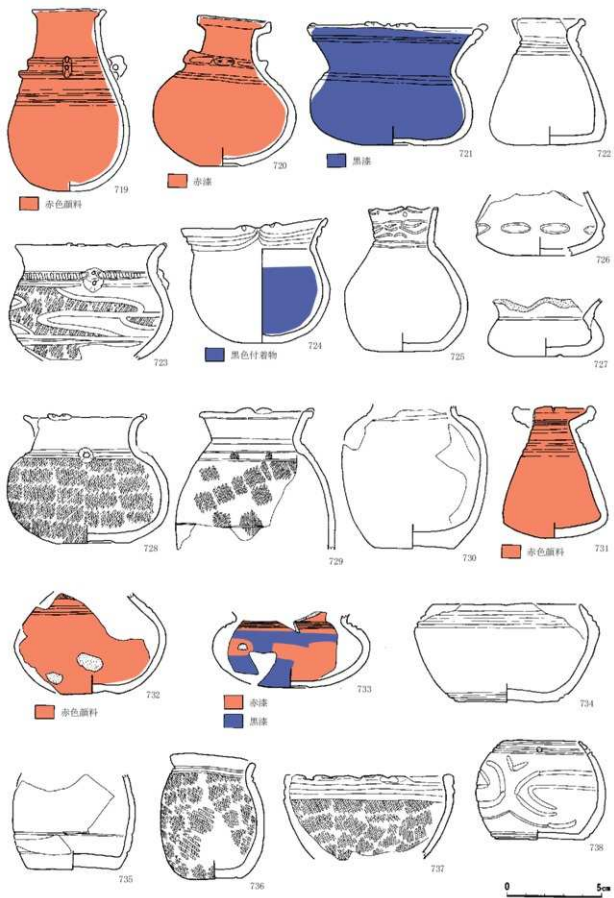


図 114 土製品 (45)

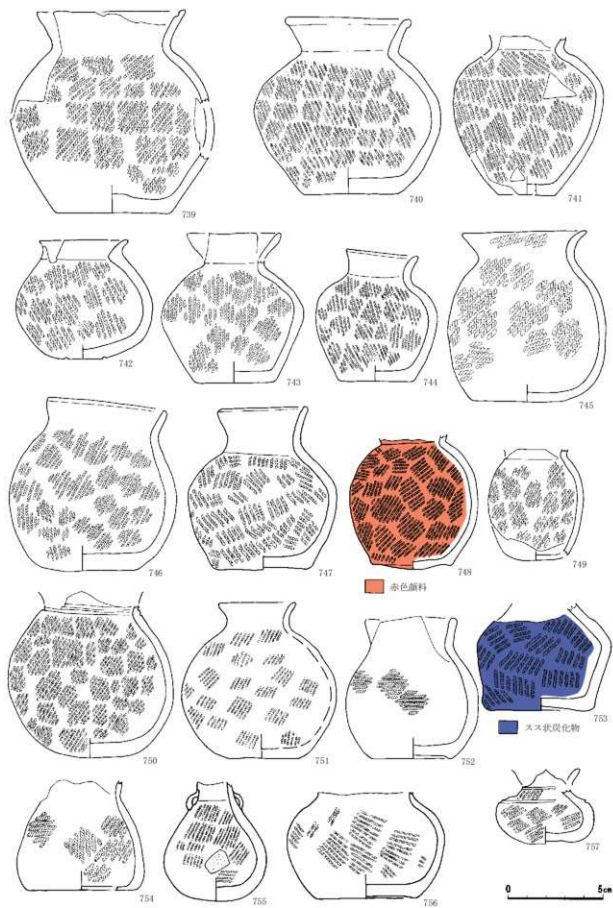


図 115 土製品 (46)

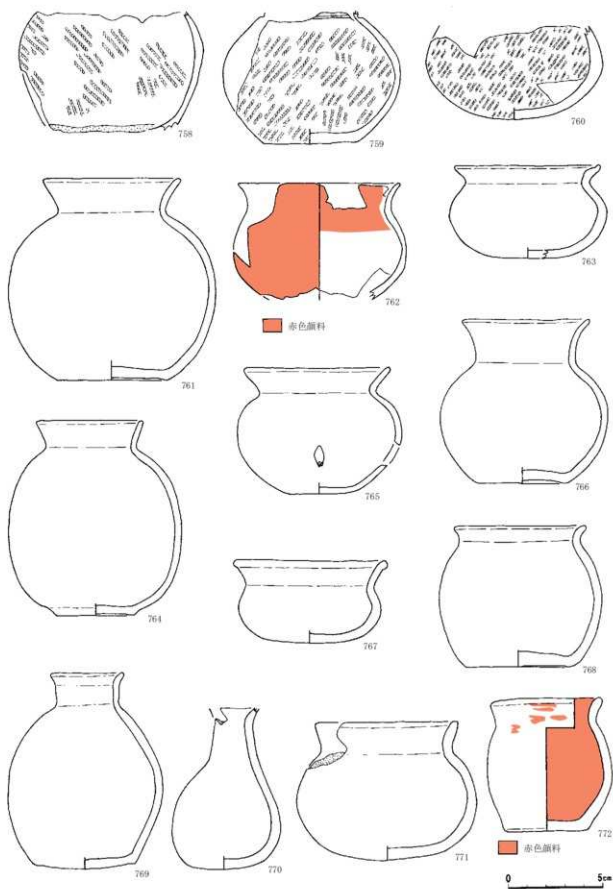


図 116 土製品 (47)

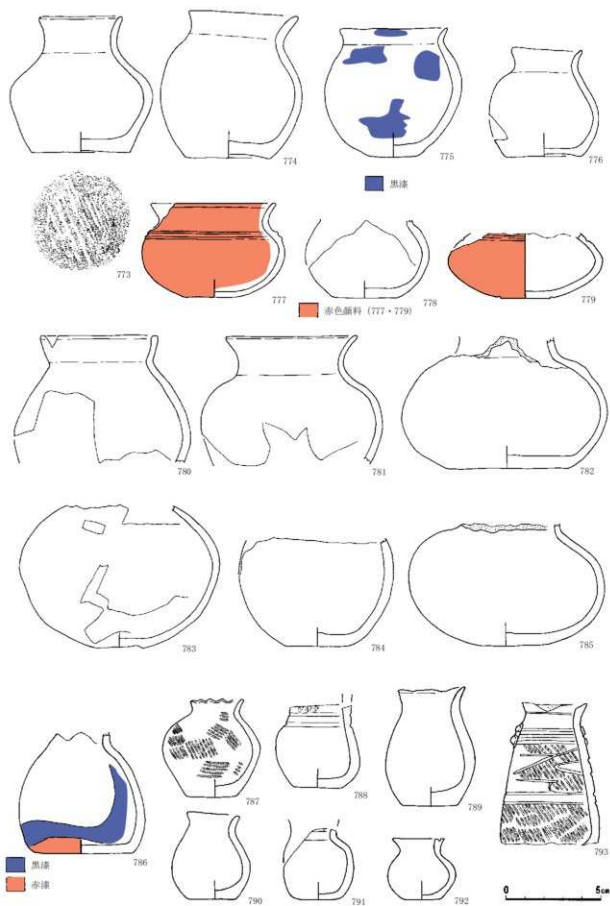


図 117 土製品 (48)

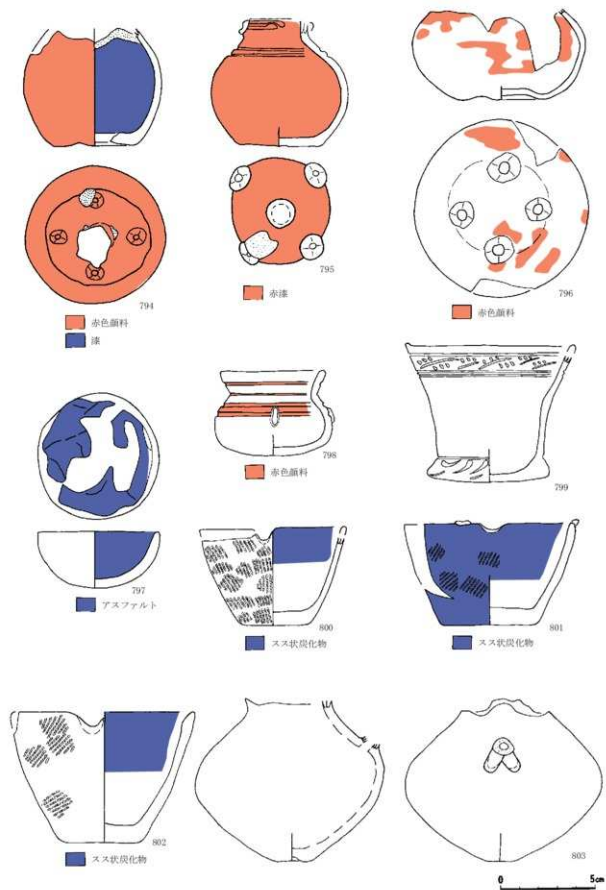


図 118 土製品 (49)

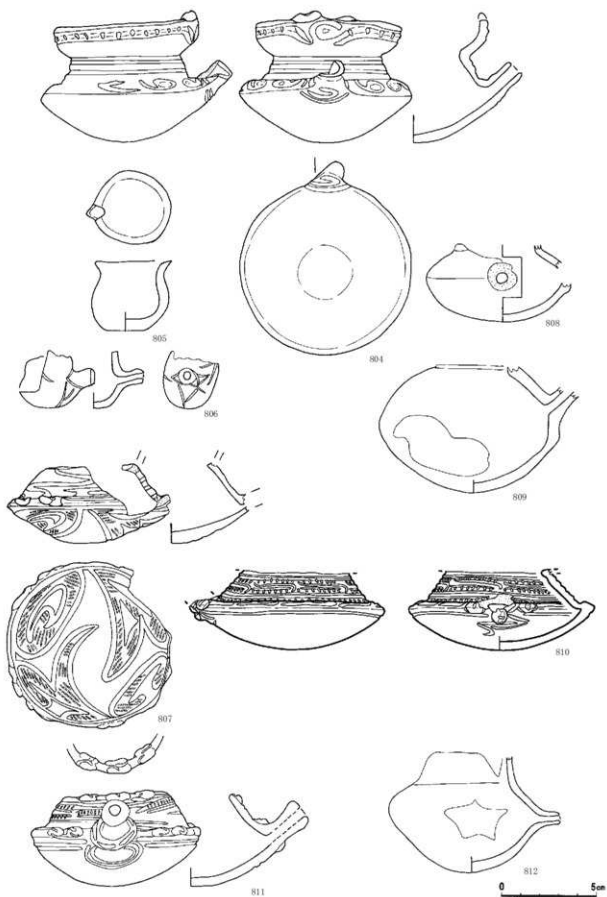


图 119 土製品 (50)

5 石製品

〔石棒類〕

石棒類は写真223から228(図120～127)に掲載した。断面形状から、石棒、石剣、石刀に分類し(後藤1986など)、判断が付かない場合は石棒類とした。

石材は粘板岩が大半である。粘板岩の中には、藍青石、点紋粘板岩や凝灰質粘板岩が見られる。また凝灰岩製の石棒類もあるが、これらは、粘板岩製に比べ、大形・厚手であり、加工も粗いといった特徴がある(写224-4など)。粘板岩製の模倣品の可能性もある。他に、軽石製(写226-7)があり、穿孔が見られ、頭頂部に放射状に沈線が施文されている。

石棒・石剣は、棒状の形態が多く、石剣には扁平形態も含まれる。棒状形態の中には、60cm近くの長さの資料や、柄尻に盲孔が穿孔されている資料もある。先端は尖頭状を呈する。写224-6、写226-8は両頭の石棒であり、写224-6は、尖頭部と胴部の境に沈線が巡る。写226-8は、頭部と胴部の境に刻みが見られる。

石刀は基本内反りか直刀である。写224-3は、石刀の断片であり、峰に沿って沈線が1条見られる。石刀の刃先には刻みが見られるものもある(写224-8)。

大形石棒類は(写265-2、写227-1,9)、粘板岩以外の石材を素材とし、全面敲打で整形している。

製作技術は、剥離、敲打、研磨が主体である。写223-12のように、先端部に赤彩の痕跡が僅かに見られるなど、赤彩された石棒類が確認されている。写227-7(未図化)は、欠損面に黒色の付着物が見られる。

再加工を示す資料も数点確認されている。写223-4は、欠損面に研磨が見られ、再加工品と推定される。写224-1は、石刀の刃先部である。刃先側に擦切痕が見られる。何かしらの転用・再加工と推定される。写224-7は、凝灰岩製で、石棒の断片に擦切整形を入れ、別の石製品に転用している。写226-4は、石棒類の再加工であり、穿孔などが見られる。図125-2は石棒の再加工品である。

接合については、石棒類は大半が欠損しているが、接合によって完形品になったものもある。捨場間、層位間接合が数点確認されている。写225-5(未図化)は、石棒先端部で、10m以上離れたもの同士が接合した。写225-6(未図化)は、石棒胴部で、10m以上離れたもの同士が接合した。写225-13は、4分割されており、柄側は西捨場、先端側は北東捨場から出土している。写227-8は、石棒であり、北捨場出土と接合した。写228-3(未図化)は、北捨場出土と接合している。写224-13は、8m近く離れた破片同士が接合した。写265-2は、大形の石棒であり、平場地区で出土したものと接合した。

石棒類は、柄頭が素文と文様をもつものがある。写223-3は、石剣であり、柄頭に沈線文が見られる。写223-11は、台形形の柄頭に「工」の字形の沈線文を持つ。写223-12は、長方形の柄頭を持ち、赤彩であり、2つの盲孔から、渦巻き状に沈線文が見られる。側面には三角形の影が見られる。胴部に沈線が2条巡る。胴部が欠損しているため、断定はできないが、柄頭の形状から(札形型)石刀の可能性もある。写224-11は、柄頭に三叉文崩れの沈線が見られる。写224-12は、柄頭に沈線と盲孔列が見られる。写224-13は、凝灰岩製の石剣で、柄頭は立方体形状で、沈線が3条巡る。写226-2(未図化)は、柄頭部の断片であり、盲孔や沈線文が見られることから、推定で(札形型)石刀の可能性もある。写226-5は、柄頭部断片であり、沈線で文様が描かれている。写226-10は、半円状の柄頭と隆帯が見られる。柄頭にはアスファルトと思われる黒色の付着物が見られる。胴部は両側面とも平坦に

なっているが、片面側は、体部長軸に沿って、石刀の峰に見られる沈線のように、沈線が1条走る。写228-8は、石刀であり、柄頭に盲孔と風車状の沈線文が施文されている。写228-9は、沈線文を持つ。

写227-9は、大形石棒であり、両端の小口面に二重の円文が見られる。

棒状の石棒・石剣類には、柄頭と刀身部の刃間に、2本の沈線で区画された内側に敲打帯を施すものが多い。中には、写227-2は、沈線間にX字の沈線文が施文されている。また先端部に沈線や、柄尻に盲孔が施されるものもある。

(高橋)

【岩版】

岩版の形態は側縁部が全体に丸みを有する楕円形と端部が平坦な方形を呈する2タイプが存在する。丸みをもつものは長楕円形が主体であるが、円形の形態を呈するものもある。方形は端部が丸みをもつ長方形タイプが主体を占める。図133-2・3は下部が広がり図134-5は下部が狭まる。

文様は渦巻文系（弧状文を含む）と非渦巻文系の文様タイプとに分かれる。渦巻文系は、表面の中心部に正中線を施文するものと施文しないものとに分かれる。正中線は端部に円形刺突を施文するもの（図130-4・6・図133-6）があり、正中線の両脇に弧状文を施文するものもある（図130-5・図131-2～4）。渦巻文は単独の渦巻文（図130-2・3・6）・C字状で末端に渦巻文（図131-4）・S字状で末端に渦巻文（図131-3・6・9）がある。弧状文は側縁部に施文（図133-4～6）する例が多い。図133-1は目部を表現しているものと思われる。なお正中線を施文するものは、左右同一文様と表裏面の文様が相違することを特徴としている。非渦巻文系は渦巻文を施文しないものであり、図129-2・4は正中線のみ施文である。多くは縦位・斜位と細状線（擦痕）を施文する例が多い。図130-1・2・4・図131-3・9・10は赤色顔料を塗布しており、図133-3は黒色付着物がみられる。図130-1・図134-1は貫通孔がみられる。

(成田)

【その他の石製品】

石冠や線刻礫など多数出土した。写真257の人の身体、横顔、足、二枚貝などを摸したものは類例が少ない。それらは報告書Ⅷの総括で他の捨場の遺物とともに記載することとして、石製円盤について述べる。写241-1～252-24・27にアスファルトの付着したもの、線刻のあるもの、石皿破片を転用したもの等を掲載した。加工の初期段階と考えられるものを含めたところ、写242-36・38、写252-13のように改めて観察し、観察表で自然礫と訂正したものがある。集合写真で写真266～277にカットごとに円1～円92として掲載したが西捨場だけで約4000点出土している。写真277の円93は、右下の剥離の少ない石製円盤（C-C'セクション5-1-r層；整理番号n3903）とその上の半分を欠失したもの（V6-25III層中；整理番号n1510）計2点を除き自然礫である。写真中央に礫に孔のある自然石を置き、その周囲に確実な自然石及び剥離があってもバルブの不明確なものも置いている。石材は石製円盤と同様であり、形状も類似している。一部は素材礫の可能性がある。

(齋藤)

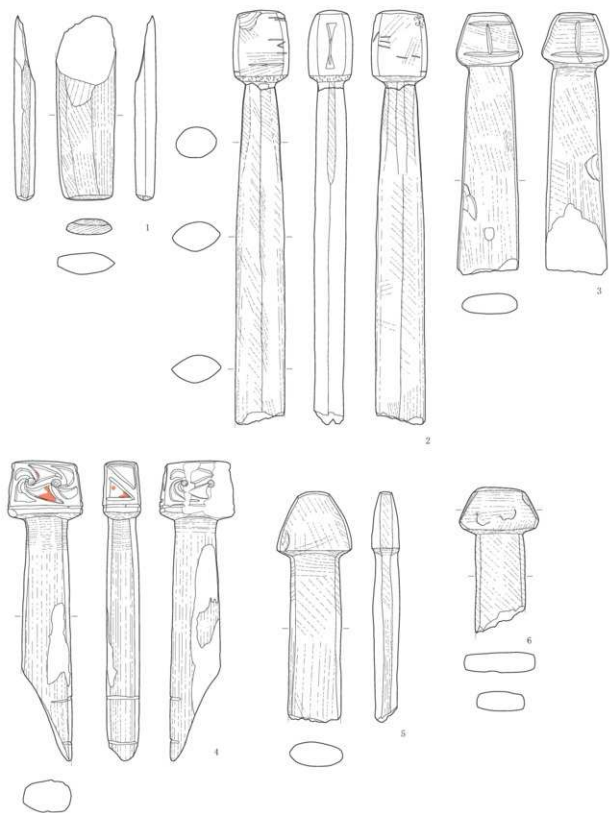


図 120 石器・石製品 (40) 石棒・石剣・石刀 (1)

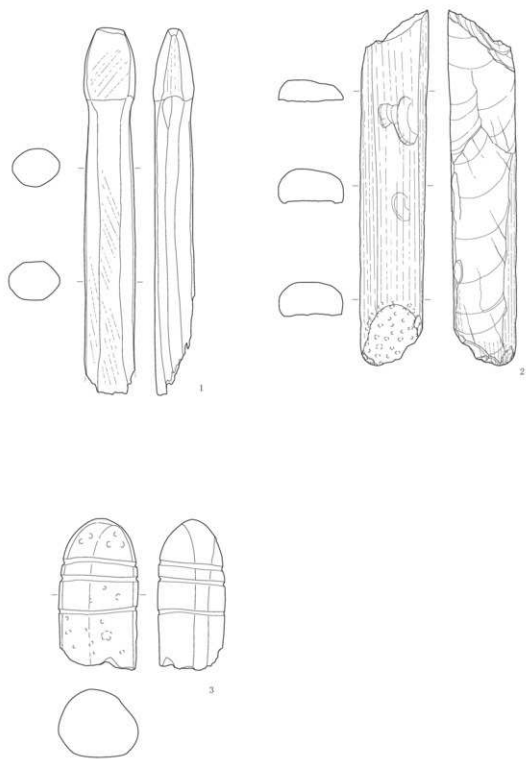
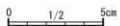


図 121 石器・石製品 (41) 石棒・石剣・石刀 (2)



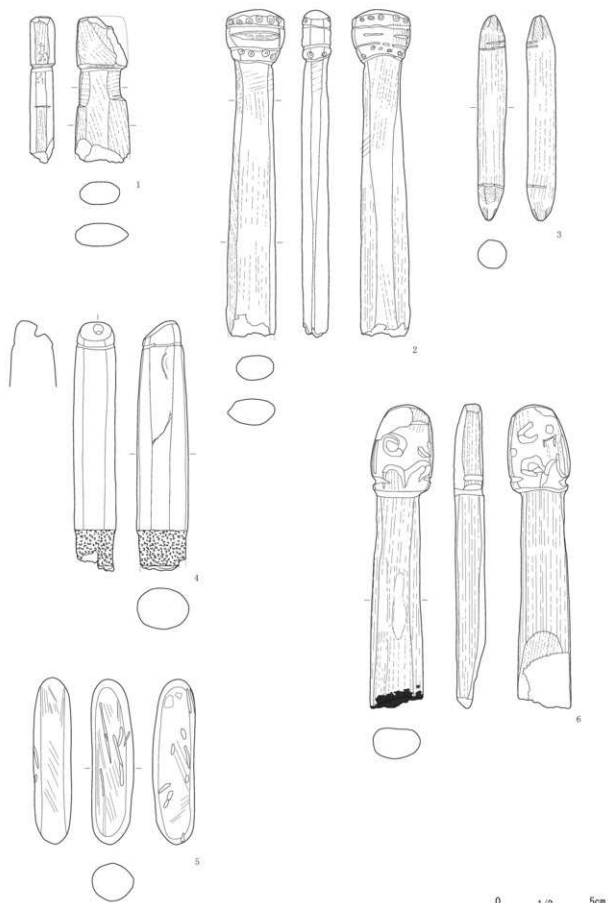


図 122 石器・石製品 (42) 石棒・石剣・石刀 (3)

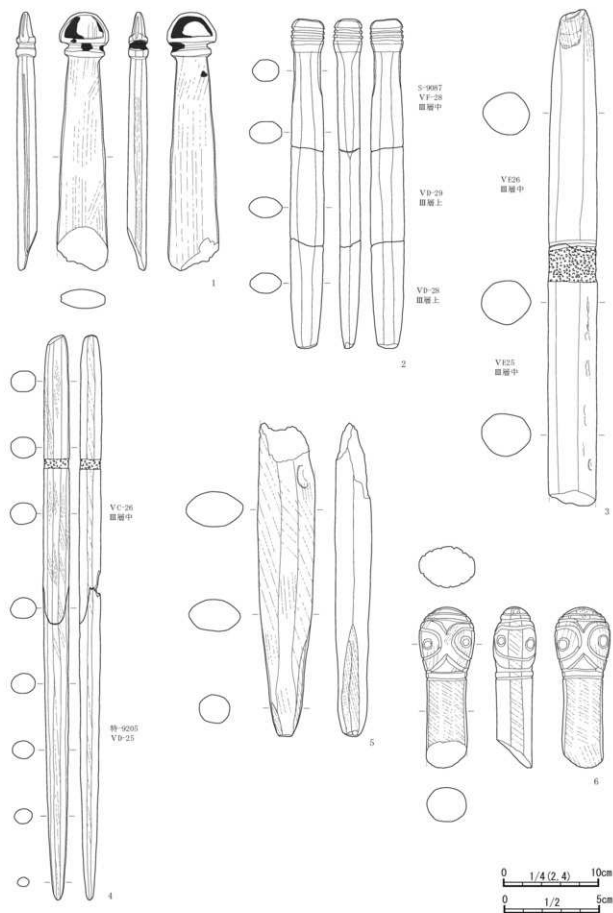


図 123 石器・石製品 (43) 石棒・石剣・石刀 (4)

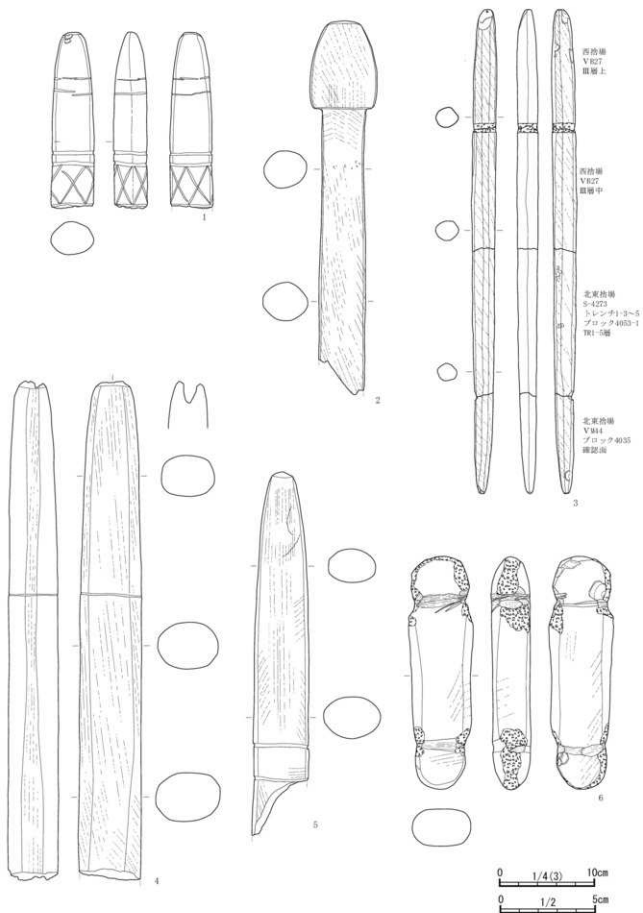


図 124 石器・石製品 (44) 石棒・石剣・石刀 (5)

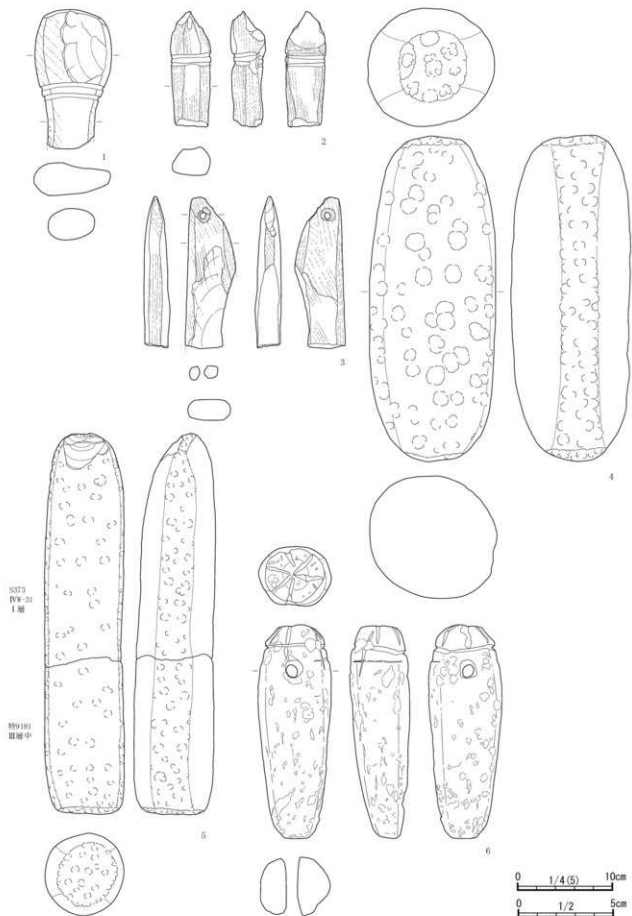


図 125 石器・石製品 (45) 石棒・石剣・石刀 (6)

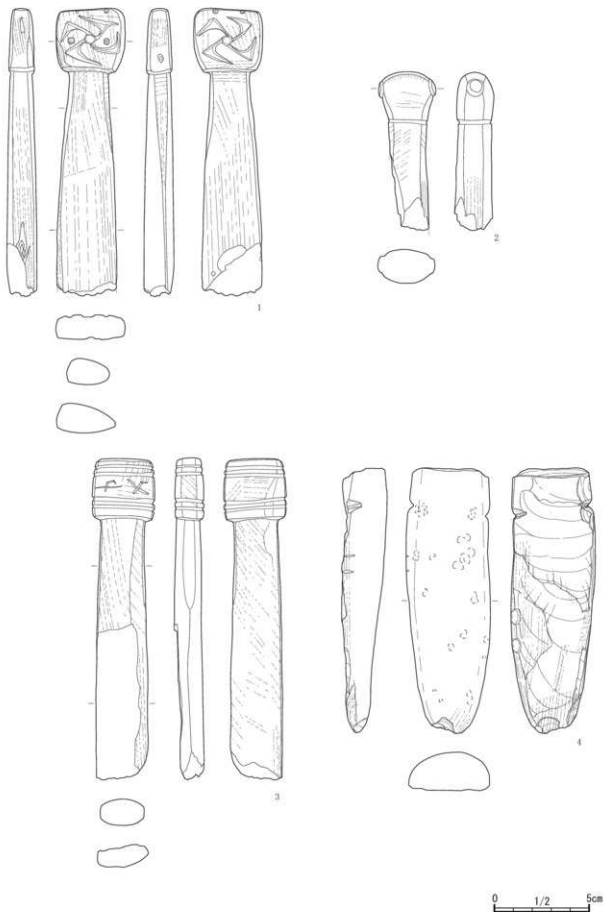


図 126 石器・石製品 (46) 石棒・石剣・石刀 (7)

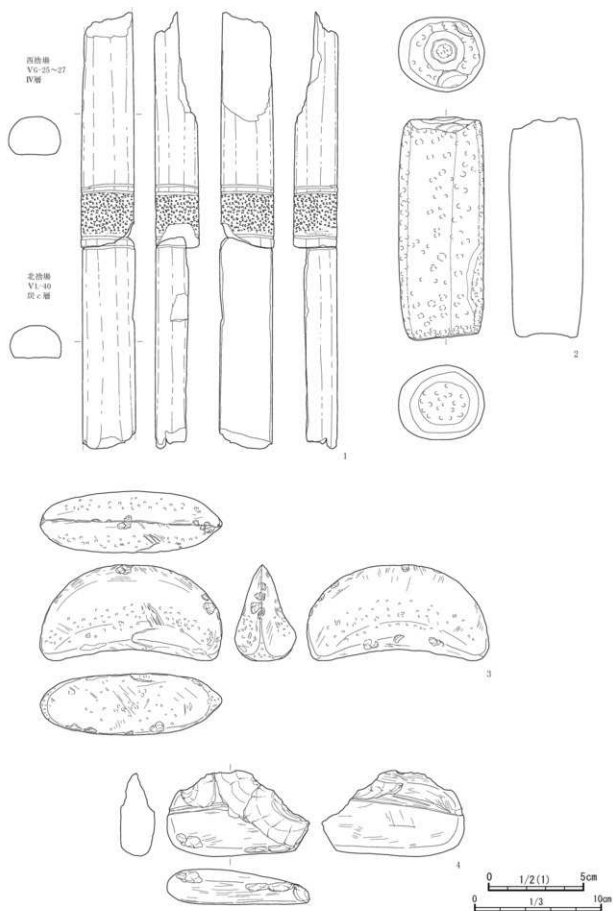


图 127 石器・石製品 (47) 石棒・石冠

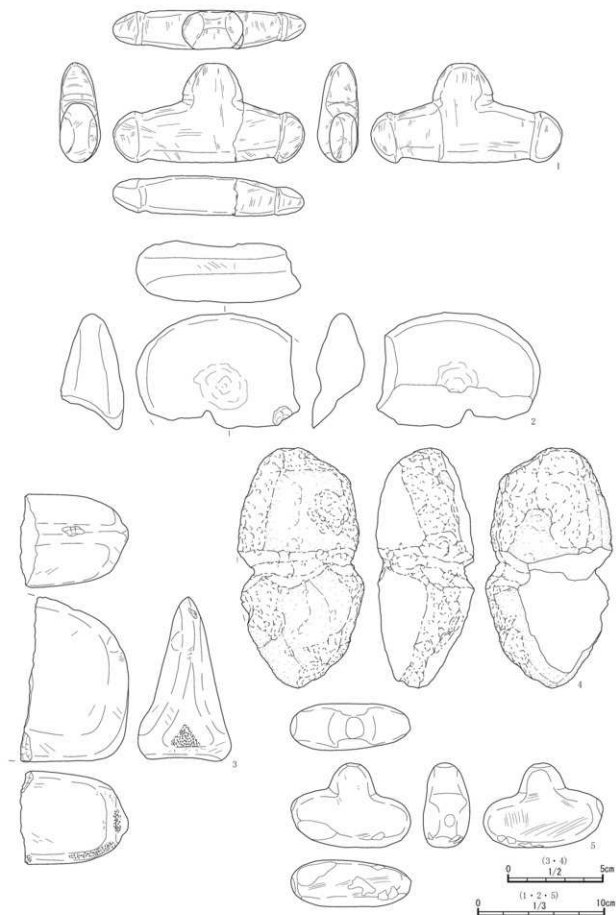


图128 石器・石製品(48)

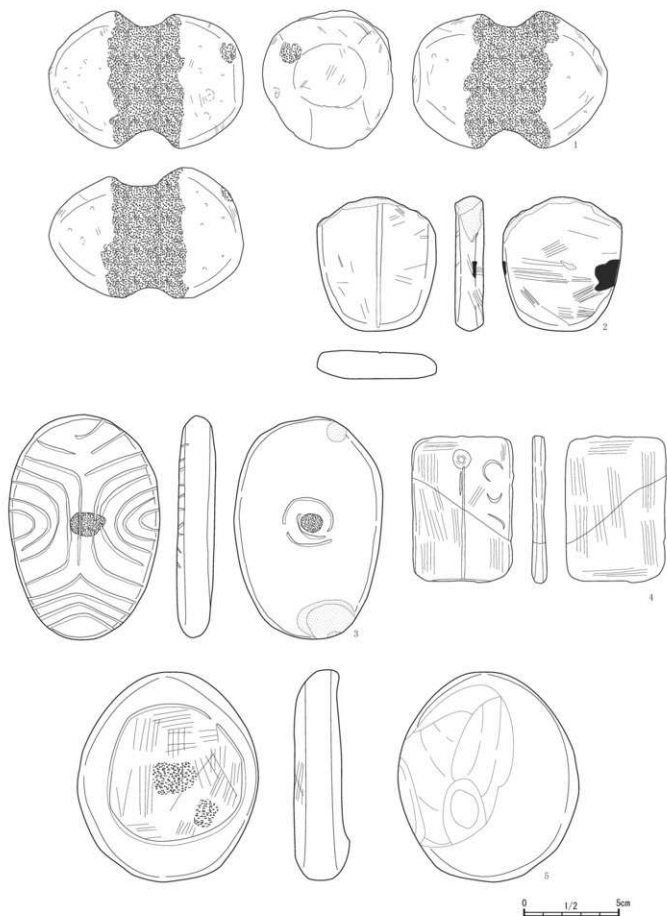


図129 石器・石製品(49)

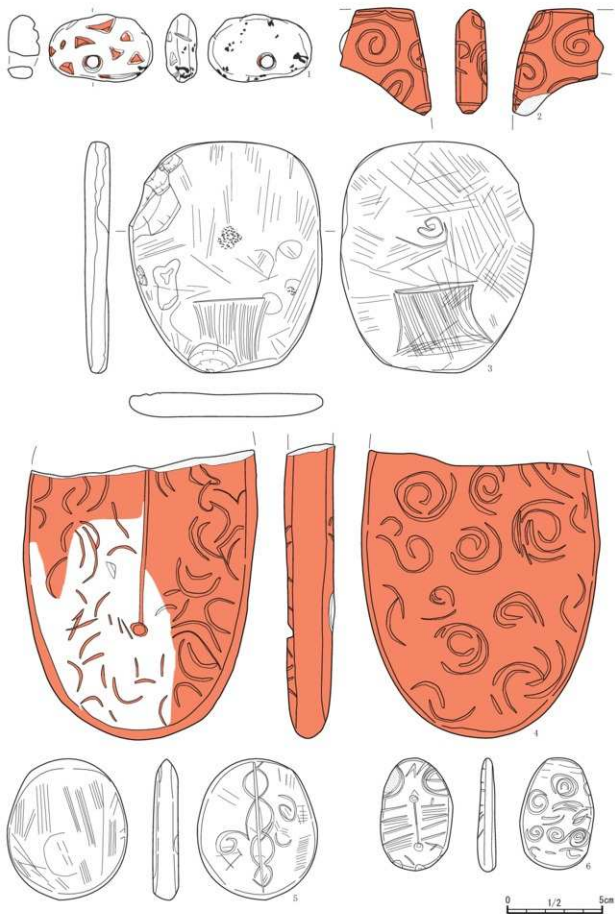


图130 石器・石製品(50)



图131 石器・石製品(51)

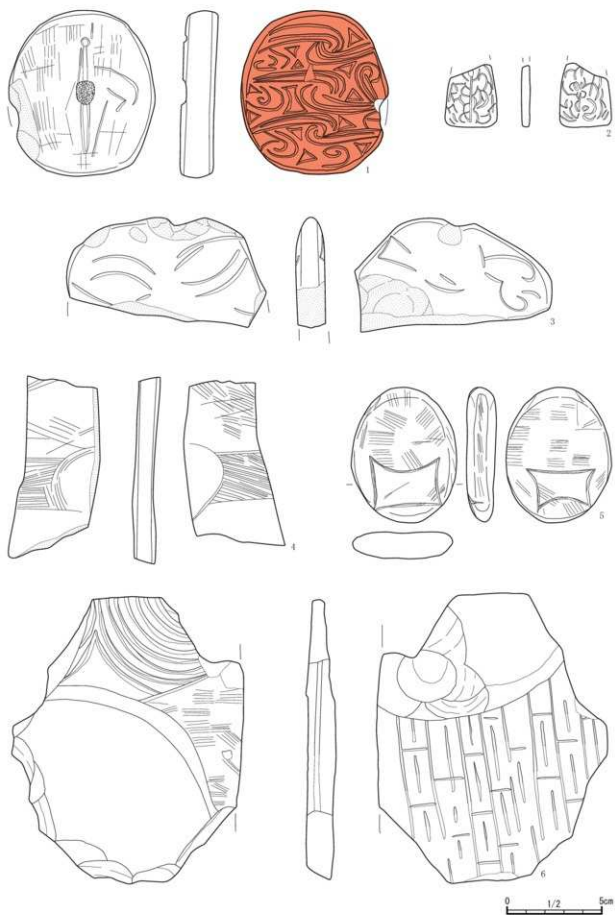


图132 石器・石製品(52)



图133 石器・石製品(53)



图134 石器・石製品(54)



图135 石器・石製品(55)

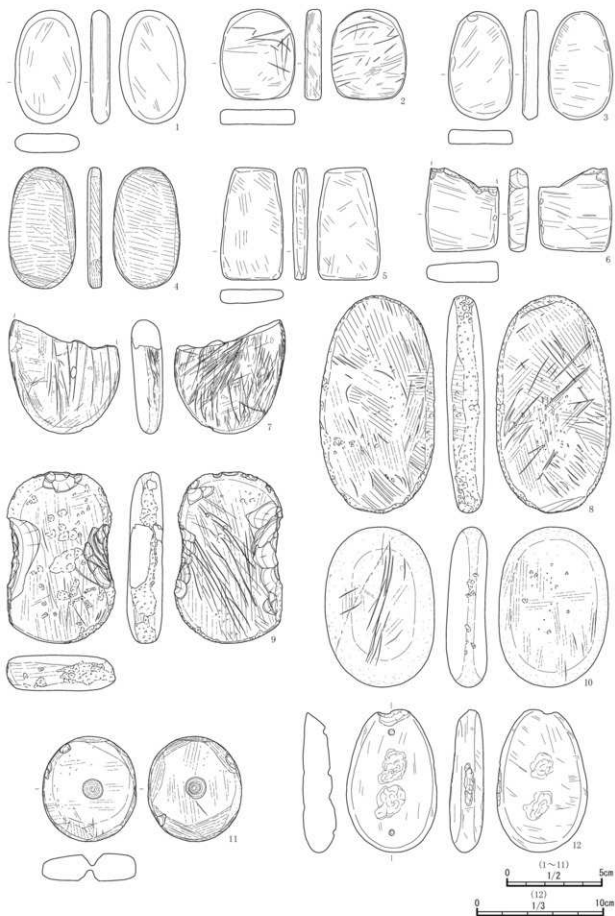


图136 石器・石製品(56)

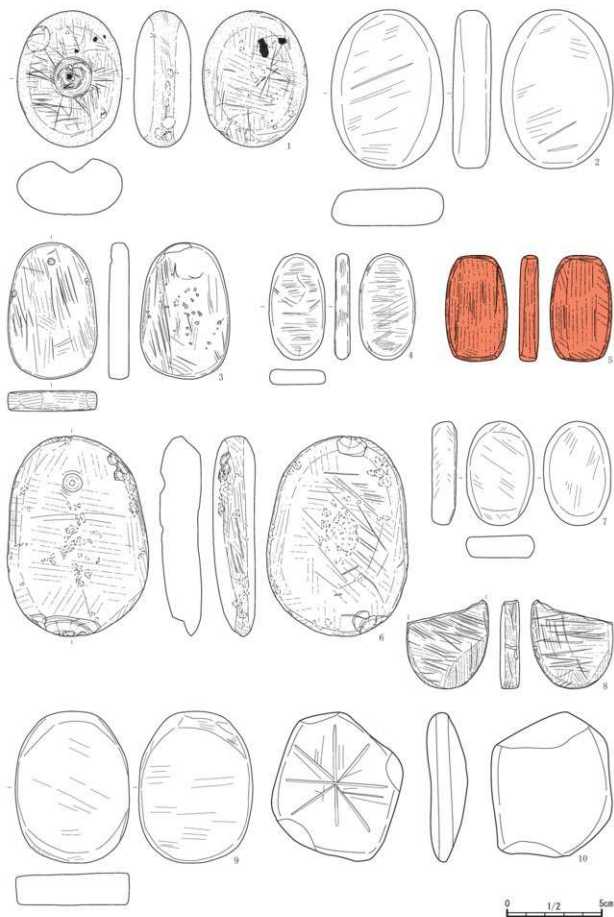


图137 石器・石製品(57)

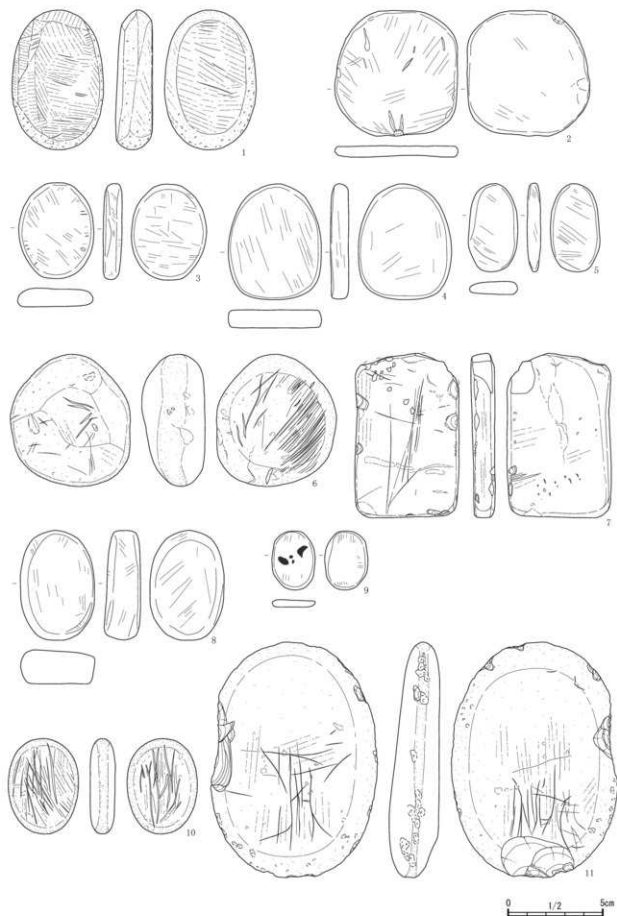


図138 石器・石製品(58)

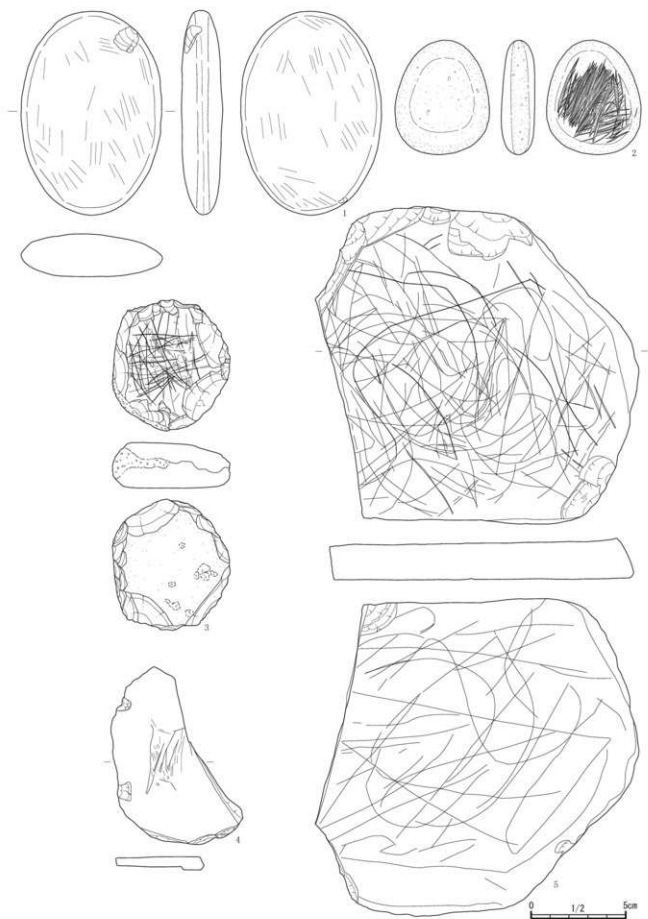


図139 石器・石製品(59)

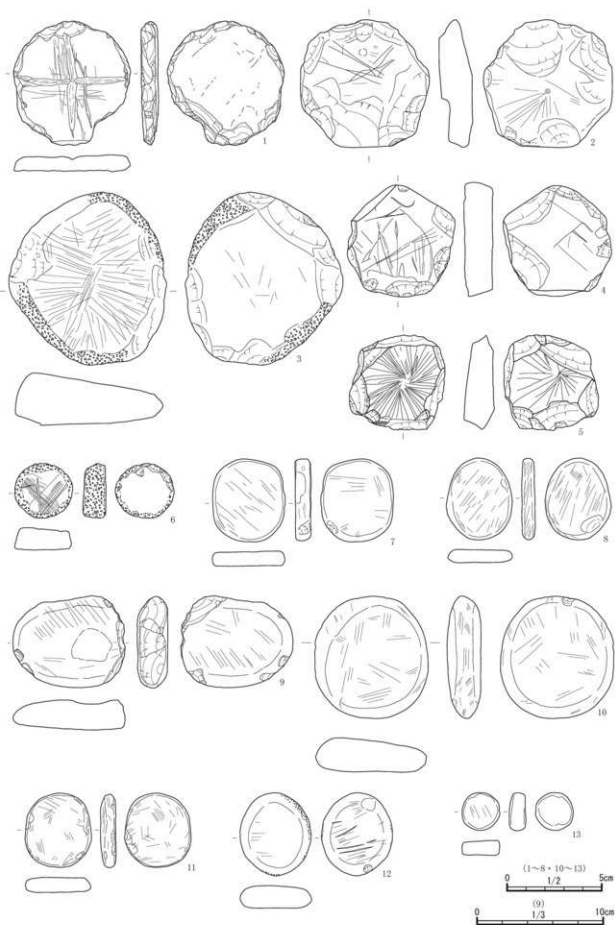


図140 石器・石製品(60)

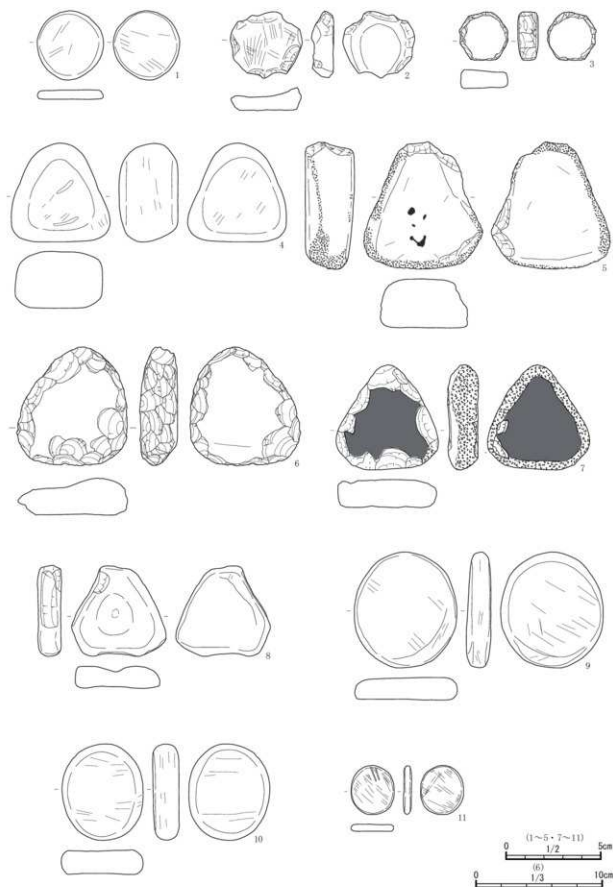


図141 石器・石製品(61)

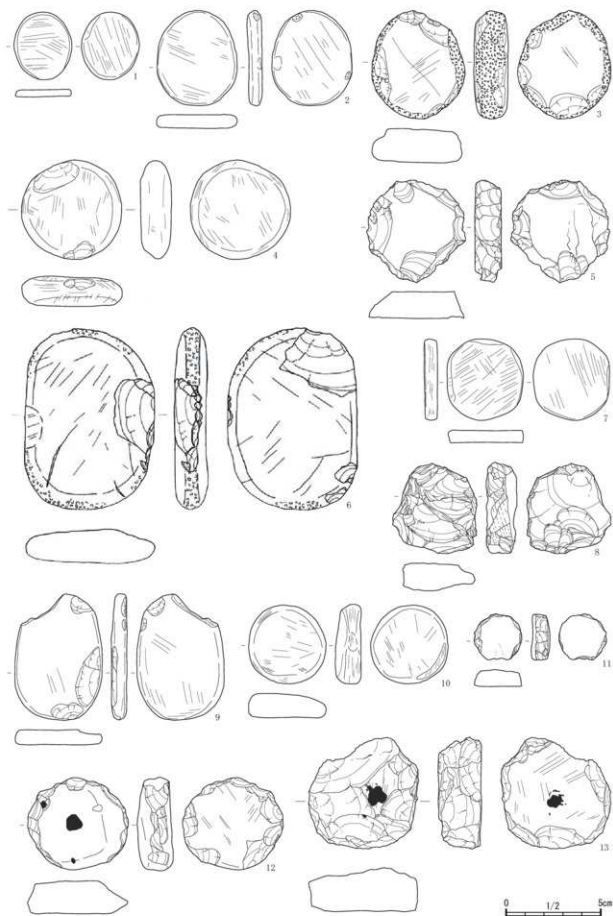


図142 石器・石製品(62)

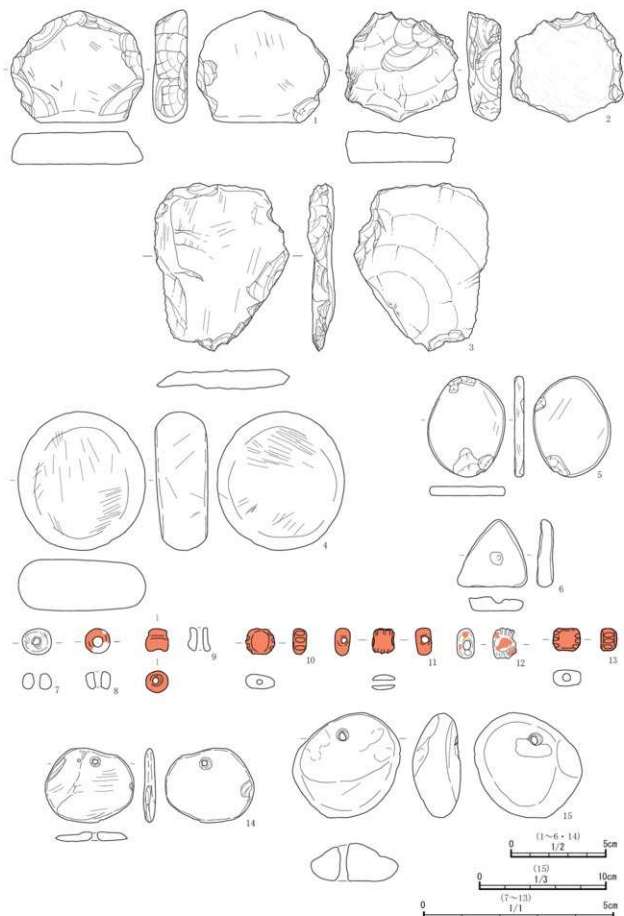


図143 石器・石製品(63)

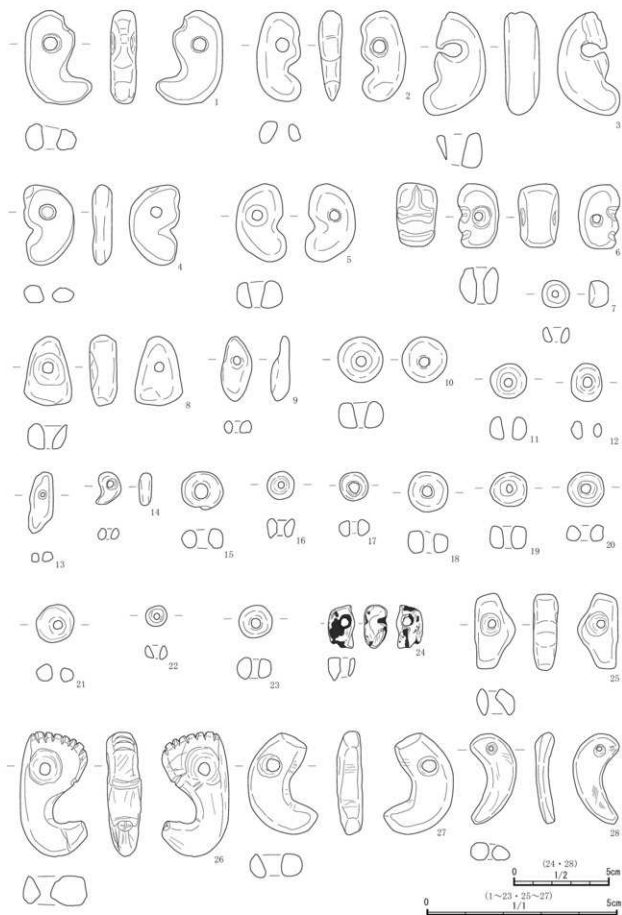


図144 石器・石製品(64)

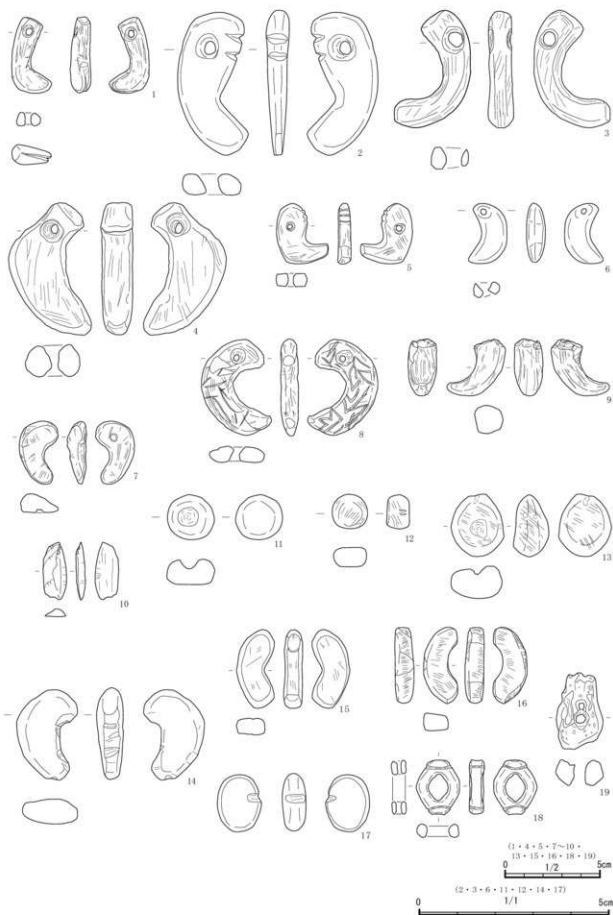


図145 石器・石製品(65)

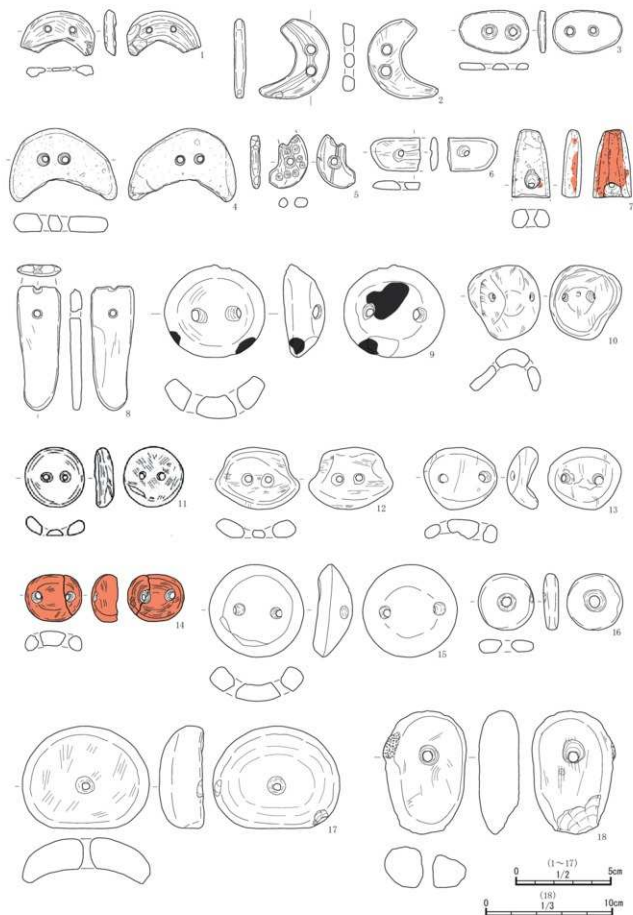


図146 石器・石製品(66)

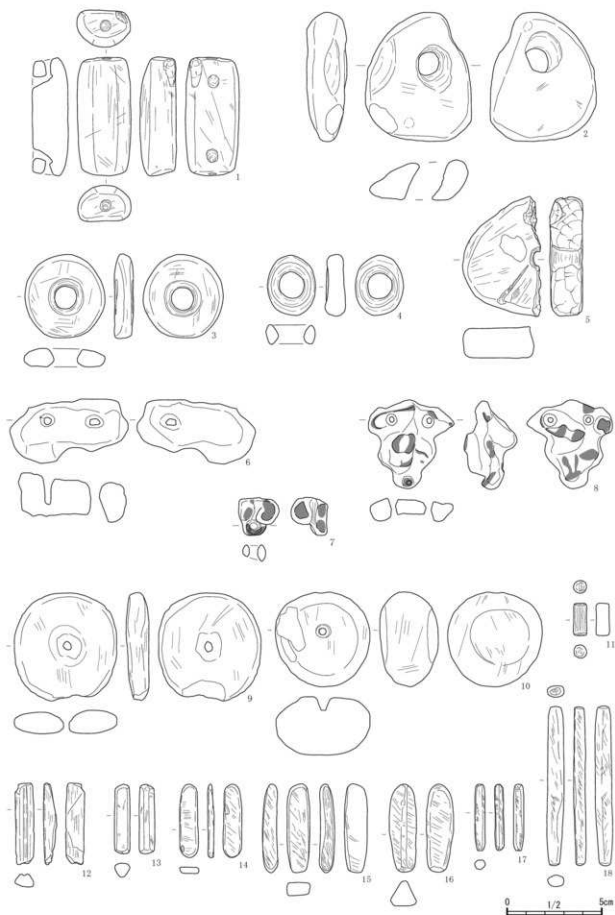


图147 石器・石製品(67)

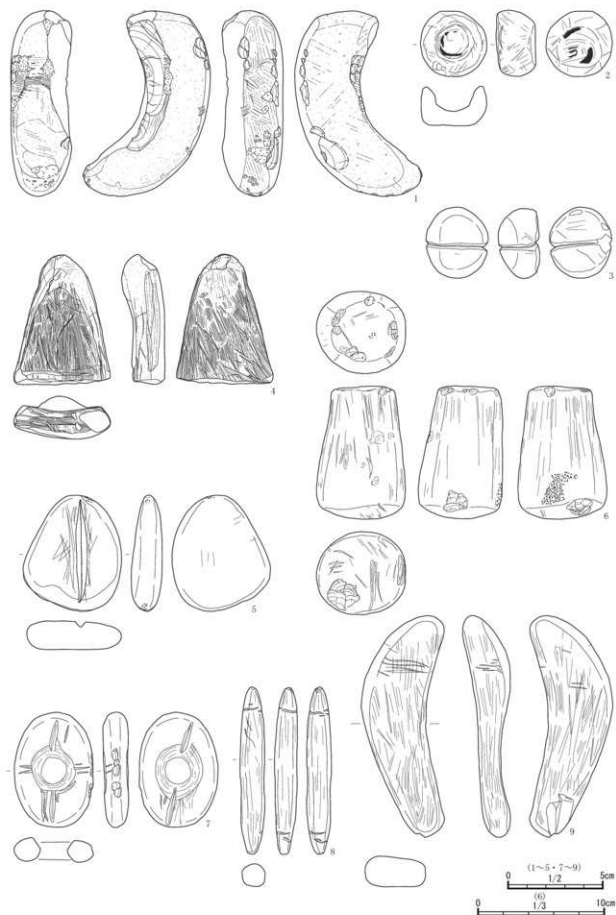


圖148 石器・石製品(68)

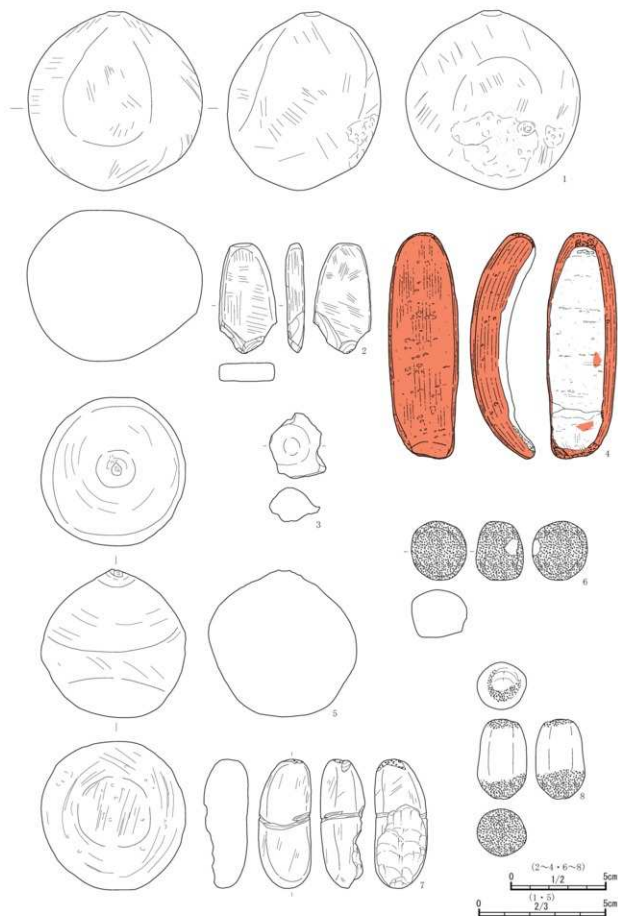


図149 石器・石製品(69)



図150 石器・石製品(70)



图151 石器・石製品(71)



图152 石器・石製品(72)

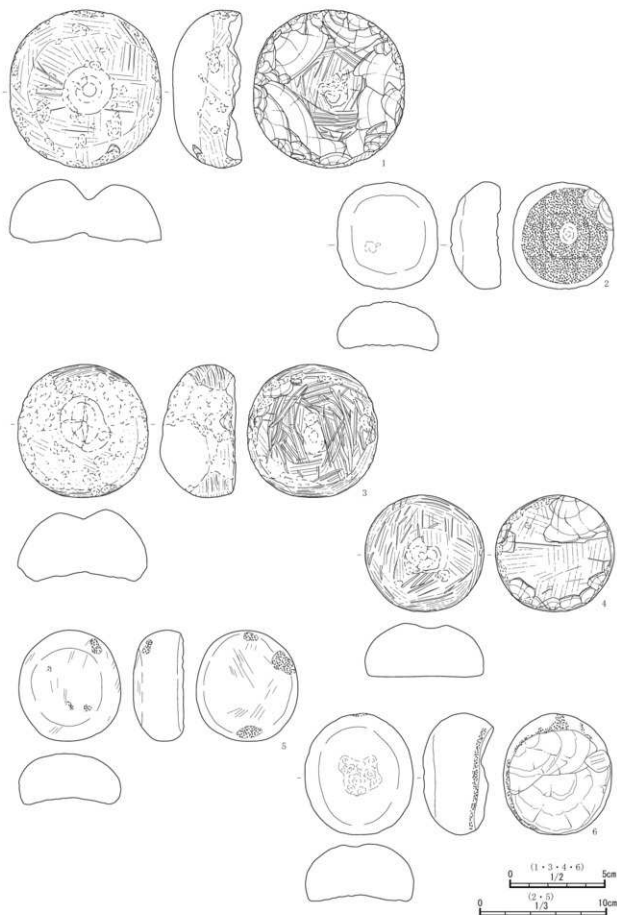


图153 石器・石製品(73)

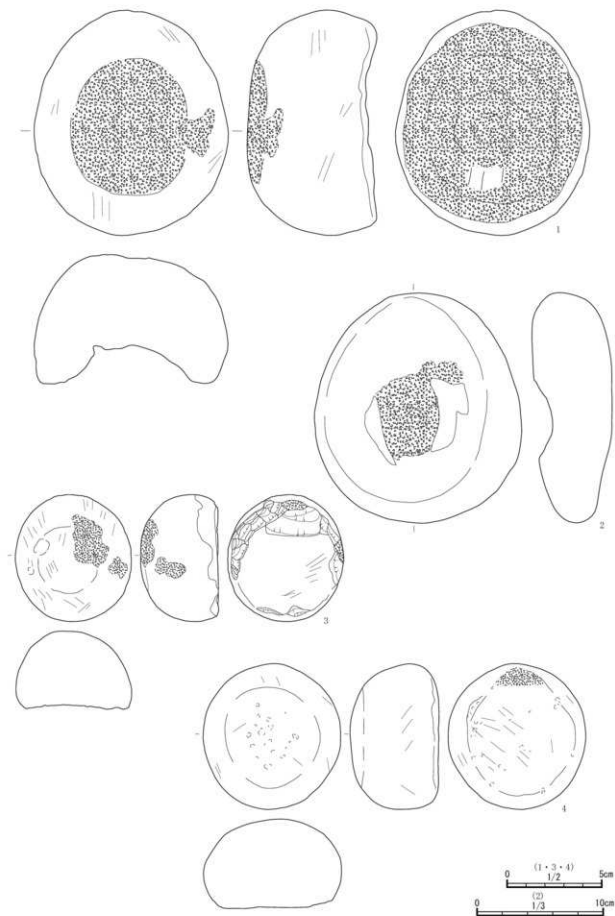


図154 石器・石製品(74)

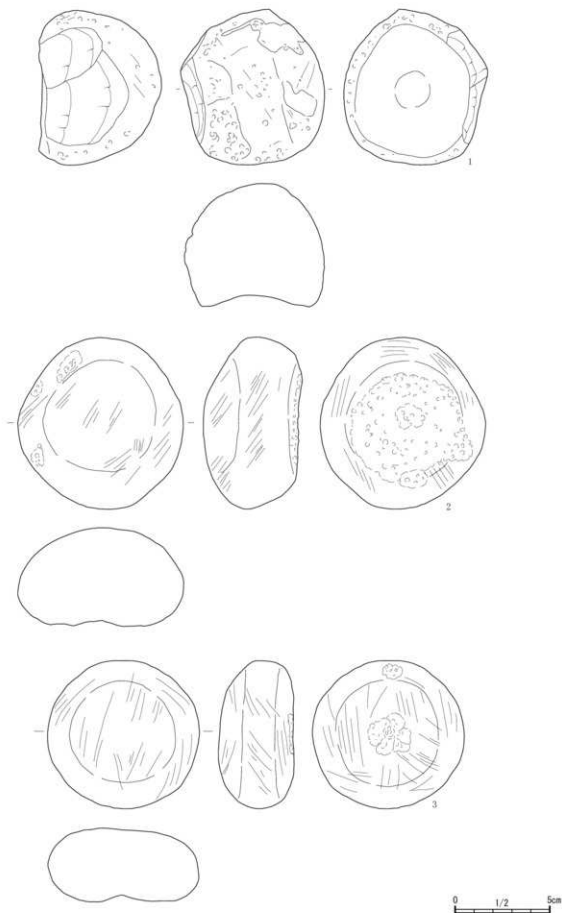


图155 石器・石製品(75)



图156 石器・石製品(76)

6 木質遺物（漆製品・木製品・編組製品・樹皮）

（1）木質遺物の出土状況

西捨場地区では、木質遺物（註1）が870点出土した。そのうち、加工痕・使用痕等が認められる人工遺物は815点である。木質遺物はVA～VG-23～28グリッドに分布する（写真60～61）。特に、西捨場地区中央部のVD-26～27グリッドに集中し、全体の約6割を占める（図157・158）。この周囲のVC-26・27グリッドでは16%、VE-26グリッドでは6%となり、分布の偏りが著しい。出土層位は、2層から5-1層ではほとんど認められず、5-2層から7層が顕著である。5-2層出土の木質遺物は全体の約35%、7層のものは約20%を占める。その下層の8層以下では激減する。木質遺物が多量に出土した5-2層ではVD-26～27グリッド、7層ではVC-25～26・VD-25～27・VE-26グリッドに集中する傾向がある。

（註1）本遺跡出土木のなかには、人による関与・利用が不明なものもある。そのため、本報告書では、山田昌久氏に従い、人工遺物である製品のみならず、非人工遺物を含めた総称として「木質遺物」という用語を使用する（山田昌久2012『木質遺物研究史』伊東隆夫・山田昌久（編）『木の考古学』海青社）。

（2）木質遺物の取り上げと整理方法

木質遺物は、発掘調査時にグリッド毎に「W-番号」あるいは「特-番号」を付け、出土地点の座標・層位を計測・記録して取り上げた。グリッド一括で取り上げた木質遺物は、「W-X」とし、出土地点のグリッド・層位のみを記録した。発掘調査で取り上げた木質遺物は、現場で洗浄し、加工痕の有無を確認したうえで、人為的な加工の痕跡が認められる「人工物」と、それが確認できない「自然木」に大別した。洗浄段階で自然木と判断したものについては、基本的には現場で自然に戻した。時間的制約から現場で洗浄できなかったものについては、当センターに持ち帰ってから洗浄し、加工痕の有無を確認し、人工物と自然物に区分した。その上で、整理作業時に新たに整理番号を付して台帳を作成した。整理番号については、漆の有無により大別し、木製品・加工木・樹皮は「木製品-番号」、漆塗り堅櫛は「櫛-番号」、漆塗り腕輪は「腕輪-番号」、その他の漆製品は「漆製品-番号」とした。整理作業の過程で、製品名の変更等により名称変更あるいは欠番としたものもある。また、土器・石器等の整理中あるいは土壌洗浄中に確認された木質遺物については、その都度整理番号を付した。台帳作成後は、以下の基準により、報告書掲載の可否を判断した。

Aランク：製品・加工木のうち、状態がよいもの、または類例等が少ないもの。

Bランク：製品・加工木のうち、状態はよいが、本遺跡で類例が一定程度あるもの。

Cランク：製品・加工木のうち、小片・断片など状態が悪いもの。

原則として、Aランクについては報告書に実測図・写真を掲載することとした。Bランクについては観察表（樹種同定結果含む）を掲載することとした。なお、製品・樹皮製品については、遺存状態がよいものは実測図及び写真を掲載したが、実測に耐えられないものや本遺跡での出土例が多いものについては、図化せずに写真のみを掲載したものもある。また、漆製品（漆塗膜のみのものを含む）及び樹皮・樹皮製品については、その重要性を考慮し、出土資料の全てを観察表として報告することとした。

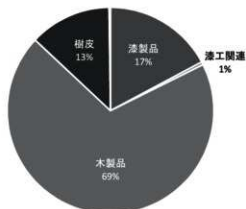


図157 西捨場地区出土木質遺物構成

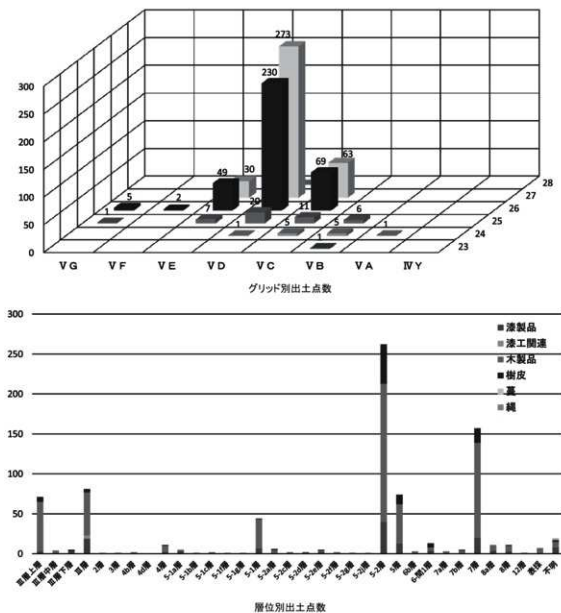


図158 西捨場地区出土木質遺物グリッド別・層別別出土点数

西捨場地区出土木質遺物出土点数

グリッド別出土点数

グリッド名	漆製品	漆工関連	木製品	樹皮	葉	縄	合計
VA-24	0	0	1	0	0	0	1
VB-23	1	0	0	0	0	0	1
VB-24	0	0	5	0	0	0	5
VB-25	2	0	3	1	0	0	6
VC-24	1	0	4	0	0	0	5
VC-25	1	0	10	0	0	0	11
VC-26	9	0	53	7	0	0	69
VC-27	12	2	39	9	0	1	63
VB-24	1	0	0	0	0	0	1
VB-25	1	0	16	3	0	0	20
VB-26	37	0	165	27	1	0	230
VB-27	44	0	181	48	0	0	273
VB-26・VD-27	1	0	0	0	0	0	1
VB-28	1	0	0	0	0	0	1
VE-25	0	0	5	2	0	0	7
VE-26	11	0	35	3	0	0	49
VE-27	5	1	22	2	0	0	30
VF-26	1	0	0	1	0	0	2
VG-25	1	0	0	0	0	0	1
VG-26	2	1	2	0	0	0	5
VC-D-27	0	0	1	0	0	0	1
VB-G-26/VE-27	1	0	0	0	0	0	1
VB-G-26	0	0	0	0	0	0	0
表戻	0	0	9	0	0	0	9
不明	8	0	14	1	0	0	23
合計	140	4	565	104	1	1	815

層別別出土点数

層位名	漆製品	漆工関連	木製品	樹皮	葉	縄	合計
Ⅲ層上層	3	0	62	6	0	0	71
Ⅲ層中層	1	0	3	0	0	0	4
Ⅲ層下層	2	0	1	2	0	0	5
Ⅱ層	19	4	54	4	0	0	81
3層	0	0	1	0	0	0	1
4層	1	0	0	0	0	0	1
5層	0	0	2	0	0	0	2
6層	0	0	0	0	0	0	0
7層	2	0	8	1	0	0	11
5-1a層	3	0	2	0	0	0	5
5-1b層	1	0	0	0	0	0	1
5-1c層	1	0	1	0	0	0	2
5-1f層	0	0	1	0	0	0	1
5-1g層	0	0	1	0	0	0	1
5-1層	7	0	36	1	0	0	44
5-2a層	0	0	5	1	0	0	6
5-2b層	0	0	2	0	0	0	2
5-2c層	2	0	0	0	0	0	2
5-2e層	2	0	2	1	0	0	5
5-2f層	1	0	1	0	0	0	2
5-2g層	1	0	0	0	0	0	1
5-2層	0	0	1	0	0	0	1
5-2層	40	0	173	49	0	0	262
5層	13	0	49	12	0	0	74
6a層	0	0	3	0	0	0	3
6-Ⅰ層	4	0	4	5	0	0	13
7a層	0	0	3	0	0	0	3
7b層	1	0	3	1	0	0	5
7層	20	0	119	18	0	0	157
8a層	4	0	7	0	0	0	11
8層	3	0	7	0	0	0	11
12層	1	0	0	0	0	0	1
表戻	0	0	7	0	0	0	7
不明	8	0	7	2	1	1	19
合計	140	4	565	104	1	1	815

※複数数の層にまたがる場合は、下層に収録された。

グリッド別・層別別出土点数

グリッド名	Ⅲ層上層	Ⅲ層中層	Ⅲ層下層	Ⅱ層	3層	4層	5層	6層	7層	5-1層	5-2層	6層	7層	8層	12層	表戻	不明	合計
VA-24	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
VB-23	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
VB-24	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
VB-25	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
VC-24	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
VC-25	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11
VC-26	16	1	0	18	0	0	0	1	0	0	0	0	1	3	0	1	1	77
VC-27	19	0	0	18	0	2	0	2	9	1	1	1	0	1	2	0	4	66
VB-24	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
VB-25	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	24
VB-26	19	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	86	236
VB-27	14	0	0	5	0	1	0	0	10	3	0	1	0	0	0	0	17	29
VB-26・VD-27	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
VB-28	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
VE-25	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9
VE-26	1	1	0	18	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	32
VE-27	1	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	0	0	0	32
VF-26	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
VG-25	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
VG-26	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
VC-D-27	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
VB-G-26/VE-27	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
VB-G-26	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
表戻	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9
不明	0	1	0	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	25
合計	74	4	5	86	1	1	2	0	11	5	1	2	1	1	50	6	2	578

※自然木を含む数値。

(3) 木質遺物の分類と器種名称

木質遺物は樹木を伐採し、加工を行って製品とする「製作段階」と、それを使用し廃棄されるまでの「使用段階」に大きく分けられる。製作段階には、伐採後に用途・機能に応じて、切斷・断ち割り・削り・磨き・焦がしなどの加工を経て製品化される。製品のなかには漆が塗布されるものもある。また、未製品のまま廃棄されるものもある。本遺跡では製品のみならず多量の割材が出土していることから、当遺跡内で木製品の製作・加工が行われていたことを示唆する。製作段階に生じた割材(残材)は燃えさしなどとして再利用したものもある。さらには、製品・加工木のなかには、使用段階を経て、別な用途のものに転用された後に、廃棄されたものもある。

本遺跡出土の木質遺物は、漆製品、木製品、樹皮、樹皮製品、自然木に大別できる(大分類)。本報告では、形状及び加工方法等に基づいて製品・加工木に分類した。製品は、分割・ケズリといった人工的な加工痕あるいは製品としての特徴的な加工が認められるものである。一方、加工木は、加工の痕跡が確認できるもの、あるいは製品と判断できる特徴的な加工が認められないもの(残材を含む)とした。木取りは、丸木・半割材・分割材・棒材・切斷材・残材等に分けられる。

また、用途によって、工具・服飾具・容器・構造部材(建築材・施設材)・部材・用途不明品・樹皮・繊維に細分した(中分類)。これらはさらに形態・使用方法等によって細分できる(小分類)。機能・用途を特定できないものについては、形状と加工方法を基準とした名称を与えた。また、製品・加工木のなかには、本来の機能を終えた後、別な製品あるいは構造部材等に転用されたと推定されるものも少なからず存在するが、原則として転用前の名称を用いることとした。遺物観察表に記した法量の計測箇所については図159に掲載した。

(4) 自然科学分析・遺物観察表について

本遺跡の樹木利用や漆製品等の製作技術を解明することを目的として、樹種同定・漆塗膜分析を外部に委託した。分析結果のうち、樹種同定結果は報告書VIII第3章、漆塗膜構造分析結果は報告書VIII第8章第3節を参照されたい。これらの分析結果一覧表に掲載されている木質遺物の種類・器種名称は依頼時のものであり、本書掲載の観察表と一部相違がある点に留意いただきたい。

また、樹種同定は複数の業者・分析者に依頼しているため、観察表の樹種同定分析番号の欄には試料番号の前に分析機関・分析者の略称等を記した。すなわち、AOMは鈴木三男氏ほか(報告書VIII第3章第1節参照)、YBLは株式会社吉田生物研究所(報告書VIII第3章第4節参照)、PLDはパレオラボ株式会社(報告書VIII第3章第5節参照)である。また、備考欄に記した塗膜分析番号は報告書VIII第6章第4節の分析番号、放射性炭素年代測定試料番号は報告書第5章第6節の番号と対応する。

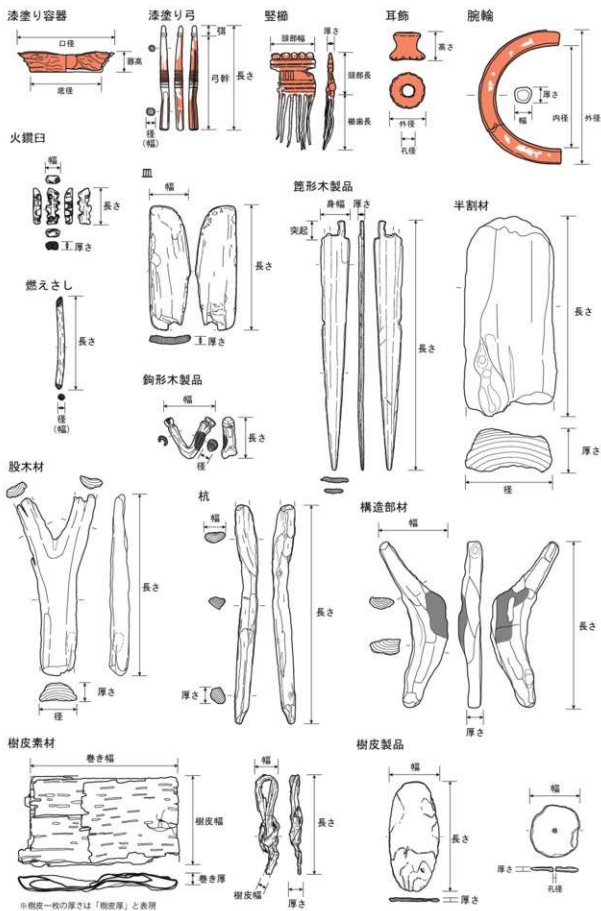


図 159 木質遺物の部位名称と計測箇所(縮尺不同)

(5) 漆製品

漆製品は容器、工具(弓)、服飾具(耳飾り、櫛、腕輪など)が出土している。ここでは、漆工関連遺物と推定される漆漉し布も含めて記述する(図160~163、表6、写真62~65、278~283)。

容器(図160、写真62・278)

【木胎漆器】2点出土した。写278-1は一木を削り出して成形した浅鉢である。平底で、外底面には雲形文が認められる。樹種はトチノキである。漆塗膜構造分析では、漆に木炭粉を混和した下地が認められ、その上に赤色漆2層塗られていることが確認されている(報告書Ⅱ第8章参照)。赤色顔料は、いずれも非パイプ状ベンガラであり、朱の混和は認められなかった。

【藍胎漆器】細く割った草木や竹類を籠状に編み、漆で塗り固めた容器である。容器の内外面には赤色漆が塗られている。器形がわかるものが3点出土したが、漆塗膜のみで判然としにくいものが多い。写278-2は鉢形を呈した容器である。口縁部は欠損している。X線写真から幅0.6~0.7mmの細い素地が底部から口縁部に向かって放射状に広がる様子が観察できる。素材は笹類(茎)である。漆塗膜断面の構造分析では、漆に木炭粉を混和した下地が認められ、内面は下層から透明漆1層と赤色漆3層が重ねて塗られ、最上層が朱、下2層がベンガラであることが判明している。写278-3は皿形を呈する容器である。底面中央部は環状に漆が剥けているため、高台のようなものが存在した可能性もある。編み方はゴザ目編みと推定される。口縁端部には別の材を一周させている。素材はつる性植物で、アオツヅラフジ属の可能性が指摘されている。漆塗膜断面の構造分析では、漆に木炭粉を混和した下地が認められるが、内面は下層から透明漆1層と赤色漆1層が重ねて塗られ、外面は透明漆と赤色漆の上に透明漆が2層塗られたことが判明している。赤色顔料は非パイプ状ベンガラであり、蛍光X線分析でもFe(鉄)が検出され、Hg(水銀)は検出されなかった。写278-4は底部・体部破片、写278-5・8は口縁部破片である。いずれも細い素地が認められる。漆塗膜断面の構造分析では、写278-6・写278-7は透明漆1層と赤色漆1層が重ねて塗られたもの、写278-9~11は微量の赤色顔料が混じった漆の上に赤色漆が1層塗られたものである。いずれの赤色顔料もベンガラであることが判明している。

工具(図160、写真62・279)

【弓】2点出土した。写279-1はVD-27グリッド、5-2層から出土した。残存長21.9cm、直径1.5~1.8cmの芯持丸木である。表面は削り調整された後に、赤色漆が塗られている。弦をかける弾に隆帯がめぐり、弓本体である弓幹には6条の横方向の溝からなる裝飾帯があり、幅2~4mmの樹皮が認められる。弓幹には縦方向の桶状溝が切れ、それと対置する面の下部は削り加工されている。樹種は弓本体がカバノキ属、樹皮部分がヤマザクラかカバの樹皮と同定されている。漆塗膜分析の結果、下地は認められず、黒色部分には透明漆が1層塗られ、その上に赤色漆が1層塗布されていることが判明している。赤色顔料はベンガラである。写279-2はVD-26グリッド、5層出土の弓で、塗膜のみが確認された。残存長53.5cm、残存幅2.3cmで、端部には弓弭と思われる有頭状の突起を確認できる。漆塗膜分析の結果、透明漆が1層・赤色漆が1層塗られ、赤色顔料はベンガラであることが判明している。

服飾具 (図160～163、写真62～65・279～282)

【耳飾り】2点出土した。断面が白形を呈し、貫通孔のない内実のものと、中央に貫通孔を伴うものがある。いずれも外面に赤色漆が塗られている。写279-3は孔を持たないもので、半分欠損し、塗膜のみが残存する。西捨場地区で類似する土製品(写210-177～180)が出土している。写279-4は中央に貫通孔のあるものであり、片方の側面には細かな刻み目が連続して施される。八戸市是川中居遺跡(八戸市教育委員会2012)でも同形態の漆塗り耳飾りが出土している。これと類似する赤色顔料を施した土製耳飾りが報告書Ⅰ範囲(図19-4)・北捨場(VI-写115-47)・西捨場(写210-174)・北東捨場(V-図98-15)で出土している。

【有孔環状木製品】2点出土した(写279-5,6)。いずれも平面形が方形状あるいは楕円形状を呈し、長軸方向と中央部の2箇所に孔をもち、開口部が肥厚する。外面には赤漆が塗られている。樹種はニシキギ属である。このような製品は、骨角製や土製・石製のものが多く、木製のものはほとんどない。本遺跡でも西捨場地区から骨角製(図186-11・12)・土製(写210-209)・石製(写256-11)の有孔環状製品が出土している。土製の有孔環状製品は、平面形が方形状あるいは楕円形状を呈するものが晩期の弘前市薬師遺跡や平川市八幡崎遺跡、田子町野面平遺跡などで認められる。

【帯状製品】5点出土した。幅1.0～2.0cm、厚さ0.2～0.5cm程度で帯状に加工したものである(写279-7～11)。表裏面に赤漆が塗られている。環状を呈し、腕輪状になるものと思われる。写279-9の樹種はニシキギ属と同定されている。

【竪櫛】38点出土した。いずれも複数の横架材と櫛歯材を交差させて結束した結歯式の竪櫛である。素地の木胎を刻み込んで製作する刻歯式竪櫛は出土していない。頭部は台形状あるいは半円形状を呈する。出土した櫛のすべてに赤漆が塗られているが、手擦れなどによって赤色漆が剥がれ、下地が一部みえるものもある。櫛歯については、写281-4・5以外は尖頭棒状の歯が残存しないが、歯の存在を示す凹形あるいは楕円形の凹みが残る。櫛歯は10～12本前後である。本遺跡出土の櫛は、頭部の形態や透かし文様の有無によって、以下のように細分できる。

A類：頭部が台形状を呈し、透かしの文様のあるもの。

A-1：頭部が台形状を呈し、上端に三角形の突起を一對もつ。突起部に三角形の透かしが2箇所、頭部半ばに三角形あるいは半月状の透かしが7箇所ある。透かしは左右対称に配置されている。櫛歯は12本前後となる。写280-1が該当する。写280-1は頭部幅9.3cm、高さ5.8cmの台形状を呈する。頭部上端及び中半に三角形や半月状の透かしを左右対称に配置し、下半には櫛歯の結束に伴うものと推定される隆起状の高まりが2条認められる。X線透過撮影画像から、透かし文様は櫛歯と横架材を綴じ合わせた後に切り抜き、その上に漆を塗付して製作していることが判明する。

A-2：頭部が台形状を呈し、上端に三角形の突起を一對もつ。頭部に菱形あるいは楕円形の透かしがある。写280-2が該当する。写280-2は半分欠損しているが、頭部中央には菱形状及び楕円形状の透かしが左右対称に配置され、下半には櫛歯の結束に伴うものと推定される隆起状

の高まりが認められる。櫛歯の痕跡は5箇所認められる。

A-3：頭部が台形状を呈し、上端に三角形の突起を一对もつ。頭部半ばに楕円形の透かしがある。写280-3は欠損しているが、上端に三角形の突起を一对もち、頭部には楕円形の透かしが左右対称に配置される。下半には櫛歯の結束に伴うものと推定される隆起状の高まりが認められる。櫛歯の痕跡が1箇所認められる。

このほか、頭部に透かしを伴うが、器形が不明瞭なものもある。写280-4は三角形及び楕円形の透かしが3箇所、櫛歯の痕跡が6箇所残存する。写280-5～7は三角形の透かしが残る。

B類：頭部が台形状を呈し、透かし文様のないもの。

B-1：頭部が台形状を呈し、上端に三角形の突起を一对もつ。体部の上部と下半部に数個の瘤が認められる。写280-8は、頭部上半に5箇所、下半に3箇所の瘤状の高まりが認められる。櫛歯の痕跡は9箇所ある。写280-9は半分欠損しているが、頭部に三角形の突起、瘤状の高まりが認められる。

B-2：頭部が台形状を呈するが、突起の有無が不明瞭なもの（写280-10・写281-1・3）。写280-10には3箇所、写281-3には4箇所の瘤状の高まりが認められる。

C類：頭部が台形状を呈し、上端にB突起状の突起を2箇所もつもの。写281-2は頭部の残存幅4.2cm、高さ4.5cmであり、下半には櫛歯の結束に伴うものと推定される隆起状の高まりが認められる。櫛歯の痕跡が5箇所残存する。

D類：頭部が半円形状を呈し、頂部に連続した突起を持つもの（写281-4・6）。写281-4は半円形と長方形を合わせて頭部とし、頂部に連続した突起を伴う。櫛歯が7本残存する。櫛歯は直径0.3mmである。樹種はムラサキシキブ属である。

E類：頭部が山形を呈し、上端にB突起状の突起を2箇所もつもの（写281-5）。

F類：頭部が半円形状を呈し、透かし文様のないもの（写281-7～9・12）。写281-8は頭部幅5cm、高さ3cmの半円形を呈し、櫛歯が5本残存する。頭部前半及び下半に微隆起状の高まりをもつ。頭部全面に赤色漆が塗布されているが、微隆起部分は手擦れなどによって赤色漆が剥がれ、下地が一部みえる。櫛歯は欠損しているが、櫛歯痕とみられる直径0.3～0.4mmの孔が連続して10箇所認められる。樹種はムラサキシキブ属である。

G類：頭部が山形の五角形状を呈し、透かし文様のないもの（写281-11）。写281-11は平面形が二等辺三角形と長方形を上下に合わせた形状を呈し、一部内部の型材が確認できる。頭部半ばに2条、下半に2条の横位の微隆起状の高まりがある。頭部全面に赤色漆が塗布されているが、微隆起部分については手擦れなどによって赤色漆が剥がれ、一部下地がみえている。櫛歯は腐食により消失しているが、櫛歯痕とみられる直径0.3～0.4mmの孔が連続して10箇所残存する。

【腕輪】38点出土したが、断片が多い（写282-1～29）。いずれも板状の木材を環状に削り出したものである。いずれも赤漆が塗られている。木胎が収縮しているものや木胎が腐食して漆塗膜のみが残るものも含まれる。平面形は、外径6～7cmの環状となり、円形・楕円形を呈する。断面が幅0.5～1.0cm、厚さ0.5～1.5cmの台形状・楕円形状・不整形形状を呈する。内径側が面取りされているものもある。樹種同定は11点行い、トチノキ・ニシキギ属・マタビ属・モクレン属・ハンノキ属と同定

された。トチノキとニシキギ属が主体である。漆塗膜分析の結果、漆に木炭粉を混和したものを下地とし、その上に透明漆と赤色漆を塗り重ねるもの（写282-12）や、下地に直接赤色漆を塗るもの（写282-10・25）があることが判明している。後者のうち、写282-10は赤色漆2～3層、写282-25は赤色漆が1層（単層）であった。赤色顔料は、いずれも非パイプ状ベンガラであり、朱の混和は確認されていない。

繊維製品（写真65・283）

【糸】赤色漆が塗られた細い糸状のものである（写283-1～7）。断面形状から、太さ（径）が0.7～1mm前後で断面が円形状を呈するものと、幅2～3mm、厚さ1～2mm程度で断面が槽円形状を呈するものがある。いずれも表面に赤色漆が塗られている。漆塗膜分析の結果、赤色顔料はベンガラであることが判明している。断片が多いため、糸玉として存在したのかどうかは判別できない。

漆工関連遺物（図163、写真283）

【漉し布】4点出土した。漆を漉すために用いた編布である（写283-8～11）。もじり編みである。糸の太さは1mm未満のもの、2mm程度のものがある。写283-9・10は赤色漆、写283-8・11は透明漆が付着している。

（6）木製品

木製品は、工具、容器、構造部材、部材、用途不明品、構造部材、加工木がある（図164～179、表6、写真66～68、284～295）。このほか、炭化材や木片等が出土している。

工具（図164、写真284）

工具は、斧柄状木製品・弓素材・発火具（火鑽白・燃えさし）に大別できる。石斧柄や掘り棒と認定できるものは確認されていない。

【斧柄状木製品】芯持丸木削出による斧柄を模したミニチュア製品である（写284-1）。幹と枝部分の角度がほぼ直角であり、瘤部分には沈線がめぐる。表面は炭化している。樹種はサクラ属である。

【弓素材】直径1～2cmの芯持丸木で、木表面に縦方向に削り・磨き等の加工を行い、全体が弓状に湾曲した加工木を弓素材と認定した。4点出土した。樹種はイヌガヤを主体とするが、ヒノキ科アスナロ属やブナも認められる。写284-2は丸木材を削り出したもので、先端部と推定される。一部樹皮が残るが、ほぼ全面が炭化している。樹種はブナである。写284-3は節の加工は行われていないが、上端部が擦れて、ほぼ全面が炭化している。樹種はイヌガヤである。写284-4は下端が切断されているが、表面には削り加工がされ、黒色の付着物が認められる。半割材であることから、弓素材の失敗品あるいは転用材の可能性もある。樹種はイヌガヤである。写284-5は弓素材と推定しているが、柔らかいアスナロ属であることからタモ棒などの素材である可能性もある。

【火鑽白】1点出土した。写284-6は残存長7.6cm、幅3.0cm、厚さ1.7cmで、長方形状を呈する。長軸

両側に直径1cm程度の孔が5mmの間隔で認められる。片側に5箇所ずつ、計10箇所の孔が認められる。孔は火鑽に伴い炭化している。樹種はウコギ科ハリギリ属ハリギリである。縄文時代に帰属する火鑽臼は全国的に極めて少ないが、縄文時代後期に比定されるものが北海道小樽市忍路土場遺跡で出土している（財団法人北海道埋蔵文化財センター 1989）。

【燃えさし・付け木】先端部付近に炭化の痕跡が残る細長い加工木である。芯持丸木・分割材・板目材のほか、残材あるいは加工材を転用したもの（写284-9, 11~13）もある。写284-8は長さ19.6cm、径1.3~1.9cmの棒状を呈する。やや湾曲するが、両端が黒く炭化している。樹種はハイヌガヤである。当初、この資料の直径と写284-6の火鑽臼の孔の直径がほぼ同じであることから、火鑽杵と考えたが、湾曲していることや樹種が硬いヌガヤである点などから燃えさしとして扱うこととした。

容器（図165、写真284）

容器は木槽・皿がある。写284-14は木槽である。半分欠損しているが、平面が楕円形状を呈すると思われる。横木取りで、樹種はクリである。写284-15は脚付皿である。器外面には脚が一脚残存している。逆台形状を呈した脚が削り出されている。木取りは横木取りで、樹種はクリである。写284-16は平面が楕円形状を呈し、内面が凹んで皿状を呈するものである。脚はない。樹種はコナラ属コナラ節である。

用途不明品（図165~167、写真66・285）

用途・機能を推定できないものや、先行研究によって機能について複数の見解があるものを「用途不明品」として一括し、形状をもとにした名称を与えることにした。ここでは、籠形木製品、鉤形木製品、刺突具状木製品、有頭棒状木製品、舟形木製品、針状木製品、板状木製品、棒状製品、有段板状木製品、円盤状木製品、環状木製品、有孔木製品に大別した。

【籠形木製品】平面形が頭部から先端部に向かって細くなる二等辺三角形を呈し、断面が平板状となる木製品である。頭部に一对の突起が付く。このような木製品は、籠状木器・籠形器・籠状木製品などと呼称されているが、ここでは「籠形木製品」と呼称する（荒山2007・鈴木2012）。西捨場地区では4点出土した。VC~VD-26~27グリッド5-1層及び5-2層に分布する。長さ52~53cm、上端幅4~6cm、厚さ1~1.5cmの板目板である。表面はケズリ加工によって平坦に加工されている。頭部に突起が付くもの（写285-2,4）もある。下端に小孔が認められるものは出土していない。頭部の突起は長さ2~3cmで一对付き、側面及び上端から削り加工によって作り出している。また、写285-3は頭部が欠損しているが、残存部の上位に3条の沈線が認められ、その付近に赤色顔料がわずかに付着している。本遺跡で確認された籠形木製品の樹種は、写285-1・2・4がアスナロ属、写285-3がスギである。

本遺跡出土の籠形木製品は、欠損していて全体形がわかるものがないが、板目材を用いる点、頭部に2つの突起を有する点、片面に平行する沈線装飾をもつ点は八戸市是川中居遺跡のものと同様である。ただし、西捨場地区のものはヒノキ科アスナロ属を主体とし、次いでスギであるのに対し、是川中居遺跡のものはスギが多く、アスナロは1点のみである。

【鈎形木製品】V字状を呈した股木状の丸木を用いたもので、その両端部に溝を巡らして有頭状に削り出している(写285-5)。股木内側に孔が1箇所認められる。股木端部は炭化している。樹種はハイヌガヤである。縄文時代前期の福井県鳥浜貝塚から「鈎形木器」と呼ばれる、本遺跡と類似する製品がある。樹種はカエデ属と同定されている(網谷1996、能城・鈴木・網谷1990・1996)。

【刺突具状木製品】芯持ち丸木を削り出して円錐形とし、頭部に隆帯と沈線を巡らせ、下端には軸を伴う(写285-6)。樹種はハイヌガヤである。

【有頭棒状木製品】端部に溝を巡らして有頭状を呈する棒状の木製品である(写285-7,8)。写285-8は上端に2段、下端に1段の段を削り出して成形した木製品である。樹種はカエデ属である。

【舟形木製品】舟形あるいは艇節形を呈する木製品である(写285-9)。全体が丁寧に磨かれ、炭化している。樹種はサクラ属である。

【匙状木製品】長さ10cm、幅1~2cm、厚さ0.5cmの籠状あるいは匙状を呈するもの。前述の「籠形木製品」と区別するため、「匙状木製品」と呼称する。上端に孔を持つものもたないものがある。写285-10は板を薄く成形し、匙状を呈する。樹種はアスナロ属である。写285-11は下端部がU字状に加工され、上半部が削りによって抉られて匙状に凹んだ製品である。樹種はクリである。写285-12は表面が丁寧に磨かれ、狭端部が一部炭化している。樹種はアスナロである。写285-13は表面が丁寧に削られ、上端に孔が1箇所ある。下半は炭化している。樹種はイヌガヤである。

【針状木製品】先端が尖り、棒状あるいは針状を呈した製品である。写285-14は上端部が膨らみ有頭状を呈する。髪飾りの可能性もある。写285-16~20は表面を削って加工し、先端が尖る。

【板状木製品】板状を呈した木製品を一括した。写285-21~24は長方形を呈し、削り加工によって平滑である。写285-23は平面が凸形を呈する。写285-25はU字状に加工された板状製品である。

【棒状製品】棒状を呈したものである。写285-15は上端部が膨らみ有頭状を呈する。写285-26は直径0.8cmの穿孔が1箇所認められる。

【有段板状木製品】平面形がY字状を呈し、体部半ばに段を有し、下端が円形状に整形される(写285-27)。下端には筋状の沈線が認められる。表面は炭化している。樹種はアスナロ属である。

【円盤状木製品】円形を呈し、中央部に把手状の握みをもつ。樹種はモクレン属である(写285-28)。

【環状木製品】ウロ(樹洞)の縁のものを環状に加工したものである(写285-29)。漆は塗られてい

ない。外径9.5～10.3cmの楕円形で、厚さ2.5cmである。樹種はクリである。

【有孔木製品】中央部に1箇所の孔を持ち、その両側に瘤状の突起を1箇所もつ(写285-30)。中央の孔は上端から穿孔されている。樹種はハイヌガヤである。

構造部材 (図168～176、写真66・67・286～293)

構造部材は、丸木材、股木材、角材、杭・杭状製品、部材などがある。

【丸木材】直径15～20cm前後のもの(写286-1,2,5)、直径5～10cm程度のもの(写286-3,4,6,7)がある。写286-1は柱材で、樹皮を剥いだ後に先端部が縁辺部から中央部に向かって削り加工され、樹芯部付近は平坦に仕上げられる。全面が炭化している。樹種はクリである。なお、放射性炭素年代測定の結果、 $2960 \pm 20\text{yrBP}$ (KAWA(1)-110)の年代値が得られている。写286-2は上半部が樹皮除去後に削り加工が施され、下半部に一部樹皮が残る。下半部には木目に直交して幅10cm、深さ8cmの斧入りに伴う抉入痕が認められる。この痕跡は伐採に伴うものではなく、構成材として利用するための加工痕とみられる。樹種はコナラ亜属コナラ節である。放射性炭素年代測定の結果、 $3040 \pm 20\text{yrBP}$ (KAWA(1)-111)の年代値が得られている。写286-3は直径6.7cm、残存長39.4cmの丸木材である。表面が削り加工されている。全面が炭化している。樹種はアスナロである。写286-4は直径5cm、長さ54cmの丸木材である。下端が欠損している。樹種はイヌエンジュである。

【股木材】Y字状の枝分かれ部分(二股部)を受け木として利用したと推定される加工木である(写真287)。堅穴建物の垂木等を受ける建築材や水場遺構等の構成材と想定されている。樹皮を剥がしたのみで、削り等の加工が認められないY字状を呈したのもを含めた。芯持ちの丸木材と半割材の2種類がある。後者は転用材の可能性も考えられる。股木部は一方が長く、もう一方が短いものが多い。股部内側は明瞭な加工痕はみられず、横架けの棒・板材等の痕跡やロープを巻いた痕跡も判然としない。

写287-1・4は半割の股木材である。写287-1の最外年輪の放射性炭素年代測定結果は $2960 \pm 20\text{yrBP}$ (KAWA(1)-108)である。写287-2は股木部が丸木削り出し、幹部が分割削り出しによるもので、下端が尖って杭状を呈する。写287-3は丸木を半割後、分割面を縦方向に粗く削って平坦に加工されている。写287-5～7は芯持丸木の股木材である。富山県桜町遺跡では半割した股木材が水場遺構の構成材として使用されていたことが判明している(小矢部市教育委員会2007)。先端が尖り、杭状を呈するものもあることから、地面に刺して固定するなどの使用法も想定される。

【角材】半割材・分割材の表面・裏面・側面を削り出して断面方形・長方形とした加工木である(写真288・289)。長さ1mを超えるものもある。写288-1・写289-1には長楕円形状の孔がある。樹種はアスナロ属を主体とし、コナラ節・クリがある。

【杭・杭状製品】棒状を呈した丸木材・分割材の表裏及び割面・先端を削って加工し、尖頭状・杭状に成形したものである(写真290)。長さ40～70cm、幅(径)3～6cmに収まるものが多い。端部の形

状は、尖頭形を呈するもの、丸みのあるもの、断面が方形状を呈するものがある。木取りは丸木材・丸木削出材・分割材がある。写290-5・8は上端がくの字状に屈曲する。写290-8は先端部が炭化し、燃えさしとして再利用された可能性もある。写290-9は上端が有頭状を呈する。写290-6は上端に切断痕が認められ、炭化している。

【部材】写290-20は丸木を削り、2箇所抉り加工されている。端部には斜めに切断された痕跡が残る。一部樹皮が残り、炭化している。写290-21は下半に抉り状の加工痕が認められるもので、端部が炭化している。用途は不明である。

【板・板材】丸木の樹皮に近い部分を年輪に沿って割り剥がし、その表面・割面を削って平坦に加工したものである。板目板・板目材が多く、柾目板・柾目材は少ない。幅が10～20cmのもの(写291-1～4)、4～7cm前後のもの(写291-5～10)がある。厚さは1～4cm前後となる。写291-3には直径1cm程度の穿孔が6箇所認められる。写291-2・9は端部が炭化している。樹種はクリを主体とし、キリ・アスナロ・ブナ属・エノキ属がある。なお、写291-2の最外年輪の放射性炭素年代測定の結果、2970±20yrBP (KAWA(1)-109)の年代値が得られている。

【その他】写291-12は溝状の抉りのある丸木材である。上端・下端ともに欠損しているが、杭状を呈するものと思われる。上半部には、木目に直交して、幅2.5cm、深さ1.5cmの溝状の抉り込みが全周する。樹種はブナ属である。写291-13は平面形がくの字状に湾曲した加工木である。表裏面及び側面がケズリ加工され、屈曲部の表裏面が炭化している。樹種はクリである。図174-1(写真掲載なし)は丸木の中央付近の湾曲した面を削って平坦にした部材である。樹種はクリである。写292-1は湾曲した板で、表裏面に削り加工が施される。写292-2は板状を呈し、側面に幅6cm、深さ0.8cmの抉り状の欠け込みが認められ、先端が尖り削り加工される。写292-3は木表面に幅7cm、深さ1cmの抉り状の加工痕が認められる。写292-4は半割材の木表を削り出した加工木である。段状の加工が2段認められる。写293-1・2は板状の加工木である。写293-1は木表・木裏に削り加工が施され、孔が7箇所ある。側面には切断痕が認められる。写293-3は丸木の樹皮を剥がした後、木表を削り出して棒状に加工したものである。木表が削り加工され、上端には工具等を用いて斜めに切断した痕跡が残る。写293-4は半割削り出しの棒材である。写293-5・6は側面に抉り状の加工痕が認められる板材である。写293-7は丸木芯持ち材である。樹皮を剥がした後、木表を削っている。写293-8は木表裏面を削り加工したものである。偏半割材である図176-1と接合する。

加工木 (図177～179、写真68・294～295)

加工木は、加工の痕跡が確認できるもの、あるいは製品と判断できる特徴的な加工が認められないもの(残材を含む)である。木取りは、芯持丸木材・半割材・分割材・その他(棒材・切断材・残材等)に分けられる。楔を打ち込んだ痕跡は不明瞭だが、切断痕跡が明瞭なものも認められる。

【半割材】丸木を半割し、表面・裏面を削って調整したもの(写294-1, 2, 5, 6)。分割した面は粗く削られるものが多い。分割材は丸木を分割後、その表面・裏面を削って成形したものが多い。断面形

状が三角形あるいは台形状を呈し、分割面は粗く削られる。

【分割材】写294-3は下半部を削り加工したもの。端部が炭化している。写294-8・10は分割削り出し材で、一端は断面三角形、もう一端は楕円形状に削り出している。写294-8は表面に樹皮が一部残る。写294-10は表面が炭化している。写295-1は分割削り出しで、断面三角形形状を呈する。分割面は削り加工が認められる。写295-3は分割材で棒状を呈し、先端が尖る。写295-4は平面半月状、断面不整形を呈する。中央付近に直径1cmの孔をもつ。写295-5は分割削り出し材で、分割面は削り加工されている。木表に樹皮が残る。

【その他】写295-2は芯持丸木材を断面六角形状に削り出したものである。写295-6～9, 14, 15は割材、写295-10～12は板目材、写295-13は椀目材、写295-13・16・17は棒材である。写295-12は分割後に削り出し加工され、下半は削りによって板状を呈する。

(7) 樹皮・樹皮製品

樹皮・樹皮製品は、樹皮、樹皮素材、樹皮製品が出土している(図180～182、表6、写真68～69、296～298)。このほか、前述した漆塗り弓(写279-1)の弓幹に樹皮を巻いたものもある。

樹皮素材(図180～181、写真68・69・296)

樹木の皮を剥いだ状態のもの(写296-1)、樹木の皮を巻いた状態のもの(写296-2～13)がある。後者は巻き方によって、樹皮を一方から巻いて折りたたんだ状態のもの(写296-2, 4)、樹皮を両端から巻いたもの(写296-5, 7, 9)、樹皮を一方から巻いたもの(写296-3, 6, 8, 10～13)がある。樹皮の加工の程度を基準にすると、以下のとおり区分できる。1つ目は樹木から樹皮を採取した段階のもので、表裏面の加工がほとんど行われていないものである。表面に皮目が残る。樹皮の厚さは4mm以上である。写296-1～2・6・7が該当する。2つ目は樹皮の表裏面が粗く磨かれたものである。樹皮の厚さは2～3mm程度である。写296-3～5・8・9が該当する。3つ目は樹皮の表裏面が丁寧に磨かれて薄くなったものである。樹皮の厚さは1mmとなる。写296-10～12が該当する。これらは、樹皮の加工作業工程を示唆するものとして注目される。

結び紐・紐素材(図181、写真69・296～297)

紐状の樹皮を数本束ねたもの、結んだもの、巻いたものがある。写296-15は幅0.7～1.1cm、厚さ1.0cmの樹皮を4本あわせて巻いたものである。写297-1は幅0.7cmのヤマザクラあるいはカバの樹皮を一重渦巻きにしたものである。写297-2はヤマザクラあるいはカバの樹皮を束ねたもの。写297-3は幅0.7cm、厚さ1～1.5mmの樹皮を2本一組で一重結びしたものである。

組紐(写真297)

写297-6は繊維状にした紐2本を燃ったものである。素材は未特定である。

樹皮製品 (図182、写真69・297～298)

【円盤】扁平な板・樹皮の周囲を削るなどして、円盤状あるいは多角形に加工された薄板状の加工製品である(写297-7～21、298-1～11)。孔のないもの(円盤)と孔のあるもの(有孔円盤)がある。表裏面は削り加工によって平坦にし、側面を加工することによって円形状に成形している。平面形は円形・多角形・花びら形を呈する。有孔円盤の孔は中央あるいは中央付近に1箇所空けられるものが多く、2箇所以上のものは少ない。樹種はトチノキ、広葉樹、モクレン属が認められる。

用途は判然としないものの、円盤の表面に別個が付着しているものが認められる(写298-8)ことから、紐状あるいは縄状の繊維で複数個体を結合あるいは綴じ合わせて使用されたと推定される。有孔円盤は、縄文時代後期の盛岡市蔭内遺跡や岩手県軽米町大日向Ⅱ遺跡などで出土している。

【大判形樹皮製品】長さ17.4cm、幅7.9cmの楕円形を呈し、厚さ0.6cmとなる板状製品である(写298-12)。表面は平滑である。孔は認められない。樹種はトチノキである。

【板状樹皮製品】写298-13は長方形を呈する。写298-14・15は上端に凸状・凹状の摘みをもつ。

(8) 西捨場出土木質遺物の器種構成・利用樹種

出土木製品・部材のうち、500点について樹種同定を行った。詳細な分析結果は報告書Ⅷ第3章を参照されたい。ここでは器種と利用樹種の関係について概要を述べる(図183～184)。

漆製品

漆製品は140点出土した。内訳は工具・容器・服飾具・繊維等である。服飾具が6割を超え、次いで容器・工具と続く。

樹種・素材は、ニシキギ属が38.3%を占め、トチノキ(12.8%)・ムラサキシキブ属(12.8%)・アケビ属(8.5%)、イラクサ科(4.3%)・アサ(4.3%)・アオツヅラフジ属(2.1%)・カバノキ属(2.1%)・ノリウツギ(2.1%)・ハンノキ属(2.1%)・マタタビ属(2.1%)・笹類(2.1%)と続く。

樹種と器種との関係については、木胎漆器がトチノキ、藍胎漆器がつつる性植物(アオツヅラフジ属?)・笹類、弓はカバノキ属である。腕輪はニシキギ属・トチノキ・マタタビ属・モクレン属があり、ニシキギ属が主体である。是川中居遺跡ではトチノキ・マタタビ属・クリ・ニシキギ属・ミズキが確認され(能城他2007)、本遺跡と共通する。櫛は木部が残存しないものが多いが、ムラサキシキブ属・ノリウツギがあり、ムラサキシキブ属が主体である。帯状製品や有孔環状木製品はニシキギ属である。漆塗り糸はイラクサ科の繊維やアケビ属の茎が用いられ、漆塗り布はアサを編んだものであることが確認されている。

木製品

木製品は565点出土した。内訳は工具・発火具、容器、構造部材、部材、用途不明品、加工木があり、このほかに炭化材や木片等もある。加工木が6割であり、次いで構造部材が2割程度を占め、用途

不明品及び工具・発火具や容器あわせて1割程度である。木取りは割材・半割材・分割材で約半数を占め、次いで芯持丸木材が18%、板目が13%となる。特に、板材については柁目材に比べ、板目材が多い点は、他の縄文時代の遺跡と変わらない。また、樹木を割っただけの割材が4割程度を占める点は、製品が本遺跡に持ち込まれただけでなく、本遺跡内あるいは周辺でも木材加工・木製品の製作が行われたことを示唆する。

樹種は針葉樹が3割・広葉樹が7割を占める。針葉樹はアスナロ属・イヌガヤ・スギ・ハイイヌガヤ・ヒノキ科がある。広葉樹はイイギリ・イヌエンジュ・オニグルミ・カエデ属・カツラ属・カバノキ属・キハダ・キリ・クリ・ケンボナシ属・コナラ属コナラ節・サクラ属・シナノキ属・トチノキ・トネリコ属・トネリコ属シオジ節・トネリコ属トネリコ節・ナシ亜科・ニガキ・ニレ科エノキ属・ニレ属・ノリウツギ・ハリギリ・ハンノキ属ハンノキ亜属・ブナ属・マタビ属(マタビ)・ミズキ・モクレン属・ヤナギ属がある。樹種構成は、クリが3割を占め、次いでアスナロ属が2割、コナラ属コナラ節が1割弱となる。樹種と器種との関係については、斧柄がサクラ属、弓素材がイヌガヤ・ブナ属・アスナロ属、火鑽白がハリギリ、燃えさしはハイイヌガヤ・カエデ属・イヌエンジュ・サクラ属、容器はクリ・コナラ属コナラ節である。構造部材や加工木は、クリ・コナラ属コナラ節・アスナロを主体とする。漆製品全体の4割弱を占め、腕輪や有孔環状木製品などに使用されたニシキギ属は木製品では利用されていない。一方で、漆製品では用いられていないクリ・アスナロ属・コナラ属コナラ節が木製品では利用されている。また、後述するように樹皮製品で主体を占めるトチノキについても、木製品では利用されていない。

加工木に用いた樹木の推定直径と樹種との相関関係についてみると、柱材は直径20cm程度、樹齢30年程度のものが多く利用されている。丸木材は直径5~10cm、直径15~25cmにまとまる。また、分割材(みかん割り材)については、6分割を基本とし、直径10cmあるいは直径15~25cmの丸木を分割している。板目材については6分割を基本とし、直径15~25cmの丸木材を用い、厚さ2~5cm程度の板目材をとる。東京都東村山市下宅部遺跡では、①丸木材は5~8cm程度のものと10~20cm程度のものに分かれ、②分割材は直径10cmの丸木材を6~8分割しているものが多く、③板目材は幅15cm・厚さ2~3cm程度になるものが多いことが指摘されている(東村山市遺跡調査会2006)。川原平(1)遺跡の場合も、下宅部遺跡と類似の傾向が認められる。用途に応じて幹・枝の使い分けが行われていたと推察される。

樹皮・樹皮製品

樹皮・樹皮製品は104点出土した。内訳は素材が約5割、用途不明品が約5割である。特に用途不明品の大半が側面を円形に加工して製作した円盤製品である。特に5~2層で多く認められる。樹種は、広葉樹が85%程度、針葉樹が5%である。特に、広葉樹はトチノキが約6割を占め、次いでカバノキ属が約1割と続く。トチノキが樹皮製品の素材として意識的に選択されていたと推察される。

自然木

製品類の樹種との共通性・相違性、さらには周辺の植生環境を明らかにするために、一部の自然木や炭化材についても樹種同定を行った(報告書Ⅷ第3章参照)。同定の結果、クリ・コナラ属コナラ

節などが確認され、おおむね製品類の利用樹種と共通する。加工痕のないイスガヤも一定量確認されることから、自然木と認定したものについては一部製品類の素材であった可能性が高い。また、西捨場地区ではサルノコシカケが2点出土した。サルノコシカケは、周辺植生を明らかにする上でも注目されている(服部・佐々木2007)。民俗例では、乾燥させると火持ちがよいという性質から、火種・火口や蚊除けとしての利用もみられる(名久井2012)が、用途は不明である。

(9) 木質遺物の自然科学分析

【塗膜構造分析】漆製品について、漆塗膜断面の構造分析を実施した。内訳は堅櫛7点、腕輪3点、容器6点、弓2点、繊維(糸)1点である。詳細は報告書Ⅴ第8章第3節参照されたいが、ここでは器種と分析結果の概要について述べる。

〔弓〕塗膜構造分析の結果、素地と漆層が認められた。漆層は素地に下地を施さずに、直接漆層が重なる様子がみられた。層厚は薄い黄褐色を呈する透明漆1層の上に赤色漆が1層重なっていた。赤色漆層に混和された顔料は、2点ともベンガラであった。

〔堅櫛〕分析試料の中には塑形材が認められたものもある。塑形材は漆に木屑(木粉)を混和したものと判断されている。写281-4(分析No.5)と写281-8(分析No.10)は、漆に混和された黒色の木炭粉がみられる。漆層は下地の上に透明漆が1層施され、その上に赤色漆が1～2層施されるものが多いものの、赤色漆のみ2層塗られたもの(写280-1)、赤色漆が3層塗り重ねられたもの(写280-10・写281-3)もある。赤色漆層に混和された赤色顔料はベンガラと朱があるものの、赤色漆層が1層の場合にはベンガラが混和され、朱の混和されたものは赤色漆層の最上層のみに施されるという特徴がある。平川市石郷(4)遺跡でも朱・ベンガラを塗布した堅櫛が確認され、本遺跡と同様にベンガラよりも上層に朱が塗られていることが判明している(片岡・上條2015)。また、北海道恵庭市カリンノ3遺跡や西島松5遺跡出土の漆塗り堅櫛でも、木屑漆の上にベンガラ漆が1～2層塗られ、最上層に朱漆が塗られているものが多く、本遺跡と共通する。

〔腕輪〕いずれも木胎腕輪である。塗膜構造分析の結果、下地と漆層が認められた。下地は漆に木炭粉を混和した下地がみられた。漆層は写282-11(分析No.15)には、下地の上に透明漆1層、赤色漆1層という塗り重ねがみられた。写282-10(分析No.14)・写282-25(分析No.16)には、下地の上に直接赤色漆が重ねられていた。赤色漆層に混和された顔料はいずれもベンガラであった。

なお、県内では、八戸市是川中居遺跡、板柳町土井(1)遺跡、平川市八幡崎遺跡等で漆塗り腕輪が出土している。木材を削り出して腕輪を製作している点や、赤色顔料にベンガラを用いる点が共通する。また、土井(1)遺跡では雑管束植物の芯材を曲げて製作した腕輪が確認されている(片岡・上條編2014)が、本遺跡では出土していない。

〔糸〕素地と漆層が認められた。素地の組織の上に直接4層の漆層が重なったものや、透明漆1層と赤色漆3層を重ね塗りしたものがある。赤色漆に混和されていた顔料は下層からベンガラ・朱・朱であった。本県では青森市平野遺跡や板柳町土井(1)遺跡で糸状・紐状の赤漆塗り繊維製品が出土している。塗膜分析の結果、ベンガラを用いた赤色漆が塗られていることが判明し(片岡・上條2014・片岡・上條ほか2015)、本遺跡例と相違がある。新潟県青田遺跡出土の糸玉もベンガラ漆と同定されて

いる(永嶋2004)。

【蛍光X線分析】赤色漆層に混和された赤色顔料を科学的に明らかにするために実施した。木胎漆器(写278-1)・藍胎漆器(写278-3)・壺(写280-1)は赤色顔料としてベンガラが利用されていると判断されている。

【元素マッピング分析】塗膜下層における朱の混和の有無を確認するために、木胎漆器(写278-1)・藍胎漆器(写278-3)・壺(写280-1)の塗膜断面上でのFeとHgの元素マッピング分析を実施した。Hgは検出されず、Feのみが検出された。3点とも赤色顔料としてベンガラのみが使用されたことが判明している。

【X線写真撮影】藍胎漆器と壺についてはX線写真撮影を行い、内部構造を把握した(写真278・280・281)。今後、X線CTスキャンを用いた平面及び断面観察を行うことによって、詳細な編組技法をはじめとする製作工程が復元できると考えられる。

【放射性炭素年代測定】木質遺物が多量に検出されたVD-25～26グリッド出土木材の最外年輪部分について、放射性炭素年代測定を実施した。分析結果は以下の通りである。

Ⅲ層中出土股木材 (W-9027)	2960±20yrBP (KAWA(1)-108)
5-1層出土柱材 (W-9062)	2960±20yrBP (KAWA(1)-110)
5-1層出土柱材 (W-9063)	2970±20yrBP (KAWA(1)-112)
7層出土板材 (W-9164)	2970±20yrBP (KAWA(1)-109)
8層出土柱材 (W-9128)	3040±20yrBP (KAWA(1)-111)

(中澤)

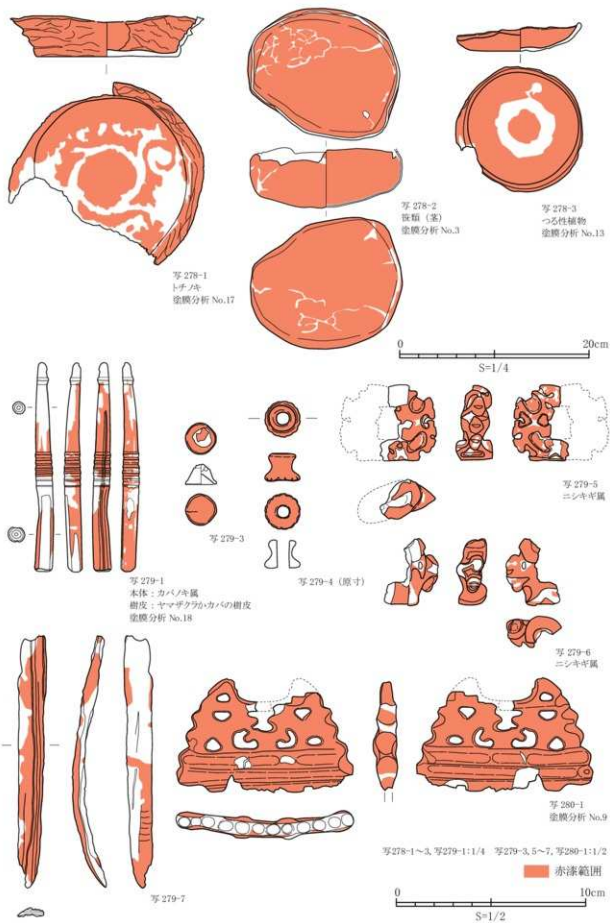


図 160 漆製品 (1)

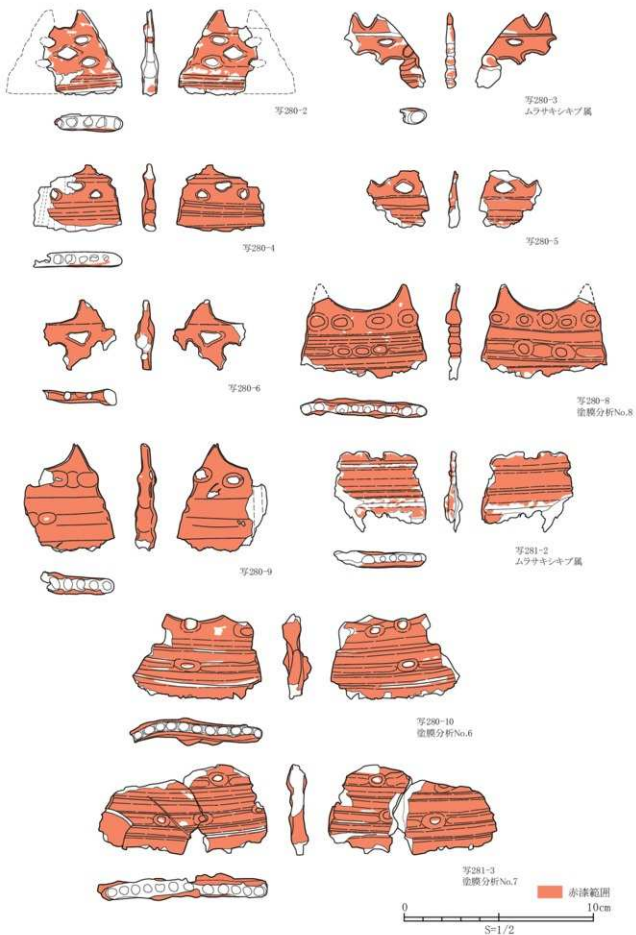
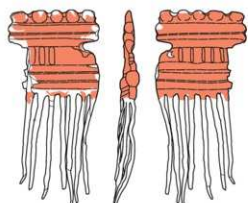


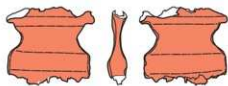
図 161 漆製品 (2)



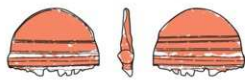
写281-4
ムラサキシキブ風
塗模分析No.5



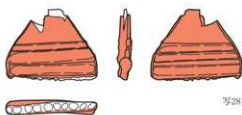
写281-5
ブリクウギ
塗模分析No.11



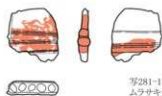
写281-6



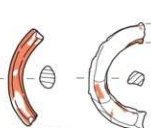
写281-8
ムラサキシキブ風
塗模分析 No.10



写281-11



写281-12
ムラサキシキブ風



写282-1



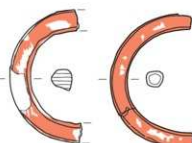
写282-2



写282-3
マタタビ風



写282-4



写282-5
トチノキ

写282-6



図 162 漆製品 (3)

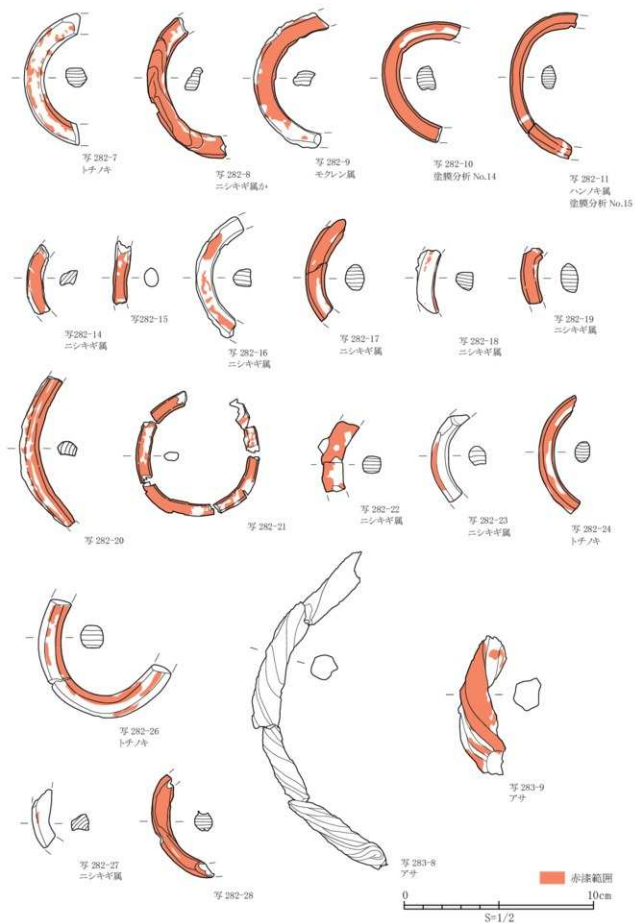


図 163 漆製品 (4)

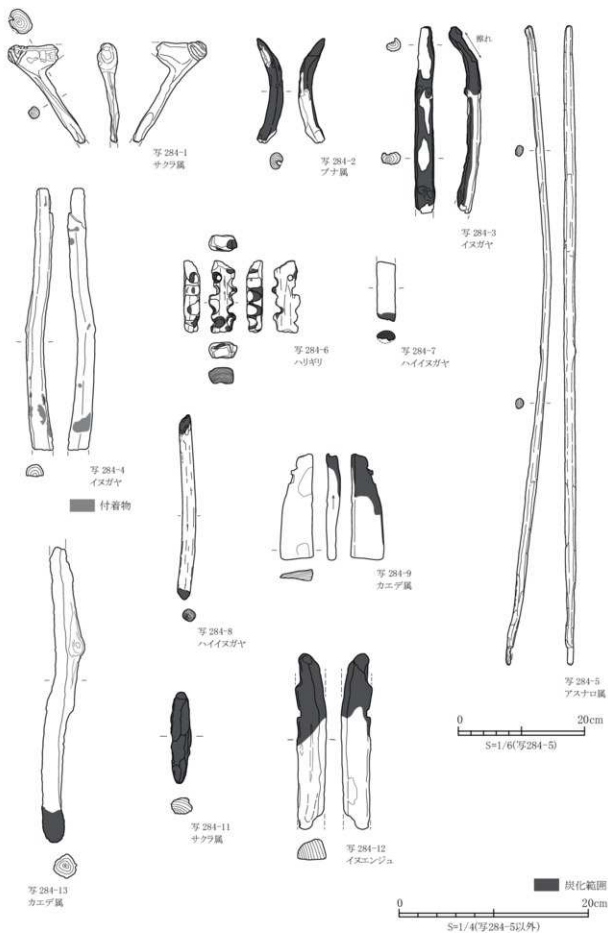


図 164 木製品 (1)

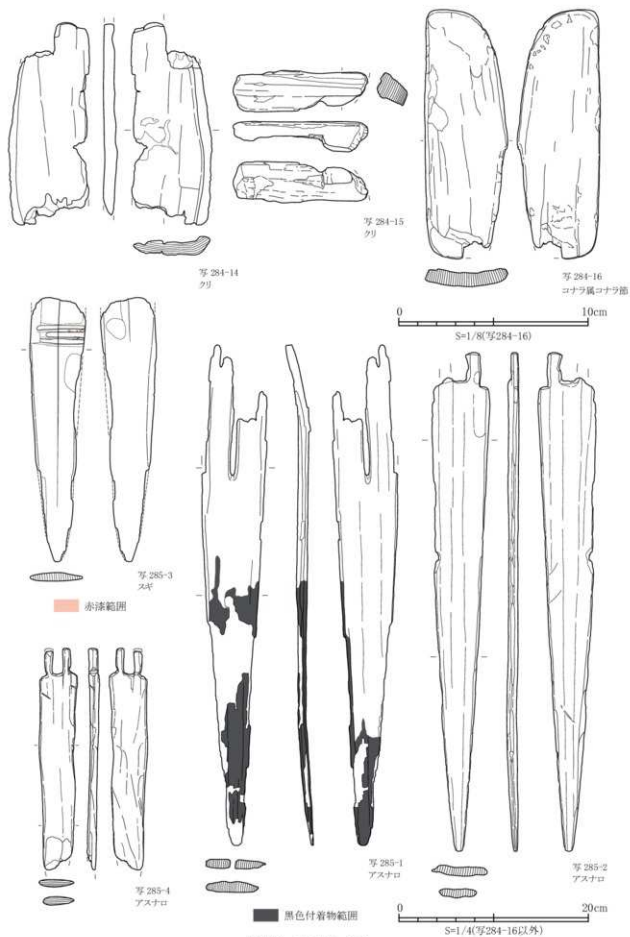


図 165 木製品 (2)

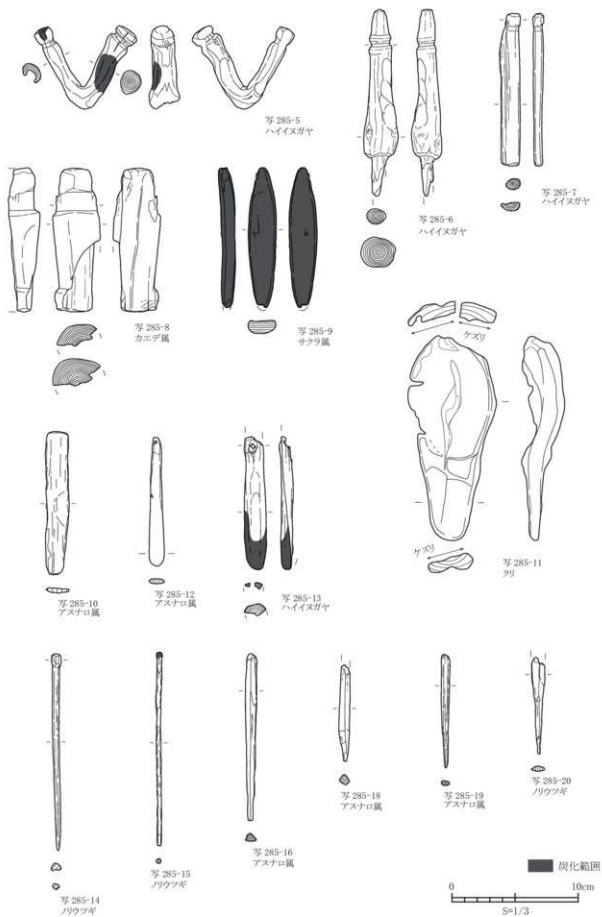


図 166 木製品 (3)

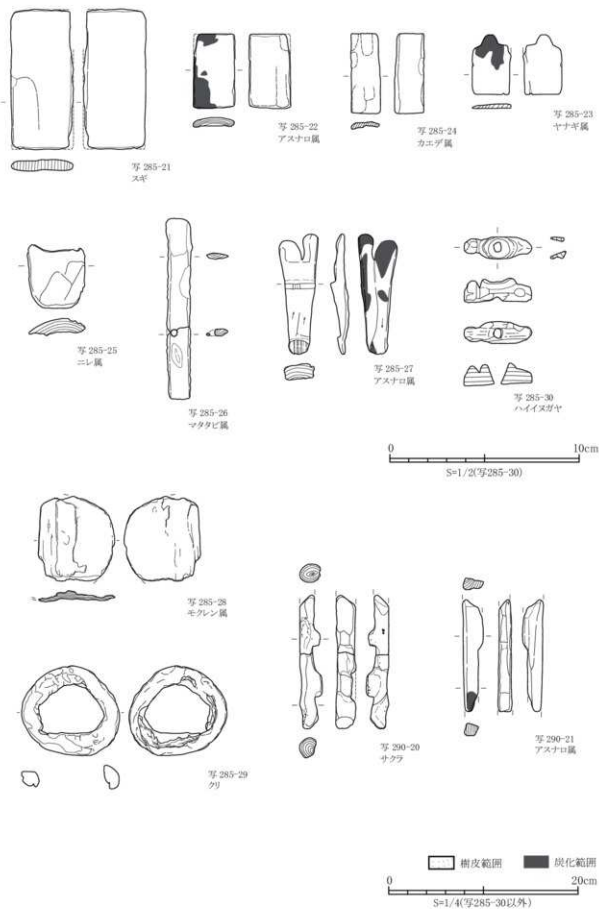


図 167 木製品 (4)

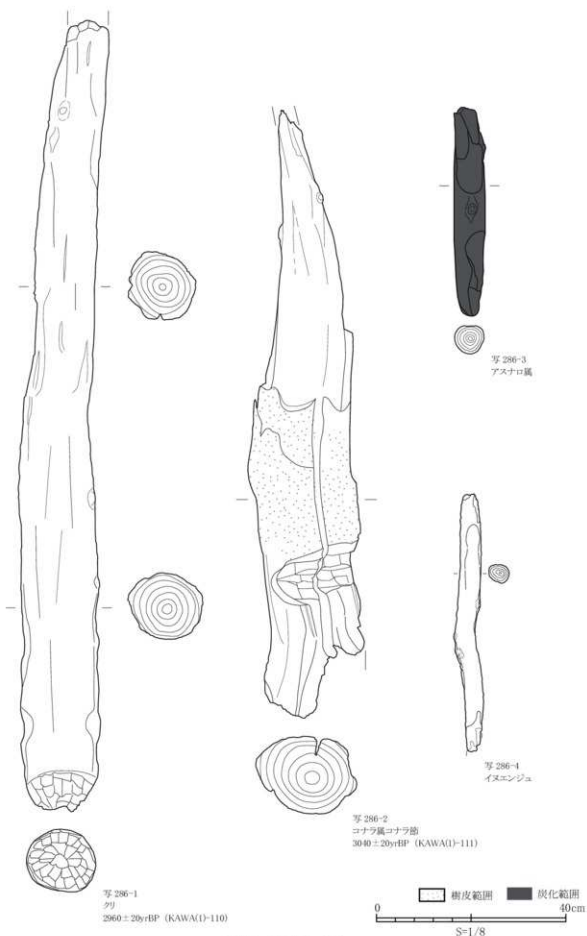


図 168 木製品 (5)